明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

明治三十四年六月五日發行
毎月一回五日發行

女學世界

第一巻第七號

口繪

- 閑院宮御息所
- 丁抹の王室
- 親愛（泰西名畫）
- 嵐山の新緑
- 伊藤侯爵夫人
- 瓜生岩子銅像
- 古利根川
- 東京裁縫女學校
- 維盛卿の哀別
- 名家筆蹟



女學世界第七號目次

文學叢書出版廣告

文學博士坪内雄藏君著（製本出來）

文學叢書　英文學史

全壹冊洋裝
總クロース金文字入
紙數九百餘頁
正價金貳圓
郵稅貳拾錢

天下古今文化に誇るの國尠からずと雖も前後數千年間に亘りて系統連綿秩序的に發展せる文學藝術の史を有する者は東洋に在りては日本支那西洋に在りては英と佛就中英國の文學は恰かも日本文學の精華の如し東洋列國の文學が粹然として我日本に集注しこゝに特殊の光彩を發したるが如く古代歐亞及び歐洲近世文學の精英は毎に英に流れ入りて古今の英文學を結成せり英文學史は此意味に泰西文學の大綱を示すに足る**坪内博士**身を英文學の研究に委ねられしと既に十有餘年其歷史的研究は年々本校講義錄に修訂增補の功を積み終に本書を成すに至れり上は英國上古史に起り國文學の起源より英詩の曉星たるチェッフレー、チヨサーに說き及びエリサベス朝の全盛內亂時代の一頓挫十八世紀の波瀾を經て終に最近の文學史に至り或は評論壇或は神學哲學科學等の諸學界或は詩人小說家の事蹟或は其傑篇の評論深切鄭寧雅馴明晰初學者と雖も**讀下一番英文學の精華を窺ふことを得べし**紙數無慮九百數十頁本邦**空前の歐洲文學史**なり之を以て文學叢書の第一編となせるは亦將に續いて出すべき諸書の總叙に代へんとの意なり世界文學の趣味を咀嚼せんと欲する者は必ずや坐右に缺くべからざる良書なり

發行所　東京牛込區早稻田　**東京專門學校出版部**

發賣元　東京日本橋區本町　**博文館**

（甲の一）

續帝國文庫

既刊

- 第一編……眞田三代記
- 第二編……近世説美少年錄
- 第三編……日本歌謠類聚上
- 第四編……日本歌謠類聚下
- 第五編……修紫田舍源氏
- 第六編……竹田出雲淨瑠璃集
- 第七編……朝夷巡島記
- 第八編……兒雷也豪傑譚
- 第九編……江戸作者淨瑠璃集
- 第十編……前々太平記
- 第十一編……太平記
- 第十二編……紀海音淨瑠璃集
- 第十三編……近松淨瑠璃集
- 第十四編……後太平記
- 第十五編……近松半二淨瑠璃集
- 第十六編……脚本傑作集 發賣禁止

博文館編輯局校訂　第卅三編

校訂 續一九全集

（製本出來）

全壹冊洋製　總クロース　金字入正價　金六拾錢　郵稅金六錢

本書目次

深窓奇談　廓意氣地　誹語堀之內詣　雜司ヶ谷記行
花照草紙　不動丸劔威德　御大相志目多發粥　敵討涙速男
復讐女諸禮鑑　風流田舍草紙　義經越路松　初時雨矢口渡
三國太郎再來傳　滑稽吉原談語　夜鄙行燈　金儲花盛塲
竹生島琵琶湖水　方言修行金草鞋　柳之下蔭　報仇女用文章

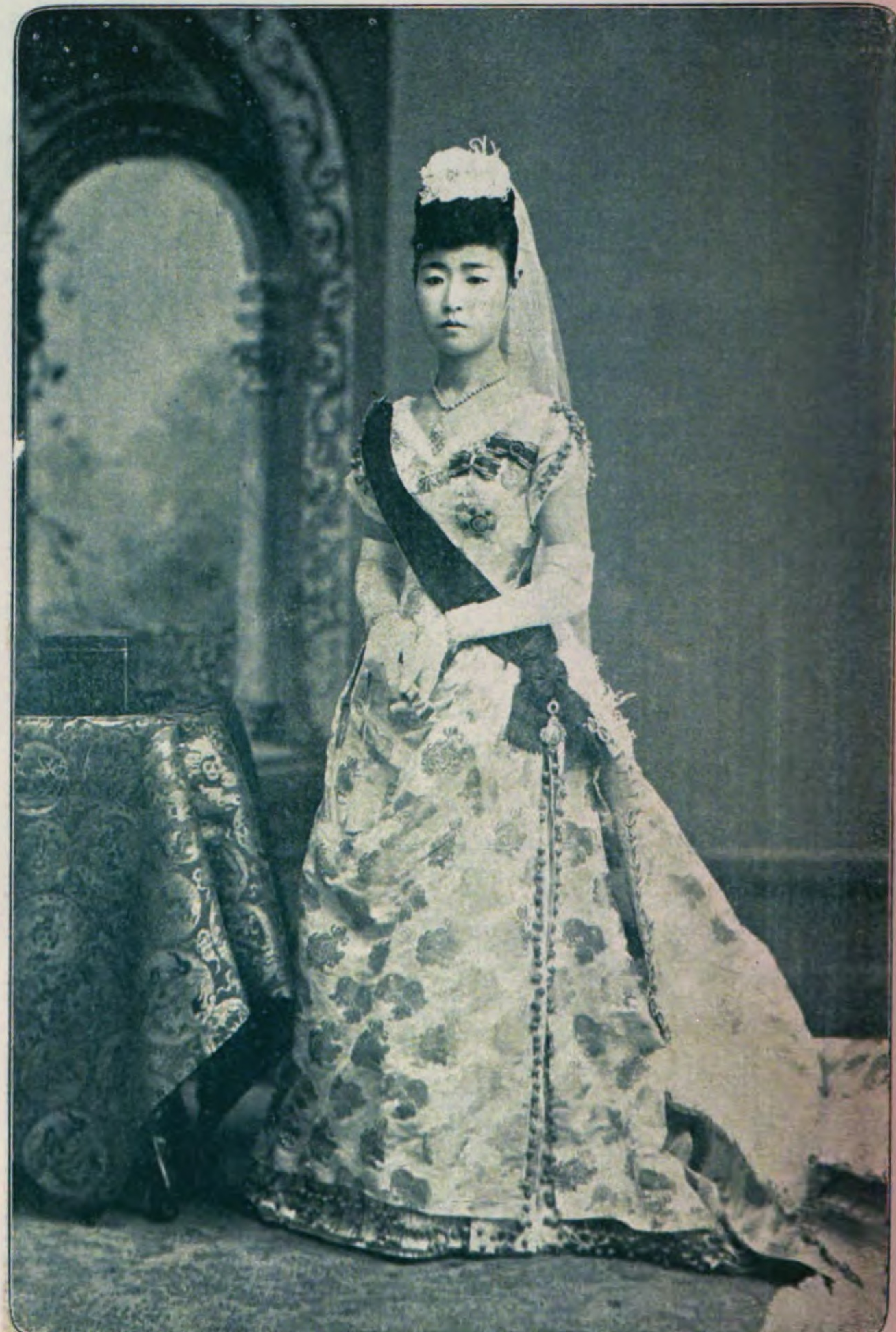
既刊

- 第十七編……京山全集
- 第十八編……落語全集
- 第十九編……並木宗輔淨瑠璃集
- 第二十編……紀行文集
- 第廿一編……一九全集
- 第廿二編……漂流奇談全集
- 第廿三編……邯鄲諸國物語
- 第廿四編……續紀行文集
- 第廿五編……續水滸傳
- 第廿六編……文耕堂淨瑠璃集
- 第廿七編……傾城水滸傳
- 第廿八編……白縫物語上
- 第廿九編……白縫物語下
- 第三十編……北雪美談時代鏡
- 第卅壹編……常山紀談
- 第卅貳編……萬物滑稽合戰

正價〔壹冊六十錢 ● 六冊三圓五十錢 ● 十二冊六圓
〔九十錢 ● 廿五冊拾三圓 郵稅壹冊拾六錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の四）



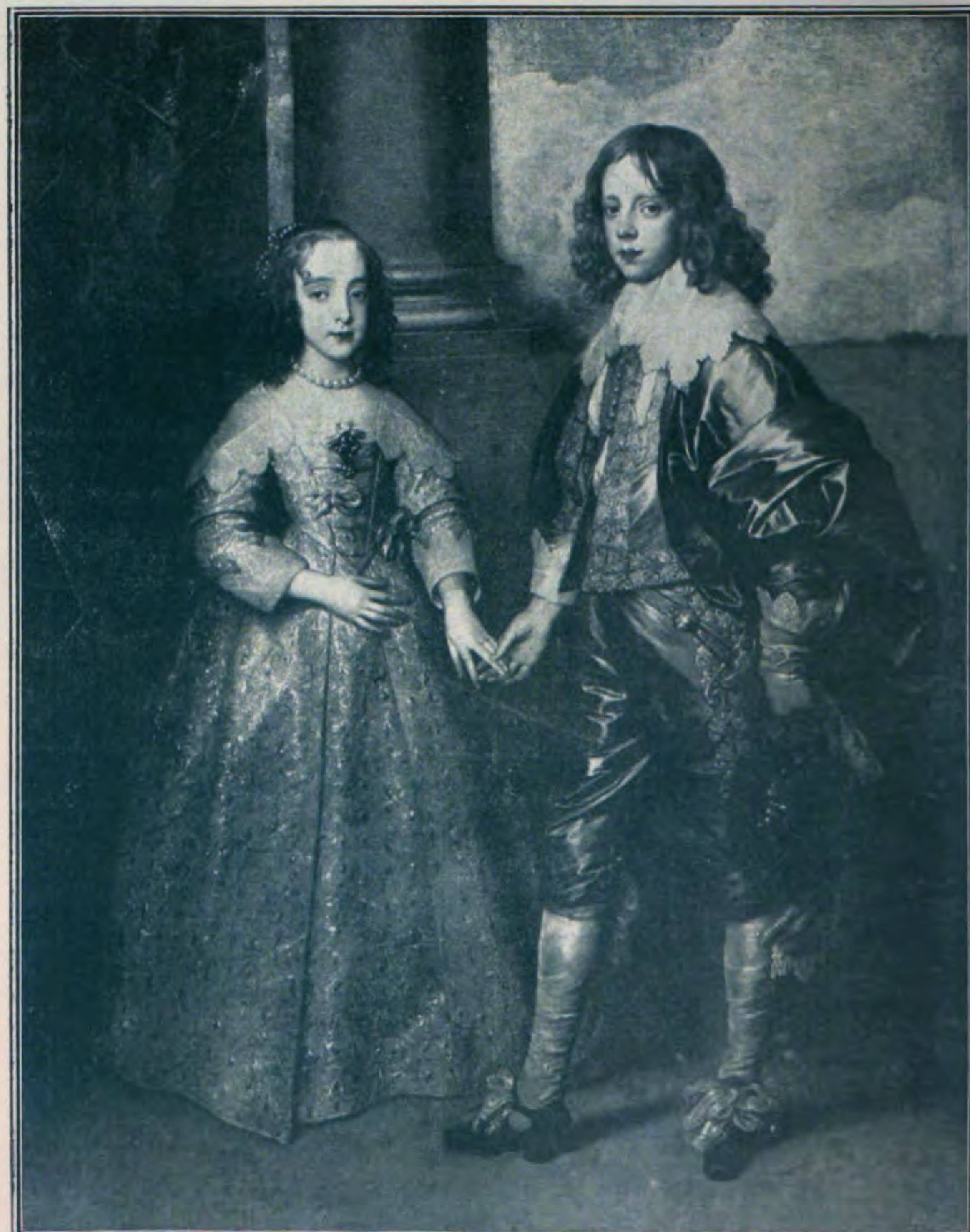
閑院宮御息所智惠子殿下

丁抹の王室



國王華故王妃殿下　英國皇后ウエールス陛下　フイッブ公爵夫人　王女アレキサンドラデユイーフ

親愛



和蘭畫伯アヴアンダツクの筆



京 都 嵐 山 の 新 綠

女子高等師範學校附屬幼稚園内フレベル會發行

●婦人敎育の指針●幼兒敎育の燈明●唯一の家庭雜誌



第一卷第一、二、三號三版出來

毎月一回五日發行

一册拾錢 郵税壹錢

六册前金郵税共六十三錢●十二冊全一圓廿二錢●郵券代用一割増

第壹卷第六號 六月五日發行

要目 本號よりは更に（家庭）に長瀬醫學士の看護法を欄載すべく（學術）には英語俚諺の外に（佐藤東京師範教諭の百合の話）と（東海生のうどんげ花の話）を出だすべく（講義）には新に（松本文學士の兒童研究法）を加ふべく（説林）には（町田教授の子どもの遊戯）を載すべし●特に又本號よりは（寄書）の一欄を設けて以て諸姉諸孃の金玉の文字を一々掲載すること〻せんほどに何にてもあれ（奮つて投稿せらるべし）但し投稿は凡べて寄稿規則に從がはんことを乞ふ

●賣捌所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

●書學速成●

●執筆●點畫及作字法●結體法●楷行草假名の各體●正俗及古今字の別●書論

右の綱目に依り毎月講義筆記を頒布し十二ヶ月にして全科を卒業せしむ尚ほ質問を許し別に質問錄を編して各員に頒つ●入會金廿錢月謝廿五錢詳細の規則書は郵券二錢を要す

東京根岸元金杉百五十番地

書學會事務所

歌學專門雜誌（毎月十五日發兌）

しきしま

定價壹册拾錢●五冊前金四拾九錢●十冊前金八拾錢

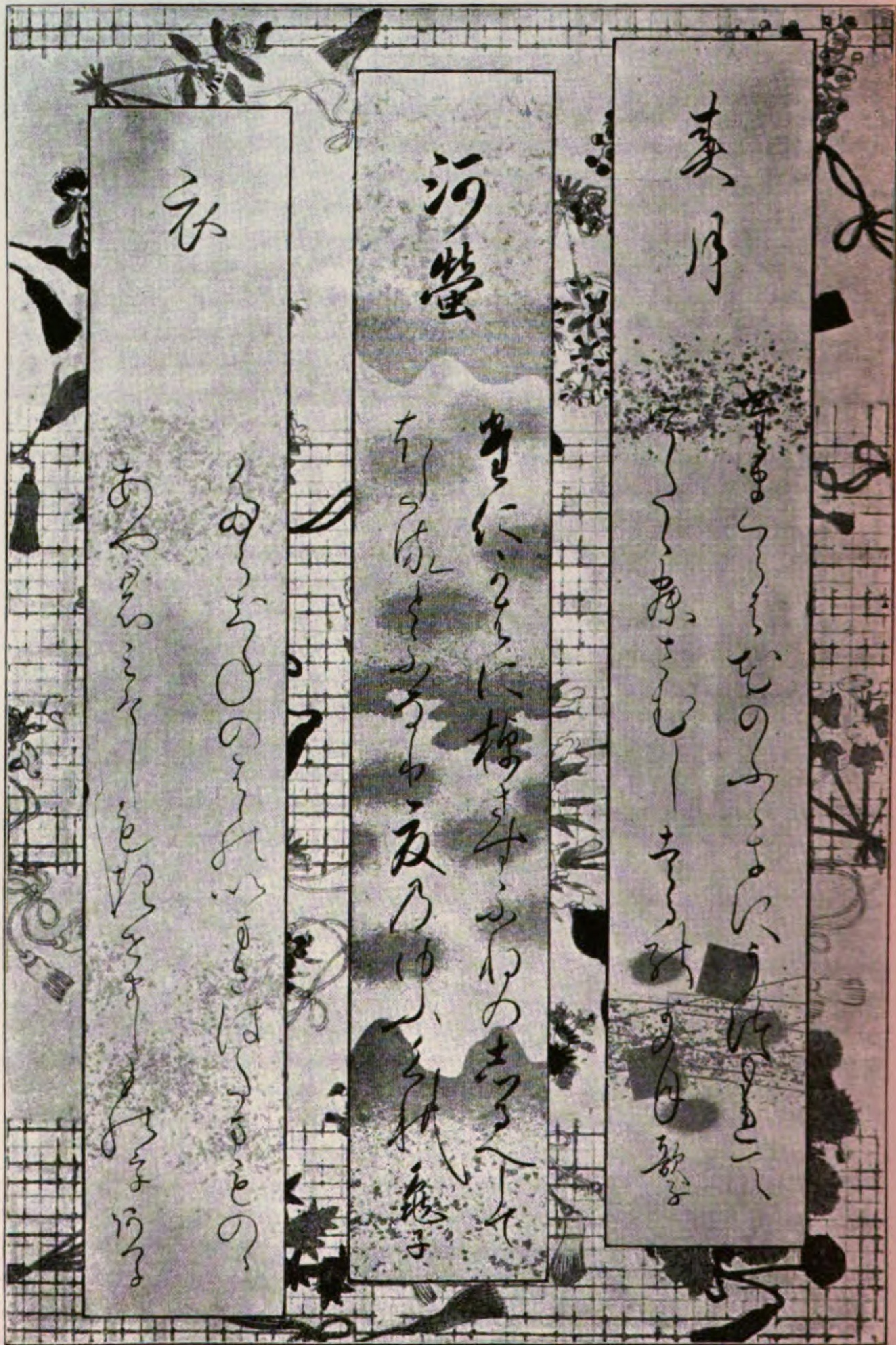
本誌は本邦唯一の歌學雜誌にして當代の歌匠小出粲大人を初め中島歌子女史遠山英一先生の撰定を經たる佳詠を掲出し添削を加へたる處は一々指示したれば初學者唯一の眞友たるべし

東京下谷區二長町五番地

しきしま發行所

（乙の三）

(乙の四)



下田歌子女史　　山尾子爵令孃　　税所敦子刀自



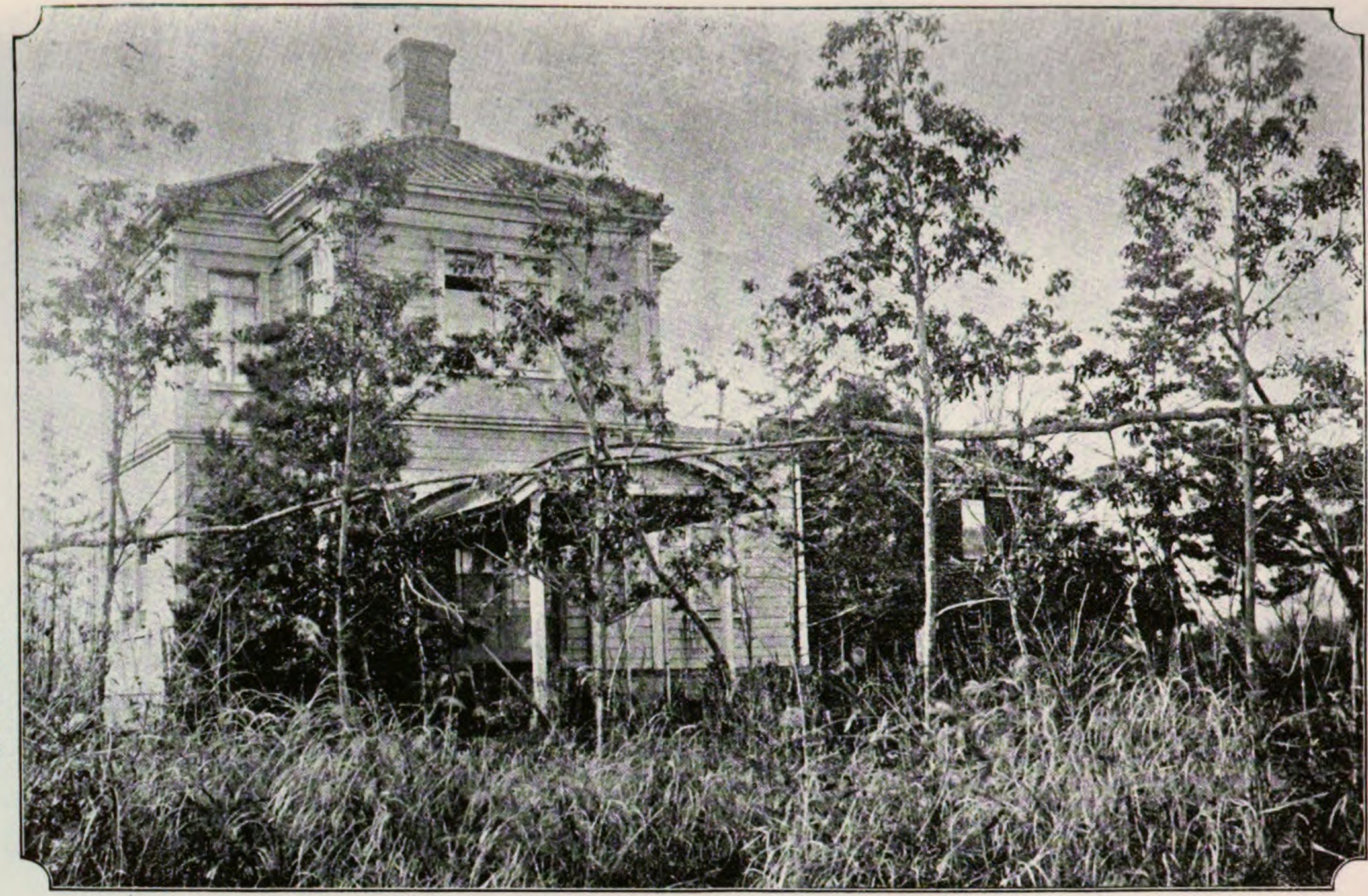
侯爵夫人伊藤梅子



（齋藤紫白氏撮影）

瓜生岩子の銅像（淺草公園內）





（齋藤紫白氏撮影）

明治女學校（在巣鴨庚申塚）



成女學校生徒並職員



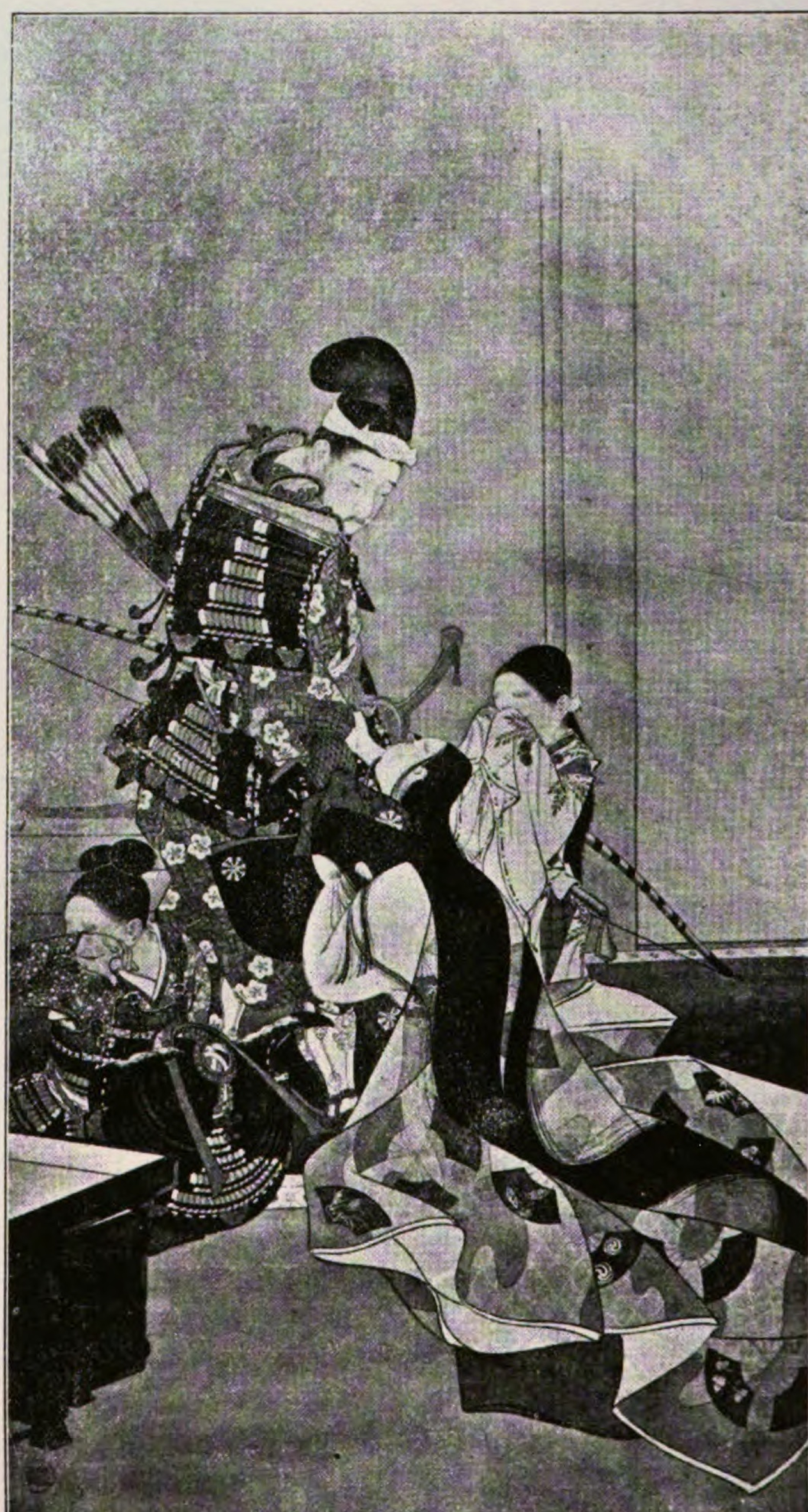
（齋藤紫白氏撮影）

古利根の流（粕壁驛附近）





東京裁縫女學校職員　(改良服着用)



（小堀鞆音筆）

維盛卿の哀別

(丙の一)

（丙の二）

通俗百科全書

全部五拾冊　全壹冊菊版三百二十頁　毎月壹回發行

第廿壹編　通俗教育學

永持徳一君著（六月下旬發行）

教育の國家將來の運命に關係あると深大なるは茲に縷述するの要なし現今教育の觀念は一般に普及し子弟ある者皆之を就學せしめ教育の事業は日進月歩と謂ふも敢て不可ならず然れども教育の事たる一に學校を恃むべきに非ず父兄たる者進んで師となり監督者となりて開發誘導を勉めさるべからず從て父兄たるものは漠然教育の必要を感受するよりも一歩を進めて教育學の何たるを會得し是を基礎として子弟を薫陶せさるべからず然るに教育學の書多く學理に偏して明斷を缺き或は簡に過ぎて要旨を失ふ獨り此書は尤も妥當なる學理を通俗的に記述して教育手段方法に論及す敢て理論の奇警を衒はざるものは實際的目的を有するが爲め也蓋し一般を利する教育學書は之に若くものあらざるべし

全壹冊菊版
三百二十頁
正價三拾錢
郵稅八錢

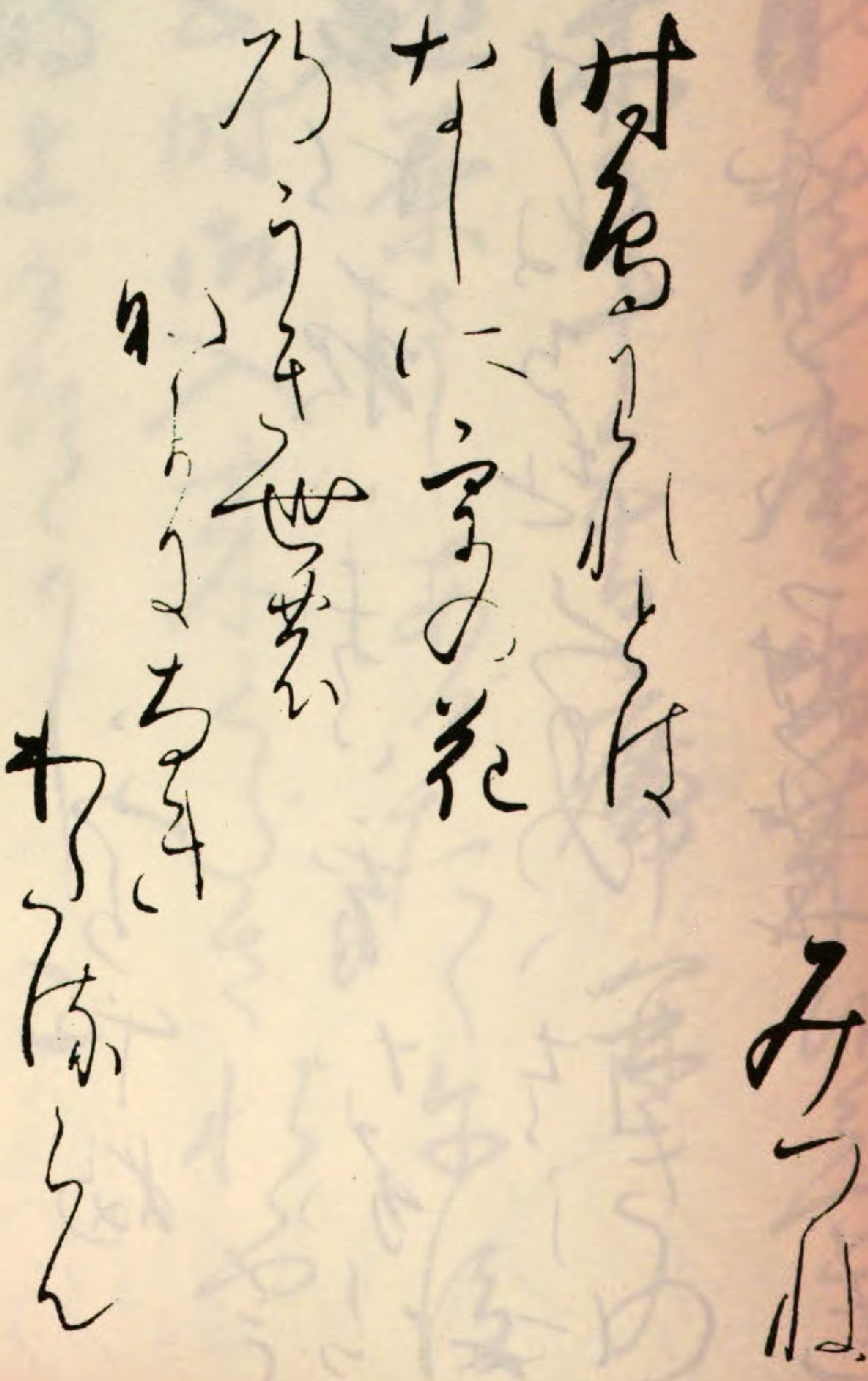
既刊目次

正價前金
●自一編至十五編一冊廿五錢　●六冊壹圓四拾錢　●十三冊貳圓七拾錢
●拾六編以下一冊三拾錢　●六冊壹圓七拾錢　●十二冊三圓三拾錢

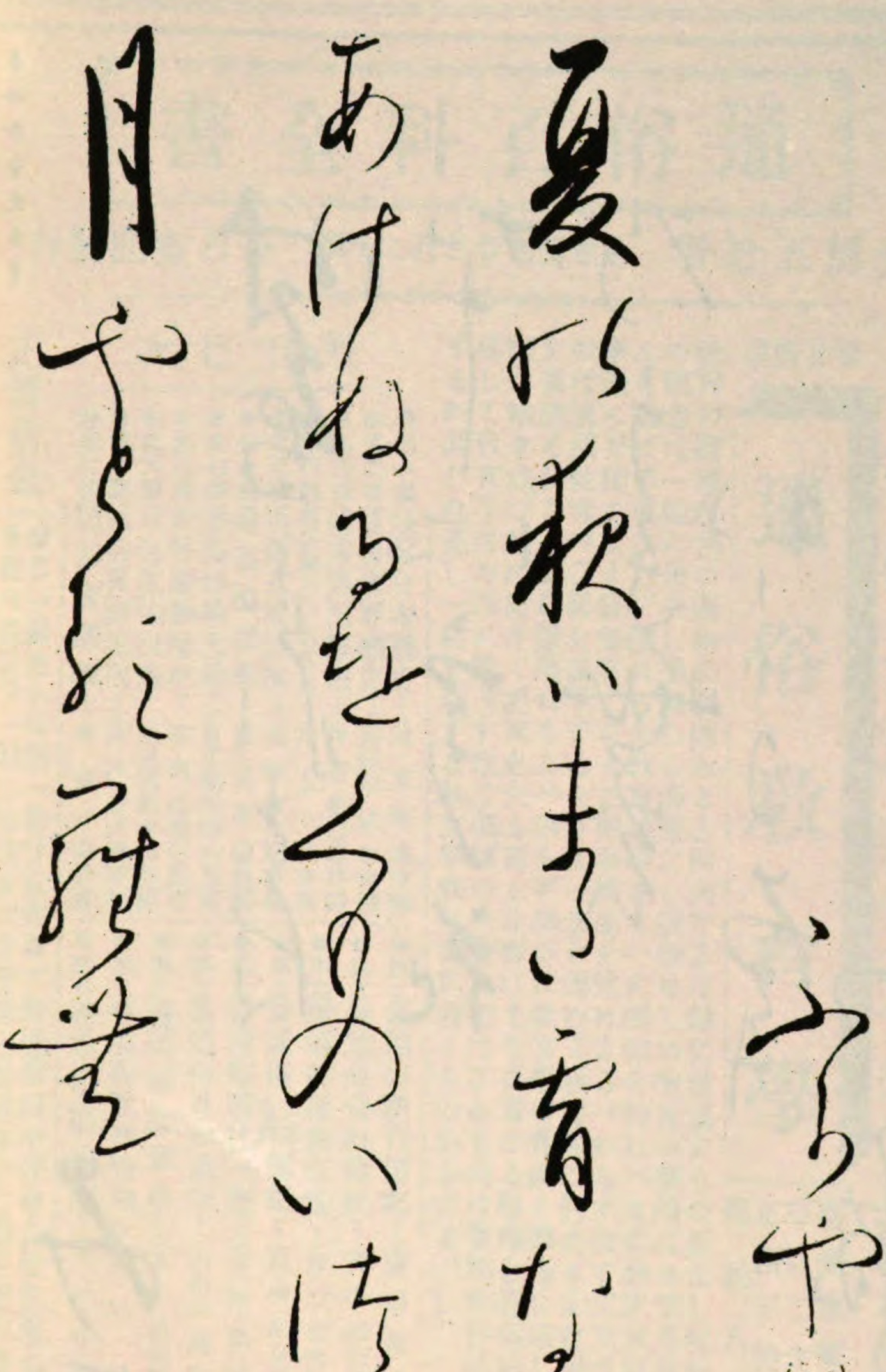
發兌元　東京　博文館

（丙の四）

多田黙堂先生筆



多田親愛先生筆



新樓の屋出来候につき
来る十五日庵開きの
粗菜さしあげたく午後
五時より御入来くださるやう
待上まゐらせ候

二

坂正臣先生筆

一じよ承り候へは御新築乃
新樓屋も出来あがり候に末
十年の御ねぎし残蒙り候り
がくく有て示し如刻よ宜
必要と侍りて勝蒙なから
先まて申上まゐらせ候かしこ



野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆



巖谷漣山人著　有名畫伯挿繪

世界お伽噺

每月壹回發行◎全部壹白册◎洋装菊判美本

正價壹册七錢◎六册前金四拾錢◎拾貳册前金七拾八錢◎郵税壹册貳錢

◎第二十九編（渡邊金秋書）

アラビヤ　奇躰の洋燈　不思議の馬

全壹册菊判密畫入美本正價金七錢郵税貳錢

例の世界お伽噺第二十九編は奇躰な洋燈と不思議の馬の二篇です、何が不思議と申して、何が奇躰と云つてこれ位また奇躰不思議のお話もあらびやの物語り、洋燈の精や木馬の精が乗り移つて居るのですから、これを讀む方がことによると本の精に誑まれるかも解りません、あうこわやの〳〵のまづは廣告から奇躰不思議な事にして置ませう。

◎第三十編（中村不折書）

獵師大臣

全一册菊判密畫入美本正價金七錢郵税貳錢

此編は獨逸伯林東洋語學校希臘語學科講師希臘人ミソタキス氏が曾て編纂せる新選希臘お伽噺中より飜案したるものにして珍聞奇話一度卷を繙かば遂に掩ふ能はざる妙あるべく若夫文章に至りては例の山人が渡航後第一の筆を揮へるもの圓轉滑脱一句雲を吐き一字風を呼ぶの快あるべく伯林在留の山人に見えんと欲するものは須く此編を睹られよ

既刊目次

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

編輯主任　久保天隨　八杉蒭舟　大谷繞石

新文藝

第壹卷第六號　六月一日發行

挿畫……倉田松濤

目次

評論　文學士　久保天隨

◎敢て讀者に告ぐ◎名を好むの愚◎娛樂としての文藝◎少年雜誌の弊◎片言十二別◎架諸錄

本誌體裁四六二倍
毎月一回一日發行
定價　一冊金十二錢◎六冊前金六十六錢◎十二冊前金一圓二十錢◎外に郵便稅一冊一錢づゝ

本誌は廣く江湖諸君の投稿を歡迎す
但し投稿は本鄕區西片町十番地ロノ二十一号新文藝編輯所へ宛送附の事

發行所　東京市神田區仲猿樂町　新文藝社
發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

（その三）



頭卷

內閣總理大臣侯爵伊藤博文君題字（石版眞蹟）
橋本雅邦翁筆智慧文殊の圖（極彩色木版畫）
寺崎廣業君筆上龍普賢の圖（極彩色木版摺）
中村不折君筆放牛田家の圖（極彩色石版摺）
光村利藻君撮影雪の金閣寺（巴里博覽會金牌逸品）

（再版出來）

旅行癖美術眼を以て知られたる乙羽子今春遠く世界漫遊を思ひ立ち、歐米の山水に遨遊し、各國の都市を觀察し、更に巴里の萬國大博覽會を視、ライプチヒ連藝の大書肆を歷觀して書帙の絕美絕精なるを歎じ、其の美術の發達せるに感じて我出版業の幼稚なるを慨し歸來見聞する所を記して歐山米水の著あり、繪畫彫刻、寫眞、製版、印刷、製本の技に至るまで總て第一流の名士を選びたれば其美其精、獨り我が邦未曾有なるのみならず之を歐米の書店に陳するも必ず遜色なかるべきなり、卷中挿む所の寫眞版一百餘圖璀璨人目を眩す、讀者僅々一圓五十錢を投じて一本を購はば、座して世界を周遊するに齊しく、著者が萬金を抛つて得たると同一の見聞快樂を博するを得、嗚呼亦廉の至なるかな

女學世界

明治三十四年六月五日發行

第壹卷 第七號

紀元二千五百六十一年 西曆一千九百一年（辛丑）

論説

女子高等教育の必要

帝國教育會長 辻新次君

本篇は、過日氏が日本女子大學の開校式に於て、祝辭として述べられたるものにて、女子に高等教育を施すの必要を説きたる有益の意見なれば、本誌は特に氏に請ふて此に掲ぐることゝせり

我國の教育も近頃漸次に進歩して參りまして、今日では是非女子にも高等の教育を授けねばならぬようになつて參りました。本校の創立者成瀨君等は此の必要を認められ、日本始めての女子大學校を御新設になりましたのは、國家の爲め又人文の發達のため、誠に祝す

べきことゝ存じます。

私も疾くから女子教育の必要を感じました一人でありまして、是迄幾分か微力を盡したこともあります。既に明治二十年の慥か二月頃でありましたか、今の帝國教育會が大日本教育會と申して居つた時分、その集會の席上で私は一場の演説を致しまして、政府に女子のために大學校を立てゝ貰らいたいといふことを望んだことがありました。其の譯は、當時女子の醫科大學に入學したいと申す者がありましたから、先づ第一に女子の醫科大學を興し、漸次其必要に應じて他の大學をも設ける樣にしたいといふ希望を述べたのであります。其時分はたゞ突飛な議論として冷笑の中に葬られたことゝ思ひますが、私の希望が空望になつてしまはないで、かように有力な方々の手で此の大學校が設けられ、今日此席に列なることを得ましたのは、私に取つては一種云ふべからざる愉快を感ずるとてでございます。最早女子には教育は入らぬといふ樣な愚論はありますまいが、今日までは女子に幾らか高尚な教育を授けようとすると中々異論がありまして、女子を「物知り」にするのは却て女德を傷ふものであるとの非難は、隨分勢力のある論でありました。成程教育をしたために女德を傷ふといふ樣なことがありますならば、それは餘程氣を付けなければなりませぬ。殊に

國々によつて自ら一種の良風美俗といふものがありますから、萬一敎育の仕方を愆つて此の美風までも壞すといふことになれば大變なことでありますから、そこには大に注意せねばなりません。で敎育者は一方には新らしい高尙な文明の智識を與へると共に、又一方には恭謙の女德を養つて往かなければならぬことは勿論であります。然るにこれまで偶ま女子敎育に幾らかの弊があつたために、其の弊のみを氣遣つて大切な女子の高等敎育を制限するといふことは、丁度痴人が病を恐れて食を絕つといふ類ではあるまいかと思ひます。しかし乍らまだ〳〵かような固陋論者がある樣でありますが、其の人々は女子は他日男子の母にもなるといふことを忘れては居ないだらうか。

昔から豪い人達の持つて居る高尙な、純潔な、品格は是は何處から得て來たかといへば、多くは稚い時分其の温かな家庭の中から得て來たのでありまして、殊に母親の感化といふものは非常に強いものと思ひます。小供といふものはすべて見ること聞くことは何んでも眞似ずには居られぬ者で、母親の一擧一動は皆な小供の手本となりますから、小供が大人となつてからの言語、擧動、人品といふものは、母親の言語、擧動、人品が再たび現はれたのであるといつても餘り言ひ過ではあるまひと思ひます。して見れば母親の見識、人品

の高いのと卑いのは、小供の人品に大變に關係があることが明かであります。そこで女子は人の手本となる樣な人品を具へ、又小供を敎育する才能見識を養ふために、どうでも高等の敎育を受けねばならぬ事も明かでありませう。

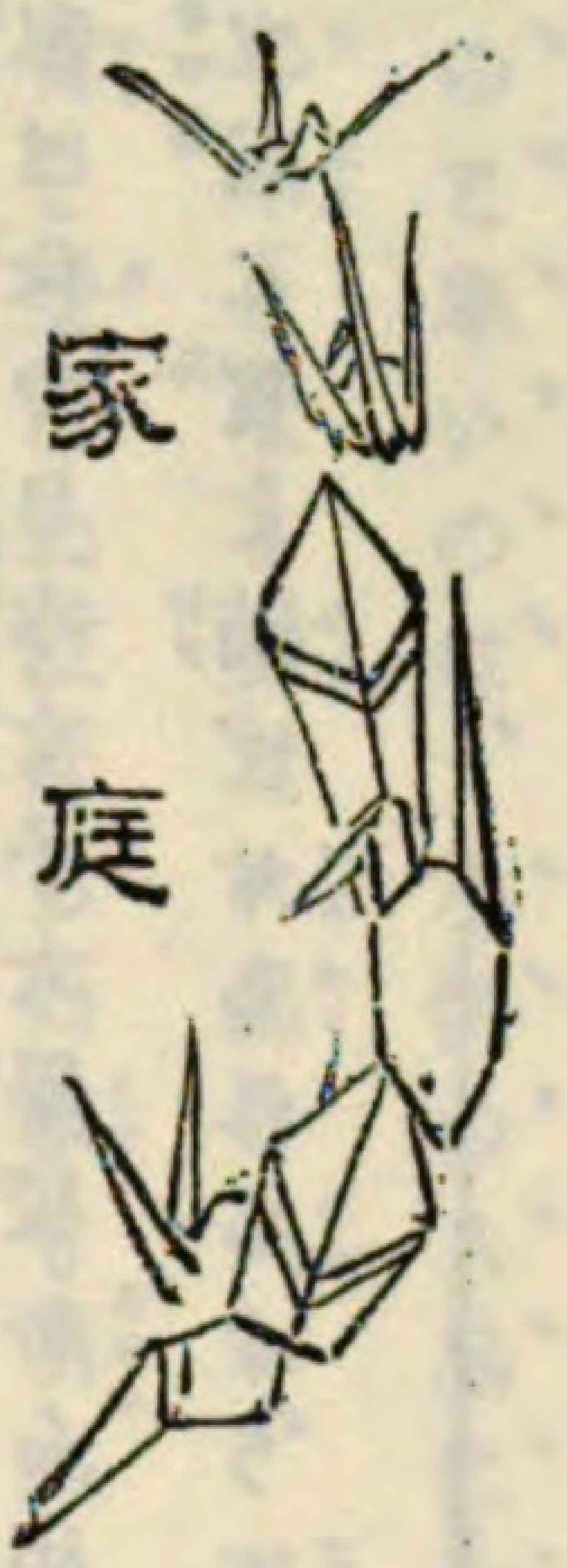
又女子はたゞ人の母として高等敎育が必要であるのみならず、人の妻としても必要であらうと思ひます、妻が夫を扶けて往く上に夫の心を悟るといふことは最も大切であります。夫がどう云ふ志を有つて居るか、どういふ事に心を痛めて居るか、又どういふ趣味を持つて居るか、妻といふものは常に夫の顏色によつて其の心を讀み、夫の一擧一動によつて其心の奧底を讀まねばなりませぬ。この位夫を慰め勵ますことはあるまいと思はれます。然るに夫はたとへ高尙な敎育を受けた立派な人物であつても、其の妻たる者がそれ程の敎育のない、物の道理を辨へない女であつたならば、夫が或は國政のため、或は商業貿易のため、其の他何かの事業のために心を痛めて居るといふ時分に、どうして之に同情を表することが出來ませうか、どうして夫の高尙な心を讀むことが出來ませうか。この樣な家庭には調和といふものは見出すことはできますまい。夫の高尙嚴格な性質と、妻の優美で聰明な性質とが調和して始めて立派な家庭が出來ますので、敎育といふものはこの男子の長所

を伸ばし、又女子の美質を發揚させて、兩方の釣り合を取り、調和させるものでありますから、今日文明の社會では男子の敎育を高めると共に、女子の敎育も高めて、いよ〳〵此の釣合を取つて往かなければなりません。

女子を何時までも小供の様な、不具者の様な境遇に置くのは文明の汚點でありますから、女子にも大に泰西の新知識を與へて、また社會に一つの地歩を占めさせて、女子の本分を盡させねばなりません。女子は良妻賢母として敬するのみならず、社會上に大きな感化力を持たせねばなりません、其の外仁愛慈善の事業なども主に女子の手でするように進めたいものであります。又社會の高尚な情操、或は優美な風俗といふものは女子に作らせなければなりません、即ち今日輿論の唱導する公德の養成なども、一方では又女子にも望まねばならぬことゝ思ひます。又敎育上女子の身體を强健にして、健全な國民を作るといふことは今日の最も急務であらうと思ひます。

終に私は此の日本女子大學校から出る淑女たちが、他日日本の文明に最も美しい花を咲かせ、立派な實を結ばせられるように今日から深く希望して置きます。

家庭



女子の家庭教育

塚本はま子

女子は妻たり母たるに適するやう、教育すべき事はいふまでもなき事なるが、この目的を達するには、獨り學校の教育のみに依頼して安んずべきにあらず、兩親、ことに母親は專ら家庭に於て、十分にその妻となり、母となりて執るべき務を敎へ、負ふべき責任を示すべきなり。抑々學校の敎育は、一日に僅か數時間に過ぎざれば、近頃の如く如何ほど女學校の課程が改まりて、女子的となり、妻たり母たるべきものに適するやう、なり行き特に敎師たちもこゝをもて女子敎育の主眼とせらるゝ傾となりしとはいへ、もとその職務が家庭内の事のみなれば、學校にて學び得らるべき事は、十中一二に過ぎずして、多くは家庭に於て見習ふべき事のみなれば、母親が實際わが家をとゝのふる術は、その娘に齊家の知識を與ふる、唯一の模範にして、これに上こす敎授法はあるまじく、母親が子女を乳養し敎育することは、家庭敎育法を學ぶ爲の、活ける敎科書といふを得べし。されば西洋のをしへにも『善き母の育てし娘を娶れ』といふことわりて、眞に女子の敎育は、大部分は家庭に於てすといへるも、ことわりといふべきなり。今次に女子の家庭敎育中、主なるもの一二を擧げて、若き母親たちの參考とす。

◎體育を重んずべし

體育の大切なる事は、男女の區別あるべからずといへども、時としては、女子は男子ほど强壯なる身體を要せずと、思へる者なきにしもあらず。甚しきに至りては丈け高く肩幅廣く、胸骼立派に肥え太りたる者は、醜しとて、己が娘はなるべく、肥え太らぬやう、顏色も蒼白く、手足も、華奢に、衣の重みにも堪へられぬほど細腰にして、屈みがちならんを望み、學校にて盛に戸外に運

動を奨勵し、日向にて體操などを課するを見、その美質を害ふものとして、女子の敎育をあやまれりと、不平を唱ふる父母もありときく。これ一には妻を求むる男子の好尚がかゝる傾をもちて、子孫の爲に躰質强壯なる賢婦を得んとつとむるは少く、昔物語の書にみゆる姫君か、さらずば容貌のみを財產として、人に媚を求むる、いやしき女の容姿を貴むの餘弊なるべしといへども、斯かる浮きたる望みの男子を、聟とせんとつとめて、その望みに阿ねらんとする心根も、また道理ある事とはいひ得じ。抑々人の妻たり母たるの務は、決して輕きものならねば、そが身分貴ければ貴きほど手足の勞働こそ少なからめ、目に見えぬ責任はいよいよ繁劇となるものにて、その繁劇なる職務を全うせんには、十分躰質をよく壯健にして、元氣も亦盛ならんこと何よりも望ましき事



なり。ことに壯健なる女子が、壯健なる母親の出なるは一般に信ずる所なれば、この點より論ずれば、女子の躰育は、男子の躰育よりも、一層大切なりといふもあやまりにはあらざるべし。されば予は女子の家庭敎育中、第一に躰育のことを述べんとするなり。

食物は多く男兒と區別する人少ければ、こゝに取りたてゝいふべき必要なしといへども、まづ食物の品質を撰み分量に注意し、滋養に富めるものを適よく食せしめ、よく食事の時間を定めて、幼時より間食の惡癖にそまらざるやうすべき事肝要なり。女兒は男子よりも運動せざるもの多ければ、特に消化器は大切に保護すべきなり。

衣服と運動とは、まことに密接の關係あるものなれば、女兒も男兒の如く、强壯ならしめんとせば、まづその衣服を運動に適するやう工夫すべし。

この頃、衣服改良の聲高きも、また子女の活潑に運動しがたき、從來の弊に氣付きたる結果なるべし。まづ大人の女服はさておき、女兒の衣服は、袖の長き事第一の瑕なれば、袖をゆるやかなる筒袖として、袖口の所のみを手の大きさに準じて細め、下部には袴樣の物を用ひ、下には股引の類をはかしめ、自由に活動し得るやう、とゝのへ、且つ上衣は夏冬とも單物として、度々洗濯する事を得るやうせば、たとひ砂の上に座するも、芝生の上をころがるも、口やかましくそれ袖がひく、それ裾がよごるゝと、叫びて餘念なく、花を摘み蝶を追ふ樂しき遊嬉の興をさまし、切角の趣味を失はしめ、遂には、母の顏色を氣づかひて、戶外の遊戲を辭むにも至るべく、これまことに、兒童の天性にそむける事といふべし。かゝる結果は、運動の不足と、不潔なる空氣を呼吸する爲とにて呼吸器をよはめ、消化器をそこなひ、營養を不足ならしめ、貧血を起こし、顏色蒼白となり、元氣衰へ、物の用にも立ち難き、神經質の婦人となり終るべし。履き物も亦運動に影響をもつ事甚しく、かのおしだ及び重き臺のつきたる木履などが、履、草履の類より、いかほど步行し難きかは、人の皆よく知る所ならん。かく運動の點よりいへば、女兒に美服を纏はせおきその破れ汚るゝを厭ひて、監督をきびしくするは、衣服をもて女兒の生命よりも貴しと考ふるものとおなじく、衣服を購ふに吝にして、醫療の費用をば惜しまざる者といふべし。もしたゞ、醫療費を費すのみにて、事おさまらば、猶幸福なりといへども、時としては大切なる小兒をして、開かざる花の蕾となり終らしめ、いはゆる取返しのつかぬ不幸をもみるに至らん。如かじ女兒なりとも、男兒と同じく質素にして運動に便利なる衣服をまとはしめ、十分活潑に運動させ、天眞の美を發揮せしめんには。

生理的變化の時期は、實に女兒が健康に注意する母親の、殊に深き注意を要すべき時なり。生理的變化とは處女の始めて、月經を覺ゆるをいふ。婦人が一生の病氣中その過半は、月經時の攝生よろしからざるによるときくをもて、いまこれに關する話をせんとす。月經の始まるべき女兒の年齡は、もとより一定せざれども、我

國の如き温和なる氣候の内に生活するものは、まづ十四歲より十六歲ぐらゐの間をもて普通とす。されども稀には、十一二歲位にて、これを見るものあり、又時としては、廿歲或は廿歲以上まで、月經の遲くるゝことも少からずといふ。かく女兒の成熟期に遲速あることは氣候に關し躰質に關すといへども、この他に種々の原因あり。常にみだらなる家庭にて懶惰不規則に生活し、或は戀愛小說に耽り、もしくはそれに類似せる談話を聞きもし、話しもし、時としては正しからぬ精神的の刺激をうけ、夜更かしを爲し、睡眠を不規則にし、濃厚なる美味を食し酒類又は刺激性のやくみ類を好むなどは、何れも成熟を促し月經を早からしむるものなりとぞ。然るにかゝる原因は、母親の監督十分ならざる爲か、上流社會に行はるるが如き事情あり、故に却て中流以下の社會にて、身躰の勞働も適度にして、食物も淡薄に精神的の刺激も少き婦女は、健全にして成熟期比較的遲きが如く、都會の女兒は、田舍の女兒より早しといふもこの原因に外ならじ。女兒が始めて月經となれる時は、まづ何となく疲勞を覺へ、萬事にものうく、腰部に固有の痛みを感じ、重荷にても脊負ひたらん如く、脊の引きしめらるゝ如き苦痛を覺ゆるものなれども、かゝる徵候は、月經の規則正しく一定せる後には、大概現はれざるものなり。母親はかゝる娘の有樣をさとらば、等閑ならずこれに注意し、強き運動及び、長途の步行乘車をとゞめ營養をよくし、精神上に刺激なきやう、注意し且つ月經時期には清潔なる脫脂綿、脫脂ガーゼの如き軟かなるものにて、その手當をすべき事より、丁字帶のかけかたに至るまで、詳細叮嚀に敎へて、過りなからしむべし。かくて始めは一定せざる事あれども、數ケ月後に至れは健康なる者は二十八日目、或は一ケ月目には、一回の月經をみるに至るべし。かく一定の月經を見るに至れば、その女兒は身躰の各部に種々なる變化を生じ、その躰格はまるく肥え、臀部は膨大し乳房も發育し、擧止動作何となく羞かしげになまめきて、精神上にも多少の變化をきたし、萬事につきこどもらしき態度を捨て女らしき品格そなはり、胸中に後々の希望をも畫きて、

妻たり母たるの天職をも感ずるに至るものなり。母親はこの時にあたり、躰育上に十分なる注意を與ふるとともに、精神上にもよからぬ道に踏みいらざるやう、高尙なる志操をたもたんやう敎へ導くべし。もしこの時期に敎育をあやまらば、或は憂欝病に陷り或は破廉耻に近きものとなるに至らん。まことに女子一生の幸不幸、德不德もこの時期の、母親の注意如何によるといふも不可なきなり。ことにこの時期は、おゝき諸種の病氣を引起し易ければ、常に身体に異狀なきや否やを氣つくる事、必要ならん。(未完)

室內裝飾

華族女學校敎諭　近藤嘉三

室內の裝飾――一寸考ふる時は、誠に何でもない事の樣であるが、又能く其の關係や影響する所を考る時は決して左樣でない、兒童が目に見耳に觸れてその幼稚なる極めて生ぶな奇麗な素心にはこれが爲に大なる利害の影響を受くるものである、それは富士山とか遠州洋とか云ふ樣な雄大壯麗なるものに對しては、心が何となく高遠に馳する樣に思はるゝ、又菫花や蓮花草などの咲き亂れて居る春の野に出れば、心が自然に融暢〳〵するやうに感ずる、これは外圍の境遇が人心に及ぼす感化力で、大人でもそうであるまして、兒童の心にはこの力が一層强く感ずるものである、されば居室の裝飾が兒童は勿論大人の心にも及ぼす、利害と云ふものは決して少くないことを知らねばならぬ、一寸した例を申しても楠公訣別の圖とか、曾我兄弟復讐の畵とかの掛物が掛てあれば忠孝の心が起る、歌丸や北齋の浮世畵の掛物でも掛つて居れば、何となく元祿時代の遊怠な心に爲ると云ふ樣なものである、であるからこの居室の裝飾の適否は一家の家庭の幸福を保つ上に於ても、又家庭敎育の上に於ても、決して等閑に付し去るべきものではないであらうと思はるゝ、即ち主婦の要務の内でも尤も大切なる條目の一であらうと思ひます其の利益ある點を擧れば先つ第一は國家忠孝と云ふ觀

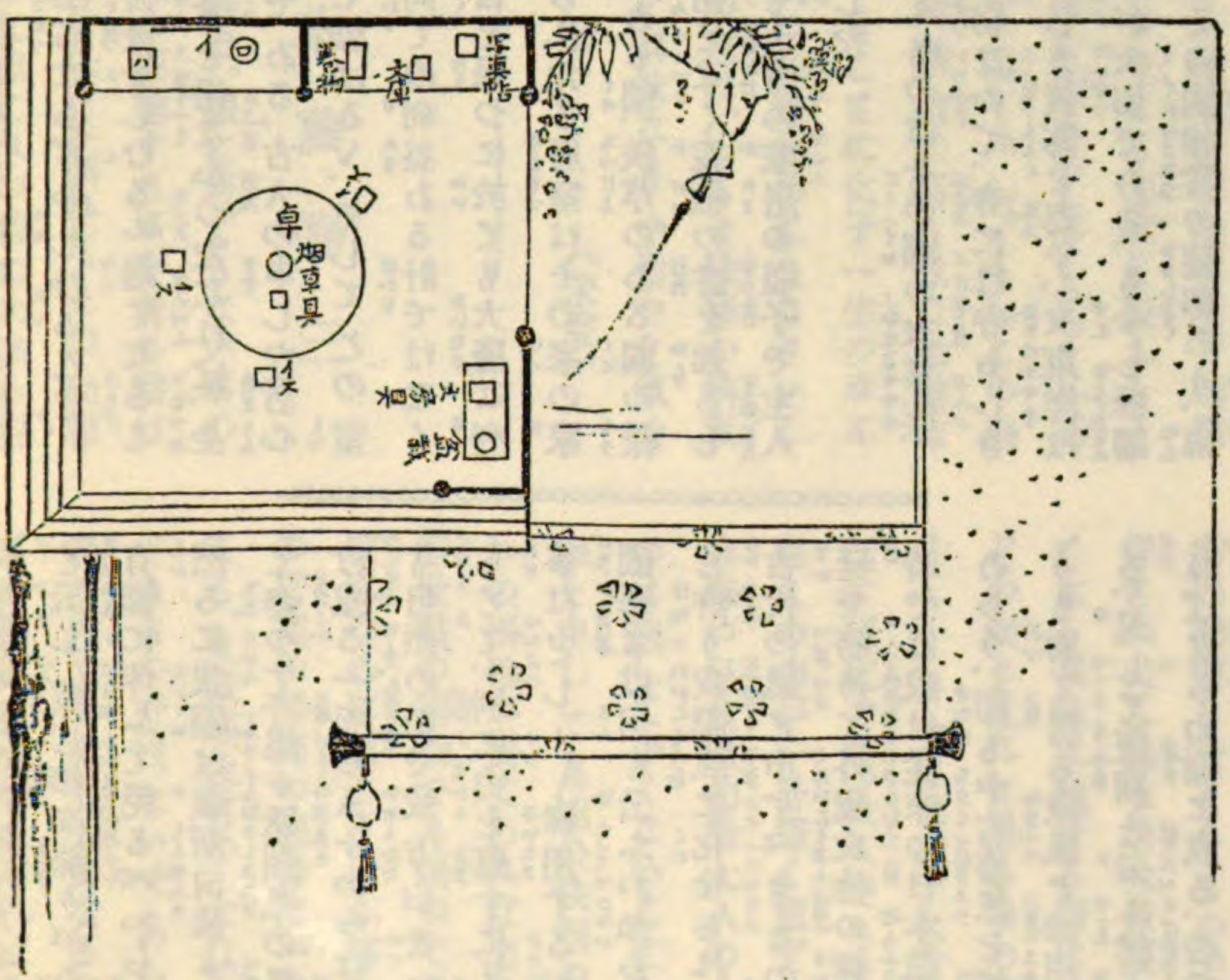
念を養ふこと、美術的の素養を作ること、兒童の心思の高尚典雅の域に誘ひて野卑陋劣ならざらしむること、又或る方法に由ては智識を啓發せしむる一端となることも出來る、もし其の裝飾が當を得なかつたなれば、全くこの反對の結果に爲るのである、古人の申した居心を移すといふ語は餘程面白く思はるゝ、そしてこの室内の裝飾が獨り家庭の内に向ての利益ある計ではなく外に對しては一家の躰面々目を保つに於ても大層な利益がある、適當に上品に飾られたる居室はその家の家庭の光りである、丁度禮儀のある國、秩序のある國の樣なもので、先づ外客をして何となく畏敬の念を起さしむるものである、兼好法師も大方の家居の樣子で主人の心か推し計るゝと申しました

然してこの居室の裝飾といふものはその國の衣食住、生活の有樣に伴ふか尤も大切なので、寺には寺らしき裝飾を要し、學校には學校らしき裝飾を要す、又東洋は東洋風西洋は西洋風の裝飾が大切である、も少し極端を云へば、北海沍寒の國にはその國相當の裝飾あり、南洋熱帶の國には椰子だの棕梠だのが樹下に竹榻を置くと云ふ、涼し相な飾りがある、これは實際生活衣食住の有樣に伴ふて免るべからざる結果である。

然るに我國は維新前後より次第に歐風の生活が流行して參つて、追々歐洲風の風俗に感化されつゝある、これは或る一派の人々からは嫌はるゝかも知れぬが、どうも自然の勢で致方がない、又從來の風俗が無くなるからとて、別に力を落すにも及ばぬ、便利なるものや善い事はどし〳〵採用するが好い、今日の風俗は神道家や國學者は何と云ふか知らないが、三韓唐土の風俗の少し許り我國風に化せられたもので、決して純粹な日本古代の風と申すべきものではない、それは歷世の朝廷で務めて外國文物の採用を御奬勵遊されたので、當時では或は從來の日本風のものよりは勝つて居たのであらう、即ち中古唐風を採用した如く、今日も亦それよりも勝て居る歐風を採用するは何の差支もない事である、况して便利と云ふ偉大なる勢力は自然之を採用せねばならぬ樣に成る、否爲りつゝあるのである、今日何

んな山間の僻村に參つても菓子パンやビールの無い村はない、又ランプや洋傘の行はれぬ里は無いのを見ても知らるゝ。

斯樣に歐風の事物、風俗、習慣がだん／＼と流行して參つた、現に東京などの紳士大宮の居宅は殆んど和洋折衷と云ふても好い、先づ居室に通れば椅子もあるテーブルもある暖爐もある、然して家屋の建築は全くの洋風ではない、若し鵺的の住居であると惡口すれば、如何にも鵺的かも知れぬが、この鵺的が尤も今日の生活に便利で、どうしても鵺的



で無ければ差支の出來るのである、されば見れば今日日本人の生活に最適の住居であるから、鵺などゝ云つて擯斥するにも及ばぬ、即ちこの不完全――不完全なる生活住居を發達せしめて完全なるものとすることは尤も今日の急務であろうと思はれます、それは中々我々の企て及ぶ所ではないが先づ差當り、餘りに不完全で無趣味な裝飾を矯る――矯めたいと云ふ爲めに、玆に現時に適當なる居室裝飾の標本――標本と云ふてはおかしいかも知れぬが參考の資ともなしたき爲に和洋

折衷家屋の裝飾と純粹の日本風の居室の裝飾とを書き試みませう。

凡て裝飾の要は調度の色彩やら形狀やらの配合が第一である、圓形のものに配するに長方形若しくは方形のものを以てするとか、高きものに低きものを以てするとか、艶麗なるものに清素なるものを以てするとかいふ樣に取合せが大切である、色などに就て申すも萌黃色には紅色と云ふ工合にするのが秘訣である、同じ草花を挿むにも燕子花の樣な艶なるものは、古銅器などの雅致あるものに、挿む方か七寶燒や伊萬里燒の美麗なる器に挿むよりも趣があると同じ事である。

五月　廣間飾

例之ば、玆に十五疊若しくは二十疊敷の大廣間の床幷に床脇の違ひ棚のある、襖、なげし上等凡て白の鳥の子紙に銀泥雲形を押す　これが冬期から春にかけてならば、金泥が好い芭蕉が金屏の松の古びや冬こもりと云ふた如く、黃金色は暖かに見ゆる、銀色は涼しそうに思はるゝ、最早五月であるから、少しくつろひたる裝飾の好ましひ季候であるから、もし新に張り付くるなれば白地に銀でなければならぬ、疊の緣は薄茶色に大紋のある繻珍か何かゞ好い、そこで床の間には(イ)の掛物柳里恭か南蘋などの美しい花鳥などの畫を白茶純子か又はこげ茶色の繻珍表裝に牙軸の付たるを懸くる、床の右の方の(ロ)に古銅の方形式の花瓶に小手毬か卯の花を澤山に挿みて朱檀の高卓の上に置く、その左側の(ハ)は銀ぼやの懸けてある青磁燒の香爐で春日盆の上に載せて飾る床はこの位にして、さて床脇の違ひ棚は上の段に堆朱の卷物盆に繪卷物の二三卷を載せて、その脇の所に寫眞帖を大小二帙位を置く、下の段には料紙文庫に料紙硯これは古代蒔繪――蒔繪も東山時代のものか何かゞ好い、さて中央に大形の楕圓形卓を置て萠黃と赤の浮織模樣のある卓被を懸けて、上に蒔繪の煙草箱にシガーを入て飾る煙草箱も、此節のものよりも何か古いもの見立物が面白いそして其の脇に銀製のアク切にマッチを添て置く椅子も多く竝べるは鬱陶しい裂張の華奢な椅子を二三脚配置する、一方の壁付

の所に(二)朱檀製の高卓を置て上に文房具これも多く置に及ばぬ、インキ壺に二三本のペンと紙と封筒位で好い、其脇に甘草か又は蘭か何かの盆栽を置くのである。

子供のしつけ

坪谷水哉

子供の養育ほど趣味ある事は無く、また子供の養育ほど愼しまねばならぬ事は無い。庭中の花卉を育てるにさへ、大陽の光線を受ける具合や、肥料の加減、または添へ木の形狀によつて、花や葉を威勢よくもまたは優しくも造られ、或は其の枝振りを直ぐにも曲げても生長させることが出來て、之を朝な夕なに眺めて居るのが仲々の樂しみであるが、まして人間の幼ないのは、草木の嫩いときよりも一層純朴なもので家庭の育て樣で如何樣にも其の性質を作ることが出來て、それが畢生の性質になるのであるから、草木を培養するに比べると數十倍の趣味がある。

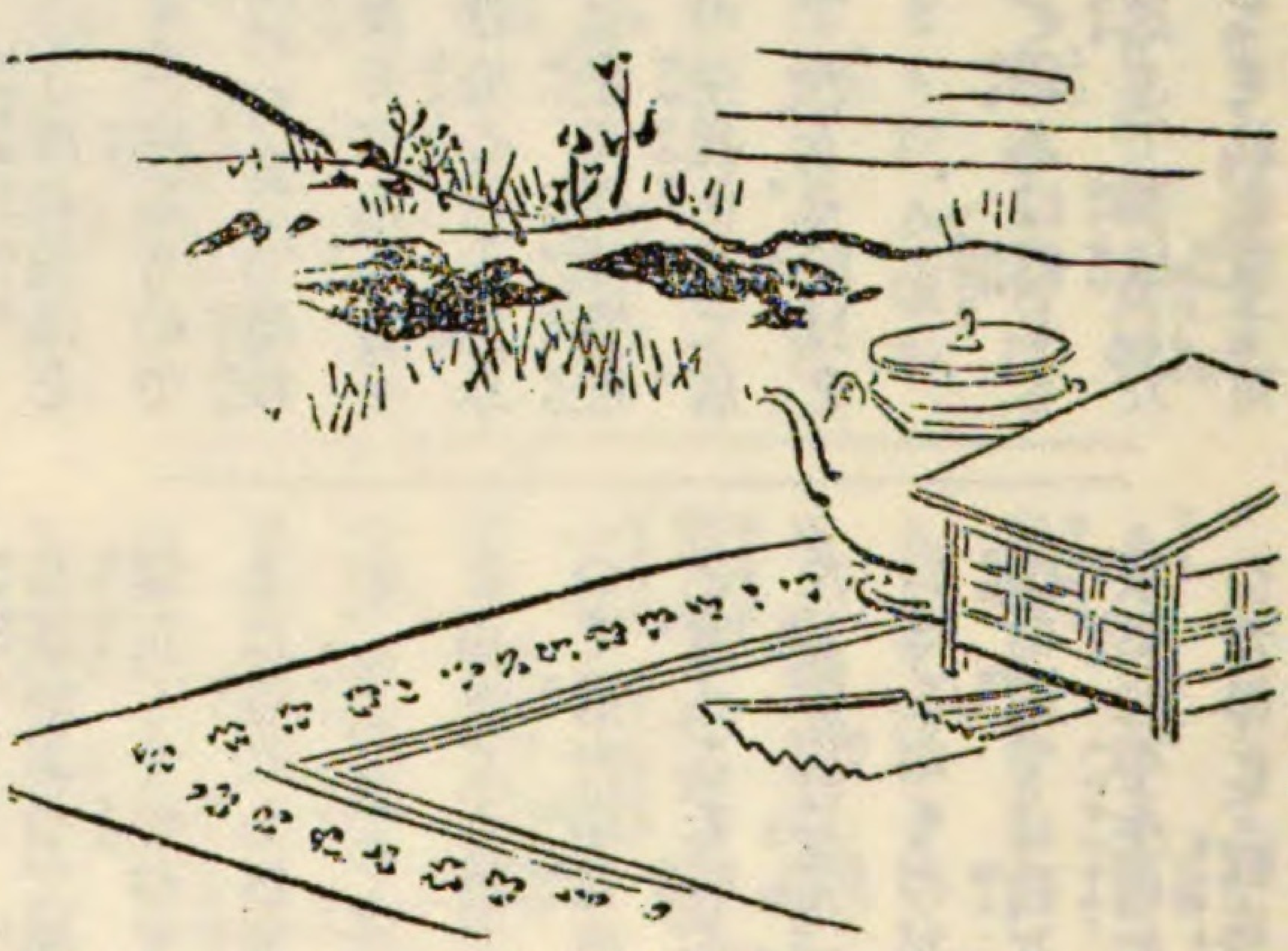
昔時の賢こい人が、兒童の敎へに注意して、白き糸を見て泣いたと云ふは道理である。何故かと言ふに、小兒の時は丁度まだ染めない白き糸の樣で、染め方によりて赤とも青とも黑ともなる如く、純白無垢の小兒は、善く育てれば善き人と爲り、惡く育てれば惡るい人となるのだ。

實に幼なき小兒は、一點利慾の念もなく、また邪惡の心も無く、恰かも神の樣な純白無垢なもので、唯だ目に見たり、耳に聞たりすることを眞似て見ようと思ふ計りで、其外の事は何も知らないのであるから、寺の前に住めば葬禮を出す眞似をし、兵營の近所に住めば兵隊の眞似をするといふので、若しも女郎屋などの不潔な場所に近い所に住む家の小娘は、娼妓ごつこなどゝ云ふ惡るい遊戲をする樣になる。故に朝夕とも學んで惡るい事は一切見せたり聞かせたりしてはならぬのだ。孟子の母が孟子を育てる爲に三度住居を遷したといふのは名高い話であるが、近頃は近所の者どころか兩親の

行ひが既に小兒に學ばせては宜しくないものが多くある。斯かる家庭では、幾たび住居を遷しても、父母の傍に置く間は、到底子供を善い人に育てられぬ。

古い川柳點に「己れが眞似するなと親は子に異見」といふ句があるが、近來は殊に斯云ふ不心得の親が多くなつた。何事でも常に親のすることを眞似たがる子供の前で、親が自から酒に醉ふてブー〳〵云ふたり、妾を置いて巫山戯狂ふたりしては、それを子供が見習ふのは當然である。近來一年々々に世の人の品行が亂れ、風儀が惡くなるのは、全たく子供のしつけが惡るいからで、其の本を正せば各人の家庭が修まらないからだと云ふても宜い。

余が近所に八百屋で消防夫を兼ねて居るものがあるが其の家の子供が、家の前で遊ぶ所を見て居ると、阿爺が持つ天秤棒の先へ阿爺の着る半纏を引つかけ其を肩に



荷ふて、消防夫の纏持の眞似をやつて居る。それからまた余が知れる或る慈善家が、近所の裏店の子供を集めて、美麗なる庭苑内で、成るべく活潑で上品の遊びをさせようとて、綱曳を爲さいと云ふて、長く太き綱を渡すと まだ學校に入たことの無い貧民の子供だから、其の綱を曳いて、サア井戸替々々々と叫んだ相だ。此等は何れも平生見て居ることの外は何も知らないからで、小兒の無邪氣なことは此れで分かる。畢竟其の父母を呼で、父さま母さまと崇める坊ちやま孃さまも、阿爺に阿母と呼び棄にする餓鬼も阿魔も、生れた計りの小兒としては決して智愚の區別もなく、また人品の高下も無いのであるが、家庭の育て方一とつで數年ならずして、忽ち別階級の人間となるのであるから、人間は天性よりは養育で善くも惡くもなるのだ。

小學校では教員達が熱心に修身の話をして、小兒の性質を善くしようと注意しても、學校を出て、自宅へ歸ると、直ぐに父母や兄姉などが宜くない事をして見せるときは、學校で學んだ事が何の効も無く、丁度折角湯を沸かした後に、また水を注いで冷たくする樣なものである。で、家庭で父母や其他の者の實際の行爲は、學校の敎育よりも遙かに多く小兒の頭腦に深く浸み込むものであるから、學校へさへ托して置けば安心だと思ふと大間違だ。故に子供に對しては家庭に於て平生實際上の敎師である積りで、注意したら、其の生長を見て居る面白さは、仲々鉢植の花木に水をやつたり日除けをしたりするの匹儔では無い。

自己の小兒に對して惡く育てたくないと思ふは誰しも同じ親心であるが、また善くしようと思ふて養成した慣習でも、飛んだ間違の起ることもある。それに就て可笑しい話は、余が知れる家にて、父母は相應に敎育もある者なれば、行儀の事などを子供に敎へて、客に往たとき、膳の上に附た全身の魚は、片面だけ喰べて、裏をかへしては箸を附けぬ物ぞ。また自宅へ客の來りて膳を出した時には、決して客の前にある物を欲しがつてはならぬなど、平生說き聞かせて居たは宜かつたが、一日客があつて膳を出しゝとき、頑是なき小兒は、傍に行儀正しく坐つて居るので、客は頻りに感心して、坊ちやまは穩なしい者だ、どうもお行儀が好いと賞めて居たが、客が皿の上の魚の片面を喰べ了つて、頓がて其の魚を引ッくり返し、裏面に箸をつけると見るや、今まで默つて居た小兒は、ワッと泣き出して、あの人が坊のお魚を喰べると叫んだので、客も主人も大いに面目を失ふた。此れは父母平生子供に言ひ聞かせて、客は魚の裏をかへさぬものだから、殘つた半身は坊にやるから、お客樣の前では穩なしくして居るのだと敎へて置いたから子供は平生客に供した魚の半身は自分の物と信じて居つたのに、遠慮の無い客が來て、其の魚の兩面とも喰べて了ふと、此んな失態が起るのだ。で、平生子供に言つて聞せるにも、父母は餘程注意して置かねばならぬ。

食物の防腐

溪流女史

これからは、氣候も追々と暖かく、凌ぎよくはなりますが、こんなに暖かになるにつれて、困るものは、食物が保たない事です。皆様の承知のやうに、冬のうちは大概な食物は、二日や三日は保存が出來ますが、今頃から先きになりますと、昨日の御飯も今朝は少しプンとくる、昨晩煮たものも今日は水ッぽくなつたり、つやつやしてきたりいたして、とてもそのまゝ食べる事は出來ぬやうになりましよう。と申して、食物でしらへの分量といふものは、なかなかむつかしいもので、足らぬこともなく、あまりもせぬやうにこしらへやうとするには、よほど熟練がいることです。よしまた熟練して居ても、食べる筈に、豫定しておいた人が歸つて來らなかつたり、不時の來客でもある時などには、相場のくるふ事も珍らしくありませず、とにかく年中食品の餘りのないやうにすると申すことは、まづ出來ないことゝいッても差支ないほどですから、この餘つた食物が、腐敗して食べられないやうになりますのも、隨分澤山あるといはねばなりませぬ。

そしてまたこの日々のことゝ申すものは、たとへ少々づゝでも「塵つもれば山」の比喩で、年分には大して損失になりましよう。例へば毎日、一匙の牛乳をくさらして捨てると假定しましても、一合を廿匙ほどゝきめ、四五錢の價と考へて計算しますと、凡そ一ヶ年に一圓近くのむだが出るわけです。これですから、日々芋一切、卵一個でも腐敗らして捨てた日には、中々大變です。西洋の諺にも「鍬でかきこむ工夫をするよりも、匕ですくひださぬ算段をするのが肝心だ」といつて居りますから、よほど臺所を有つて居るものが、この點については、十分注意しなければなりませぬ。と申すものゝ食物は腐敗つたからといつて、捨てゝは勿體ないなどゝいふ考から、少々くさりかけて居るものも我慢して召食るかたが老人の婦人などには、少くありませぬが、これは却て大した不經濟です。なぜかと申せば、食

物は時々刻々に消耗する、躰内の諸機關を補充し搆成する爲と、躰力や躰温を保つために食べるものですから、(本誌第一號、第二號參照)身躰を營養する爲に入用な成分、たとへば蛋白質だとか、脂肪だとか、その外澱粉、砂糖、水、鑛物質などゝいふやうなものになるやうに、原素が組みついて居るもの丶外は、幾ら食べても害にこそなれ、益には少しもなりませぬ、ところが、食物が腐敗するといふ事は、言ひ直せば變質することで、化學上から申せば、分解するといふものですから、澱粉なら澱粉といふ一種の物質が、腐敗つてをれば、いふまでもなく、くさりかけたぐらゐの所でも、もはやもとの澱粉といふ滋養物ではなく、外の物質になつてしまつたのです。それで味も變り、臭氣もつくといふ譯がお分りになりましよう。こんな理ですから、腐敗つたり、腐敗りかけたりしたものをヤレ惜しいとか、ヤレ勿躰ないなんぞと申して、我慢して食べた所が、身躰の爲にはなんにもなりませぬ。たゞ何にもならないばかりならまだ結搆ですが、時としては、イヤ時としててはない、大概は身躰の害になります。殊によれば、生命にも障ることがありますから、それで却て不經濟だと申したのです。實に何が不經濟だと申して、身躰を捨てるほど不經濟なはなしはありませぬ。いかに貴い食物でも食物を捨てるほうが、安あがりですから、腐敗つたら最後、未練なしに捨てねばなりませぬ。で、まづくさらないうちに、よく用心をして腐敗らせないやうにするのが、經濟にも、衛生にも大切な注意です。

◉腐敗の原因

腐敗を豫防するのを、防腐と申してをりますが、この防腐法を研究する前に、腐敗といふのは何んな原因からくるものかといふ事を、研究せねばなりませぬ、少しむつかしい面倒な問題にたちいるやうですが、總て物の原因が分からずに、經驗上「かういふ事はこんな風にすれば治るものだ」などゝいふ事は、とかく間違ひ易いものですから、たゞ防腐法と申すよりも、ちつと難しくても、やはり多少その原因に立ちいつて、何ういふわけで腐敗を起すから、何うしなければならぬものだとい

ふやうに、おはなしを致した方が少しは面白味がつかうかと考へて、ホンの片端ながら、腐敗といふ事の原因をつまんで申しあげます。

まづ宇宙間に生活をして居る生物と申すものは、我々人間をはじめとし、眼にみえる禽獣蟲魚、草木菌苔の類の外、肉眼ではみえない、極々小さな生物があります。これは昔はほとんど植物ともつかず、動物ともつかぬものと申してをりましたが今では皆、植物の下等なものとして、これを細菌と名づけております。細菌は、何れも肉體で觸れることも肉眼で見る事も出來ませぬから、たゞ顯微鏡の力をかりて、始めてその樣子を知る事が出來るもので、顯微鏡の發明がなかつた昔には、夢にもこんな生物が宇宙に居らうといふ想像もなかつたのです。今日から考へてみますと、むかし物語によく出る「時のけ」といふのも、近世俗間にいひはやされた「厄病神」などゝいふ種類も、目にはみえずに人間を恐ろしく苦しめた所からみますと、このバクテリヤを指したものではあるまいかと思はれます。それはともかく、この頃の開けた理學思想から論じますと、目にもみえないくせに、小さなこのバクテリヤの勢力と申すものは、大したもので、人間の生理上に關係した事ばかり調べましても、小冊子に載せ切れるやうな、生やさしい事ではありませぬ。まづ一寸どなたでも御存知の事から擧げましても、かの恐るべき黒死病や、コレラ、チビス、ヂフテリー、といふやうなひどい傳染性を有つてゐる、病氣の原因も、このバクテリヤですし、肺結核は申すに及はず、結核と名のついたものは、皆このバクテリヤを指していふので、何れも傳染の性質が立派に備はつてをる恐ろしいものなのです。併しかやうに申したからといつて、必ずバクテリヤといふものは、みんな人間の敵であるとはいはれませぬ、中には大層人間に有益なるものもありますから、バクテリヤといへば、どれでも恐ろしいもの、害毒のあるものとばかりは、思はないでもよいのです。又恐ろしくないのみならず、人間の食物としてよいものも、澤山あるのです。一つの例を擧げますと、納豆が粘つた糸を引く、この糸は皆

バクテリヤからなりたつてをるのださうですが、この納豆といふものは、決して人躰に害を與へませず、滋養の點からも、消化の點からも、よい食物の中にはいると申すことは、學者たちも證明して居られますから、好きな方はめし上つてよろしいのですし、食用にする酢の出來るのも、バクテリヤの作用によるので、これも消化を助け味をよくする功があります。かやうに種々な種類のバクテリヤがありますが、その性質として、多くはその生活し增殖して居る物は、其の作用でその品物を分解させ、その成分に變化をおこさせるのですから、そこで始めて腐敗といふ事がおこるのです。まづ米飯とか、鷄卵とかいふものがあつて、これが腐つたとすればその中に含んでをつた、蛋白質物や、脂肪や澱粉や、砂糖などがまるで、その成分を變じて、今まではありもしなかつた、酸類ができたり、鹽分に增減があつたりしますので、味の酸くなつたり、固有の香がなくなつて、腐敗の臭氣などが出來るのです。

まづ腐敗と申すものは、ざつと申せばこんなことですが、少しくはしくお話すれば、もつともつとおもしろい微妙た理窟もあるのですが、こゝではそんな事をとく目的でありませぬから、それはお預りと致して、まづこの腐敗の原因である、バクテリヤが、どうして增殖しますか、どうして生活しますかを述べまして、防腐の本題にはいらうと存じます。

◉バクテリヤの增殖、生活及び蔓延

細菌學者の說く所によりますと、目にみえる植物に、松杉のやうな大木になるものと、苔や菌のやうに小なる手のひらにものるほどなものがあると同じで、この目に見えないバクテリヤでも、大層種類によつて大きさがちがふものだといふ事ですが、たゞ大きさがこんなに違ふばかりでなく、その蔓延、增殖のしかたも、やはり色々あるそうです。併し一般に申すと、其生活に適當な事情の中にありますと、分裂してだん〳〵と殖えるもので、その殖えかたは、まづ一個のバクテリヤの正中にくびれめが出來、こゝから二個となり、その二つになつたものゝひとつひとつにも、亦くびれめが出來て、

二つになると申すやうに、いつもこの倍數でふえますから、まづ一個のバクテリヤは二十分時間毎に二倍して行くといふ學説に從つて計算しますと、最初の二十分に二つとなり、これが亦四十分の時に二つづゝとなるので、都合四個となり、六十分即ち一時間たちますとこの四つが皆二個づゝになつてつまり八個となり、一時間二十分の時には十六個、一時間四十分には三十六、二時間目には七十二、三時間目には五百七十六となり、四時間目には五千六百〇八とふえ、五時間目には四萬四千八百六十四となり、十時間たちますと、十五億三千五百六十三萬九千五百五十二といふ驚くべき數となりますから、これでもし、一晝夜廿四時間同じ速度でふえると想像しましたら、實に考へられないほどな事でしやう。そしてこんな增殖力を有つてをる、バクテリヤはどんな所にをるかと申せば、生物體は申すにも及ばず、水の中でも、土壤の中でも、空氣の中でも、いひ直せば、宇宙間のあらゆる所に居らぬことはありませぬ。隨て空氣や水が浸入する事の出來る間隙があればたとひめばりをしても、錠をおろしても、おかまひなくズンズンとはいりこみます。それ故空氣に觸れる總ての物品は、皆バクテリヤにも觸れるものと考へねばならぬのです。生活のしかたは、バクテリヤも亦一種の生物ですから、吾々人間や、禽獸草木の類と、別段のちがひなく、溫度の適當なのと濕氣のある所とが、一番住ひよく、もしもその上にバクテリヤを養ふやうな滋養物がありますと、非常によく增殖するのです。はやい話が、一個のバクテリヤが、空氣中に浮遊して居つて硝子のかけらについたとしますと、別に養ひにもなりませぬからたとへ生活してゐても、一個のものはやはり一個でふえませぬが、もし人間の食物になるやうなものにでもつきますと、細菌の體を營養ひますから、分裂は盛になり、非常な勢で增殖しますのです。併しもともと小さな弱い生物ですから、少し熱せられて溫度が高くなつたり、烈しい日光にあてられたりしますと、直ちに生活の機能を失ひますし、これと反對で、少し冷たくされましても、又生活はとまります。併しこれで

全く永久死んでしまふものではなく丁度蝸牛が外殼の中に引込んで外敵をさけたり、蛇が穴ごもりをして冬を過したりするのと同じで、又生活や繁殖に適當な事情になりさへしますと、元の通り殖えてきます。この生活の止まつてをる間を胞子と申しまし。胞子は割合に丈夫で、大概な温度の高低では、生活は絶たれませぬからどんな寒い時分でも、熱い處でもバクテリヤの根だやしといふ事はむづかしいのです。しかもこれがその生活に都合のよい事情たとへば温度が適度で濕氣もあるし養ひもあると申すやうな時には、何時でも遠慮なく、バクテリヤになりまして前に申したやうな非常な速度で增殖をはじめ蔓延をもしますので、實に恐ろしいものであるのです。殊にまた目にでもみえますと人の氣をつけかたも自然に念がいりますが、肉眼ではみえぬと申す厄介なものですから、一層人間に難儀させます。がバクテリヤの身になれば、これが極その幸福な所で、もしもこれほど人間に害を與へるものが烏や鳶ほどでなくても、蚤か蚊位にでも、目に付いた日には、夫れこそもつと激烈な、バクテリヤ征伐の工夫が出來るに相違ありませぬし、又無學文盲な人でも、熱心に豫防する心もちにもなりましよう。ところで、このバクテリヤはどうして蔓延するのかと申しますと、前に申しましたやうに、水の中にも、空氣の中にも、澤山に居りますので、水がしみこみ、空氣がはいりこむ限りはバクテリヤは何處にでも侵入しますから、たとへ一日の物もたへず、一杯の茶も飲まないでも、傳染する事があります。たとへば私がある傳染病患者にふれるか、又はその患者の居つた室にでもはいつて、その細菌を袖か裾にでもつけてきたとしますと、これが自分の家の中で、空氣中に浮かんでゐて、誰れかそのバクテリヤが生活增殖に適當な、體質を有つてゐる人につきますと、そこでその病氣が傳染するのです。バクテリヤの傳播といふ事については、隨分面白い話もありますが、防腐の作用をするバクテリヤには、大した關係もありませぬから、それはお預かりに致しましよう。

◉防腐の原理

腐敗の原因が、細菌であるといふ事も申しあげましたし、又その細菌の性質や生活、増殖、蔓延の有様も、ざつとながら申しあげましたから、少し詞がかたくろしいやうですが、防腐の原理といふ事を述べましてもよからうと存じます。まづ物が腐敗するのは、バクテリヤの作用であるとすれば、物の腐敗しないやうに致すには、このバクテリヤの浸しこまないやうに致せばよろしいのです。併し前にも度々申したやうに、空氣のある所には、バクテリヤもゐると申すやうな理ですから、その浸入を拒ぐには、空氣に觸れる事を防がねばならぬのですが、この空氣がどこにでもあることや、その性質状態などは、岡田光子さんのおはなしで、皆様よく御承知の事ですから、別にこゝでは申しのべませぬが、とにかく空氣にふれないやうにするのがむつかしい事は、よくお分りになつて居りましようから、食品の腐敗しないやうに用心をするのに、鼠いらずの代に排氣鐘をこしらへ、食物を保存する爲に、一々空氣をぬいて置かうといふ譯にもまゐりませぬので、肝心な防腐に功のありさうな、空氣に觸れないやうにするといふ工夫は、到底行はれさうにもありませぬから、そこでまた細菌の性質から考へ、適當な事情でなければ、胞子となつて生存はして居るにしても、増殖、蔓延は出來ぬといふ弱身につけこんで、その生活増殖に適當な事情といふ、適當な温度の内におかぬやう、又水分もないやうにして、盛に生活を營む事が出來ない工夫をせねばならぬのです。そこで行ひやすい防腐法といふのは、よく乾燥させて、濕氣のないやうにするか、壓力を加へたり、鹽や砂糖の類を加へて、自然に水分を取り去るが、熱してバクテリヤの生活をたつか、冷してその繁殖を妨げるか、或は空氣杜絶を行ふかの數種にはすぎませぬ。まづ次號からその防腐のしかたを實際について一々に申上ましよう。

（未完）

しげりあふみどりの蔭に折々は
古葉もおつるこがらしの杜

こゝろえ草

武田鶯塘

婦人の心得べき事は一々擧げつらうべくもあらねど、其專門の學科藝術にはまたそれ〳〵專門の師範ありて心得べき事々叮寧に敎へ導き給ふべければ、そは此處に謂はずもあれ、今は則ち、家庭、道路、病室、公會の場所等に於ける心得、輕微なる病者に勸むる食物、意外の負傷を被りたる時の應急手療、火傷、蟲毒等一家に起るべき災厄に於ける注意の一ッ二ッを書いつけて、大方婦人の參考に資せんとはするなり。

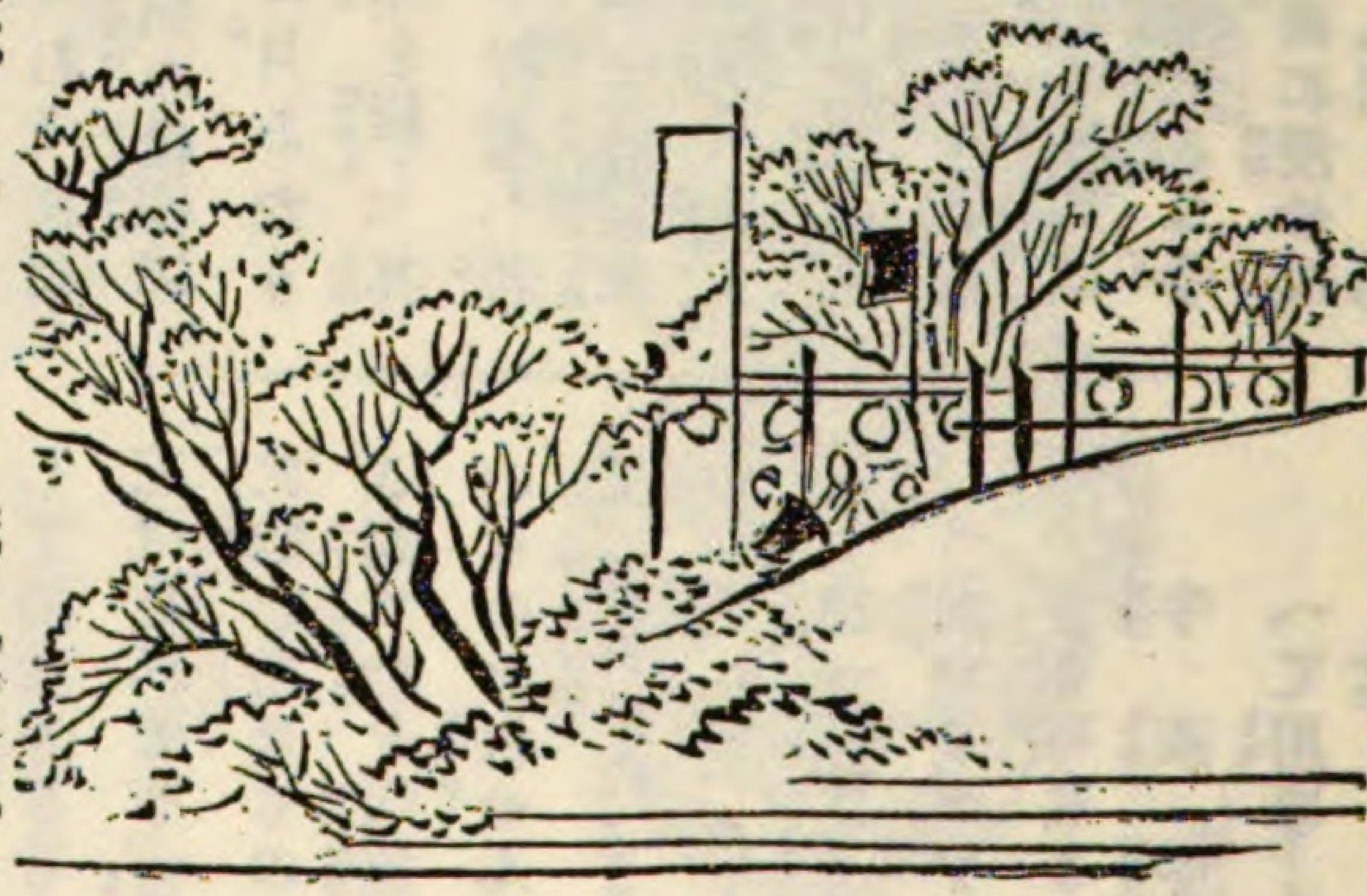
◉繃帶の心得

博愛社と稱せし昔より赤十字社の業務日に月に開け來るにつけ、婦人の看護法もまた進みて、今は貴顯の夫人方にして、繃帶の心得なきは稀なるに至りしが、未だ中位の夫人が此心得に乏しきは洵に口惜しき事なり、醫師多く看護婦も自由に聘し得らるゝ今日、繃帶の心得はあらずもがなと想ふ人もあらんがなれど、既婚者にせよ未婚者にせよ什麼なる事情に依り醫師に乏しく、藥舖に迂き僻地寒村に到らずとも限らねば、假令便利なる處に住むも何時什麼なる災厄に遭ふて、醫師を聘くの暇なき負傷をせまじとも限らざるに、中以下の婦人にても平常繃帶の心得はあり度きものなり、曾て大隈伯が兇漢の爲めに隻脚を傷けられ給ひし時の如き、素破事ありと云ふや、伯を官邸へ擔き入れしを、大方の夫人ならば意外の珍事に周章して、醜き擧動にも及ばれん場合ながら、伯の夫人は毫驚ける氣色もなく、伯を床上に横臥せしめて、靜かに應急の手療を施し、やがて繃帶を加へて、醫師の來るを待ち給ひたればこそ、手術の好果を收めて伯の今日はあれ、若し出血を其儘にして徒らに醫師を待ちたらば、負傷者は時の間に衰へて、また其甲斐なかるべし、勿論伯の負傷の如きは極めて希なる事ながら、疊の上にも意外の負傷はあるものなれば、繃帶の心得はなくてかなはざる事なり、殊に外交官の夫人令孃の如き、身を外國に委ね給ふ方々には、繃帶の製法もまた兼ね心得られたきものなり、現に義和

團事件に於て北京籠城中の婦人が謂ふも忌はけれど、他の外國婦人に一籌を譲りしは、此心得に乏しく、應急の手段に拙かりし爲めにあらざるか、最も中川軍醫夫人の如きは夙に此心得ありたれば、繃帯の製作、患者の繃帯に盡瘁せられ、籠城者をして些の不自由を感ぜざらしめしとは謂へ、凡ての婦人が中川夫人と同樣の素養あらましかば、いかで外國婦人に其歩を譲るべきや、繃帯の要は之にても推しはからるゝなり、其一斑は出入の醫師若くは相知れる看護婦に就きて糺し給はゞ、直ちに合點し給ふべし。

◉看護の心得

藥劑はたゞ病痾の進行を防ぎ、局部の濫漫を妨ぐるに止まるものなれば、其平癒を期せんとせば、醫師の注意法に基き、病者當人も充分攝生すべきは勿論ながら、病者の苦痛を殺ぎ、病勢を減するの力



は偏に看護にあるものなるを以て、此心得もまた一般婦人に必要なりと信ず、殊に其病狀によつては病者は日に増し食慾の增加するに反し、強いて其食慾を制限する攝制法の如き、看護者が無意味の同情を病者に表し、醫師の注意を他所にして病者の食慾を盈たすが如き事あらんか、一片の同情は反つて患者をして不治の悲境に陷らしむる事なしとせず、尤も病者が重患に陷れる塲合には病院にも入り、看護婦を聘するも任意なれど、かりそめの病にも看護は必要にて、熱度の高低に注意し、食物の奈何を見るは亦此心得による事なり、看護法を理會へざる人に看護せらるゝ病者程世に頼み難き者はなかるべし。

◉病室の心得

病者は其病の輕重に關はらず、常人よりは神經過敏を

來すものなれば、病室の出入は成るべく靜肅にものすべきは勿論、病者にものなど云ひかくる時には、餘りに顚狂なる聲を發すべからず、病者には努めて人事の錯誤など耳にせざるやうに心懸げ、其心を慰さむるには美しき花の色、幽美にして響き低き音樂等、病の模樣によりて慰藉の法は種々あるべし、さて病室は日あたりの好き處を撰み、病床は平均一日置きに掃除を施し、其纒へる襯衣は屢々洗濯して不潔ならしむべからず、若し其襯衣が牛毛織ならば、之を洗濯するには、三時間米の炊き汁に水を加へ、煮立ちたる處へ襯衣を投じ、取り上げて冷水にて洗ひ上げ後また米の炊き汁に浸し置き、火に翳して乾かすなり、又其襯衣がフランチルなる時には、好き石鹼を湯にて煮立て、之にて和かく揉めば汚れは直ちに落ち去るべし、されど其湯は差入るゝ手の堪え得るだけに煮立てざれば、餘り熱き湯に浸せはフランチルは縮みてまた元の如くならざる虞あり、其他日本の襦袢、日本の織物ならば石鹼にて洗ふも、灰にて洗ふも、たゞ其汚れを去ればそれにて好きなり、他の

作法は凡て醫師の注意に從ふべし。

◉病者に勸むる食物

病者に勸むる食物は尤も注意せざるべからず、淡白にして滋養多きものを撰むに、牛乳、鷄卵、スープなど二三はあれども、惡熱ある病者は概して味感を失ひ、食物に飽き易きものなれば、必要なる飲料食物の外、變りたる副食物を渇望すべし、此時病氣により與へ得る限りのものを供せんは隨意なれど、滋味ある飲料食物にして、稍異りたるもの〻二三を擧ぐれば、

アロウ、ルート　こは澱粉にして一匙に水半杓を加へ、砂糖とレモンにて味を加へ用ゆるも好く、またブランデーの一匙か葡萄酒の一匙を加へて用ゆるも可なり。

牛　茶　牛肉の汁一磅に水小量を加へ、食鹽を加へて用ゆ、こは尤も手輕なる方法にして、長き時間を厭はざれば、新しき牛肉を賽の目に切り、水を切りたる鍋に入れて、二三時間極めてトロ火に懸け置き、さて其脂肪に湯を加へ、食鹽を投ずれば大に

好し。

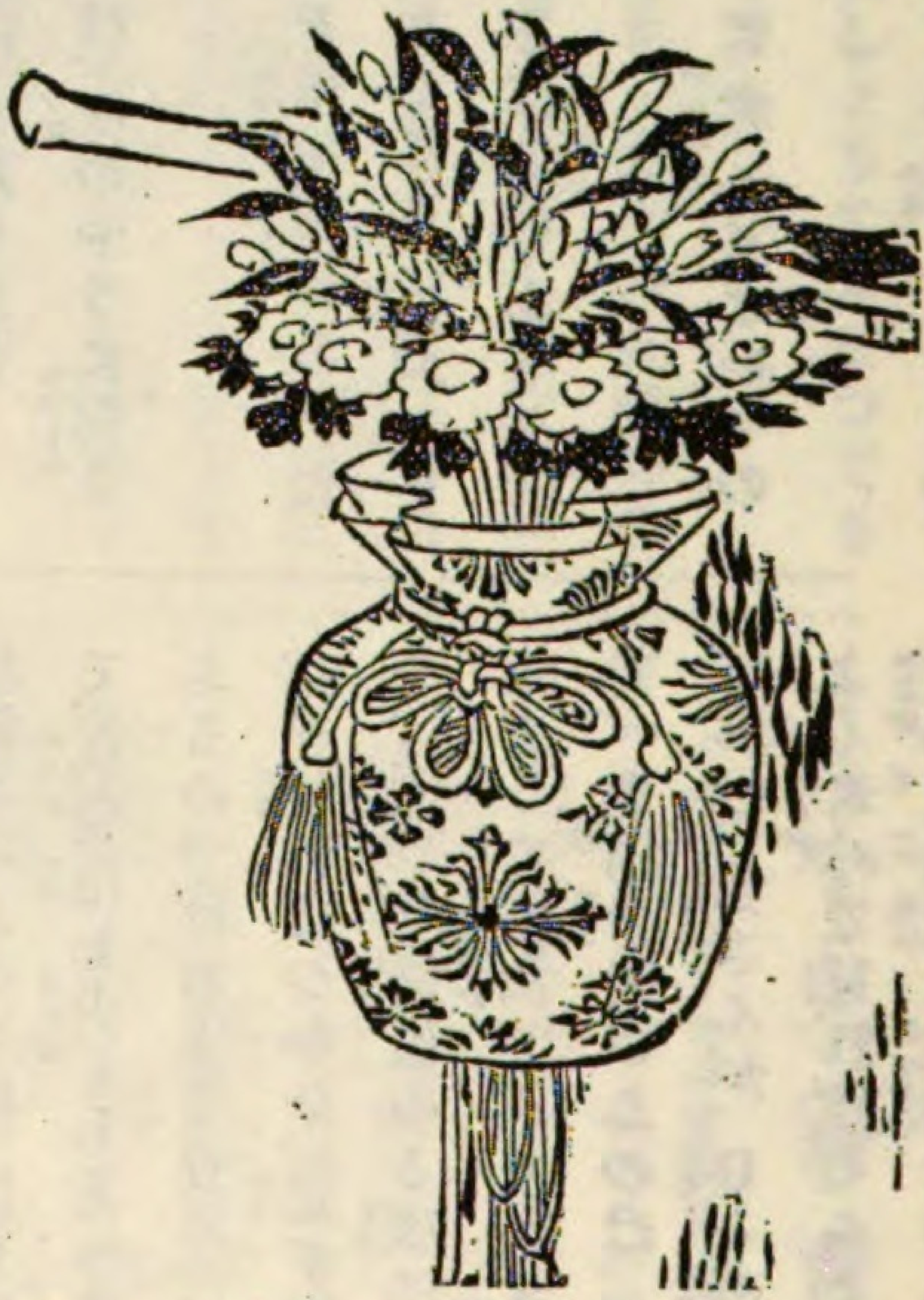
卵酒　盃に卵の黄部を掬ひ、箸にて掻き廻はし、之に小量の白砂糖を加へて葡萄酒の中へ落す、こは主に強壮劑として用ゆるなり。

犢肉汁　こは普通の牛肉にても好し凡て虚弱なる病狀にあるものに與ふべし、製法は新しき犢の肉凡そ二磅に眞珠麥半磅を加へ、少量の塘蒿と少量の食鹽とを加味して水にて煮立つべし、食鹽を少し多く入れ充分に煮立て置かば翌日まで保つなり。

林檎水　林檎の皮を拵き、煮え湯を貯へたる壺の中に切り落し、これに少量の砂糖とレモンを加へて、蓋を覆ひ置くなり。

レモン乳漿　煮立てたる牛乳へレモン汁を注ぎ、上皮を去りて、シエリー（葡萄酒の一種）一コップを加へ、冷して用ゆべし。

此他尚多くあれどさはとて省きつ。（未完）



女學生の經濟

桐陰女史

女學生諸君、經濟といへば、何だか大變むつかしいことのやうにきこえますが、つまり金錢なり、品物なりを、つかふべき時にはつかい、節すべき時には、節すれば、それが經濟なんです。私は今經濟學からとか、何とか、かたくるしいことをいふのではありません。ほんの見やすい道理を申さうと思ひます。

一の國が經濟がよくいきませんでしたならば、其國はどうなるでせう。きつとだん／＼貧しくなるでありま

せう。一軒の家にしても、此通りであります。もし其家の主婦が、經濟の考に乏しく、又は考があつても、なほざりにして置きましたならば、きつと其家は貧乏になります。此通り、一國にも、一家にも、經濟といふことが必要であるならば、もう一段こまかく考へて、一人一人の人にも、經濟といふことが、必要であります。かやうに申しますと、皆さんの中には、次のやうに仰る方があるかもしれません。

私なんかは、毎月いるだけのお金を阿母樣からいたゞくのですから、經濟をしてもしなくても、金があまつても、足りなくても、別にさしさはりはありません。

明治の女學生は、はたして右のやうに考へてよいものでありませうか。

いや／＼決してそうではありますまい。皆さんのつかふ金は、其家の金なんですから、皆さんが多くつかへばつかふほど、一家のいりめが多いといふことになります。ですからさしさはりがない、などゝ言つてすまして居られたわけではありません。まして其金は、皆さんが自分でまうけたものではありません。つまり皆さんには、生産力といふものが、少しもないのであります。これらを考へますと、皆さんは、實に經濟といふことに、氣をつけなければなりません。

經濟といふことは、決してお金や物品をけちにつかつて、只費用を少くしさへすれば、それで經濟になるといふものではありません。初に申しました通り、つかふべき時にはつかひ、節すべき時に節して、つまり、お金や、品物を、價値ある樣に、上手につかふのが、それがほんとうの經濟であります。さて其つかふべき場合、節すべき場合といふのは、どんな場合でありませうか。これは、皆さんが、日々金をつかひ、物をつかふたびに、よく考へなければならないことであります。

女學生時代に經濟について考へなければならないわけは、これはかりでありません、なほ／＼大切なことかあります。

例へはこゝにしたらのない人があつて何時も針箱の中

は切れも絲も鉄も錠もごた〳〵で、机の上はごみだらけであるとしませう。このやうな人が主婦となつて急に押入や箪笥の中をうまく整頓することが出來ませうか。また娘の時に割烹のことに注意しないで置いて主婦になつてから急に割烹を上手にしようとおもつてもずることが出來ませうか。

一家の經濟のこともこれと同じです。娘である時分に經濟のことをあまり考へないで居て、主婦となつてから、にはかに、經濟をうまくしようとおもつても、それはなか〳〵六ヶ敷ことでありませう。そうして經濟といふことは一家の整理上まことに重大なことでありますから女學生諸君は他日主婦たるの準備といふ點から考へて經濟に注意することが大切であります。

さて、こゝに一つ、是非皆さんにおすゝめしたいことがあります。それは皆さんの中には已に實行して居る方があるかもしれませんが、日々自分のつかつた金高と其のつかひ道とを一々帳簿に記入して置くといふことであります。そうして記入した後で自分はどういふことにどれたけ、つかつたかといふ事を考へるは大に後の爲になります。其の帳簿の雛形と記入の仕方については、此の次に述べませう。

小兒養育訓

左に掲載する小兒養育訓は獨乙ヴヰースバーデンの醫師社會にて協定せるものにて同所の戸籍役場に於て出産屆のある毎に無代價にて其の人民に交付するものなり、目下適正なる衞生法を普く衆庶に納得せしめんとするは、何れの協會に於ても難しとする所なるに、同公署の勉めて此擧に出てたるは、斯道の爲に頗る感佩すべき事と云ふべしと　大日本衞生會雜誌に據る

◉一歳以内に於ける小兒の營養と看護

▲母親の乳は小兒の爲には最上無限にして、且價の安き食物なり、生後一年以内の小兒は消化器官の病にて慘しき惱みを起す者多けれども、母親の乳にて育てたるものは箇樣なる憂なく、其上後々も丈夫に成長するものなり。唯乳を哺せたくとも哺せてならぬのは、母親の癲癇、肺病、精神病のある者なり。

▲哺乳は生後八時間より十二時間に始むべし。産婦は

横臥の儘與へて宜し。昔は茴香茶其他之に類するもの(日本にてマクリと唱ふるもの丶類)を嬰兒に飮ましめたるとあるも。何の役にも立たず、實に謂はれなきことなり。

▲乳を與ふる前後には、温室の水中に浸したる清淨なる木綿裂にて乳頭を善く拭ふべし。

▲乳を與ふるには自ら定りたる順序あり、先づ生後一ヶ月間は廿四時間に八乃至九度、二ヶ月より五ヶ月迄は凡そ七度、六ヶ月以後は凡そ六度にて充分なり、一度の時間は十五分時より二十分時間を適度とす、但夜間は最初より四乃至五時間、段々後には六乃至八時間と餘程間を長くおいて哺乳せしむべし。但し哺乳は兒の號泣を止むる手段に用ゆるものにあらずと心得べし。

▲經通のありたる時は、醫師の診察を受け、其指圖に從ふて哺乳を廢すべし。更に姙娠したる時は、如何なる事情ありとも之を止むること勿論なり。乳頭に腫物を生したる時は、精々奇麗になし置きて、醫師の治療を乞ふべし。是れ一は自分の爲め、一は兒の爲なり。必ず膏藥などを貼るべからず。哺乳を止むるは、極遲くとも九ヶ月の初めに於てすべし。併し其時分が極暑に際すれば暫く見合せ置き、凡そ六週間程延引し、其間に段々と廢すべし。

▲哺乳せしむる母親又は乳母の食物、辛辣なる香味料、香の高き食物又は此等を加味して調製したるもの、其外酒類を多く用ゐる事は禁ずべし。「ブランデー」の如きは、毛頭用ふべからず。此外には何も食忌みするに及ばず。極不消化のものを除きては何なりとも平生の通りは食して宜し。古へより産婦は初めの一日は食物を極減少すると云ふことは不條理千萬なる弊習と知るべし。

▲人爲營養、始終母親の手一法にて乳を哺せ能はざる事情あるか、若くは全く母の乳を哺せること出來ず、又乳母を雇ひ入るゝことも六ヶ敷場合には幾分か人爲營養物を以て補ふか又は全然人爲營養を行はざるを得ず此場合には、生後八ヶ月の間は殊に一定の分量に稀釋なる牛乳(又は山羊乳)を用ふべし。九ヶ月未滿の小兒

には決して粥、馬鈴薯其他右に類するものは與ふべからず。此事を守らざる時は、消化器官を害して英吉利病又は其他の病氣を惹起すは普通の結果なり。牛乳を加へざる小兒粉羹は何の役も爲さゞるものと知るべし。

▲最上の牛乳とは如何なるものなるか、清潔なる牛舍にて過不足なく一齊に飼養したる健康の牛より得たる純粹の乳を云ふ。必しも枯草飼養のものを選ぶにも及ばず、只最も大切なることは搾乳後直に配達せしむる事にして、長く時間を經たるものは小兒の爲めには大なる害あり。又一頭牛より得たる乳よりは、數頭の混合牛乳を優れりとす。

▲牛乳は屹度熟煮するを要す。之に用うる器はソキスレット氏の器械を最上とす。(代價拾貳「マーク」日本の六圓計り)但し此器械もなく、又大仕掛けにて殺菌したる全乳又は稀釋乳(ビーデルト氏又はゲルトチル氏牛乳等の如きもの)を得られざるときは、配達し來たる牛乳を直に熟煮すべし。之を爲すにも只一度沸騰するのみにて足れりとせず。凡そ十分間熟煮するを要す。熟煮中は掻き廻さざれば吹き溢るゝ恐れあり。又其後も冷ゆるまで始終掻き廻して居りて、善く乳皮を乳の中に混在せしむべし。乳皮は小兒の爲には肝要のものなり。又餘り脂肪の多きに過ぐる乳は宜しからず。右熟煮したる乳は蓋を覆ひ成るべく冷所に置くべし。牛乳ばかりにては消化し易からざる故に、下表に示す通りに稀釋して用うべし。其之を稀釋するには、熟煮したる水又は裸麥粘漿(引割裸麥一食匙に熱湯半「リットル」(約二合五勺)を加へて、半時間煮て布片にて濾過したるもの)を用うべし。下の表に示す通りに乳糖を加味するは、誠に肝要なるを以て忘るべからず。

牛乳は温めて(善く振盪して)與ふべし。其温かさ加減は徳利を頬に當て試むべし。自分に飲みて試むべからず。

飲み殘しの殘りは常に捨てゝ仕舞ふべし。

▲乳の徳利と吸口並に熟煮に用ゐたる鍋は、使用後直に善く注意して洗ひ(護謨の吸口は其内部も同樣に淸

洗すべし）後に清淨なる水の中に置くべし。護謨の吸口は殊更護謨の方を宜しとす。長き硝子管などは、清洗に困難なる故用うべからず。徳利とても同樣にて、内面の滑澤ならざるものは使用すべからず。

▲「ルーチェル」（ビスケットと砂糖にて製し、袋に入れ、乳の中にて軟かくなして用うるもの）又は「シユマルレル」（摺糊の類か）は小兒の爲めには害と知るべし。

▲沐浴　小兒は生後一ヶ年間は、毎日一度づゝ浴せしめ、湯の温度は列氏二十八度乃至三十七度（攝氏三五度乃至三三、七五度華氏九五度乃至九二、二五度）又浴中の時間は、凡そ五分時間にして、一度洗へば可なり。先づ第一に眼と顏を洗ふべし。頭は毎日水と石鹼にて洗へば、痂を生ずる憂ひなし。頭及び皮膚に發疹あれば、病氣の故なるを以て、醫師の治療を乞ふべし。皮膚の皺襞部（腋窩、頸、臀、生殖器の部）は沐浴又は洗ひたる後は、善く乾かし米粉を撒布し置くべし。大小便の通じ後は、其都度洗ふて乾かし置く時は、腫物の生ずることなし。概して清潔にして置きたる小兒に腫物を生ずることは極稀なるものなり。

▲着物　熱からず、狹からず、温保に適すれば宜し。臂は露出を要す。纒紐は用うべからず。

▲臥床と部屋　臥床は小兒獨用の小床（搖床にあらず）を具へ、清潔と風通しの注意とを怠るべからず。夜分も決して母又は乳母と一つ床に寢かすべからず。部屋の内にて物を煮たり、洗濯物を干すべからず。時々風を通し、又其温度は十五度乃至十六度を適宜とす。

▲懷抱　夏期は生後八日目、冬期は六乃至八週間目に初めて抱きてよし。本來嬰兒は、成るたけ長く仰臥にして置くを可とす。段々と起して置く樣になりてから抱くには、腕を右左と交互に替へて脊柱の彎曲せざる樣注意すべし。立つたり歩みたりの試は精々遲くなすべし。

▲便通　廿四時間内に一度乃至二度あるを要す。若し消化器障害（下痢嘔吐其他の症）ある時は、成るべく早く醫師の診察を乞ふべし。殊に暑中は尙ほ以てなり。

▲體重の增加　毎一週間に躰重の增加することは、極

最初の一週間は別として、初めの三ヶ月は、一五〇乃至二〇〇「グラム」(約そ四十乃至五十三匁)第二の三ヶ月は、一二〇乃至一六〇「グラム」(約そ三十二乃至四十二匁)第三の三ヶ月は、七五乃至一〇〇「グラム」(約そ二十乃至二十六匁)を通例とす、此例外の異變あるときは醫師の診察を乞ふべし。

▲生齒　健全なる小兒の齒は、別に困苦も病氣もなくして生ずるを普通とす。若し生齒期中に、下痢、咳嗽、其他の症狀を發すれば、何か他に原因なかるべからず。故に速かに醫師の診察を乞ふべし。齒頸帶を施さば齒を生し易しと云ふことは虛僞と知るべし。

▲種痘　生後六ヶ月乃至九ヶ月目に之を行ふを最も宜しとす。兩親に於て種痘の時に渡されたる心得書を遵守すれば決して害も危險もあることなし。

▲八ヶ月後の營養　九ヶ月より十ヶ月以後に至れば、最早乳計りでは足らざるゆえ、副食物として脂肪の少き肉羹汁に卵黃(卵黃計りは既に六ヶ月以後に至らば之を與ふるも消化に耐ふるものなり)を混じたるもの、小兒用「ビスケット」其他米、タヒオカ、穀粉は小麥粉製の粥を牛乳に和して用うべし、然れども二歲の中頃迄は、滋養分の重なるものは牛乳にありと知るべし。

▲酒類、茶、珈琲　などを屢々小兒に飲ましむるは、全然宜しからず。十四歲に達するまでは、非常に有害なり。只醫師の指圖に由り醫藥として用ゐる外は、一切飲ましむべからず。

▲眼の衞　生後第一日の眼瞼の腫脹及び膿の滲出を發することあり。斯かる時には、早速醫師の治療を乞ひ、忽せにすべからず。往々數日にして盲目となることあり。故に温蒸湯などは必ず行ふべからず。

次に示す牛乳の表は、一度に用ゐる分量なる故、ソキスレット氏器械にて一日分を一度に熟煮するには、本表の分量に、日々の食事の度數を乘したる量を取るべし。例令ば第二ヶ月目ならば、七倍して、牛乳三五〇「グラム」(約九拾三匁)水四九〇「グラム」(約そ百三十匁)乳糖七茶匙(約六匁五分)を混合し、毎朝一度に煮て、七瓶に分ち置くべし。又毎瓶に甘味乳皮約一食匙を加ふれ

ば、甚だ便利なり。（又醫師と相談の上、人造貯藏用乳皮を用ゐても可なり）

虚弱の小兒にして消化器官の感動し易き者又は早産兒は醫師に請求し特別の營養方法を設け行ふべし。

人爲營養に就て滋養品分量表

生後の月數	一度の分量　牛乳	牛	乳糖	廿四時間内の食事度數
一ヶ月（初半月／後半月）	一五「グラム」（約一食匙）／三〇仝（約二仝）	四五「グラム」（約三食匙）／五〇仝（約三仝）	半茶匙／一仝	八乃至九度／八仝
二ヶ月	五〇仝（約三仝）	七〇仝（約五仝）	一仝	七仝
三ヶ月	七〇仝（約五仝）	七〇仝（仝）	一半仝	七仝
四ヶ月	八〇仝（約五仝）	七〇仝（仝）	仝	七仝
五ヶ月	一〇〇仝（約七仝）	七〇仝（仝）	仝	六仝
六ヶ月	一二〇仝（約八仝）	五〇仝（約三仝）	一仝	六〇
七ヶ月	一四〇仝（約九仝）	三〇仝（約二仝）	一仝	六仝
八ヶ月	一六〇仝（約十一仝）	二〇仝（約一仝）	半仝	六仝
九ヶ月	二〇〇仝（約十四仝）		半仝	六仝　副食物を與ふ

一五「グラム」を以て一大食匙とす。

苺の料理さまざま

赤くして美はしく、人の目を引きつけ植物の酢と、糖分わりて、健康を保益するものは、此頃の苺なり。病人を慰さめ、小供の涙をぬぐひ、學生の學問を勵まし、勞働者の疲勞を安むるも苺なり。只さへも滴たる滴に舌を沾ほせば、三年の生命は延長するの感あるに、之を然るべき法を以て調理せば、更らに三倍五倍の美味を増すを得べし。

（一）

能く熟したる、されど腐敗せざる苺の一斤計りを取て、莖を去り、洗ひて之を器に入れ、上よりさじか、杓子にておしつぶし、どろどろとなりたる時、砂糖一斤と雞卵の白味、二三個と、牛乳五勺計りを入れ、之れを氷水もしくは冷水に冷やしながら、能くかき混ずる時は白き泡となりて、固くなるべし。之れは白雪苺と呼びて、賓客に供するに美觀、美味、共に備われり。

（二）

苺水の製法は、苺の熟し過ぎざるもの一斤を、摺鉢にて摺りつぶし、之を木綿の袋に入れて、絞ぼりて、水計りを器に入れ、之れに白砂糖一斤を加へて、火上に置くと

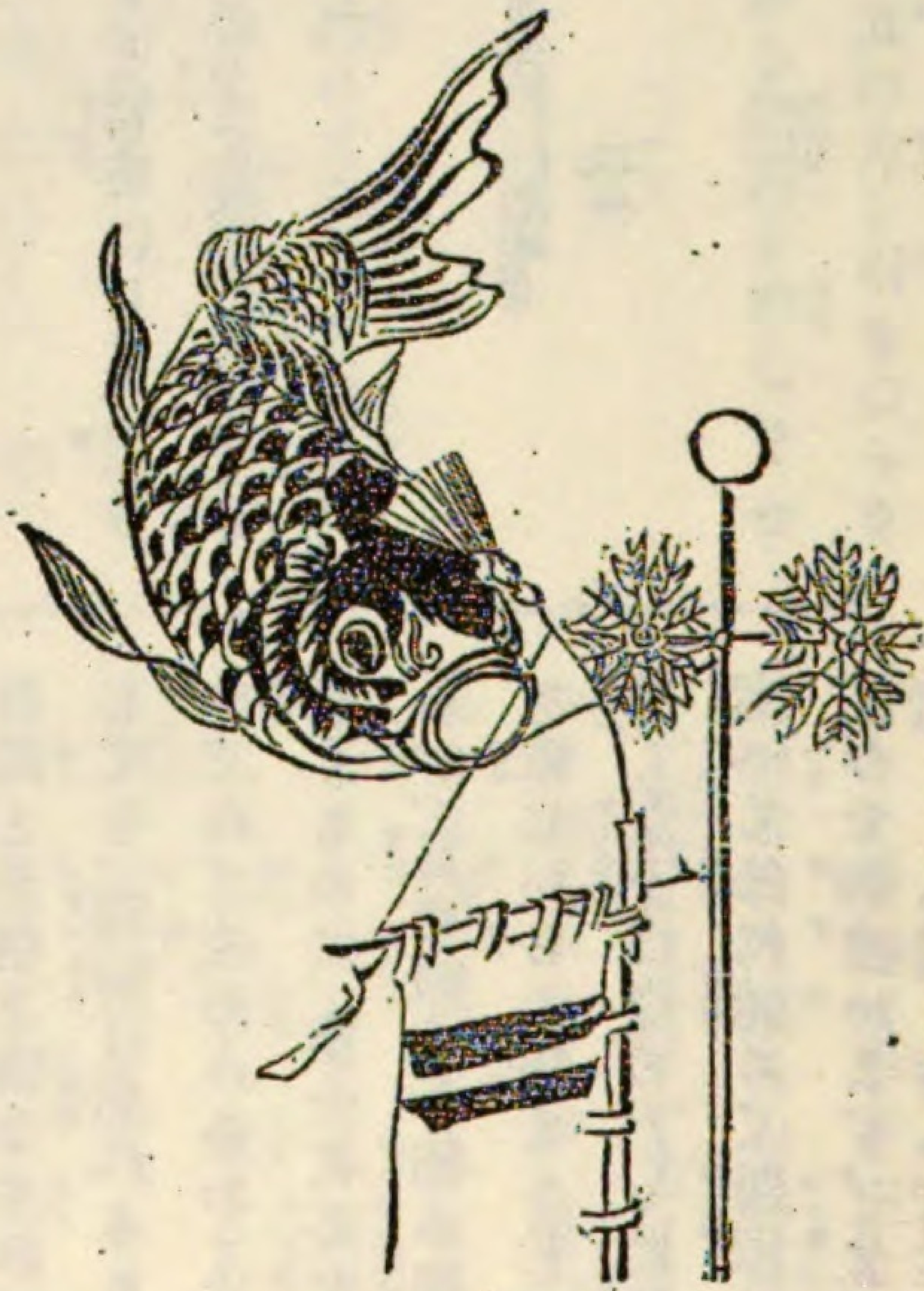
十五六分乃至廿五分なれば、飴色のどろ〳〵としたるものを得べし。飴色になりたれば、鍋を火上より下して、少しく冷まし、瓶に移して、冷水の中に入れて、暗き所に冷すべし。

（三）

菓子苺と云ふは、五勺計りの麦粉の中へ、三四個の卵と五勺計りの牛乳と、少量のバタと、ソーダ一サシとを能く混じ合せて、その中へ半斤計りの苺と、少しの砂糖とを入れて、焼鍋にて焼きて、菓子に用ゆ。人の好みによりて、レモンの汁をかけて用ゆるもよし。

（四）

第二法に随ひて作れる、苺水の未だ沸騰して冷めさる中に、熟し過ぎざる苺を投じ、とろ火にて煮て苺の柔かくなりたる時引き出し、汁と別々にさまし、さめたる上にて苺の上に、先きの汁をかけて出すべし。別々にせざれば苺の崩るゝ恐れあれば也。



（五）

五勺計りの苺を、之を浸す丈けの水を鍋に入れて、柔らかくなる迄、之を煮つぶしてざるにて塊をこし、一オンスのバタと、コップ一杯の砂糖と、二三個の雞卵の黄味とを合して能く混和せしめ、之を硝子若しくは錫の器に入れて冷水上に冷まし、その能く冷へ上りたる時先きの卵の白味計りを、能く泡立たせ、固まるを度として苺の上よりかくべし。

（六）

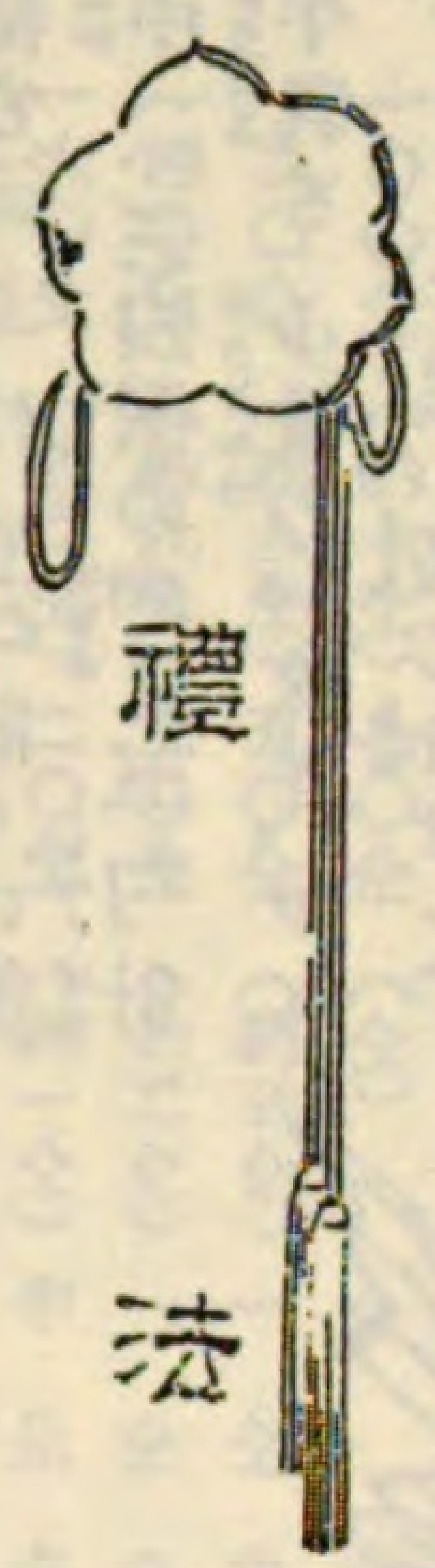
器の中に苺を一通り並べては、その上に砂糖を置き、又た苺を並べては、又た砂糖を置くと五六層にして、最も上にクリームを置て、氷水にて冷やして食ふべし。

(七)

苺の莖を去りて、能く洗ひ、之に適宜の砂糖とレモンの汁とを濺ぎて、一時間計り置き、その上より氷水を濺ぎて、砂糖の溶くるを度として、錫の器に入れて、氷中に冷やす時は氷苺を得べし。

(八)

赤と白との苺を撰らみ、氷水に浸すこと暫時にして、引き上げ、笊の上にて水を滴らし、砂糖の上に轉ばして、衣を着け、硝子の器に盛りて出すべし。



女子の作法

禮法講習會師範　田島秀子

はしがき

私が爰に御話いたします禮法は、務めて簡易に且つおもに平生實際に用ひらるべき事を追々と御話致す積りで御座います。即ち今の世の中は座禮のみならず、立禮も行はるゝ時で御座います故、和洋二つながら心得居らねばなりませんが、之れを細かに一々悉敷記憶しせらるゝものでは御座いません故に、其禮の精神と目的とを悟り得ますれば、たとひ其手つゞきは忘れましても、精神は忘れるものでありません、それ故に事にのぞみて左のみあわても致しません。抑々禮の精神と云ふものは、第一に心を落つけて、決してかろ〳〵しからず、又表面のみ飾る事なく、いかにもつゝしみて、然も卑しからぬ樣とうして餘りに度を過してもあしく、況て女子はほと〳〵に其の身の威容と愛嬌との二つを備へて後に始めて閑雅なる進退及び應對の作法を得るもので御座います。先づ第一に其法に習熟せねばならぬので、扨先づ座作進退に習はねばなりません、それで彼樣に座作進退と一口に申せば誠に容易く聞えますがこれが極めて必要で御座いまして例へば步行でもその仕方のあしき時は手に持ち物品も同じ樣に動きますか

ら、傍で見る時は誠に見にくう御座います前申しました如く、立禮も心得ねばなりません、又内外人打交りたる場合に置きましては、專ら西洋の禮法に據る事なれば、佛國巴里にて、近頃專ら行はるゝ禮法をも此頃調べ居ますゆゑ、座禮を終りましから、其の方も引きつゞき御話致しませう、それで先づ起樣から御話を申しませうと存じます。

起樣

先づ座をはなれて立ちます時は、始めて兩足を爪立てながら、手は正しく膝頭の所までのばし置き、右の膝より立ちかけてしづかに立つので御座います、そをして身躰は眞すぐに反らぬ樣、又屈まぬ樣、眼はすべて七八尺位向ふを屹と見まして、決して他見などせぬやうに、然し凄まじく怖しそをに見えてもわるう御座います、又人形の樣に作りつけの樣なのもいけません、只いかにも其の擧動は別に繕はぬ樣にして、威儀を美はしくしました内に、何となくにこやかに見ゆる樣でなければいけません、それで坐る時でも歩む時でも、その心用ひは同じで御座います、次は歩行で御座います。

行歩

歩きます時は手を正しく兩股のわきに添へまして肩だの肘などは張らぬ樣又縮めぬ樣に致し、足音は高くなく、大股に又は小走りにならぬ樣、する〱と進みますので御座いますが、疊の上などをさつ〱と摺るのはわるう御座います、そをして歩み出す時はいつも下坐の足より致します、又退く時は左の足より進みました時には右の方へ旋り、又右の足より始めました時は、此の足を斜めに左の足の踵の所まで引きて旋り、左の方反對で御座います、そうして旋るには右の方なれば右なれば前と反對で、左の足を引きて旋ります、それで歩く時はすべて疊の縁、又閾などは決して踏みましてはいけません、閾をふまぬのは音などのするを憚り、縁は雲繝縁などの黒き紋の移りちる恐があらからで御座います、此次には坐しやうを御話致しませうと存じます。

史傳

ナイチンゲール女史

文學士　中内蝶二

上

空飛ぶ鳥にたとへけむ、戰する身は銃を枕に草の床、何處いかなる地に骨を埋めむもはかりがたきものぞかし。一旦御國に事ありて、劒を執りてたつときは、山行かば草むすかばね、海行かば水つく屍、大君のために生命をさゝげて、もとより生きて還らむと思ふものはあらざるべけれど、それも、彈丸の雨降りそゝぐ中に、奮撃突戰、世に目ざましき功績をたてゝ、譽れあり最期を遂げばやとこそねがへ、貴き命を、あだに棄てむとはおもはざるに、うたてや、病魔のために冒されて、ふる里遠き異郷の土と化し、はかなく消ゆる人の上ばかり、あはれにも、また本意なきはあらざるべし。

今を距ること四十餘年の昔、かの『クリミヤ戰爭』の起りける時、英國の軍勢は、海路はるかに黒海のあなたの岸に送られしが、あまりに出發をいそぎしため、糧食衣服の準備も全からず、懸軍萬里、敵地ま近く來て見れば、嚴冬雪は深うして、人煙稀にたちのぼり、四萬五千の大軍が、食をもとめ、宿を乞ふべき方もなし。人も馬も、餓に苦しみ、寒さになやみ、いひ知らぬ苦患のうちに、辛くも一冬は過ごしたりしものから、變る氣候と風土とほど恐るべきものはなく、やうやく暑さの催すにしたがひ、疫病たちまち軍中に蔓延して、空しく斃るゝもの數を知らず。節霖雨に入りては、晝はひめもす、夜はよもすがら、たゞしと〳〵と降り續きて、空晴れし間なく、川水あふれて陸をひたし、山なす屍は野に横はりてあしき臭ひの堪へがたく、わづかに餘喘をたもてるものさへ、身を養ふべき藥餌もなく、かたみに相抱きて死を待つのみ。あはれ百萬の強敵を、ものゝ數とも思はざる益良武夫も、拒ぐによしなき病の勢ひをいかにせ

む、未だひとたびも、矢を交へざるに、怨みを呑むで命を空うするもの、二萬人にも及びしかば、軍に從へる通信記者は、つぶさに此慘狀を本國の新聞に報じて、同胞の涙に訴へぬ。

かくとは夢にも知らで在りける滿都の士女は、一たび此報を得て驚くことといふばかりなく、且つおそれ、且つ歎きて、あわれなる軍卒が窮厄を救はむが爲めに、われも〳〵と、新聞社を宛てゝ送り來る義捐金ひきもきらず、いまだ二週間をも經ざるうちに、その額はやくも十五萬圓の多きに達せしかば、食糧衣服を始めとして、醫療に要すべき數〳〵の品殘らず買ひあつめ、特派委員マクドナルドは、これを携へてクリミヤに赴きぬ。

本國の同胞が、心こめたる贈物によりて、異鄕の空に呻吟せる病うど共は、幸に着るもの、食ふものには事かゝぬ身となりたれども、なほ看護の手の十分にとゝかざるを如何にせむ、病ひを療やすに藥餌の必要なることはいふまでもなけれど、心をつくして、厚くいたはり慰むるみとりの人の側にあらざれば、なか〳〵におこたり難きものぞとよ、今英軍のうち、醫師も、看護者もなきにはあらねど、もとより斯くも多くの病うどあらむとは思ひもかけぬば、其數いとも少きがうへ、これすら大かたは病いのために斃れたれば、病める者ども、かたみに相たすけ合へるのみにて、その不便、その不自由は言葉にもつくしがたしと云へば、新に數十人の看護者を派遣せざるべからず。されど思へ、その心をこまかに配る點に於て、其もてあつかひ方のやさしき點に於て、婦女は男子にまさらずや。さらば婦人の看護者を送るべきか、たゞさへか弱き女の身の、海山遠くへだてたる蠻地の氣候に遇ひては、人のみとりはさて置きて、われからさきに病ひにかゝり、一命を全うせむことの難かるべきに、果してその募りに應ずるものありや。時の陸軍大臣ハーバートは、心を苦しめて此適任者をもとめし末、遂に一人の名婦を見出だし、一書を送りて其旨を通じてけり。

さても、この榮譽ある撰びにあいし名婦を誰とかなす、これぞ、わがこゝに紹介せむとする、フロレンス、ナ

イチンゲール女史にぞありける。

女史は、英國の豪農ウイリヤム、ナイチンゲールの第二の女にて、紀元千八百二十年五月十五日、以太利の古き都なる、フロレンスに於て生れぬ。心はへいと優しくて、姿容も人にすぐれ、家裕なれば、浮世の榮華忍ふがまゝなれど、世の常の蓮葉なる女とはかはりて、髪のかざり、衣裳の流行には心もとめず。わかき時よりなさけ深くして、常に貧しき家や、病める人の枕のもとに訪づれては、金錢、品物などを惠み與ふることを、この上もなき樂みとしてけり。

女史が家はリー、ハーストと呼ぶ邑にありて、山紫に水白き仙境に、幼き時を送りたりしが、或時は父に從ひて、佛蘭西、獨逸、以太利などの國々に旅したることあり、また或時は、遠く埃及の邊まで遊びたることもありしが、何れの地にても、貧苦を悲しみ、病苦になやめるものありと聞くごとに、自から其家を尋ねて、物など惠みて慰めけるほどに、到るところとして、女史を貴び敬はざるものなかりき。その倫敦に出で行きたる時にても、繁華の巷、遊樂の場所には目もくれず、普ねく病院、孤兒院に在るものを見舞ひて、力を慈善の業につくすを樂みとしたりしが、遂には自から斯かる事業に身を投ぜむと思ひたち、再び獨逸、佛蘭西、伊太利を遊び周りて、其地の病院、孤兒院などに就き、精しく萬般の事情をきはめ、ライン河の上流に在りと聞く、『ルーラララン』大病院に到りては、その規模の大きなると、設備の整へると驚き、奮つて同じ院内に在る看護慈善學校に入り、そのころ萬國博覽會の開かれて、世界の士女を一つに集めけむ、倫敦の都の春を餘所にして、ひたすら看護の道に心を委ねぬ。

業を卒へて故郷に歸りし時、偶ま倫敦のバーレー街に在る看病婦學校の、資材つきておもふがまゝにならざるより、まさに廢校の悲運に陷らむとせるよしを耳にせしかば、女史は取るものも取り敢へず、いそぎ都に出でゝ、其學校を身に引き受け、自から多くの資財を擲ちて、これを維持せむが爲めに久しく心を碎きしほどに、幾とせの盡瘁身躰の健康をそこないけむ、一時病ひ

の床に臥したりしが、天恩かたよりならず、やうやく快氣に趣くと共に、學校の基礎も次第に固くなりまさりて、女史が名は滿都の人の心を動かすに至りぬ。

『クリミヤ』戰爭の起りたるは、まさにこの折のことにして、女史が名譽の愈よ世に傳はりしは、げにこの戰爭によりてなりけり。（未完）

家庭歴史　三十六歌選

中村秋香

日本武尊

やくもたつ
　いづもたけるが
　　はけるたち
つゞらさはまき
　さみなしにあはれ

此御歌は尊の話のうちに委しく記しおけるが如く、出雲の酋長出雲梟帥に計略を以て赤檮の木もて作り、黒葛を繁く巻き装ひたる木刀を授け玉ひ、さて太刀合はせんとて、之を誅戮ましましける時、詠ませ玉へるものにて、やくもたつは、彌雲立つにて、出雲といふ詞を起さんがための枕詞、はけるたちは、佩帶たる太刀といふこと、つゞらさはまきは黒葛多巻きにて、黒葛は蔓草、刀の柄及び鞘には、握り力を得んため、又割れざらんがために之を巻きしは當時の風なり、されば此赤檮の木にて作りたる木刀に、見掛けばかりは、いかにも嚴めしく黒葛を繁く巻き装ひたりしかばかくの玉へり、さはまきは多巻きにて、しげく巻きたるをいふ、さはは多きこと、繁き事などにいふ、さみなしは正身無しにて、即正身の刄なく、木刀なるをいふ、さみのさは眞といふことゝ、みは身にて、眞身は正身に同じく太刀の刄をいふ、御歌の意は出雲梟帥の出雲といふ事をいはんがために、先づ彌雲立つといひ、さて出雲梟帥が佩用して居たりし太刀は、葛黒を澤山に巻きて、いかにも嚴めしく作

り装ひたるものなれども、肝要なる正身の刄が無くして、拔く事が叶はず、遂に我が爲めに誅戮せられし事よあゝ氣の毒なる事かな、と歎じ玉ひしなり、計略をもて之を誅し玉ひし委曲の事は尊の話につきて知るべし、

日本武尊の話

日本武尊は景行天皇第二の皇子にまし〳〵、御母は皇后播摩稻日太郎姫と申す、尊御諱は小碓尊、一の御名は日本童男とも、又日本武尊とも申し奉る、天性慧敏して智慮深く、氣質猛く雄々しくまし〳〵て力あくまで強く、容貌世にすぐれ、身の長一丈とぞ聞えける、景行天皇二十七年の八月、西の國なる熊襲反きて四方を侵し掠め、禍害をなす事甚しく、日夜を分たず變報頻りに至る、そも〳〵當時熊襲の害をなす事しば〳〵にてこれより前にも天皇御親征まし〳〵て之を討伐し玉ひし程の事なるに、今又此の如くなれば、天皇深く大御心を惱まし玉ひ、是容易なる事に非ずして、之が征討に任すべき者朝廷を擧りて其人ありとも覺えず、唯小碓皇子こそ深沈にして智謀あり、勇敢して膽畧ありて、此任に當るに餘りあれとて、即て尊に仰せて征伐せしめられければ、尊謹んで勅をうけ玉はり、當世弓術の達人と聞えたる美濃の弟彥公、及び其從屬石占橫立、尾張の田子之稻置、乳近之稻置などを率ゐて是歳十月征伐の道に出で立たせ玉ふ、時に尊御年十六にまし〳〵て、いまた童の形を改め玉はず、御髮を額の上に結ばせ玉ひけるが、竊に思しはからせ玉ふ所ありければ、伊勢の國にましませる御姨君倭姫命の御許に廻らせ玉ひ、此度熊襲征伐の仰を蒙りたる由を告げ奉り、且聊か思ふ所あればとて、姨君の御衣服、御裳、幷に御短刀を申し受け玉ひ、即て熊襲の國に至り、先其土地の有樣、山川の狀形、地勢の嶮易より、賊徒の動靜を伺ひ探るに、熊襲魁帥、名は取石鹿文といふ者、勢力甚強く、部下の兵卒最も多くして、威遠近に震ひ、險阻の地に據りて第城を搆へ其周圍には多人數の軍兵をして幾重ともなく取圍ましめ、防衞晝夜怠る事なく、げにすさまじき勢なり、時に川上梟帥といふ者あり、熊襲魁帥が一族にして、其勢力亦甚強く、相下らざるものなりしが、折し

も其家に親族始め懇意の人々を招き集めて宴會を開く事あり、尊探りて此由を知しめし、是屈竟の機會なりと即て隻角の髪を解き下して垂髪とし、かの姨君より申受け玉へる御衣服を着け、御裳を裝ひ玉ひしかば、最麗はしき少女となり玉へり、然るに御容貌のもとより世にすぐれ玉へる上に、此時いまだ御年少くまし〱て御丈立も猶さばかり高くもましまさざればなり、斯くてかの短刀を竊かに懷中に藏し持ち玉ひ、梟師が家に入り給へるに、其御容體の毫も少女に異ることなければ誰怪しめる人もなし、されど多人數なる給仕女の中に交りて來客をもてなしつつおはしけるに、酒宴やうやく闌にして主人も客も悉く醉ひ、歌ひつ舞ひつ歡樂を極むる折しも、梟師は尊の容姿殊に勝れて美しきを愛でよろこび、やをら尊の手を取りて我が席に伴ひ來り、盃を取て尊に參らせ、強て之を飲ましめ、其膝にしなだれかゝりて亂れ戯る、時に宴ます〱闌に、夜いよ〱更けて、座客皆醉ひ伏せり、時こそよけれと尊は短刀拔く手も見せず、梟師が胸にグサと突く、突かれて

驚く川上梟師、苦しき息の下より言ふやう、しばらく待たれよ、言ふことあり、そも〱君は何人ぞやと、此時尊は形を改め、聲朗かに宣はく、吾は是大足彦天皇の皇子、日本童男にましますなり、と梟師之を聞きてます〱愕き、あゝ僕は此國にての剛力無雙の者なり、されば何人も我に敵する者なく、我に從はざる者あらず我是まで武力ある者に出で逢ひし事甚多しと雖も、いまだ皇子の如く單身にして我家に入り、吾傍につきて、吾を刺すばかり膽力ありて剛勇なる人を見し事あらず、あゝ僕、反賊の口より申すは恐ある事ながら、今謹んで尊號を奉らんことを願ふ、許し玉はるべしや、と申す、苦しからず、疾く申すべしと宣ひければ、今よりして皇子の御名は日本武尊とこそ申し奉るべけれ、と言ひも訖らず、刄は胸を貫きて之を誅戮し玉ひぬ、此時豫て牒じおかせ玉ひし事なれば、弟彥も軍勢を率ゐ來り、悉く其族類を誅伐し、勢に乘じて四方を征討し、熊襲全く平定す、日本武の御名は實にこれより起れるなり、

さて又爰に出雲梟帥と云へる出雲の國の酋長あり、屬類衆く兵力强く、朝廷に服從奉らず、常に暴威を擅にし、民の憂國の禍をなすことをさ〳〵熊襲魁帥にも劣らざる程の者なりければ、いかで此序をもて之をも誅滅せばやと思しけれど、屬類多く兵力强き者なれば、誅伐せんこと容易の事にあらず、なまじひに戰を開かば數多の人命の失ふべし計略を以て之を除くに如かずと思慮まし〳〵、即て從者をも召連れ玉はず、又弓矢をも携へ玉はず、御身唯一人卒然出雲梟帥が家を訪らひ玉ひ、交を納れ玉ふに、梟帥はじめは疑ひ奉りしかども、樣々の事ども語らひて其樣を伺ひみるに、又他事もなく見えたりければ、心やう〳〵打解け、且は尊の風采を慕ふ情さへ生じたり、尊は疾くも其氣を察し玉ひ、折しも夏の旱續き土も拆くべく照らす日の、やう〳〵西にまはる程、甑の中に坐るが如く、炎熱譬んやうもなければ、尊は梟帥に向ひ玉ひ、いかに梟帥あまりに暑く覺ゆるに、水だに浴みて凌がはやとて、やがて互に連立ちて、肥の河に赴き玉ひ、おの〳〵衣を脫ぎ捨てゝ游泳をぞなしたりける、時に尊は梟帥よりも先に水より出で玉ひ、手早く衣服を着け、豫て佩びさせ玉ひたる赤檮の木鞘柄等に黑葛をしげく卷きなし、いと嚴めしく見せかけて、實は刄なき木刀をば、梟帥が衣服の下に置き、梟帥が佩びたる太刀を御身に佩びさせ玉ふ折から、梟帥も岸に上り來り、衣服を着くるを見そなはし、尊は莞爾と打笑み玉ひ、いでや梟帥、諸共に太刀合せして試みんと言ふより早く拔き放てば、心得たりといひさまに、梟帥も太刀を拔んとするに、素より木にて作りしなれば、何としてかは拔き得べき、これはと慌て驚く程に首は前にぞ落ちたりける、前に揭げし御歌は即ち此時詠みまし〳〵なり　かくて其屬類を征伐まし〳〵出雲の國を平げて吉備に入り玉ひ、穴海の惡神を滅し玉ひ難波に歸り着かせ玉ひけるが、柏濟に惡神ありて國の害をなす由を聞しめし、遂にこれをも討ち平げ玉ひ、去ぬる廿七年の十月より今歲廿八年の二月迄、僅に五月に足らずして、西陲こと〳〵く靜謐となり、民皆業に安んずるに至りしかば、天皇深く其功を賞し玉ひ、御寵遇日に

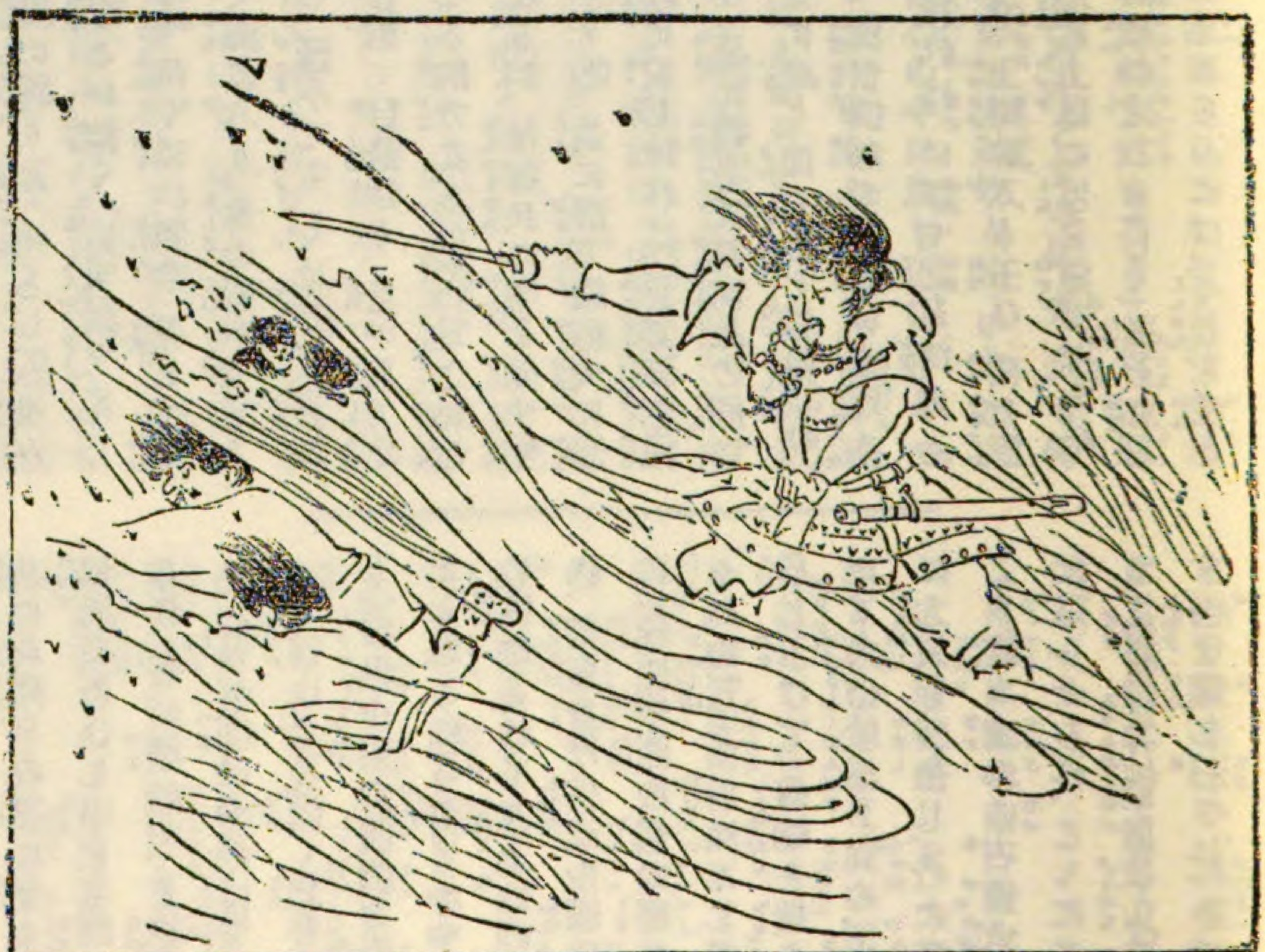
ます〳〵厚し、
これより後は天下久しく平穏にて民皆太平を樂しみけるが、同じき天皇の四十年の六月に當り、東國の夷賊反き亂れて、在々處々を侵し掠め禍亂をなす事頗る甚しく、變を報ずる事頻なりければ、天皇深く大御心を惱まし玉ひ、公卿の限を悉く朝廷に召集めさせられ詔して今東の國々大に亂れて、惡徒至る所に横行し、蝦夷こと〴〵く叛きて、境を侵し民を虐ぐ、之を討ち平げんこと容易の事に非ず、追討の任に當らん者はそも〳〵誰なるべきと宣はせられければ、群臣之を承りて各々互に顏見合するのみ、茫然として對へまつる者なし、時に日本武尊進み出でゝ奏し玉ひけるは、曩には臣勅命を蒙り、身の不肖をも顧みず、西國征討の任をうけ玉はり奉りき、されば此度の任は大碓皇子こそうけ玉はり玉ふべけれと、ありければ、大碓皇子はもと軍旅の事に慣れさせ玉はず、深く惶れて固く之を避け玉ひければ、尊慍つての玉ひけるは、熊襲の亂治まりて僅かに十年、今又東夷叛きて民を惱ますこと此の如し、あゝ何れの日か民と共に太平を樂むべき、臣力微なりといへども、天下のために誓つて此亂を平げんと、ありければ、天皇甚、喜ばせ玉ひ、即て斧鉞を授けさせられ、宣はせられけるは、朕かねて聞く、東夷と人となり粗暴にして侵掠を事とし、各々互に土地を奪ひて相盜み、山には山賊あり野には野盜あり、その東夷の中蝦夷殊に強暴く、男女別なく、父子道なく、冬は穴に入り、夏は木に巢み、毛を着血を飲み、山に登るは飛鳥の如く、野を走るは猛獸に似たり、恩を承けては忽ち忘れ、恨を感ずれば直ちに報い財を見れば掠め、食を見れば奪ひ、之を撃てば草に隱れ之を追へば山に入る、是を以て古より治め難きものとなせり、朕汝が人となりを見るに、容姿端正くして軀幹長大く、力いと強くして、能く鼎を扛げ、勢猛くして殆雷電の如し、こゝをもて向ふ所前なく、攻むる所必ず勝つ、之をもて思ふに、汝は我が子なりと雖も實は神にして、天地の神祇朕が及ばざるを憫み、汝を降して朕が子となし、朕を助けて天下を平げ、生民を安からしめ玉ふならん、されば此天下は、即ち汝が天下なり、此位は即

ち汝が位なり、汝深く之を思ひ、强き者は武威を張りて之を征し、弱き者は文德を修めて之を懷けよと、尊謹みて勅をうけ玉はり、恭しく斧鉞を受け、やがて發軔の途につきたまふ、かくて直ちに東路に向ひ玉ふべき事なれども、神宮へ參拜せずしてはいかでかはとて道を枉げて伊勢に赴かせ玉ひ、謹みて今度の事を
皇祖大神に告げさせられ、さて御姨君なる倭姬命を訪はせ玉ひて此度東征の事を述べさせられ、御暇乞を申させ玉ひければ、姨君も深く喜ばせ玉ひ、かねて天皇より預からせられ、神宮中にいつきまつらせ玉ふ三種神寶の一つなる天叢雲寶劒をもて尊に寄せしめられ、是ぞ皇靈の寓らせ玉ふ所のもの、こをもて賊を平らげ玉へ、愼みて怠り玉ふなと仰せられければ、尊畏みて之を受けさせられ、やがて出發なし玉ふ、かくて駿河に至らせ玉ふに、其國の賊徒、かねて尊の威名を承りをる事なれば力をもては迚も敵對すべきにあらず、唯謀計もて失ひ參らするに如かずとて、かの〱巧みに諜じ合せ、陽りて慇懃に迎へまゐらせ、恭しく申しけるは

此野には麋鹿いと多く、其立並べる足は、野に生茂りたる雜木にも過ぎ、其集りて吐く息は、野を立籠る霧よりも甚し、さればこゝに入りまして獵し玉はゞ、獲物の程は數へ盡し難かるべく、旅中の御慰これに過ぐることあるべからずと眞言しやかに、申しければ尊聞し召され、そはいと興ありて面白き事なるべしとて、即で野中に入りて獵し玉ふ、此時未開の時代なれば野には一面雜木生茂り、見渡す限り荊棘にて、遠く天涯に續きたり、折しも十月下旬の事にて、草木すべて乾燥ける事故賊は尊の深く野中に入り玉へる時分を圖り、豫て用意し置きたる枯草を夥しく積累ね、風上よりして火を點くれば、忽ち雜木に燃移り、またゝく隙に野は一面の火となりて、炎々として天を焦す、こゝに尊は欺かれたることを悟り、大に怒らせ玉ひ、かの姨君より預らせ玉ひ肌身離さず佩びさせ玉ふ、天叢雲の寶劍を拔きかざし、烈しく燃え來る周圍の雜草を薙刈り玉ひ、更に燧を出して火をきりて、之を一方の雜草に移し玉へば、不思議や風向俄に變り、颯と靡きて燒け反れば、賊徒が集り屯

せしところは、みる〳〵四面火となりて、一人も殘らず焚殺さる、これより此寶劍の名を草薙といひ、又其地をば燒津といふ、即ち寶劍は今熱田神宮に齋き祀る所にして、燒津は今東海道線鐵道停車塲なる燒津の地是なり、

これより進みて、相模の國に至らせられ、上總國に渡らせ玉はんとするに、舟人ども風浪よからざる由を申す尊海濱に出で、遙かに上總を望ませられ是池の如き小海のみ跳びて渡るべしとて强ひて船を出さしめ玉ふに暴風俄に起り、船漂蕩て覆



らんとす、王妃弟橘媛從ひまつりて船中にありしが尊に啓しけるは、是必ず海神の怒らせ玉ふに依るならん、妾身をもて其怒を和めまつらんと言ひさま跳つて海中に飛び入れば、今までさばかり荒れしまきたる暴風狂瀾、忽ち止みて船は平かに上總國に着きぬ、弟橘媛は穗積氏にして忍山の宿禰の女なり、尊は是より更に陸奧國に至り、葦浦玉浦を經て蝦夷に入り玉ふ、蝦夷の賊首島津神、國津神等此由を聞き、大軍を率ゐて逆へ戰はんとして竹の湊に屯せしが、遙に沖の方を望

むに數艘の軍船旌旗翩翩と風に飜り、堂々として進み來れるさま恰も天神の降り來るが如く、威炎赫々として仰ぎ視るべからざりければ、深く恐れ戰き、覺えず弓矢を捨て、衣を褰げて爭つて海に入り、尊の船を推して岸に着け、悉く其前に平伏し、謹みて申しけるは、君の容姿を仰ぎ視るに、威光人を射て目暈けり、是かねて承る天神にや、そも〳〵いかなる御方なるかと、尊之に示して、我は是現人神の御子なるが、汝等民の害をなす者を征伐せんために來れるなりと、是に於て蝦夷大に恐れ慄き、悉く兵器を捨てゝ罪に服しければ、尊其罪を免し玉ひ、厚く之を鎭撫し玉ひ、更に轉じて日高見の國に入り、又還つて常陸より甲斐に至り、深く之を懷け玉ひ、蝦夷大方鎭靜したりけるが、猶信濃越の二國いまだ全く平定するまでに至らざりければ、いざや之を治めんと甲斐より轉じて武藏に出で、上野に入り玉ひ、碓日阪を踰え玉ふ時、嶺に登りて遙に上總の空を望ませられ、かの弟橘姫の、尊のために難に死しましゝ事を思し出させられ、あはれ今存生へてあらんには、今日も我と共に此碓日の嶺に登り、此景色を眺めて上總の海にて暴風にあひし事をも語らふべきものを、と思しつゞけられ、吾が嬬はや、と歎かせ玉ふこと三たびに至らせ玉ふ、（吾が嬬はやのはやは深く歎ずる聲にて、あゝ其弟橘媛はよと深く之を哀み歎き玉へる意を含むものなり）後世山東の諸國を吾妻の國と唱ふるは、實に此御詞よりおこれる事とかや　かくて吉備武彦をして越の國に遣はされて其土地の有樣、人民の動靜を見せしめられ、御自身は信濃の國に入り玉ふ、信濃は元來山國なるに、殊に未開の代の事なれば、峨々たる山は古樹老木森々を生茂り、谷深くして猛獸横行す　されども尊は毫も屈し玉はず、瘴烟を披き、毒霧を凌ぎ、嶮を犯し、嶇を踰えて大山峻峯を究め、山神を誅し、猪鹿を驅り、到る處に人民を綏撫し、遂に美濃に出でさせ玉ひ、こゝにて越より歸り來れる吉備武彦と出て遇ひ玉ひ、やがて尾張に還らせられ、こゝにて尾張氏の女宮簀媛を娶らせらる、時に近江國膽吹山に山神ありて、深く人民の害をなす由を聞し召され、いで之を擒にせばやとて、佩びさせ

玉へる劔を解きて、宮簀媛の家にさしおかせられ、徒歩にて膽吹山に入り玉ふ、此時山神大蛇となりて尊の進み玉ふ路に蟠りて尊を懼れしめんとするに、尊毫も怖ち玉はず、されども此大蛇は即ち山神なりといふことをも知り玉はざりければ、御心の中に思し玉ひけるやう、此蛇は必山神に使はるゝものならん、さらば山神を擒にせばこれらは手を下すにも足らざるべしと即ち大蛇を跨ぎて猶進行し玉ふ、この時山神俄に雲を起し、氷雨を降らすこと甚しく、雲捲き、霧迷ひ、山谷暗冥咫尺も辨ぜず、されども尊は猶屈し玉はず、雲霧を凌ぎて强ひて進行し玉ひ辛くして麓に出させ玉ひしが、精神朦朧として醉へるが如くなりければ、山下に流るゝ清泉を掬ひて之を飲み玉ひ、かつ〴〵人心地にかへらせ玉ひけれど、大蛇の毒氣や受けさせられけん、御身痛む事甚し、されども猶くづをれ玉はず、强いて尾張に還らせ玉ひ、更に伊勢に入りて尾津を過ぎさせ玉ふに、最初東征の途に向はせ玉ひし時尾津の濱の松蔭に休はせられ、此にて食事をしたゝめ玉ふとて劔を解きて松が枝に懸け置き玉ひ、其儘にして去り玉ひしが、其時の劔今に其儘松にかゝりてありければ、深くあはれがり玉ひて、

尾張に直に向へる一つ松、あはれ一つ松、人にありせば衣着せましを、太刀佩けましを、

かく歌ひまして能褒野に至り玉ふに、御身の痛ますます甚しく、もはや一歩もはこばせ玉ふべくもあらざりければ、此回の役にて擒にせさせ玉へる蝦夷等をもて神宮に獻り、吉備武彦をもて御使として都に參上せしめ、東國悉く平定の旨を天皇に奏し奉り、やがて能褒野に隱れさせ玉ふ、御年僅に三十にぞならせ玉ひける、天皇深く驚き哀しませ玉ひ、晝夜御淚の隙なく歎かせられ、即て在朝公卿百官をして伊勢國能褒野につきて葬らしめ玉ふに、白鳥ありて陵よりまいいでゝ大和國の空をさして飛びゆきければ、葬場にある百官の人々驚き怪しみ、御棺を開きて之を見るに、唯明衣のみにて御遺骸なかりければ、やがて御使もて白鳥の行方を追尋ねしむるに大和琴彈原に停まりしをもて、そこに就

きて更に御陵を作る、さるに白鳥復び飛びて河内に至り舊市邑に止りければそこにも亦御陵を設けぬ、されば此三の陵をもて世にはいづれも白鳥陵とは申しけり、是景行天皇の四十三年にして、尊の東征し玉ひしより四年を經ての事なりけり、



文苑

和歌

奉賀御降誕　從一位 久我建通 八十七翁

むかしよりためしまれなる男山
　松ふく風をうふ聲にして

皇長孫御降誕ありけるまたのあしより
參賀のみちにて

男爵 高崎正風

こゝろなききさへくさらへなにとなく
　うれしきいろのみゆるけふかな

水邊藤（津島神社獻詠）

河岸の松よりまつにかゝりけりうすむらさきの
藤波の花　千種任子

水きよき清瀧川のたきつせにさきてうつろふき
しの藤波　小倉文子

ゆく水にかけうつらすは葉かくれにさくともし
らし藤波の花　園祥子

おのつから水あるかたになひきけりいけのみき
はの藤波の花　姉小路頁子

松かえもいはねもこえて山川のきしにかゝれり
藤波の花　小池道子

せをはやみ舟もよられす谷川のいはねに藤の花
はみゆれと　生源寺伊佐越

山川のきよきなかれにかけみえてみきはの松に

かゝる藤なみ　平田三枝

うちなひく枝おもしろき谷川のいはねの松にかゝる藤波　吉田愛子

ゆく水にかけをうつしてさきにけりいはねの松のふちなみの花　竹屋光昭

たにかけの清水わきいつる岩かねにかゝりてさけりふちなみの花　宮地嚴夫

ふねよせてみし世おもへはなつかしきもり津の藤はさきやしつらむ　荻原嚴雄

はるふかきたにのいは淵みおろせはかけこそうつれ藤波の花　鎌田正夫

かせわたるいけのふちなみ老松のかけなからこそたゝよひにけれ　千葉胤明

谷川のふちのみとりにうつりけりいはねをつたふ藤波の花　遠山英一

さくら花はやちりはてゝ池水にうつりかはりぬ岸の藤波　加藤義清

春朝

窓あけて花のおもわに向ひをれはかすみににほふ春のあさかせ　男爵夫人 末松生子

櫻さくはなのやよひはおのつからなれし朝ひもせられさりけり　男爵母堂 西升子

子らつれて後(うしろ)の岡に今日もゆかむあしたのとかに小鳥さへつる　子爵夫人 竹屋雅子

思ふとちとひつとはれつ朝いするひとなかるらむ花のさかりは　諏訪晴子

よはの雨いつしかはれて梅そのゝ花のかたかく朝日いてむとす　板倉藤子

あさ日さす花ににほへり百ちとり花にうたへりたのしき春の日　大河内桂子

花のかをふきおくりくる朝かせにけふよりそしる春ののとけさ　原田時雨子

世の人は花みるころになりぬらむねさめのとけき春のこころ　小幡八重子

ほの／＼と霞なかれてかはそひのやなきの村はあけそめにけり　芦田操子

おきいてゝいかにとあふく大空にひはりの聲ははやきこゆなり　印東富貴子

とくおきて花のむしろに圓居せむふく朝かせはよしさむくとも　大澤國子

朝な／＼手あらふ水もぬるみけり老ははるこそうれしかりけり　根岸直子

うくひすの聲はほのかにきゝなからふし心地よき頃にもあるかな　頭本春子

まなひやにうちつれ通ふ少女子のあさ露はらむすみれ折りゆく　三宅貞子

斧のおとあさとくひゝく杣やまのひともとさくち白みそめけり　佐藤朝惠子

大そらはかすみの上にねふるらむゆめにも似たる朝ぼらけかな　峯百合子

おきいてゝまつそ眺むる庭の面のはつ花さくら今日はいかにと　大村八代子

さくらちり鈴菜もちりし朝の野にてふ二つ三つあはれけに飛ふ　荒井萬子

けふの日ものとけかるらむ花鳥の聲のうちより夜はあけにけり　大竹以勢子

誰しかも心あるひとのめてさらむ花にしらめるあけぼのゝそら　黒田珪子

をさな子があしたの笑も長閑なりはなかけにほふ窓のみとりに　村山元子

しつかなるあしたの花の下かけに眉ましろなる法師なかめをり　淺井鐵子

朝またき泣く子すかしてたい入れは軒端のさくらはら／＼とちる　瀬川久可子

うくひすの優しき聲をわれきゝつうめの花ちるあさにはにして　池田愛子

さきたわむ梅かえたにぬるてふのゆめしつかなる朝ぼらけかな　鈴木光子

おきいてし子供ひきゐてこの朝け人よりさきに
はなみしてけり　　松永そよ子

夢のうちに雨ははれけむ露もまたかわかぬ花に
あさ日さすなり　　中村文子

朝またきいまた起出てぬわか門を花見のともに
たゝかれにけり　　山本芳子

とり／＼に籠たつさへて春の野に朝またきより
うなゐ子のゆく　　久保花子

なく鳥の聲におとろき目さむれはのとけき春の
あさ日さすなり　　田中たを子

植木屋かつくりし室のはなうはら二つさきたる
はるのあさかな　　加藤ひな子

またきより花見くるまのところ／＼あしたの大
路きしらしゆくも　　佐々木瀧子

朝戸出の大路よひありく花うりのかこにゝほへ
る桃さくらかな　　有賀晴子

騒かしきあまたの群にさきたちてあしたしつか
に獨はなを見る　　寺野章子

山てらの鐘のひゝきもうら／＼と霞みわたりて
夜はあけにけり　　遠山直子

うくひすの聲のとかなる朝にはにはなのかさそ
ふ風わたるなり　　池谷久子

春かすみたなひきわたる波の上に朝日きらめく
大和田のはら　　市田とよ子

なき父のろうたきものに數まへしつはき一りん
今朝さきにけり　　保科蝶子

けさもまたとく起出てゝ眺めましうしろのをか
の花のさかりを　　菅原珠子

家の内に野邊に山邊にはるかせののとかにわた
る朝ほらけかな　　島崎いさ子

しつの女か朝けたかむと汲む水のおともものとか
になれる春かな　　前田美子

うらやまし霞むあしたの大そらをひとりしめて
もなく雲雀かな　　佐々木雪子

こかね色の胡蝶となりて此あしたの春の女神の野
におりたゝす　　印東昌綱

夜はあけぬ春のひかりは廣ごりぬあたらしき色
あたらしきこゑ　　佐々木信綱

和文

山わけごろも（下）　　佐々木信綱

西行庵に、上人の像ありしを、今は金勝明神の社務所にをさめありときけば、茶店の家刀自にしひて頼みて、人すまぬ社務所の戸ざしたるをあけさせぬ。像は左の膝をたて、右手に數珠をもちませり。うらに奉納、天明五乙巳春願主江戸南鍛冶屋町大井八右衛門定恒。細工人同中橋益田慶運とあり。定恒とは、いかなるすき人なりけむ、ゆかしう覺ゆ。雲井櫻の茶店に歸り、あづけおきしわりごをひらく。大竹ぬしは瓢とかで、此花に向ひ此酒をのむ味ひはとて、えらぎをり。足もとまらぬ坂路を下り〳〵て上の一目千本にいたる。いまだ早けれど、雲をふみてとは、まことにこゝのさまなるべし。

仙人が雲にわけ入るみちならし
　　そばだつ山のはなのしたかげ

山そひをほぐり〳〵て、延元の陵にまうで、小高き所に石の玉垣をめぐらし、白砂子をしきたる前に、ひれふしをろがみまつるに、懷古の情たへがたし。

松かげの大陵をあふぎみれば
　　なみだぞおつる旅のころもに
三吉野のやまの雫のしげければ
　　綾のみけしやかわかざりけむ
古への大御おもひや晴れざらむ
　　くもこそかゝれ三吉野のやま
南ふき北ふきかはる山おろしに
　　大御こゝろもさわぎましけむ
くなたふれ醜のをの子しなかりせば
　　かゝるみ山に行幸あらましや
みよし野の奥やま櫻のどかにも
　　みそなはす日や少なかりけむ

石磴のもとなる寶殿は、むげに新らしき殿づくりにて、丹ぬりのきざはしなど、ふさはしからずおぼゆ。如意輪

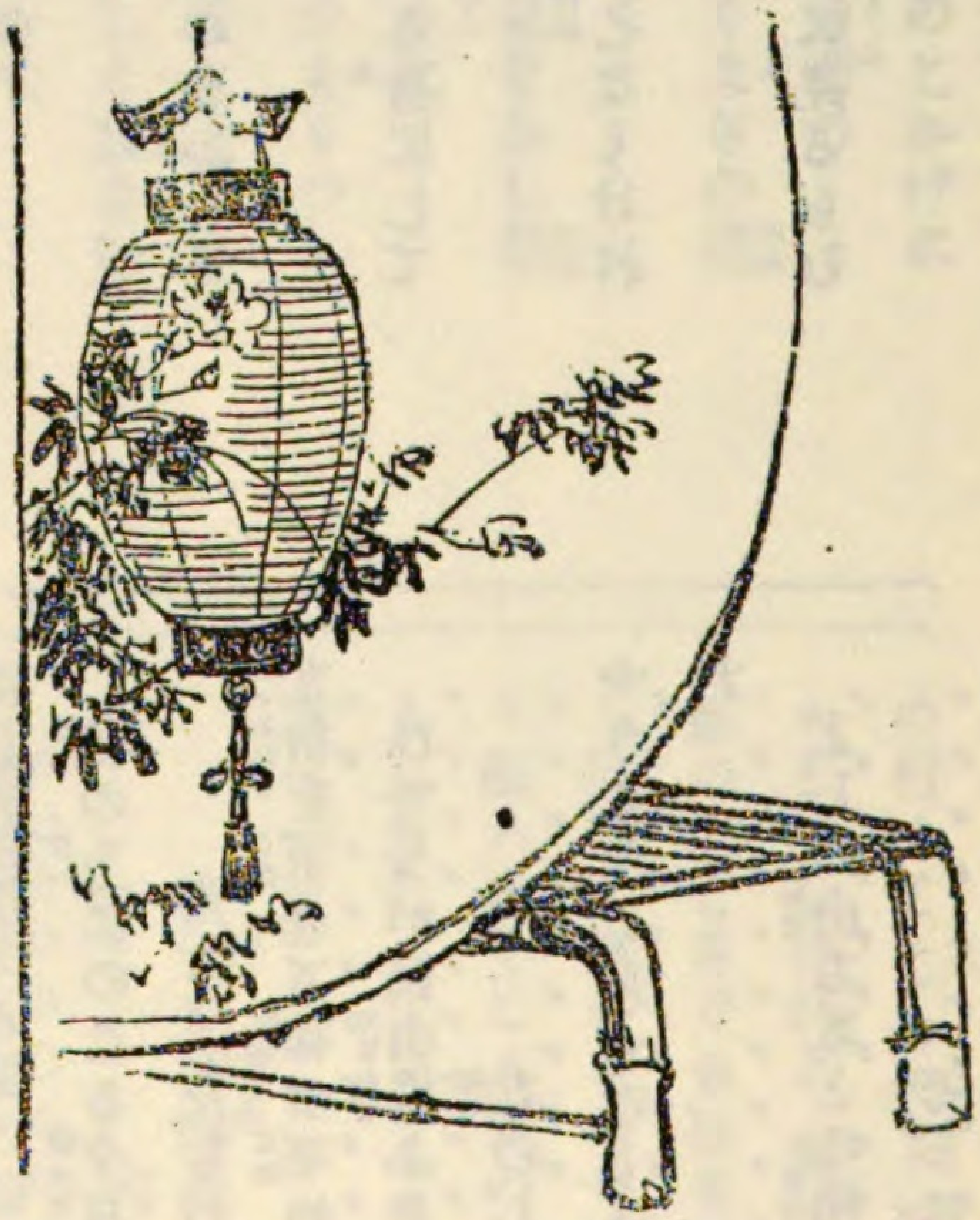
堂にて、かの歸らじとの歌ゑりたる扉をみる。古へのなりや否やしりがたけれど、そゞろに袖たゞならず。

みなとがは水はかれても萬世に
　あふるゝものは誠なりけり

陵ををろがみまつり
　ちかひけむ
むかししのべば
　泪ぐましも』

歸らじとしるしゝ文字は
　消ぬとも
消る世あらめや
　きみがま心』

此外くさ／＼の寶物あり。いづれも其かみ忍ばるゝくさはひならざるはなし。かくて立出でんとするに、屏風におしたる短冊の中に、父のかけるもまじれり。大竹ぬしにさし示すを、あるじの僧の見て、君も風雅の道好み給へりやといふ。假初の旅にわが姿のあやしければ、父の名なのりいでんもさすがにてほゝゑみをるに、大竹ぬし、我名を告げらるゝに、さては父君にはさいつ年あひまゐらせつ。いかで短冊をなどいふ。扉の歌をすりたるを得て歸る。僧は吉川法譽といへり。ゆくての谷あひの花、枝にたれて、さながら雪の中をわたるに似たり。中の千本といふとぞ。かの下の千本とこゝとは、花の木最も多かるわたりにて、かしこは見おろし、こゝは見あぐるにて、おもぶきはかはれど、とり／＼にいひしらぬながめなり。吉水院にいたる。後醍醐帝の、しばし宮ゐさせ給ひし跡と、きくもかしこし。



いにしへの吉野の宮の跡とへば
　まつ風さむく花ちりみだる

寶物には、南朝の帝の御姿を始め、くさ／＼あり。芳雲餘情とて人々の詩歌をあつめたる一卷あり。もとめ見

るに、みよしの丶花の盛を來て見れば只白雲のたてるなりけり。み芳野は花より外の色もなし櫻を山の姿にはして。と云へる父の歌あり。こゝにて市松にわかれんとするに、しばしまたせ給へとて、近わたりより短冊もとめ來て、こふがまゝによめる。

春ごとに千本の花のしたみちを
　たちならすらむ人のゆかしさ
何をかもまどしといはむ春秋の
　はなに紅葉にとめる身にして
みよし野を奥山里と人はいへど
　こゝこそ花のみやこなりけれ
白くもの中なる里にすむひとは
　うきよの塵もよそに見るらむ
ちりふかき都の中にすやわびぬ
　この山かげにいへやもとめむ

城王堂にまうづ。大塔の宮の、今はとてうたげせちせ給ひし折を忍びつゝ、吉野の町つゞきをはなれて、また下の千本にいたる。今の後の宮のこゝに行啓せさせ給ひし折、御輿をとゞめさせ給ひし地とて、らちゆひたる所あり。かたへなるさずきにのぼりて打みやるに、山ざはに落んとする夕日花やかにかゞやきわたりて、千本の梢に匂ひあひたる、げに天の下の樂しび、何ものかこれにしかむ。

花の上にのこる夕日を返り見て
　たちわかれゆくみ吉野のやま

九折を下りて花の下かげたちもとぼるほど、

ひやゝかに山風ふきて吉野やま
　花のしたみち日はくれむとす

やう／＼くろくなりゆくに、ちりはじむるも少なからず。

よしの山ちもとの梢かぜふけば
　そらにたゞよふ我こゝろかな

今しばしとたちやすらひて、

よしの山歸らん空もなけれども
　ちるなげきにはたへじとぞ思ふ

終にかへさの道につきぬ。過こし道のこゝかしこにて

よめりし歌ども、

みよし野の山わけ衣ぬれにけり
　雲よりうへの杉のしづくに
千年へて我石ぶみをたつべくは
　よしの丶山の花のこかげに
これもまたあはれとぞ思ふみ吉野の
　山したかげのさくなぎの花
山深みちりし木陰をたどりきて
　いまだふゝめる花をみし哉
山かげはふめど音なしいやが上に
　杉の落葉のちりつもりつゝ
玉くしげ二たびゆかぬ人の世を
　けふの限したのしく暮さむ
にほひなき言葉の花をかきつめて
　もたこむ恋のしをりにやせむ

《をはり》

ひな歌

中内蝶二

一痕の殘月空にかゝりて、霧は江上にたちこめたり。一葦流にしたがうて下らむか、風にむかつて溯らむか。一葦の行くところにまかして、遙かに蓬萊の夢をたどらむもをかしけれど、流水の來るところをたづねて、遠く桃源の春をさぐらむもたのしからずや。棹を中流に立てゝ曉風に面をさらせば、冷氣肌を侵して宿醉なごりなう醒めゆくこゝちのせらるゝに、へさきのあたりに躍りし魚の、波にとゞめし碧りの環のひろがりゆくさまさへ、折からのながめなり。

　富士の裾野の
　　一むらすゝき……………

梅に戀する鶯の初音か、時は今秋の半ばなり、岩間にむせぶ水のさゝやきかと聞けば、松の梢にかなづる琴の音のそれにも似たり、ひなぶりの歌の文句を、さりとはやさしき聲のふしかな。主や何處にと見やれど、霧深うして咫尺を辨ぜず、餘音嫋々として、空しく耳もとに

殘れるのみ。

歌のぬしは、思ふに堤の上を行く人なるべし。さらば上流のかたに行きしか、下流のかたに行きしか。耳をすまして續く文句の聞こえ來る方をうかゞへば、しばしありて、

やがて穗に出て
みだれあふ…………

聲はたしかに上流のかたより來りぬ。

今更思へば、心狂ひたらむ人のわざに似たれど、われは如何にもして美しき歌の主を見さだめたき心おこりて止めがたく、棹とりなほして、何處までもと聲を慕うて流れをのぼりぬ。

橫雲東の天にたなびきて、殘むの月影も、明星の光もいとかすかになりたれど、霧はなほ晴れやらず。道芝の露ふみわけて行く足の音かすかに聞こえながら、ぬしは何ものとも見えわかざりけり。

溯ることや〻十町ばかり、たゞむき漸く疲れて、つく息さへ苦しくなりたれば、しばし舟をとゞめて耳かたむくるに、人の足音はたえてきこえぬやうなり。

さては、あまりに心はやりて、ぬしより前きに舟をすゝめしか。あるは、わが舟のぬしに遲れけるか。われは、さばかり舟の進みの遲かりしとも覺えざるに。

なれぬ手わざに、此のさきなほ舟を進めむことの覺束なければ、しばらく舟を堤下に繋ぎ、わが舟のおくれたるか、はた歌のぬしの後れたるかを見さだめむと思ひつ。

霧はやうやく薄らぎたり。舟をすてゝ堤に上れば、何ともしれず快き香氣の淸風にともなはれて、われを襲ひぬ。

げにもあやしき朝なるかな。さきの歌聲といひ、今また此香氣といひ、美しきもの、快きもの、あやしきまで我身をとらかす心にくさよ。

對岸の寺に撞き出す鐘の、水を渡つて傳はり來る響きに驚かされ、顧みれば、紅燄うら〳〵と東の空にのぼれり。

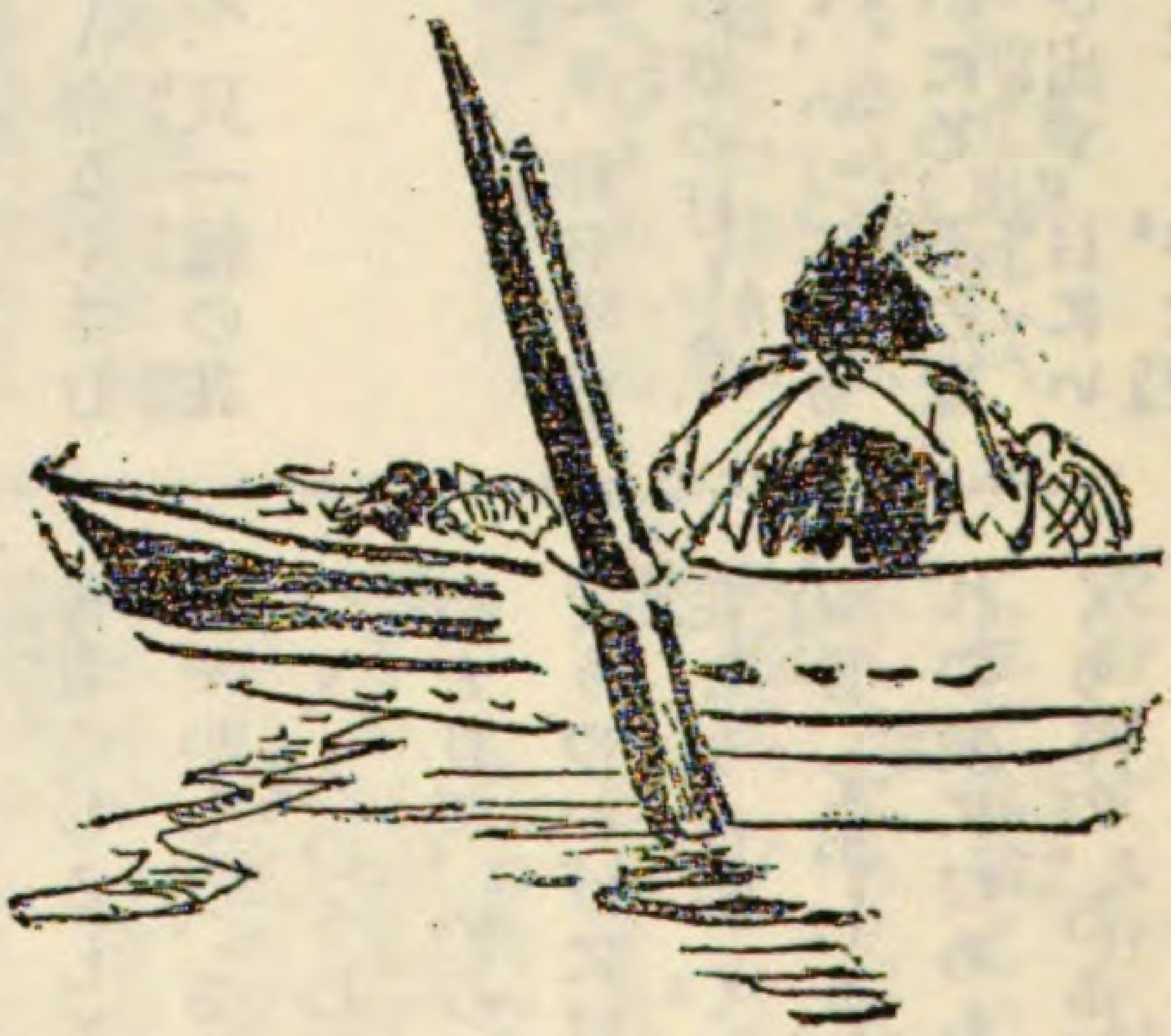
さしも深う立ちこめたりし霧も、あさ日の光りに射

られて晴れゆきぬ。
見わたせば、一面にしきわたしたる花の錦と見まがふまで、秋草の花、今をさかりと我が前に咲き亂れたり。とらばけぬべき白露を重げに、小萩が花のしだれがちなるを、穂に出で尾花の誰れ招くらむ。風にたはるゝ女郎花の、あだなる色さへなつかしきに、きちかうの花大きなるもきはだちたり。藤ばかま、撫子、花いろ〳〵に匂ふも嬉しき眺めなるかな。
されど、其花よりもなほ美はしきは、花籠かた手に、花野の中に立ちたる乙女の姿なりけり。

をり〳〵草　小幡八重子

○安房よりの歸さ

曉より雨いたく降りそゝぎて、空すごう霧わたれるに、舟出せんはいかゞあらんなど、ねもごろに引とめらるれど、明日は又さす方へ行かまほしといふ人もあれば、まげて朝の程より都へ歸らんと思ひたつ。さすがに別のつらく、親しき人々は岸に立ち、あるは舟までおくりて別を惜み給ふ人の情に、あかぬ袖を拂ひて、本船へと移りぬ。さだめの室へ入るに、廣からぬ窓は雨の爲引立てられ、束の間に例のかしらは痛みつようなりて、えたへぬ心地す、設けおきし藥など取出させ、やうやう夢に入りぬ。やがて雨もやみがたになりしよなどのゝしる聲に、うつゝのうちよりやう〳〵我にかへりぬ乘合の人々は、空のはるゝにまかせ、前後に立さわぎ、あれは何かし、かしこはお濱離宮よとひしめく。乘りし時に比ぶれば、いくたりか數もまされり。とり亂したる身のをくらき方にかゞみて、舟のつくを待つのみ。家に歸りても、猶波の音の耳を離れぬをい



かゝはせむ。

○をがめの花

春秋の花を生けて樂しむばかり樂しきはあらじ。そのかみは枝のまゝならぬにむつかり、風情のとゝのはぬに飽かれし姬も、夢の間にて、はや心の樂しみとはなりぬ。うき世の業にあぐみ、はた雨のつれ〴〵をなぐさむるは、生花になん。あはれ古人もいひけん、只一輪の花にも千すぢのむねは解くとこそ。

○うたゝね

春毎にまたるゝものはと古人の歌ひし鶯も、昨日今日庭の木間に聲きこえて、いとうらゝかなる空のけしき、花には蝶ともなりたしなど心に思ひつゝ、いづこともなうあゆみて、この樣をゑがゝんにはいかにと、石のほとりに休みては、又かひなき腰折なと思ひ出す。目にいる物うき世の外なり。たれならん後のかたより呼ぶ聲するに、心づけば、樂しき野べにはあらで、身は机によりつゝ、折ふし人の物せるふみどもくりひろげつゝうたゝねの夢路をたとれるなりけり。さめざらましをと思へど其かひもあらで。

○園遊會

花はやゝ盛すぎし今日、某君の催ほされたる園遊會に至りぬ。まづ園の口にて名をとはれ、あやしき造花を渡さる。こは何にかあらんとかたへなる人にとへば、來會者のしるしとこたへぬ。物なれぬ身にはいとはぢかゝやかしう、さながらこはき物にても見るらん心地しつゝ、人のうしろにつきて歩み入る。庭はさまで廣うは見えねど、いろ〳〵の旗をたて幕をひてき、薄くこきみどりのかげには、休み場をしつらひ、花のもとには、其花よりうつくしき少女らの物うるさま、種々の面白き聲音、をかしき物の音も、折々もるゝなどめでたし。何れの殿にはあらん、うつくしき人々よりおくられしつくりもの、あるは匂ひめでたき花の枝を、いと重げに、はためいわくげに持ちゆかるゝもをかし。あまりの興あるさまに時のたつをもしらず、浮れつゝ歩むに、ふと山のあなたなる方にて、何樣の御車、何樣の御たちとこわづくりて呼ばゝるを耳にせしかば、主人の君に暇こひ

つゝ、心は樂しき園のうちに引かれつゝも、急ぎ外の方へと出るに、はや暮ちかき鐘の音も聞えて、さびしき風の吹くに、ひたすら車急がせて家へと歸り來ぬ。猶心のおち居ず、かの園の内にあるやうなるのいとをかし。

○空ゆく月

今日もまた雨ならんなどいふ聲に、目ざめて立出れば、はや軒よりしと〳〵とおちそふ雫、ものうき心地たへがたし。月の頃はさらに、あくるより思ふはこの清きかげのみ。草に結ぶ露、川の流にも、月ありてこそあかぬ思は夢に入りぬるを、あはれつよからぬ嵐のふけかし。思ひに思ふ月のまとゐに。

○おくれし雁

そよふく風は耳に近う心ぼそく聞えて、身も共にきえうせぬべし。思ひいでてたれとふ人もなき宿は花うくひすに身をやまかせん、といひしは、世をのどかにおくる人ならん。明くるより暮るゝまで、うきにのみ眺めくらすぞ悲しき。同じ心の雁がね、空にのこりてなきわたる聲、いと身にしみて、果ては涙のふちに沈まん心地す。

○萬歳の繪に

一人のおきな、身に大紋のひたゝれをつけ、扇をもちて立てり。かなたには年わかき男の、鼓をもちて、今やうたむとするけしき見ゆ。其音やいかにのとけかるらむ。これぞ萬歳といふものゝ繪ならむ。其さよのゆたけさ、聞くたにめでたきいはひの歌、まひの袖、とし立つ門の松風に、わらひさゞめく人の聲々、家も國も今やゆるぎ出てんけしき見ゆるぞめでたき。

○あたご山の花

花さかは明暮野に山に遊はんと思ひしかど、其頃となりぬれば家の事ども何くれと暇なくて、さらでも雨などふりつゞきつゝ、心ゆくまで花にあくがれし事なし。此程は少しく心にやむ事ありて、夜はよく眠られねば、今朝こそはと朝とくおき出て出たつ。ゆき〳〵て芝の愛宕山へといたりつきぬ。おなじ心の人にやあるらん。いと年ふりたらん聲音して、こゝにも只一人花見る客はありけり。つれもなき身は氣も安うて、花の下をあな

たこなた心の儘に、今昔の事ども思ひ出つゝ歩む。軒端のみ打つゝきし所よりいづれは、心はすが〲しく、頭のいたみもさりたらんやう覺え、立さりがたし。あまりに長くあらんもと、こたびは山の下より車に打のり、家へと歸りきぬれば、例のらうかはしき家のうち、今日はことにかしましく思ひぬ。

○なき姉君

別といふ文字は、さらでも悲しきに、よみぢの出たちばかりあはれにはかなきはあらし。されどいみしう年老たまいなば、聊かは思ひのどむる方もありなん。姉君のうせ給ひしは、世の常のたぐひにもまれにかなし。遠き故郷にへだゝりゐたまへど、母きみにもまさりて文をば通はし、何くれとねもころに物せられしに、くれ行く春にいさなはれたまひぬとしらせこしを聞きては、何とせんやうもなく、只涙のみわき出でぬ。

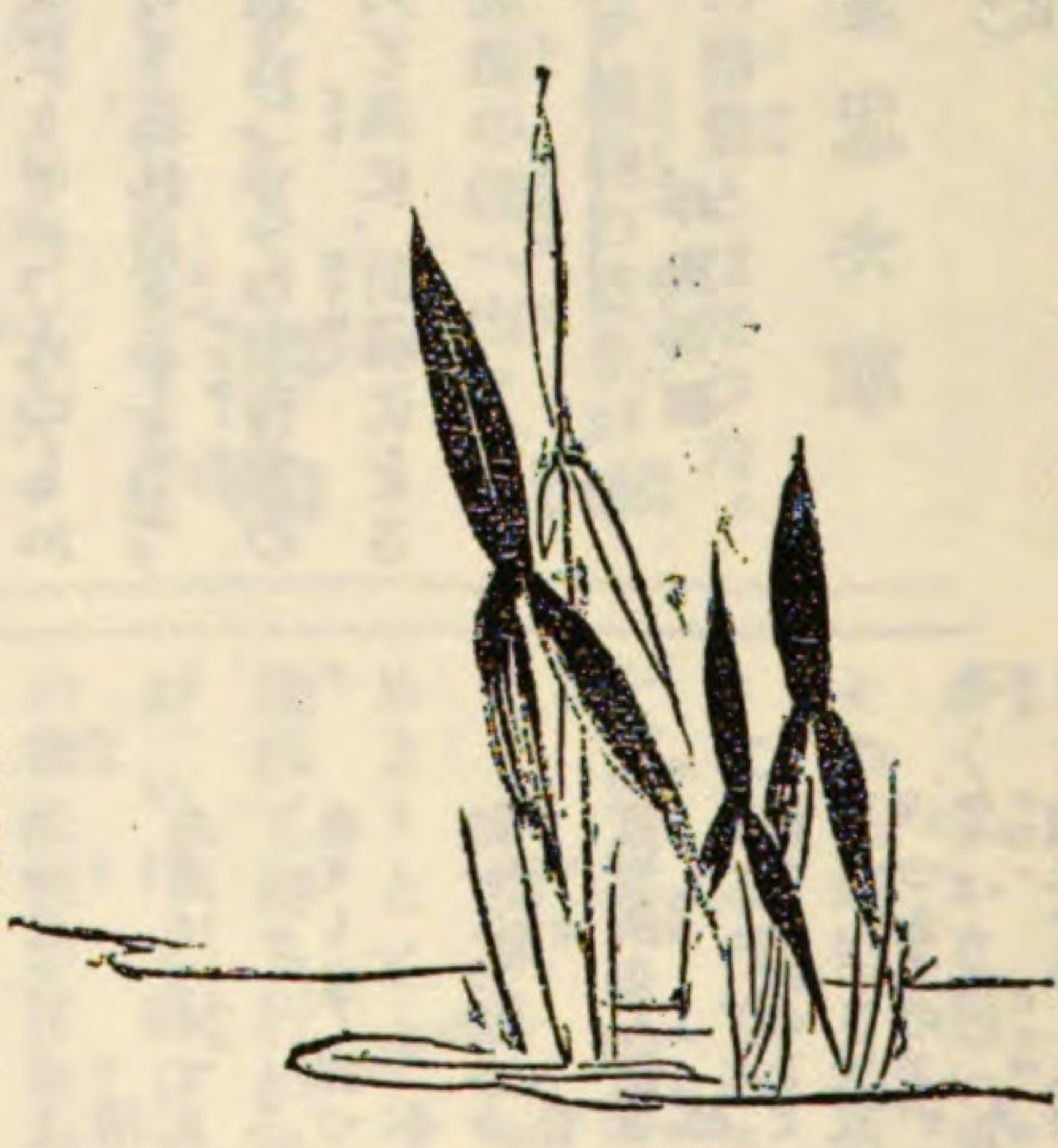
明日よりは我を敎ふるひとぞなき
なみだながらに世をやおくらむ

ぬひものゝ記

山崎とね子

今日もぬひものに暮らすべく、朝けの後針箱とりいだしぬ。母君は何してかおはすらむ。彼方に御聲はきこえながら、いつものやうに對ひゐたまはず。急ぐとにはあらねど、今日の中に縫ひはてむと思ふ衣を、たゞ一人つく〲とぬひに縫ふ。身の巾とりてさし置きつる尺度の裏に、文字こそありけれ。拙く書きたる我名も消え〲に、何學校何學年と薄く殘りたる。ありし其敎場さだかに目に浮びぬ。老ひ給へる師の君、ならびゐる友の顏、庭の櫻よく見ゆる窓、へらのあと多く殘りたる机などよ。あゝかの敎場よ。なほ裁縫の敎場にてやあらむ。かのやさしかりし師の君は、なほ健かに猶ねんごろにをしへつゝいますらむか。誰も〲慕ひまつりしやさしの師の君なりき。いつなりけむ、衣のつまのよくいできしとて譽られし嬉しさは、今も忘れず。されど一昨日我ぬひしを見給はゞ、何とかのたまはすらむ。常に師の君に見せまつる心にて縫ふべきを、古ければわろけれ

ばと見ぐるしう縫ふいとも罪ふかし。懇にいましめ給ひし御言葉を思ふにも、やさしき限なりや。かの我すぐ前にゐたる友こそ、衣はいとよくぬひたりけれ。人に嫁ぎしと聞きしを、此頃いかに日を暮すらむ。ちかまに書やりてや見なまし。隣にならびゐし友は去年の暮母になりき。今日あたり紅の衣など縫ひつゝあるやらむ。されど我等の昔をのみ思ふやうならす、傍にねふる子の顔みながら、其ゆく末をやさまぐ〲に思ふらむ。祈るらむ。其友と同じ赤き糸をかけ針の糸をとつけしかの机よ。いかなる人のならびゐていかなる事を語るらむ。かの糸も切て捨られて、何處のちりにかなりけむ。ありし櫻のことしの花は今年の風にちりかいて、ありし窓の今年のぬしの袖のあたりをまよふらむ。こひしなつかしと果なく思ひつゝぬひて綿入るやうになりつ母君の手かりまつり入れ終へて、畫けに立ちぬ。いつの



程よりか降りいでけむ、細き雨の音もなくて柳の枝しなやかに青みたり。外をゆく人の足音たどるやうにてさわかしからず。猶一人ぬひつゝあれは、思ひいつるこし方、思ひやる行末の秋のねざめのそれよりも深くとほき心地して、人の上わが上はてもなくぞ思ひつゝけらるゝ。まきたる糸のとけゆくにも似たるかな。先つ日學校の同窓會ありし時、いろ〲に變りたる世のさまも、人のさまも、驚きあひて語りしを、此後いかになりゆくらむ。女子大學に入らんとする友のゆく末こそゆかしけれ。今の望こそ聞かまほしけれ。自轉車にのる友、馬にまたがる友、いかなる母にならむとすらむ。今は外國に物學び給ふ師の君によろこばるる君達ぞといつも思ふ。其師の君の歸りたまはむ日、世はいかなる様ならむぞ。それよりも衣服改良論の行末こそ思ふさへをかしけれ。いかならむ。幾度か叱られてつらき思

ひして、やう〳〵ぬひ得るやうになりしこの衣のぬひざまも、皆不用にならんとするやあらむ。それもあまりにつらし。されといつも〳〵苦しむ衣の褄こそ、今すこし容易かるべき改良ぞのぞましき。いかなる衣をきるやうにかなるらむ。やう〳〵縫ひ終へし此衣の破るゝまでは、さる異なる衣きむやうになりそと、火のしかけてたゝみ置く。雨なほ晴れずて日も暮れぬとするよ。いざやぬひものはこれにて終りにせむ。こし方行末のなほ思ひ殘したることとは、糸と剪刀と共に、針箱にをさめておきて。

◉折にふれて　印東昌綱

あたゝけき南のまさによむふみを
　なり〳〵かへす春のあさかせ

中山のみてらのいらかかけさむし
　くれなむさする並松のうへに

灰いろの雲はくつれてわたのはら
　ゆふへの波に船ひとつかへる

夕されはいひあはせたるもの顔に
　門田のくろになくかはすかな

たえまなく念佛となふる老ひさの
　のりあはせたる船のうちかな

わたつみの神の少女かよひ〳〵に
　お琴しらふるしまのまつかけ

見わたしのいれの中道くるまゆき
　人ゆきうまゆくいれの中みち

野にいてしさなりの翁かへりきぬ
　すみれ一たはまごに持たせて

◉折にふれたる十首　山崎とね子

市中はさなりまちかく庭せまく
　清き月夜をつきかけもなし

箱庭はつりする人の糸こめに
　ちいさき池の氷りゐにけり

果てもなく雪つむ野へを行人の
　小さきかけのあはれなる哉

猿かにの話をきゝてよろこひし
　昔もありきうつみ火のもと

池水はさゝ波さわきもみち葉の
　船くつかへる玉あられかな

櫻ちる南のまさの戸をあけて
　衣ぬひをれは春風そふく

いつまでのさかりなるらむ里の子か
　あそふ川邊の姫ゆりのはな

植ゑそめし人のいしふみ立てりけり
　梅に名をえし山もとのむら

川そひの梅さく道のはゝこ草
　つむさはなしに積ためにけり

山さいへはまつ故郷の赤城山
　やまの姿のめにうかふかな

初夏の畑（動植物談）

女子高等師範學校教諭　藤堂忠次郎

もー袷衣ものは要らぬ、單衣ばかりの時節となつた。やがて梅雨の頃にも近づいて、動物や植物の發生が滅切盛んである。一番空氣の清らかな屋後の畑へ出て、思ふさま自然の研究をして見よー。

畑で先づ眼にとまるものは豌豆である、多くの竹と細とにもたせて、今や盛んに實莢がぶら〳〵と下つて居る。花は既に多く過ぎ去つたよーだが、しかしまだチラホラ殘つて、謂はゆる「おくれ咲き」とでもいはうか。何でも此の花には蝶が喜んで止まる、それはその形がチヨツト蝶のよーであるから、蝶の情として何となく懷かしいのかも知れない。だから此のよーな花を蝶形花といふ、豆の類は大抵此のよーな花を咲くのである。

さて其の形が蝶のよーだといふが、果してどこがそのよーであるか。それには先づ眞正の蝶の形を調べることが肝要である。」

蝶の體は頭と胸と腹との三部に分かれて、その胸には多く柔かな短い毛が被つて居る、それには理由がある.その毛が恰も花の花粉を身に着けて、散り失せないよーにするのである。植物は何種でも自分の雄蕊の花粉を、他の花の雌蕊に能へて、そこで完全なる種子を結ぶことが出來るのであるから、蝶や他の虫が花の蜜を舐めよーとて來たのを幸ひ、自分の花粉を其の虫の體へ觸れて持ち行かせよーと考へて居る。それで虫と花とが、いはず語らず互の約束を結んで居る。即ち虫は花の蜜に依つて生活し、花は虫の助に依つて種子を結ぶといふことである。此處等が自然の妙といふべき所である。

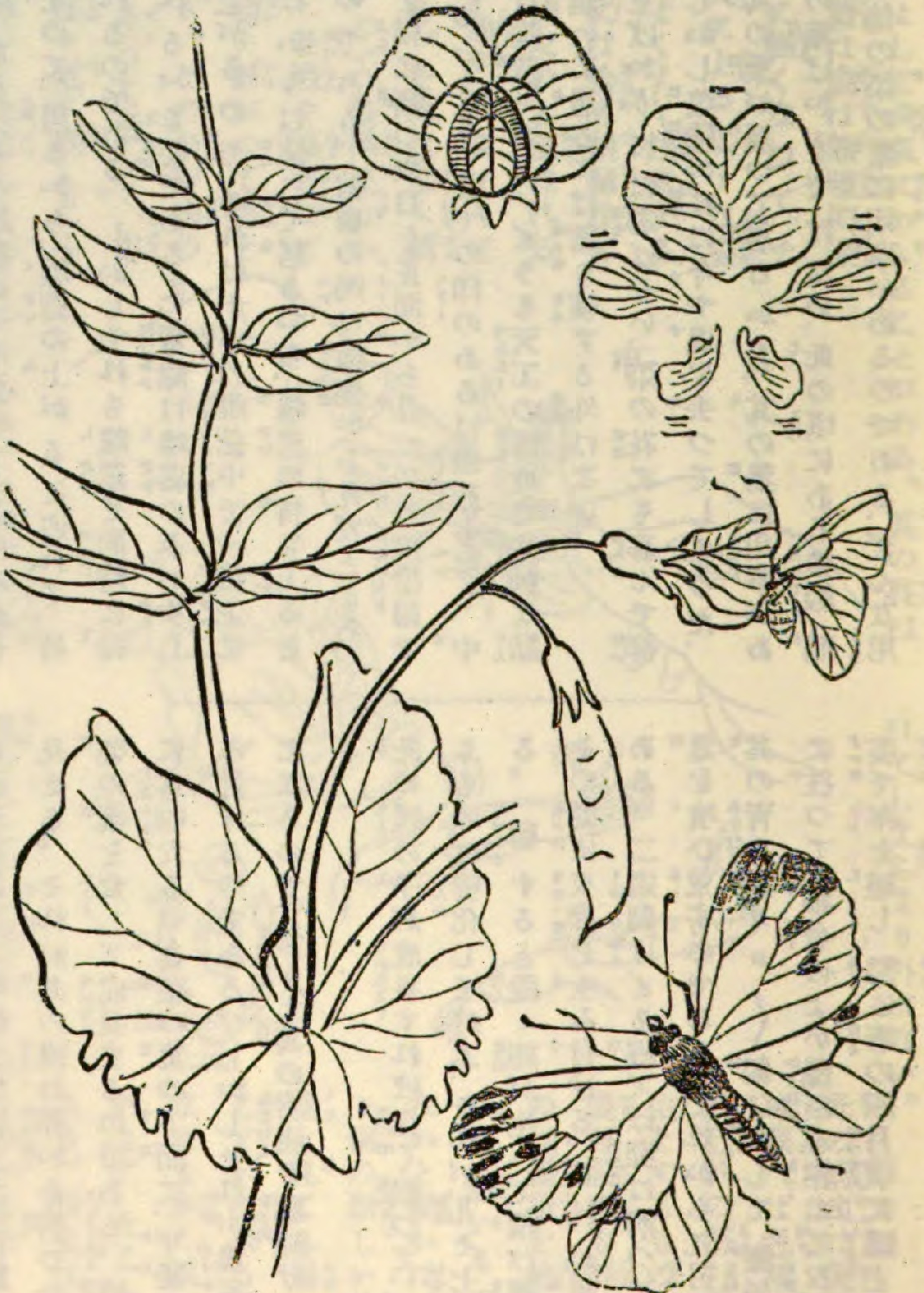
それから蝶は其の胸に二對の翅をもつて、一對は大きく、一對は小く、ある。そーして其の翅の面には規則正しき脈があらはれて居る。豌豆の花はこれに似て居る

のである。しかし比べると、左程に形の似て居ることはないが、大体がチョットそのよーである。先づ其の花を摘み取つて、瓣を一枚づゝ取り離して御覽、前圖にある如く一二三と分ちて、一が最も大きくて且、立派でそれが蝶の翅をひろげたよーな樣子をして居るのである。兎も角其の最大の瓣が一枚中央に高く秀でゝ虫を招きよせるだけの價をもつて居る、だからこれを旗のよーだとして旗瓣といふのである。それから次に二と記した瓣は左右兩方にあるから、これを翼瓣といふて、それは雌蕊雄蕊の妄りに雨に曝されるを防ぐよーに、相合して屋根の庇の如くなつて居る。次に又三と記した瓣は甚だ小くて、色も他の瓣が赤或は白であるにも似ないで青白くて、見榮もない。それはその筈で、此の二瓣は全く翼瓣の下影にかくれて、謂はゞ日陰の身であるからてある。ところが日陰ながらも此の二瓣はその下縁で相合して、旨く雄蕊雌蕊を包んで居る、即ち其の多くもあらぬ花粉を妄りに散り失はせない役目をもつて居る。其の合はされ方が龍骨（西洋の）よーであるから、これを龍骨瓣といふ。これで見ると、豌豆は一つの花に旗瓣、翼瓣及び龍骨瓣の三種をもつて居る、即ち三種不齊なる花瓣をもつて居る花だといふことが分かる。

こゝに一つ疑ひが起つて來なければならぬ。豌豆の花は自分の花粉を他の花に與へるならば、何故に雄蕊を瓣で以て包み隱して居るか、それでは蝶などの虫が、とれに觸れよーにも觸れられないではないか。サアそこのことである、成る程蕊は、包まれて居るが、それが虫の止まると同時に外に露はれ出るのである。どうして出來るか一番說き明さう。今一の手で旗瓣を摘み、支へ他の手で翼瓣の二枚ともを、尖だけ摘みて引き下げて御覽、雌蕊の柱頭が突然飛び出す、それから猶引き下げると雄蕊が續いて現はれて來る、それは前圖の甲に示してある如くである。どうしてそんなことが出來るかといふに、翼瓣が下がれは、之れに伴はうて龍骨瓣も下げられるよーになつて居る。それには翼瓣の基に、内へ突き出て居る所があつて、それが丁度龍骨瓣の外

面にある凹へ嵌まり込んで居るのである。前圖の乙がその翼瓣を摘み除けて見せた實況である。

今蝶などが飛んで來て、止まる所の足場は翼瓣である即ちその瓣が屋根のよーになつて居るからである。そ、こで虫の體の重さで翼瓣が下がれば、龍骨瓣も下がる、すると先づ雌蕊が跳ね



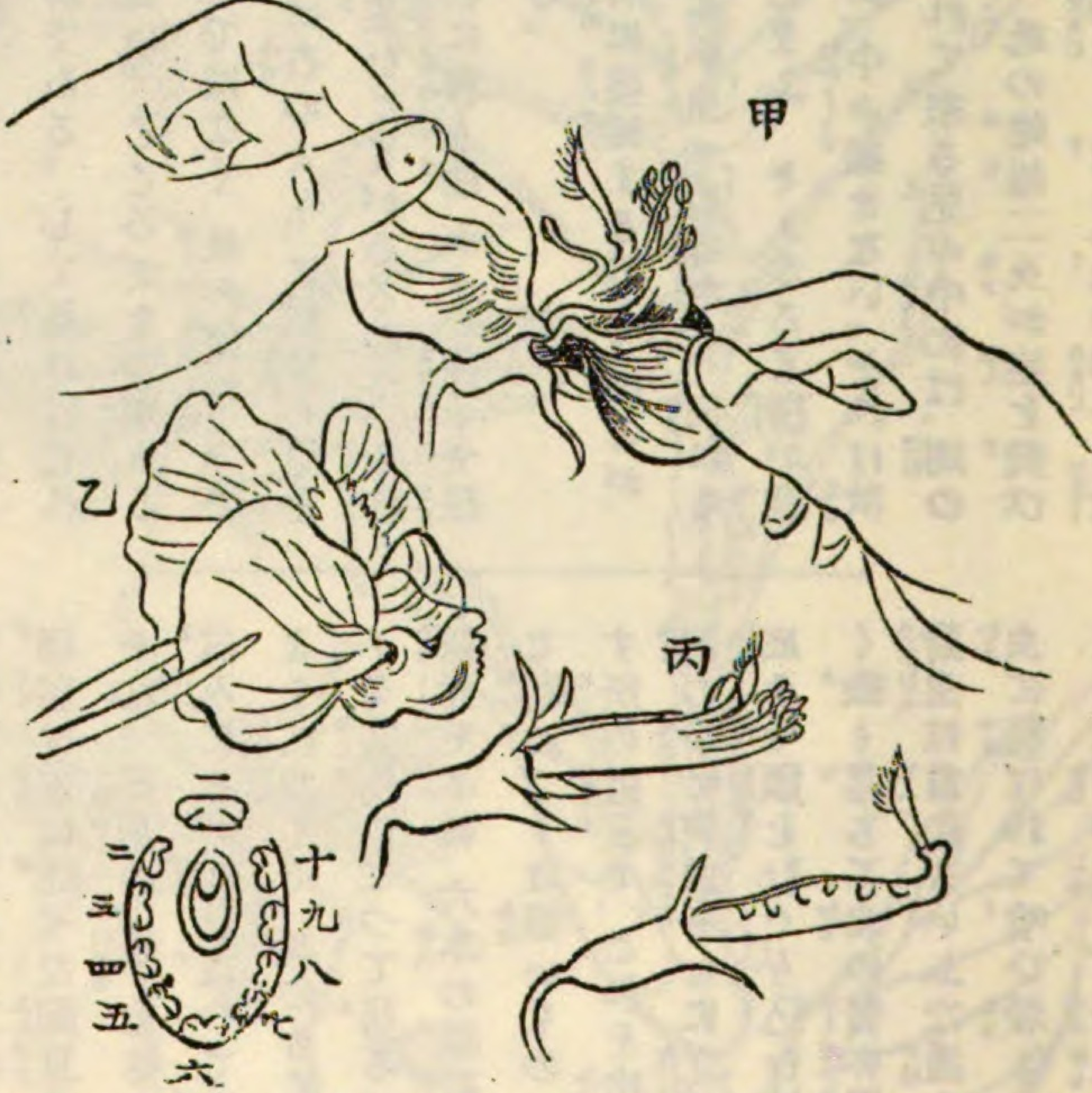
出して、次に雄蕊が現はれる順序は前に手で試みたと同じことである。さて何が故に雌蕊の柱頭が眞先に飛び出すかといふに、虫がその花に止まると直ぐに、他の花から運んで來た花粉を取るためである、それには柱頭が子房から特別に起き上がつて居つて、且花粉を捕り易いよーに毛が生へて居る。前圖の丁を御覽それ

から雄蕊が續いて飛び出すは、花粉を虫の體へ振りかけるためである。その雄蕊が十本あつて、其の本が合して筒になつて、居るから、雌蕊の上がるに添れて、持ち上げられるのである。しかしそれも雌蕊と同時に持ち上げられるべき筈であるに、實際は雌蕊のみが少し早く持ち上がるので、それは十本の雄蕊中で一番上にあるものばかりは離れて居るから、雌蕊の持ち上るを妨げないのである。前圖の丙は横側から見たところ、戊はそれを横に斷つた口を正面から見た所の摸型圖であつて、その一より十までの印のあるは雄蕊を示し、中央にあるは雌蕊である。どうも天工の極めて些細な點までも行屆いて居るには驚き嘆ずる外はない。

粉蝶は豌豆ばかりには遊ばない、菜の花にも喜んで徘徊する。しかし菜種の花は今や過ぎ去つてしまつた、只其の實其の葉が殘つて居るから、其の葉に用事がある。否其の葉ばかりではない、此の頃にある萊菔、蕪菁、及び其他の菜の葉に用事があるのである、どんな用事かといふに、黄色の卵を生みつけることである。よく注意すれば、葉にポツ〱と孔のあることが見える、その邊を裏返して吟味すれば、大抵は蛆のような青虫が見える。それが其の蝶の卵から孵つたもので、好んで菜の葉を食して成長するのである。蝶は其の子のために食物たるべき菜の葉の下面に、甲斐〱しく卵を產み付けるのである。しかしそれが農家に取つては害虫になるので、切々と其の青虫を驅除けつゝあるのである。

此の蝶の子が成長すれば全く眠つて、いはゆる蛹といふものに變化して終ふ、それが凡そ七月中のことである。暫すると段ゝ翅が生へて飛び廻るよーになる、その間に又卵を生み付ける、これが第二回目の產卵である。二週間ほども經てば卵は孵つて又青虫となつて葉を喰ひ荒すのである。それから九月十月頃に至ると、其の青虫がソロ〱匐ひ出して、籬垣や板壁や軒下等に往つて、都合のよい隱所を索ねて又蛹となつて、その姿で年を越し、翌る春の四月頃に蝶となつて盛りの菜種菜に遊ぶのである。

菜種菜は一名油菜ともいふて、やゝもすると此處に蕾々に腫起を生じたり、或は縮を生じたりして、終には枯がいてあるよしに病氣にかゝることがある。其の花はれてしまふより外はない。萎縮して、莖は或は無暗に太く或は非常に細くなつて、チヨット龍の天に上るよーな姿に見える。よく〱注意すると、その莖には恰も胡麻粒を無數に附着けたかと思はれる程に、小さい虫がムラ〱と群がつて居る。それは即ち蚜虫といふもので、菜種菜はかりではなく、萊菔や蕪菁などの凡て菜の類に群がつて害をなすのである。その口が蟬のよーに細く尖つて居つて、柔かな植物の莖や葉に刺しこんでその液を吸つて生活して居るのである。それで蚜虫はよいが、液を吸はれる植物は堪つたものじやない、所



此の蚜虫は幾種もあつて、形も異へば色も違へて、それぞれ己れの好む種類の植物に寄生をするものである。それが幾百幾千も群がつて、黒いものは墨粉を塗り付けたかと思はれ、緑いものは緑粉を蒔いたかと疑かはれる程で、チョット梅の新しい枝や薔薇の緑い莖を見ても屢しこれを認めることが出來る。どうしてこんなにも多く群がつて居るかといふに、そこには面白い話がある。蚜虫は自分獨りで子を産むことが出來て、それも卵では生まない胎からの子で、即ち親の姿で生むのである、我々が蚜虫の臀部に小

さな蚜虫を認めることあるは、即ち其の胎生した幼兒である。そーして其の兒が成長すれば亦自分獨りで兒をその通りに生み、その子が亦そのよーに生みて數日の間に幾百千に殖えて來るのである。して見ればこれは皆雌の虫といふてもよろしい。ところでその殖えることは一本の植物の上ばかりではなく、他の植物へでも追々に擴がつて來る、それは右のよーに數多く兒を生む間に、時々翅のある雌を生むことがあるので、それが自由に飛び去つて他の植物に移り住みて、亦子や孫を數多く生み出すからである。

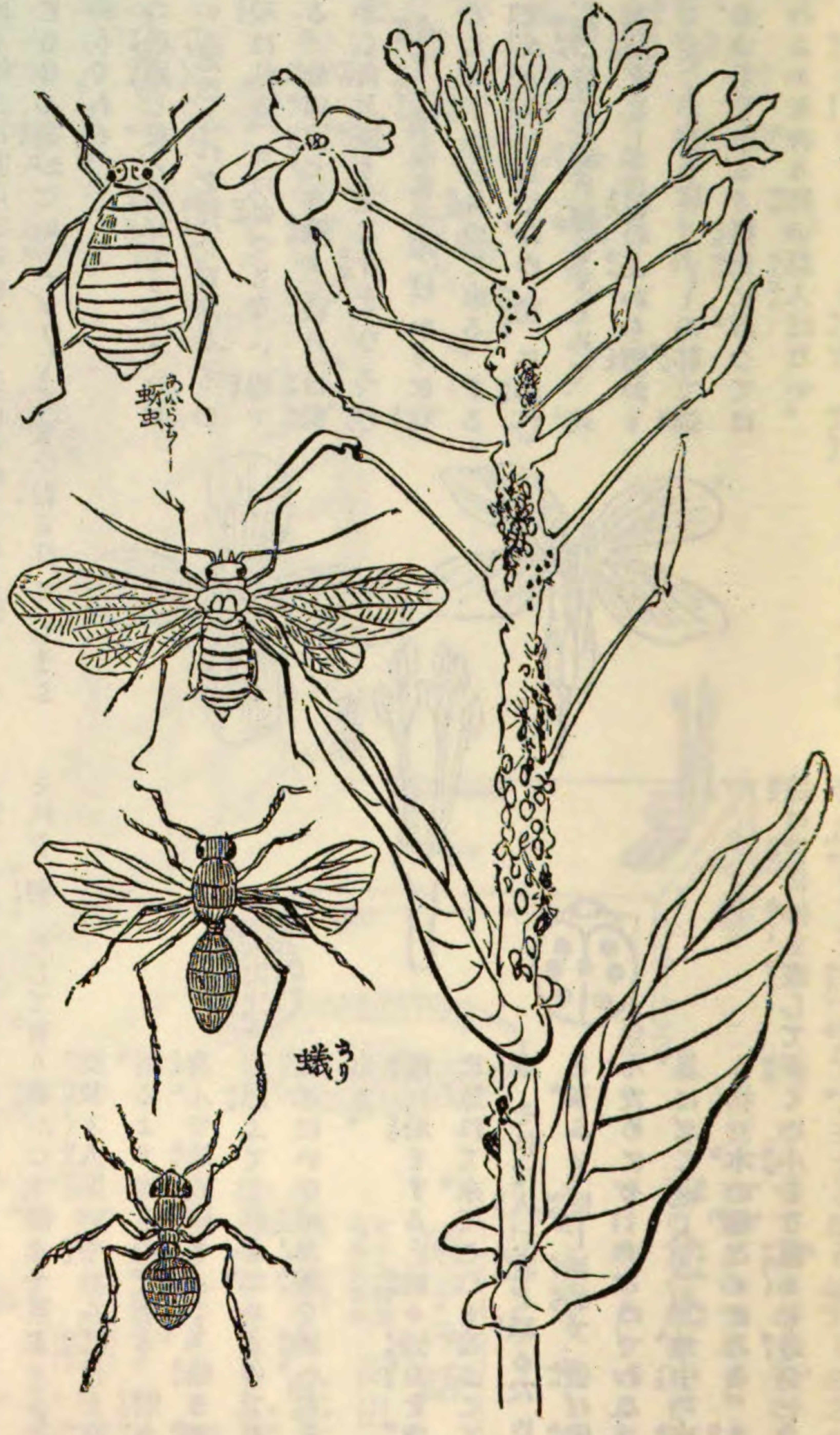
蚜虫は此のよーにして至る所に蔓延するのであるが、極ゝをとなしくて意氣地のない虫であるから、何れも冬の寒さに遭へば皆仆れてしまふ。そーなると種が盡きてしまはなければならぬが、中々盡きない。それは秋の末になれば、次第〳〵に生れて來る兒の中には、翅のある雄虫と雌虫とを生ずる。此の雌雄二虫が空を飛び翔けながら交尾つて、始めて卵子を產む。此の卵子は丈夫な殼をもつて冬を越し、翌に年の春に至りて孵つて亦子を獨りで胎生するのである。

全體菜種菜といふ植物は蚜虫を忌むこと甚しいが、蝶や蜂などは喜んで之れを待ち受けるものである。その理窟は前に述べた豌豆の花のよーに、蜜を舐めさせてそれで花粉の媒をさせよーといふのである。今一つ試みにその花を取つて御覽。四枚ある花瓣が十の字のよーに並んで、其のもとが細くなつて集まつて筒のよーな鹽梅になつて居る。そーして其の筒の中にはさも窮屈そーに、六本の雄蕊が立つて居つて、その下に小さな粒のよーな綠いものがある、それが甘い蜜を泌み出す所の道具で、これを蜜腺といふのである。虫が花の筒の中に窮屈そーに立つて居る雄蕊を押し除けてその底まで頭をむぐり込むものであるから、花粉が都合よく振り落ちて虫の體に附着することが出來る。

蚜虫は前にもいふた通り、實に弱い虫であるから他の虫に襲はれて喰ひ殺されることがある。てんとうむしといふ虫が好んで蚜虫を食べるので、背に堅い甲を被つてその上に七つ二つ二十八の黒或は赤の紋あるか若

しくは全く無地で黒い色をして居るものがある。より

し二十八てんとうむしむぢてんとうむしなどがある。



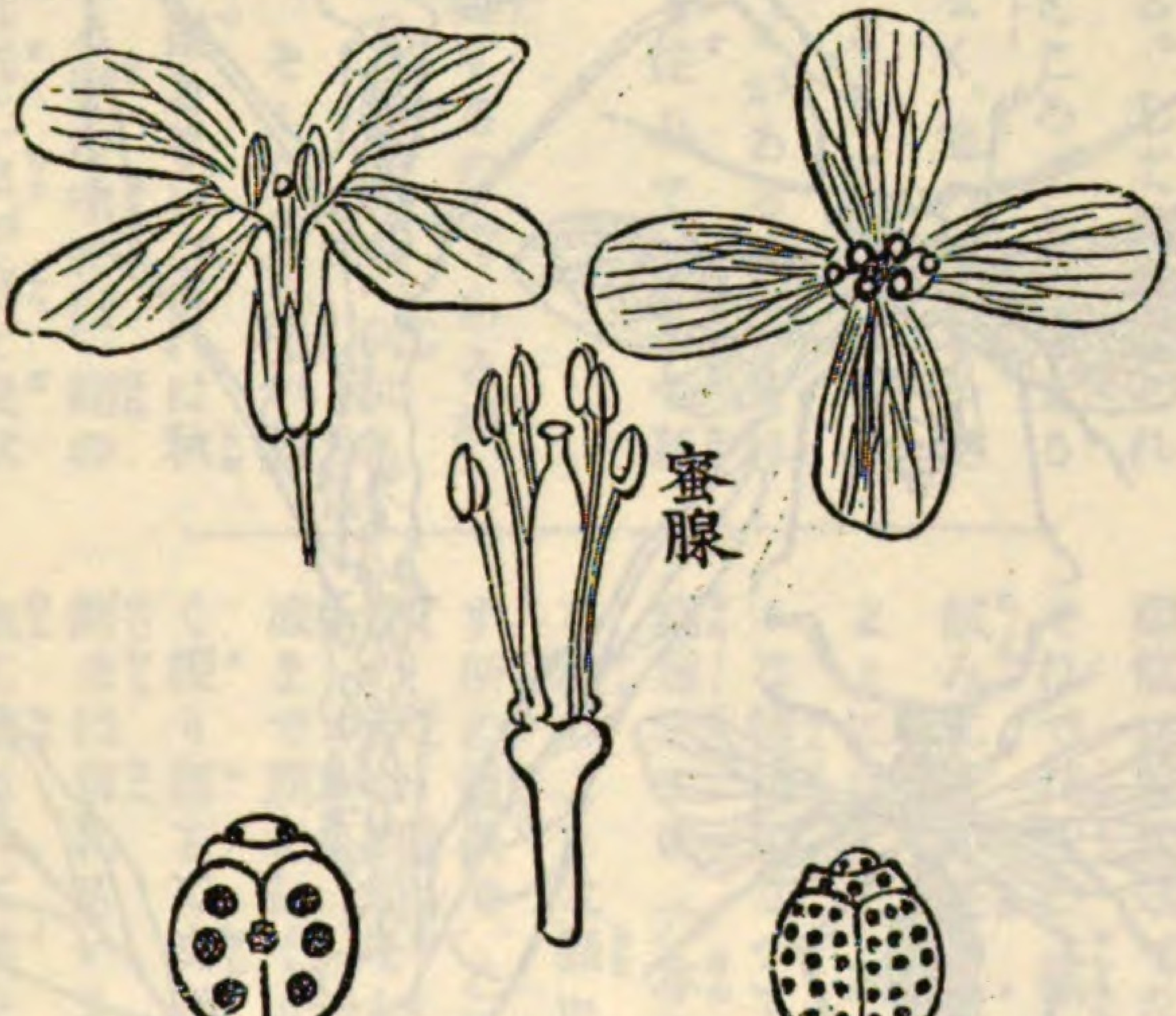
て其の名にななほしてんとうむしひめあかてんとうむ

しづかに飛びて蚜虫の群に止まつて來るや、直ちに彼

等の仲間に一大恐慌が起つて上を下へと騒ぎ出すが何分にも蚜虫は其の足が極めて遅いものであるから、どうともせん術がない、ムザ〳〵と喰ひ殺されてしまふばかりである。

其の時遅し彼の時早しとでもいはうか、忽然これを拯ひに來るものが現はれる、それは外でもない蟻である。如何勇しき蟻よ、彼れは勢つよく角を振り立て牙をひろげて、今や一噛みにせんばかりに猛然として下から昇つて來る。するとてんとうむしは此の勢に恐れて、俄に足を縮め頸をすくめて、死んだ狀をなして枝の上から轉がり墜て、そーしてほう〳〵の躰で逃げ去つてしまふ。蚜虫に取つては蟻のよーな有り難い恩人はない。

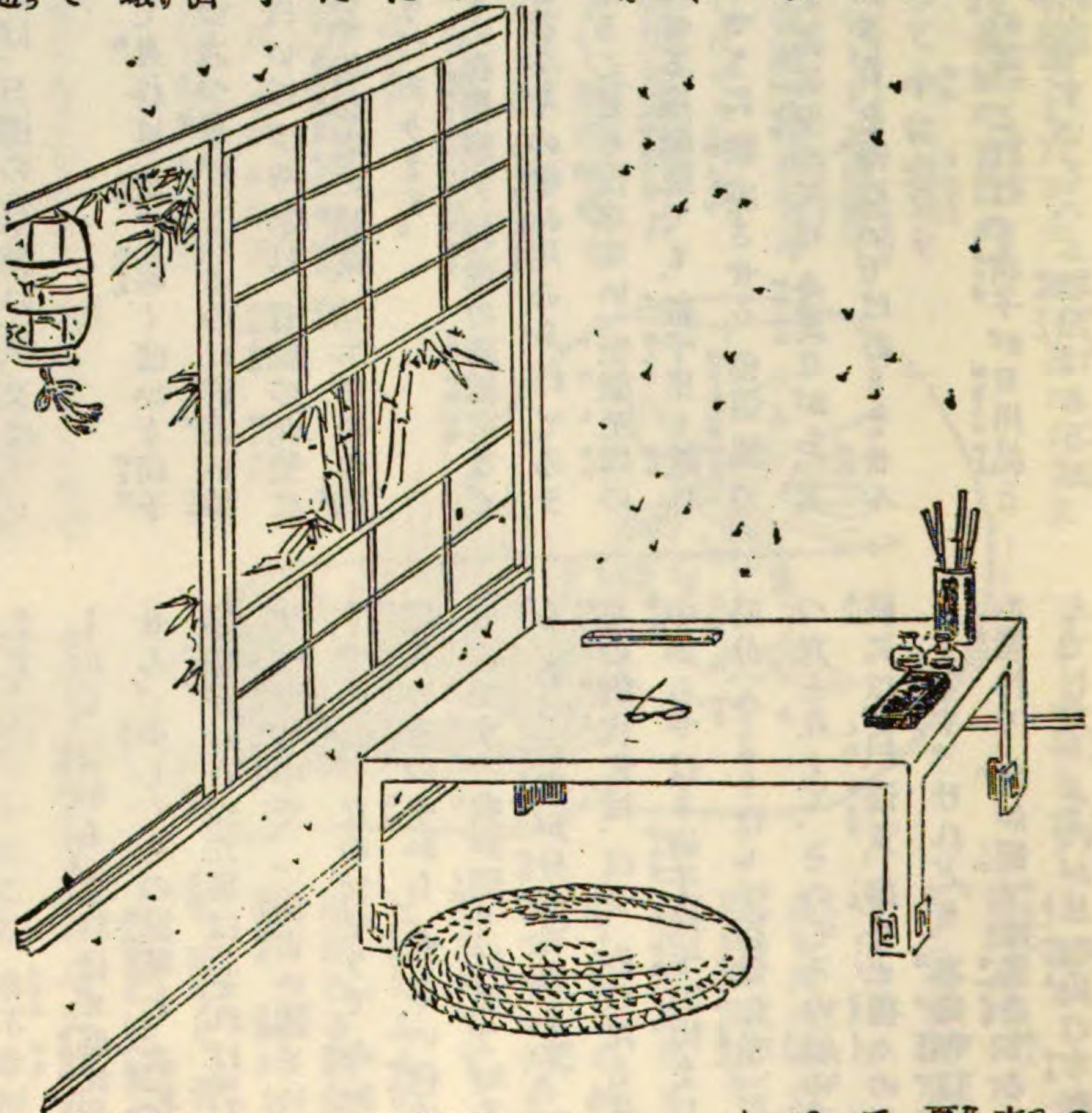
何が故に蟻はかくまでに蚜虫の恩人であるかといふに、中々蟻も蚜虫から恩を受けて居るからである。即ち蚜虫の臀部から甘い蜜のよーな汁を出すから、蟻はそれを養として有り難がつて飲んで居ることは、丁度我々人間が牛から乳汁を飲んで居るよーなものである。蚜虫は又喜んで蟻に飲ませる、蟻も亦嬉しく思ふてこれを舐めるのである。虫とはいひ條恩義を辨へたものである。



蟻は時とすると態々蚜虫を我が巣に連れて來てこれを畜ふことがある、それは人が乳を取るために牛を畜ふと同じ目的で、彼は蜜を得んためにそーするのである。蟻の巣はどこにあるか、地中か或は腐り朽た木の根などにある。其の構造は實に妙を盡して多くの小さな房々を造つて、それに一匹づゝの卵を生み入れて、それを孵して、そーして

日々世間を稼ぎ廻つて得た餌を持ち歸つて、その兒に與へるのである。此のよーに稼ぎ廻るものは常に定つた蟻で、これを職蟻といふのである。そーして巣の中に一匹の王樣が居つて、それは雌で、總ての職蟻も雄も生むので甚大切にせられて居る。雄は只巣の中に幾匹か居つて、何事もせずに食ひ潰して居るものだから、交尾つて雌に子を持せれば、役目が濟んだわけで追々と職蟻に殺されてしまふまでのことである。蟻は通常翅をもたないが雄と、王たる雌とばかりは之れを持つて居るから飛びながら交尾ふのである。

夏の初の畑のことに付いては未だ／＼いふべきことがあれど、こゝらで切り上げよー。



硝子の話

女子高等師範學校教諭　岡田光子

◎今は硝子の、隨分よく使用せられゐる時代であります。そんな事を思うて、銀座通りでも歩いて見ると、片端から目に付きます。殆と各商店の戸にも、窓にも、嵌まつてゐるし。たまに窓や、戸に

無い家があるかと見れば、戸棚の戸、箱の蓋、又はランプは必らず之です。

一軒の家の奥深く入つて見れば、更に驚くばかり硝子の品々が見えます。五つ六つ擧げて見るのは容易い事で、コップ、皿、鉢、罎等はいはずもあれ、皆様の化装に使はるゝ姿見、老人がたや近眼者の眼鏡、坊ちやんの御慰みの金魚鉢までがさうであります。

まだ〲通例の家でなく、化學室や、物理の器械室などに行つて見ると、一層さま〲の事に用ゐられてゐます。ことに、肉眼では見ることも出來ない、至微至細のものを、大きく明に見せる顯微鏡でも、數千里も離れてゐる物體を、手にとるやうに觀察させる、望遠鏡でも、皆硝子の御蔭だといふに至つては、今更ながら、其の用途の廣いのに、驚かざるを得ないではありませんか。

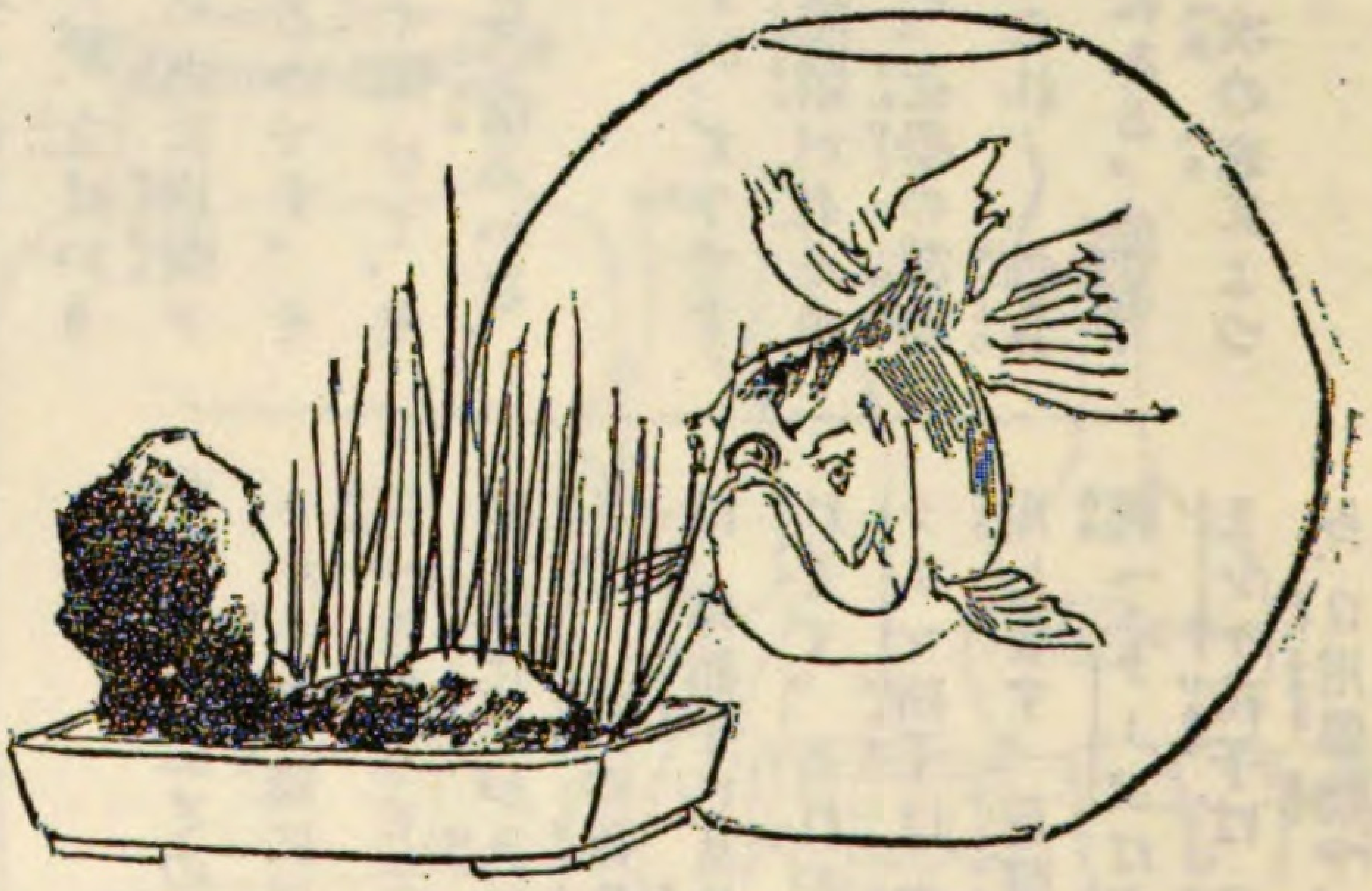
學問上の用途はさておいて、これほど硝子が日用品として使はれるのは、破損しやすいといふ缺點はあるが、透明で、美しくて、しかもあまり高價でないからであります。

しかし、昔から、これほど盛に用ゐられたのではありません。少しくその沿革を、次に申して見ませう。

◎硝子のあつた事は、それは〲大古にもあつたのです。世界中で、一番古い國といはれてゐるエヂプトに、すでに有つたのだそうで、今から數千年前にをつた同國人の墓の中から、美しい色の硝子の玉が出た事があるのです。我が國ではどうかといふと、之も隨分昔から、あつた事が分つてゐます。歴史で御承知の、仁德天皇の御代には、はや、あつたと見えまして、その御陵の中からやはり硝子の玉か出ました。ことに寧樂の朝の時分(今よりほゞ千百餘年前)には、その製造も盛であつたと見えて、そのころの物の藏めてある、奈良の正倉院には、白、淺黃、紺など樣々の色の硝子の壺や高杯があります。けれども、寧樂朝以後、その製造法がいつしか廢れて、我が國では製造するものが絶えてありませんでした。それが足利氏の末あたりから、外國との交通が、やゝ開けるやうになつたものですから、硝子の品

も、外國から輸入せらるゝやうになりました。徳川氏になつても、依然この有樣でしたから、硝子器は非常に珍重せられまして、やれ長崎の富商が、ビードロで天井を張つて中に金魚を入れたとか、仙臺侯がビードロの障子を、作つたとか申して、當時では非常の豪奢のやうに、言ひ囃したそうです。そんな有樣でしたが、徳川氏の終から、明治にかけては、ポツ／＼製造するものが出來、今はもう東京、大坂、名古屋、諸所で盛にやつて支那、印度、朝鮮等へ輸出するほどになつてゐます。かゝる次第で、今では硝子は重要な日用品になつて居ますから、それが如何なるものであるかを、少しは知つておく必要があります。

◎硝子は、一體何で出來てゐるでせう。見たところでは、金でもないし、木でもないし一寸何であるか分らぬ



やうなものですが、あれは硅酸といふものに、他のいろ／＼の物を混じて、熔かして作つたものであります。硅酸とは何だか聞きなれぬ名ですが、名こそは御存じなくとも、物は御存じのはずです。あの美しい、清らかな、結晶した水晶は、すなはち硅酸で、しかも粹純の立派な硅酸です。それから、今、簪の玉などにつかふ瑪瑙といふ、色のよいものが、ありませう。あれも、硅酸ですが何か交つた爲に硅酸が色を帶びたのです。その他石英、蛋白石、燧石などいふものも、やはり硅酸ですし、海岸にある無數の砂も、同じくさうなのです。だから考へて見ると、水晶も、砂も硝子も、皆、元は一家である。然るに中には、非常にもてはやされてゐるものもあるし、又とんと顧りみられないものもあり、此の樣なものにも、幸不幸があるのは、誠に奇妙なも

のではありませんか。

硅酸の事は、これほどにしておいて、ガラスの話に、もどりませう。硝子は、その硅酸が重になつて出來てゐるので（通例砂、燧石、石英などを使ふ）すが、之ばかりでは、容易に熔けない性質のものですから、之に炭酸ソーダ、石灰石酸化鉛などいふものをまぜるのです。さうして、之を強熱しますと、硅酸がたやすく熔けて、それらのもの〻間に變化を起こして、透明な、滑らかな、所謂硝子が出來るのであります。

◎皆樣、氣が御付きなすつた事がありますか、どうですか、一口に硝子と申せど、之にはいろ〳〵種類があるのです。たとへば、普通につかふ窓ガラスと、化學の試驗や、光學上の實驗に用ゐるガラスとは、それ〳〵性質がちがひます。その違ふところは、原料にある。即ち、まぜるものによつて、相違を生ずるので、次の表によつて見ると種類が三通りあります。

第一、ボヘミヤ硝子	白砂、石灰石、炭酸ボタシユーム
第二、クラウン硝子	白砂、石灰石、炭酸ソーダ
第三、フリント硝子	白砂、酸化鉛、炭酸ボタシユーム

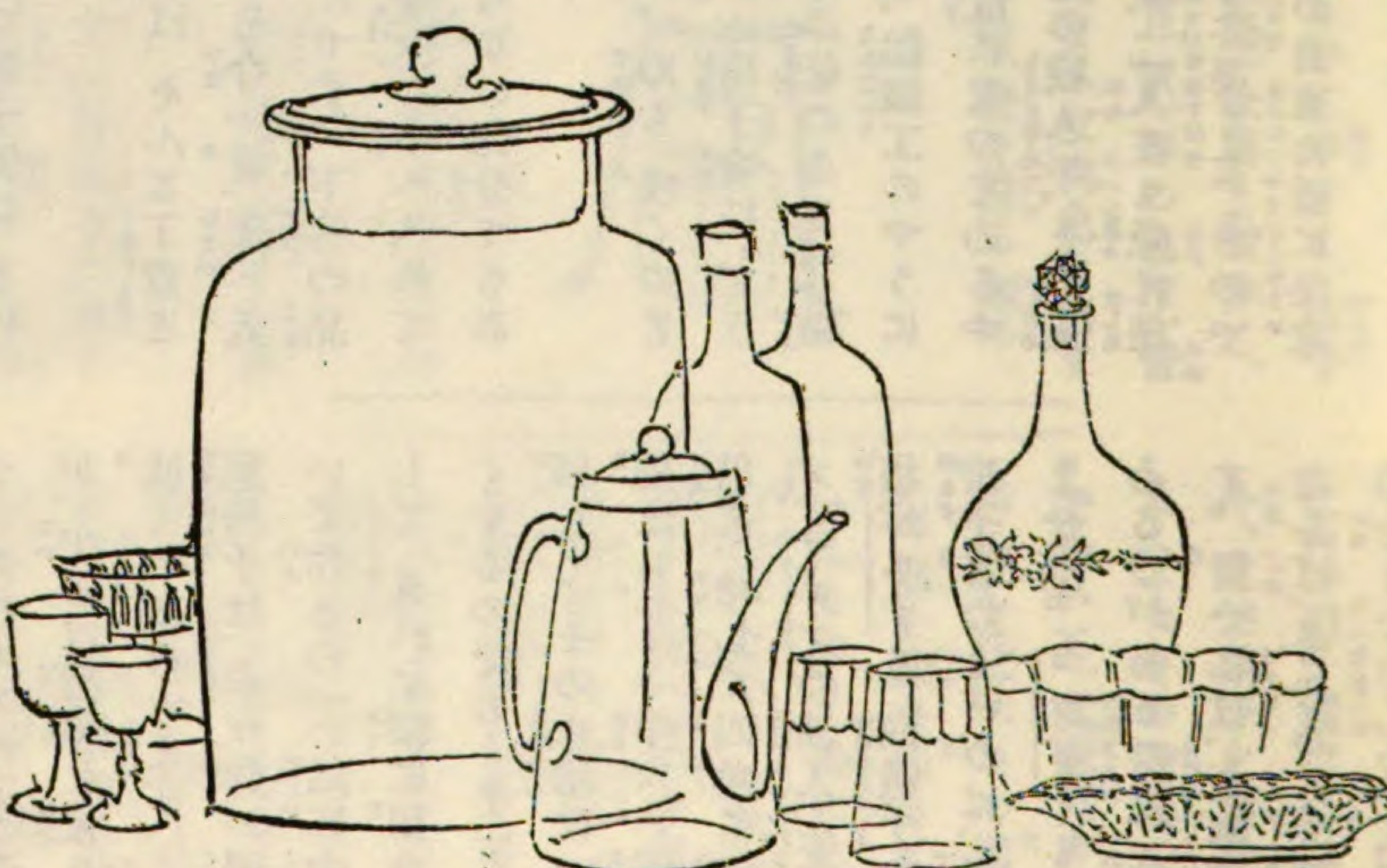
第一と第二との相違の點は、一方には炭酸ボタシユームが入り、他には炭酸ソーダが入るのにある。

第一と第三とを比べると、第三の方には、石灰石の代りに、酸化鉛が入つてゐます。

さて、各の得失を擧げて見れば、第一のボヘミヤ硝子は、硬硝子とも申して、容易に熔けないので、珍重せられます。これが化學家の使用する硝子です。第二のクラウン硝子は、窓硝子とも申して、通常の窓や何かに使用します。原料に使ふ石灰石は、硝子に光澤と硬さを與へ、ソーダは之に稍緑色を帶ばしめます。第三のフリント硝子は、非常に光澤があり、地が密で、美しいから、日用器物や、裝飾品は皆之で作ります。ことに色の無いため、光學用の器械にも多く用ゐられます。しかし、この硝子は軟かいので、瑕のつきやすいといふ缺點

は免れません。
◎次には硝子器の製法を、ざつと申しませう。

前に申した砂だの炭酸ソーダだの石灰石だの、混合物を、粉にしまして、適當の分量を、坩堝と申す入れものに入れて、竈で熱しますと、中のものは追々柔になつて、すつかり熔ける前には、粘着性のある塊りになります。この性質は、大きに物の形を作るのに便利なわけで、さもなくてあまり「たわい」のないものであつたらば、仕末に困りませう。さて、十分に熔けたらば、少し熱を冷して、それが飴狀になるのを待ちます。適宜の時が來ると、職人は、長い管の末端に、その少量を附けて、吹いたり、切つた



り、のべたりして、好きな形を作るのです。ところで、形が出來たとて、それをそのまま冷して仕舞うては、いけません。こゝに、よほどの注意が必要なので、餘り急に冷すと、その硝子は、必らず脆く、少しの温度のちがひ、天氣のかはりにも、抵抗する事が出來ずに、破れてしまひます。さればとて、餘りのろ／＼冷すと、また硝子を、一種硬い不透明なものにする恐がありますから、そこで、適宜に冷やす、即ち燒き戻すといふ事をします。即ち、硝子器をして長い竈の中を通らせるので、その竈は、一方の端では熱度が高く、次にゆくほど次第に熱が減じ、終の端には火の氣がなくなるやうな、仕掛けにして

あります。ですから、この中を通れば、硝子器は、よい工合にさまされて、出るわけです。

しかし、實際我が國でする燒き戻し法は、そんな丁重なのでなく、上等品でも、形が出來たのを今一度、竈へ入れて、熱いてそのまゝ、幾日か置くだけです。下等の品に至つては、出來ると直ぐに、あつい藁灰の中へ入れて冷します。だから、灰の中へ、よく入らない部分でもあると、そこから直に破れます。

器物を作る仕方に、大體二樣あります。即ち、吹くのと鑄形に入れるのとです。たとへば、細い硝子管は、どうして作るかといふに、職人が吹管といふ管のさきへ、硝子の熔けたのを附けて、プーと吹くと、飴細工のやうに玉ができる。（其の玉は、吹管とまつ直になつてゐるやうに注意せねばならない。）其處へ、他の職人が、その玉の反對の側へ棒をつける、その途端に、二人とも急に後へ下ると、從うて、玉はだん／＼伸びて、長くなるのであります。但し、この間にも、厚薄の出來ぬ樣に注意しなければならないのです。

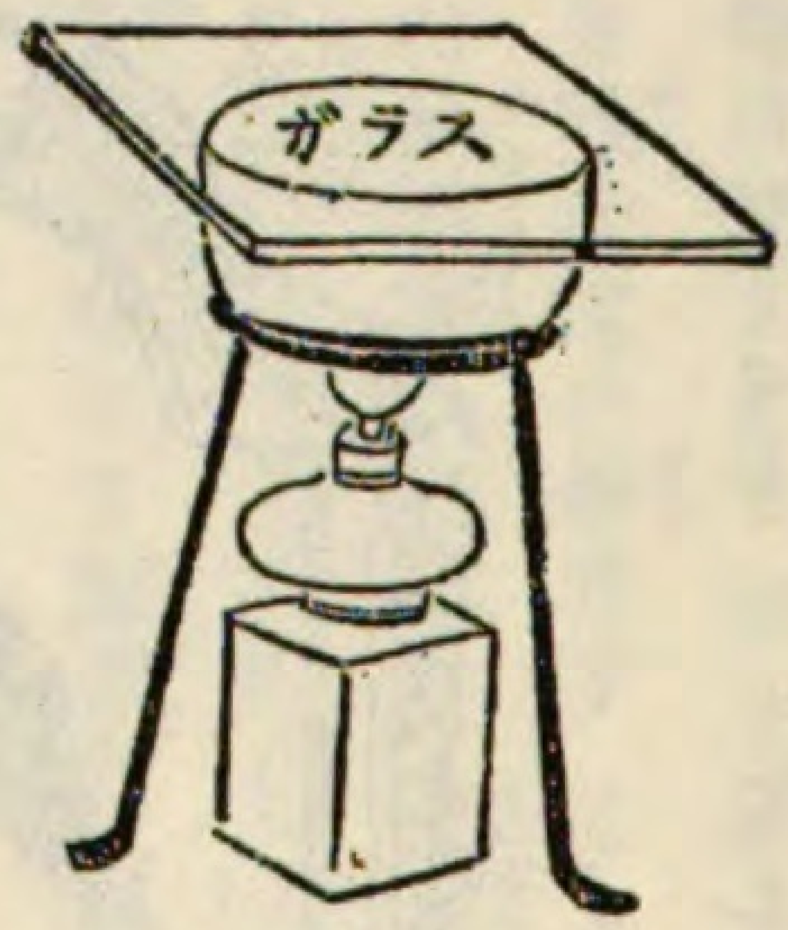
ランプのホヤや、罎なども、やはり吹いて作るのですが、中には鑄形を使うて吹くのもあるし、たゞ手加減で吹くのもあります。

窓硝子は、未だ我が國では出來ませんが、之もやはり吹いて作るので、始に中空の筒をこしらへておいて、そうして、其れを縱に切つて、平な面の上にのばして、平たくするのであります。以前には、棒をクル／＼速に旋回して、その末端について居る硝子の軟かいのを、共に旋はらせて、平たい圓板を作り、よい程の厚さになつた時に、冷して四角に切つたものだそうです。皿鉢、コップ、ランプの油入、笠などは、皆鑄形に入れて作ります。板がらすも、同樣平たい型に入れて作るのです。

硝子器のよいのは、出來上つた上で、研がなければなりません。コップでも、皿でも、美麗にスベ／＼になつてゐるのがあるのは、皆磨いたので、價もやゝ高くあります。研ぐには、金剛砂、たゞの砂などを使ひます。研げたらば、そのあとで錫粉で磨きます。

◎今まで申したのは、無色の硝子の事ですが、硝子が裝

飾用に使はれるのは、多くは、その色の美しい爲であります。あれらの色は、どうして出來るかと申すと、硝子を作る時分に、原料に、種々の酸化金屬(金屬と酸素と、結合したもの)を入れるのです。紅、青、紫、等の色は、皆中に入る各金屬固有の色なので、たとへば桃色を出すには金を入れるのです。やすい赤には、酸化第一銅や、酸化鐵を入れます。緑には酸化第二銅、紫には酸化マンガン、青には酸化コバルト、黄には酸化アンチモン又酸化ウラニヤム、ランプの笠などの乳白色には、燐酸カルシユーム、又は二酸化錫を入れるのです。



◎店舖の窓硝子に、文字を刻したり、硝子罎に文字を書いたりする方法を、今一つ申しませう。

之には、一種の弗化水素といふ瓦斯、又は弗化水素酸といふ液を使用します。このものは、非常に硝子を腐蝕する性のあるものですから、之を貯へたり、使用する時には、硝子罎は使はれないから、鉛製の器を用ゐます。今、之で硝子を腐蝕させるには、まづ硝子に蠟を塗つておいて、その隨意の場所へ、隨意の字形を針か小刀の端でかいて、其處だけ蠟をはがしておく。そこへ、この液がかゝれば、その出てゐる部分だけが腐蝕せらるゝから、蠟を洗ひ去ると、チヤンと文字は殘ります。螢石といふものを、粉にして、之に硫酸を注いで、暫くおくと白煙が立つ。それは弗化水素であるから、その上に硝子を掩へば、やはり腐蝕せられます。

◎鏡につかふ硝子は、やはり模型に入れて作りますが、余程、精純を要するので、燒き戻すにも十五日も竈の中へ入れておき、それから器械でみがいて、平にしたり、金剛砂でこずつたりして、最後に、毛布に包んだ木片でよく／＼磨くのであります。之を鏡にするのには、從來は、水銀と錫との合金を塗りましたが近來はその法を改めて硝酸銀の溶液を注いで作ります。硝酸銀は暫時にして硝子に固まりつきますから、その上に蠟を塗

つて銀のはがれないやうにするのです。

實に硝子は工業品の重なるもの丶一つであつて、世が開ければ開くるほど、その用が廣くなりますから、其の製造の盛なると、否とによつて、國の文明の發達を知ることが出來るとまで、いはれてゐます。然るに我が國では、前申したやうに、これの製造を始めてから、未だ日が淺いため、通常の品や粗なるものは、出來ますが、精巧を極めた器物だとか、板ガラスなどは作りだすことが出來ないで今に外國にその供給を仰いでゐるのは、誠に殘念な次第であります。



割烹實習

女子職業學校割烹科教員　井上善兵衛講述
同校員　岡野をりゑ筆記

高橋先生の割烹原理の講義が、一先づ完結したので今回から私が割烹實修の手引をお話しする事になつた。兎角言葉では盡しかねる事があり、又いつた通り試み

たからが、手のなれぬ内はうまくゆかぬがち、しかし精々實修がすぐ出來るやうにお話しをするから、精々數をかけて手に入るやうになさるがよろしい。

ひと口に割烹といふものゝ、儀式用、會席風、日用惣菜といろ／＼にはかれる しかし家庭日用の調味には、儀式の會席のとはいらぬ事で、稀にいつたにしたが、これは專門に十年も二十年も、毎日庖丁をもつて居るものゝする事で、お話しをしても詮のない事です、こゝには專ら日用の膳部に用ゐ、又は臨時客あしらひ、即席の間に合ふ樣な家庭用の調味を教授する、それにしても四季折々の材料がちがふ 隨て調味にも加減がある、一ヶ年は是非心を用ゐて修めなければならない。

▲庖丁使用法

搔敷むきものゝ仕方は一種の技術で、それは精妙に發達して居る、しかしこゝにはその樣な庖丁方を説くのではない、又古式にある鯛の庖丁の何のといふ事を話すのでもない、たゞ庖丁の手慣れるまでに、その練習をするので、これには大根をいろ／＼に切ッて見るのがよろしい、二三種左に手引をしやう。

(一)。白髮大根のきり方。長さ一寸餘に切り、三方をうすく切り落し、一方きり落さぬところを手元に押へ、端からうすく切りはなさぬ樣ざく／＼庖丁を入れる、手馴れぬ内はあつくしては切りにくきゆへ、五六枚庖丁を入れたらそこで切はなし、今度はそれを横にして、端よりうつ、これが細く揃へばよいので、水に晒して膾の向ふにつかふ、即ち白髮大根です。

(二)。千六本のきり方。これは前と同じ事で、たゞ少し厚く眞角になる樣に切る。

(三)。算木。これは一分五厘眞角に切る、切り方はまへに同じ。

(四)。鏡。まんまるくむいて、端よりザク／＼厚五厘位に切落す。

(五)。銀杏。大根をまるくむいて、四ッ割にして端から切る。これがなみの銀杏大根です、上等の汁なとにつかふには、その四ッ割にした上部と左右をほんの心もちすきとつて、銀杏の葉形に作る、以上二、三、四、五

ども日用汁の實につかふ。大根のきり方はまづこれ丈で、どれがはやく揃つてうてる様になれは、庖丁は自然に手馴れたのです。

▲鱠のこしらへ方

鱠は大根を千六本に切り、鹽をふたよく揉んで、十分間ほど置き、水で洗ひ、しぼりて皿へあげ酢をかけて置く、水からあげるときあまり固くしぼるとばさ〳〵になつて味を失ふ、多少手加減がなければなれぬ。そこで一方別に鍋へ味淋一合を入れ、これを五勺に煮つめ、これへ醬油二勺、鹽二匁、酢一合を混和して、三ばいをつくり、前の大根を酢からあげ、ふんはり輕くしぼつて皿へあけ、これへ適宜に魚を加へ、右の三ばいをかければ鱠となる。

魚は何をつかふのもいゝ、メヂ鮪ならそぎ身、又はブツ〳〵切りにして、鹽をふり置き、小時間酢でひたし、しぼつてまぜるのです。

メヂのほかは、鯵、針魚、を重につかふ、本膳の鱠には、鯛、鯔、赤貝、みる貝、鳥貝、貝柱、抔を用ふる、尤もこれは生盛即ち大根は大根、魚は魚と別に盛りたてる、普通の鱠は合鱠といつて混ぜて仕舞ふ、魚貝類の調理方は追々これを調理するときにはなすとして、こゝでは預りにして置く。

▲松露豆腐

豆腐一丁を布巾にてつゝみ、板の上にのせ、上から又板をのせ、其上へ重い壓をして十分ほど置く、水のきれた時分に裏漉にかけて皿へとり、鹽五匁、砂糖十匁をませて、親指の頭ほどの大きさの團子にまるめ、まるめたのは盆の上に濡布巾を敷いてその上にならべる、一方玉子焼器へ油をしき、まるめた豆腐はこれへ玉と玉とのくつゝかぬを度に幾個でも入れて、滿遍なくゆすぶツていためる、これでは油臭いから、別に鉢へ水を入れ、これへあけて油の臭を拔く、それより笊へとれば丁度實物の松露のやうである、これは精進の汁の實に用ゐる。

▲摘みいれ豆腐

前と同じ手順で裏漉にかけた豆腐を擂鉢に入れ、豆腐

一丁には鹽五匁、うどん粉二つかみ、砂糖十匁を入れて摺る、摺りあがつたのは杓文字へとつて、箸で少しづゝちぎつて、鍋の湯の煮立つたなかへ落し、浮きあがつたを度に鉢へとる、これが摘みいれ豆腐といつて、矢張精進の汁の實につかふ。

▲肉ケンチン

牛肉一斤、豚一片をよくたゝいて摺鉢でする、但し豚は油を抜くため、一寸湯煮をして用ふ、摺鉢でよく摺りまぜた二種の肉へ、煮出し五合、味淋五勺、(味淋は一合を五勺に煮つめたもの)生酒五勺、鹽十匁、砂糖三十目、醤油一合を加へてよくまぜる。 別に豆腐一丁を水から鍋へ入れよくこなして、煮立つたところを笊にとり、よく水をしぼつて、再び別の鍋にて煎り豆腐に作る、(煎り豆腐は砂糖三十目、酒五勺、味淋五勺、醤油五勺を入れて作る) 煎豆腐のさめたところへ生玉子一ッを入れかきまぜ、これを前の摺肉へ合ぜる、別に又俎板の上へ乾いた布巾を敷き、その上へ紙ゆばを敷く、(紙湯婆といふのは、半紙ほどに製したのし湯婆で、もしあまり乾いて居たら一寸むして湯氣をくれゝば柔らかになる。しかし買立なら大概それには及ばない、湯婆屋で賣ッて居る)、前の肉と豆腐をまぜたのを、この湯婆の一端へならし、一寸ほどの太さに巻く、巻き終りの端へは生玉子を指にてしいて巻目がはなれぬやうにする、この湯婆まきにした肉は蒸籠へ入れ二十五分ほど蒸す、蒸す時は蒸籠の蓋の端を少しきつて置く又しちりんの火氣がつよいときは、その口の蓋をする。蒸しあがつたとき蒸籠から出してさまし、これを又玉子焼器に油をしきて一寸いためる、又別に鍋へ味淋一合、醤油一合、砂糖十匁程を入れ煮立て、この中へまへのいためた湯婆巻きをころがしテリをつける、皿へ盛るとき、そのテリをつけたつゆを煮つめて、肉の上へかける。これは口取りの前盛り、又は丼に盛つて侑める。

▲鳴戸巻

薩摩芋を輪に切り、よく皮を剝き(勿躰ないからと皮を剝くのをとかく薄くするが、厚く剝いて黒いしみなどをとらなければいけぬ)水へ入れて置く。別に鍋に

て砂糖七十目、鹽五匁、味淋五勺、生酒五勺、(これは甘諸三百目の分量)を入れ、むいた生芋をよくこれで煮る、煮あがつた時、裏漉にかけ、皿へとつて、うどん粉二つかみ程を入れてよくまぜ合せる、又別にすだれ麩を味淋、生酒、砂糖、醬油、鹽でサツト煮て、この麩をしき、捲これで太さ八分位の丸さに、まへの裏漉の芋を捲く、捲あがつたのは蒸籠に入れて凡そ二十五分ほど蒸す、さめるのを待つて小口から切つて、口取の前盛にする。

▲つみ菜

つみ菜は鶯菜の葉だけをとり、洗ッて一寸湯煮をし水に取り、よくしぼり、細かに切る、鍋へ酒五勺、煮出し一合、味淋五勺、醬油五勺、鹽五匁を入れ、きざんだ菜を入れて煮る、これは鉢肴の前もりにしてよろしい。

▲目分量　講述のうちにある何寸何分はすべて目分量で、自ら慣れるとそれほどになる、又酒醬油抔は、金杓子一杯が丁度五勺に作られてあるから、一合なら二杯入ればよい割合、すべてこの割に從つてよろしい、又砂糖、鹽の何匁とあるのは、それは手の大小もあるが、まづ片手一杯を十匁ときめて大差がない。この目分量で別段升の量のと騒ぐには及ばぬ。

この講述は學校で一ヶ月實修した分を順に從ひなるべく一回にかきつくすつもりであるが、今度は十が三つもかけなかつた、次回にはたつぷりかいて、實修の參考に供する事にします(筆記者)

造花科

女子職業學校造花科教授　伏見藤三郎

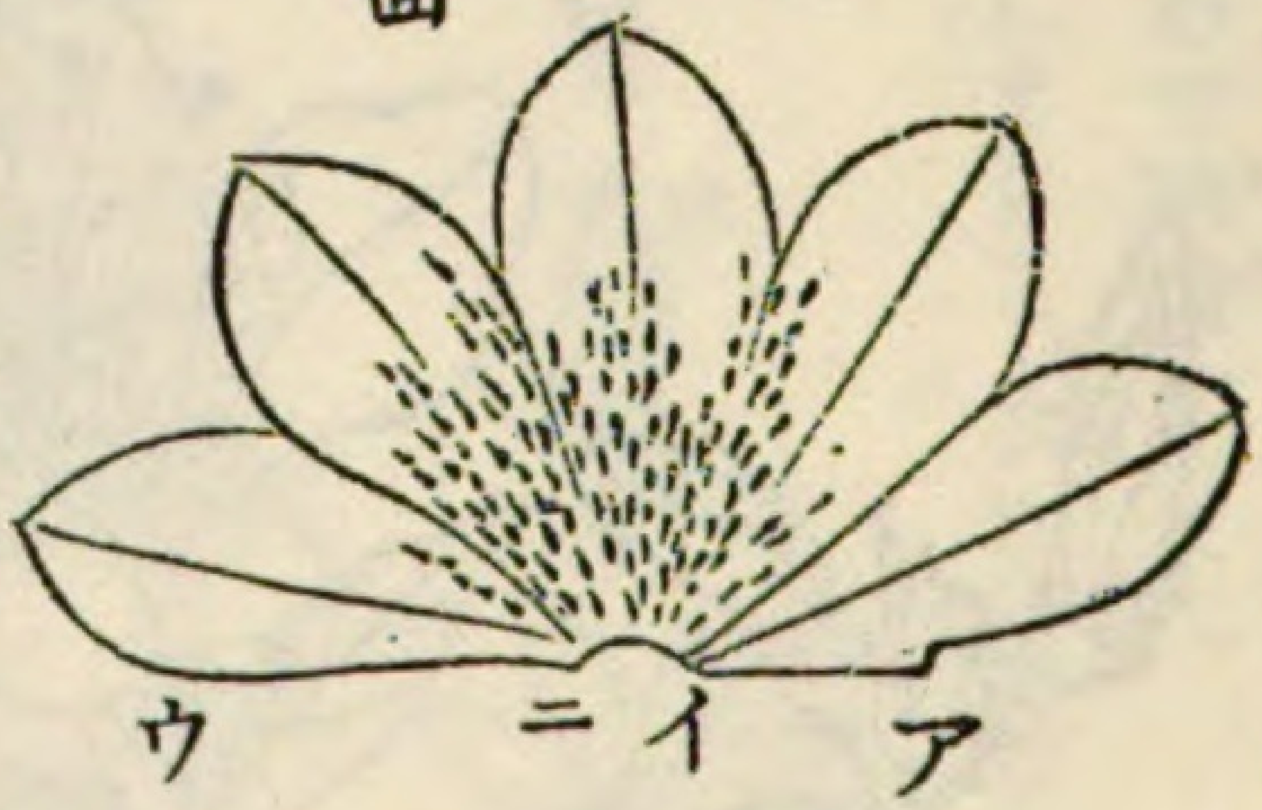
霧島の造り方

今回は霧島の作り方を御話し致します、霧島の花は、絹か又は寒冷紗を用ひます、絹の時には前回にも申しました通り、淡き糊をしき、寒冷紗を使ひます時には其儘で第一圖のやうな形にきります。

花の色には白、赤しぼりなど色々御座ります、白は「チウラシン」と「グリーン」を極淡くとかし、瓣の下の方から中頃までぼかし染に致します、又赤に染めますには、初め「フロクシン」で淡く下染を致し置きまして、「スカレット」を解し、瓣の上の方を濃く、下の方を淡くぼか

します、絞りに致しますには、「スカレット」六分「フロクシン」四分の割合で、此二色を合せました汁を筆先に含ませ、左の手に筆軸か又は箸のやうなものを持ち、其繪具の含みました筆を夫れに打ち付けまして、大小の斑點をこしらへ、又其筆先で實物のやうに、即絞りと見へますやうに彩色致します、之れが乾きましたならば、瓣と同じ色を濃く解し、其内に糊を少しまぜ、細い筆で圖のやうに點をうちます、(繪の具の中に糊を入れますのは色のしみてでません爲で御座ります) かやうに彩色致しますことが終りますれば次に鏝をあてます。

第一圖



先づ筋鏝で名々の花瓣の眞中を表から縱に筋をひきまして、後裏近しにして、又其兩端を「中の瓣鏝」で前に引きました筋の、きえませぬやうに、圓味をつけまして、後第一圖花瓣の(ア)(イ)の所を(ウ)(エ)の所にはりつけまして、夫れを蕚の内に入れます。

蕚を作りますには、蓮華草の蕚を作るのと同じことで御座ります、

蕊を作りますには、二十番位の「カタン」糸を瓣と同じ色で染めまして、後に、夫に糊をつけて乾かし、凡七八分位の長さに切り其上に、灰か又は米の糖、を少し付けましたのを、凡五六本束ねまして差込むので御座ります。

第二圖



半開の花の造り方は、滿開と同じに致しまして、只其滿開のは裏から「中の瓣鏝」をあてますけれども、半開にはそれと反對に表にあてまして、内部の方に圓味を持たせるので御座ります。

蕾の作り方は、絹か、又は寒冷紗を一寸四方位に切り、又綿を少し先の方へ入れ、八ツ折にたゝみまして、先を

細く元の所を少しふくらせまして、前に疊みました皺のまゝ、針金で括りました後、指先で縦に少しひねり前と同じやうに色を付け蕚の内に入れるので御座ります

葉は寒冷紗で作りますが、染め方は是迄度々申しましたものと同じで御座ります、そして第二圖のやうに、大中小三種の大さにきりまして、青紙をまきまして針金をつけ、「ピンセツト」で眞中の筋をとり、又筋鏝で葉筋を付け、裏から「中の瓣鏝」をあてますことは、前回に毎々申しました通りで御座ります。

葉が出來上りますれば、薄美濃紙を「カシドラベル」で染めましたものを細く切り、それで實物にならひまして、よき工合にまとめるので御座ります。全躰のまとめ方は第三圖のやうに致します。



第三圖

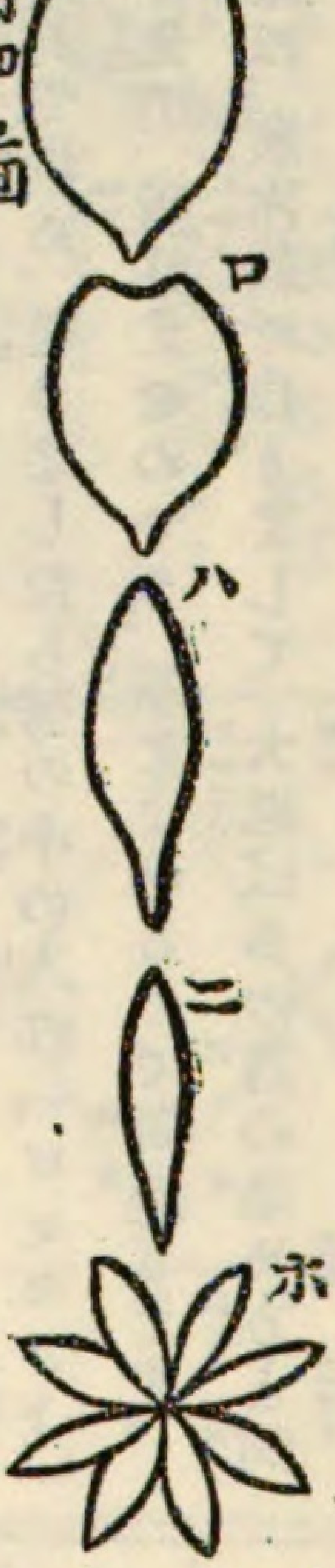
山吹の造り方

山吹には、一重八重など二三の種類が御座りますが、一重の造り方は六ツかしく御座りませぬ故、玆では八重の方を申上げます。

花瓣は絹又は「寒冷紗」を用ひて作ります、先ず初めに「ヨーシン」を熱い湯で極淡めに解かしまして、其内に前の切を入れ、丁度櫻色になりましたのを堅く絞りまして、其次は「ヲウラシン」を濃く解かしました中へ、夫れを擴げながら、段々に入れ、能くむらの出來ませぬやうに浸け引上げますれば眞の山吹色になるので御

座ります。
偖其切が乾きましたなら、第四圖のやうに裁ちまして、(イ)と(ロ)との瓣は「中の瓣鏝」を使ひまして、瓣の中程から右によりました方に、表から極輕く靜かにあて、又返しまして裏の方から前と同じやうに右の方へあて、表裏反對に少し丸みを付けるので御座ります。
(イ)と(ロ)との瓣は、かやうに致しまして、次に(ハ)と(ニ)の瓣は中程を「筋鏝」で表から引き、兩端を(イ)(ロ)の瓣と同じやう反對に「小の瓣鏝」で輕くあて、下の方は「筋鏝」で成るべく細くよつておきます、又「小の瓣は、只「筋鏝」ばかりで、中程から内側の方へ縦に引きまして、少し縮れを入れます。

第四圖



萼は、厚美濃の紙で作るのが宜しう御座ります、造り方は前に時々申しました作り方と同じで御座ります、只萼の先を、「ブローン」で淡くぼかし、下の方の餘り長過ぎませぬやう、能く注意致して堅くよらなければなりませぬ。花瓣の付け方は、梅や桃の花を作りました時と同じやうに、萼の先をひろげ、大の瓣から五枚づゝ互ひ違ひに、重なり合ひませぬやう付けます、先一つの花に付き、(イ)と(ロ)との兩瓣と合せて、大凡二十五枚位、次に(ハ)の瓣十四五枚、(ニ)の瓣十四五枚、終りに(ホ)の瓣二三枚を付けて形をよく致します。
半開の花は(イ)(ロ)の瓣に、鏝を反對にあてませんで、「中の瓣鏝」で表に計り丸みを付け、下の方には尙餘

第五圖



計に丸みを付け、又（ハ）（ニ）の瓣も「中の瓣鏝」で下の方に丸みを付けまして、萼に付けますのは開きと同じやうに致します、小さき半開は（イ）の瓣を除きまして其あとの四種の瓣を皆數枚づゝ減らして作ります。

蕾は絹竹紙、又は雁皮紙でも宜しう御座りますが、凡そ七八分四方程に切り、餘り多過ぎませぬやうに、綿を入れ細い針金で結んで作りますのは前に時々御話致しました作り方と、同じで御座ります　そして花の色と同じ繪具で染め、乾きましたら萼の中の入れ「ピンセット」の先で、破れませぬやう、皺をよせるので御座ります。

葉は、寒冷紗で作りまして、大抵ばらの葉の染め方と同じやうに致します、そして、第五圖のやうに三通り程裁ち青紙を卷きました針金を付け、「ピンセット」の尖で、筋をとり尚「筋鏝」を表に、「小の瓣鏝」を裏に使ひまして、圖のやうに葉の筋を出し、蠟をしきます。

偖、かやうに出來上りましたら、小さい葉を、初めにつけ、蕾、半開などを取まぜ、枝の太く堅くなりませぬやう注意して、まとめるので御坐ります。

裁縫科

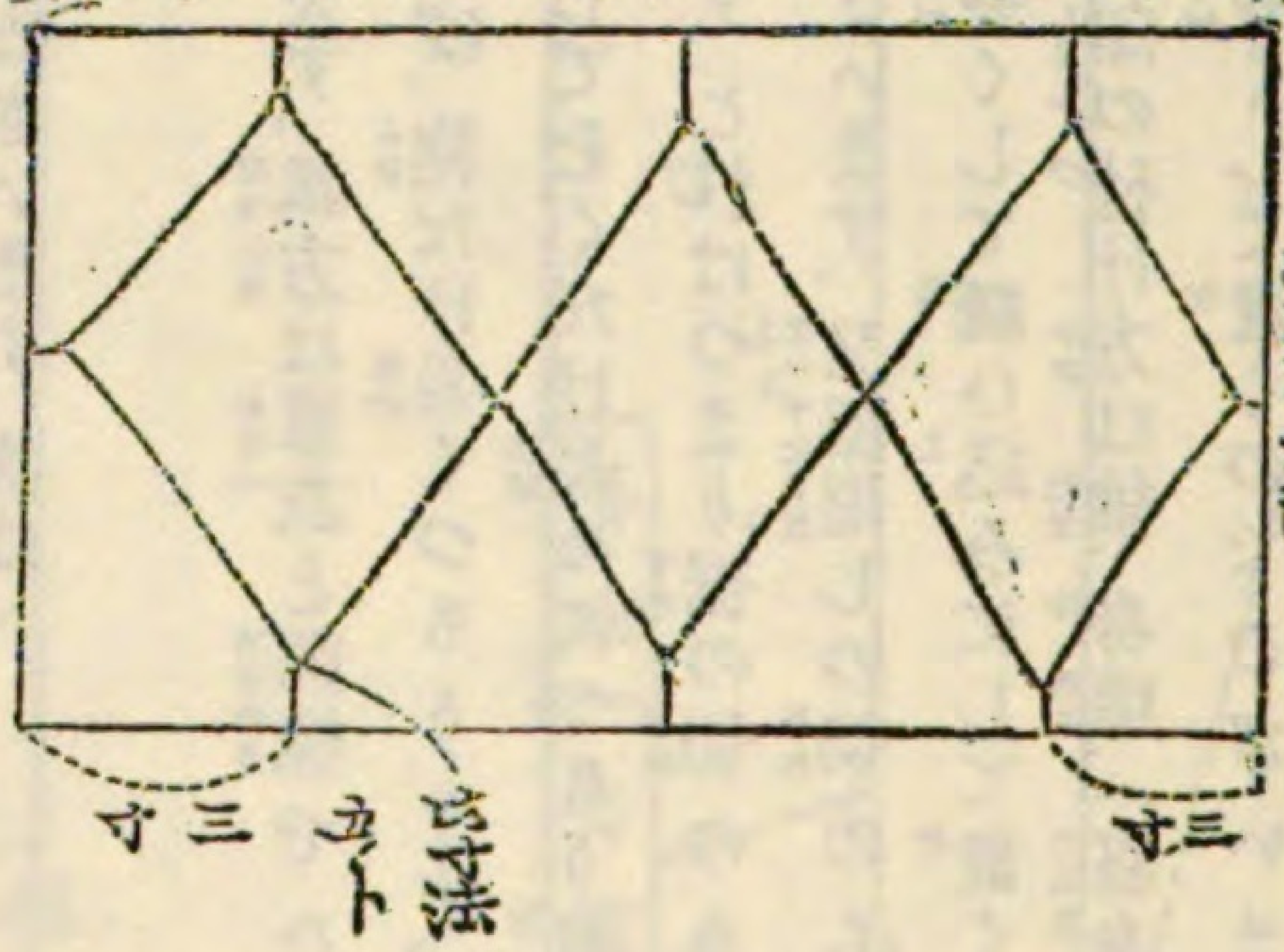
女子職業學校裁縫科教員　金子銅子

鯨帶

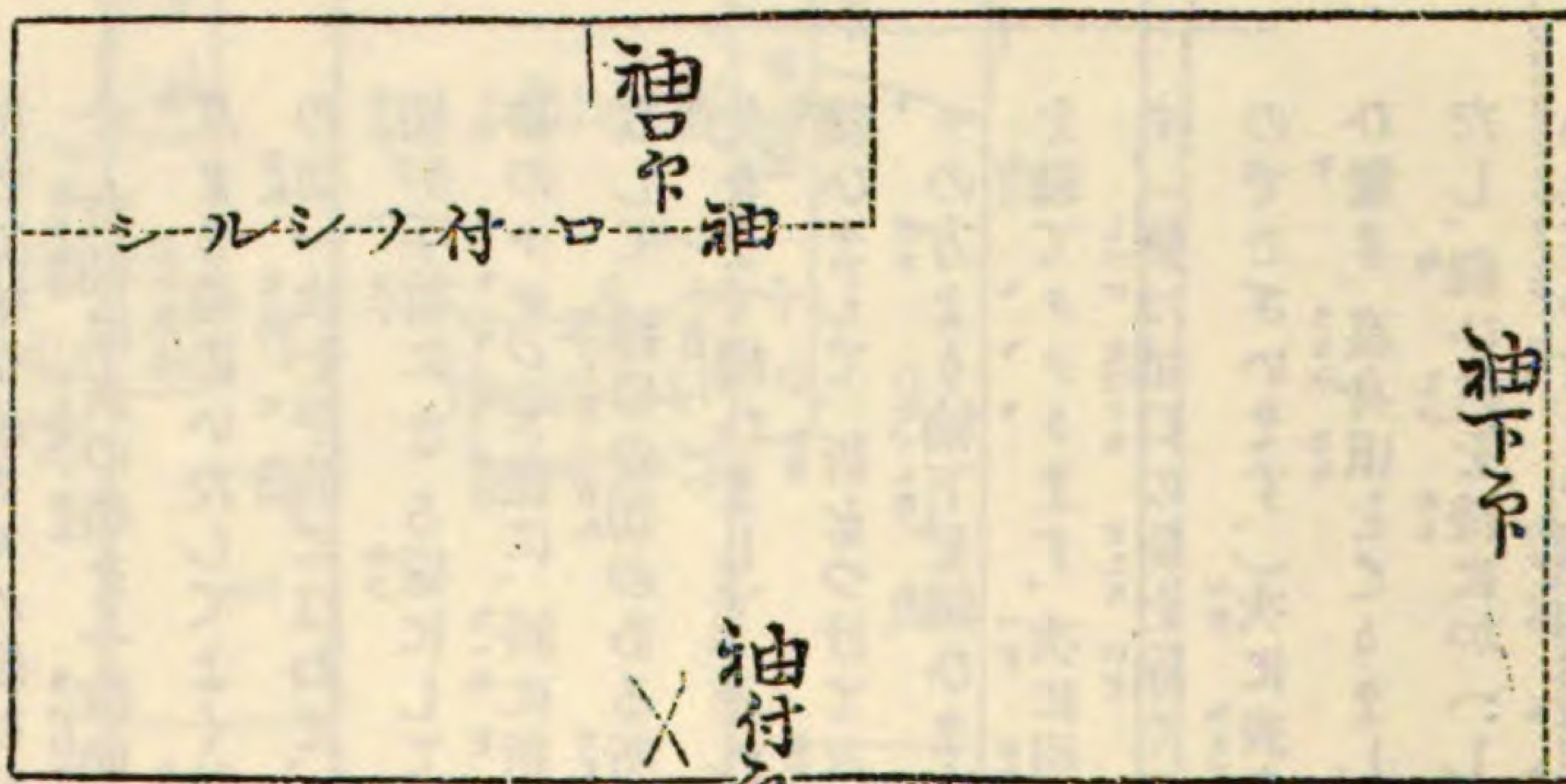
布を曲のない樣によく伸し、熨斗をかけまして、布の兩縁と中央とを比較べ、同樣に致しまして、棒に卷き置きます、又片カワになる切も、只今と同じ樣に致します、それより二枚重ねてシズミのない樣にして、布の中央に針をうち、兩カワもその樣にそろへ、待針をうちて一寸綴ぢます、次に一方の縁を眞直に一針ヌキに縫ひて、端より端まで縫ひ終りましたらば、又他の一方を、此通りに縫ひます、しかし此方は、中央の所を帶の巾だけ殘して縫ひます、これは、心の切を綴ぢつけてから引かへしますときの、用意でございます、先づこれで兩方の縁が縫へましたから、次は兩端を、布目を通して返し針にて縫ひまして、縫込を折らずに、平くして下に置きまして、鏝をかけキセカケのない樣に兩端の縫込を折返し、兩縁の縫目と同じ樣に綴ぢつけ、それより兩縁の縫込

みしをも亦、、、キセカケのない様に折かへしまして、兩端の縫ひ込みの折てある切の上にのせてはしを綴ぢ付ます、これより心の切を付けるのでございます、扨て心の切は、あらかしめ表になる切と同様に布の曲りのない様にして、、、キリをふきて伸しまして、棒に卷きて置くのでございます、それを取りまして二枚心なれば一枚は、長さを帶の丈より三寸位長くきりまして、一方の縁は曲りのない様に裁ち切りまして、それより巾を當り、一枚は帶の巾よりも一分位すくなく致して切り、いま一枚は兩縁兩端の四方とも縫込の切だけせまく切りとりまして、次に此二枚をよく動かぬ様に綴ぢ合せまして、後ち心の切の片カワに綿を布き四方縫ひ上りました帶の切を平に置きまして、其上に心の切

第二十一圖



第二十二圖

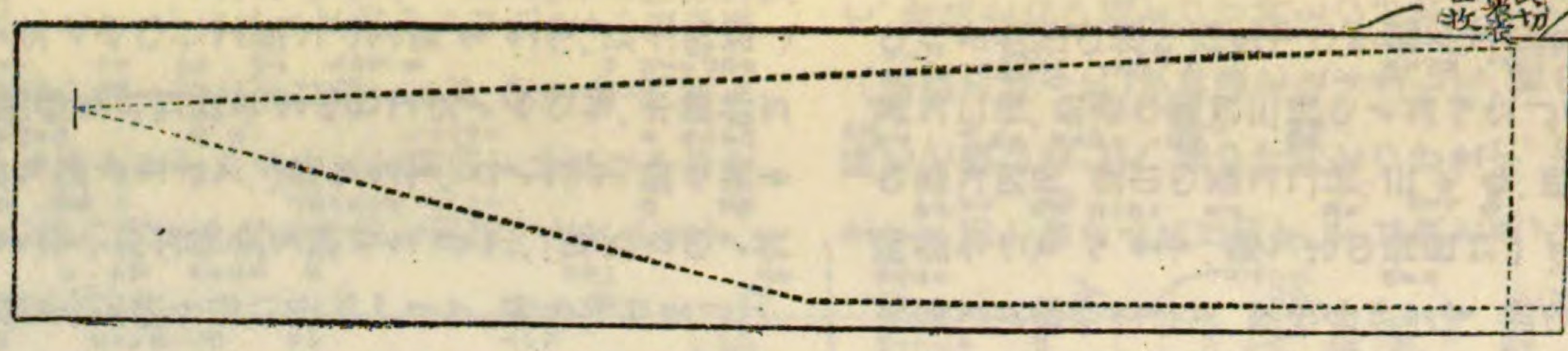


の綿の切である方を表の切につく様にして上に置きまして、心のつれぬ様に表の切ともに全躰待ち針をうちてとめて、置きまして、縫込と心とを殘らず綴ぢまして、縫ひ殘しになつて居る所は心も亦綴ぢ付けずに置くのでございます、四方とぢ終りましたらば、表にかへしまして、心と表との工合をよくして平にいたしまして、縫ひのこしの所を細く縫ひ上げた通りに絎けまして、兩方のふちに躾をかけます、兩端は端の方二分位のこしまして、八針か九針位(大概針目は一寸位)に端より端に躾

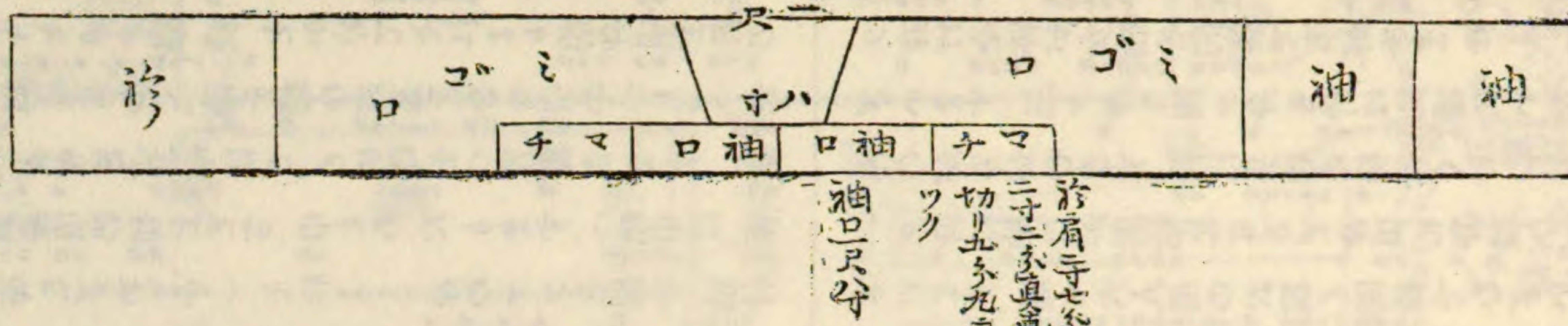
をかけ、再び此所にかへりて初に糸の出ぬ方に此度は糸の出る樣にして、つまり兩面から見ても糸が一直線に見える樣にするのでございます、これで仕立終りましたから、熨斗をかけまして、第二十一圖の通りにとおきまして、壓しを置くのでございます、次は

袷

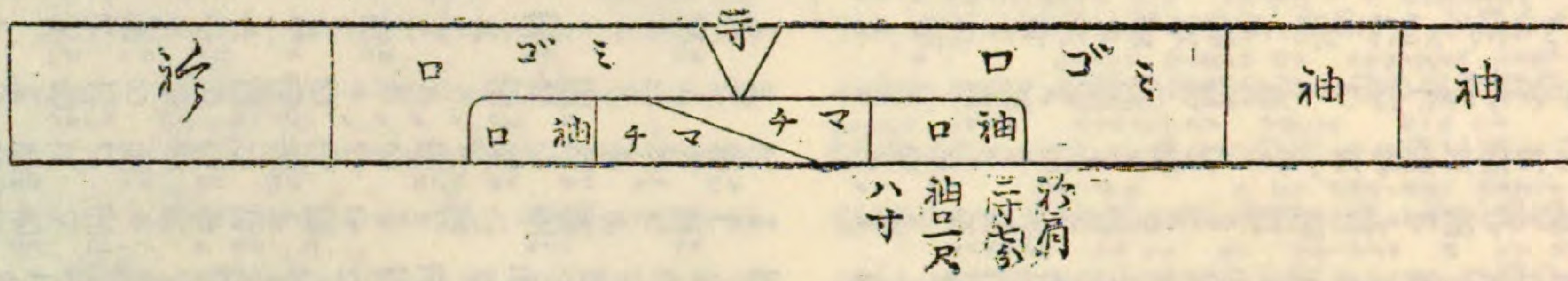
先づ女物から御話を致します、裁方は單衣と同樣でございます、裏はトホシなれば、袘だけ長くつもります、なるべくは肩にアゲを致してをくだけ長めにつもり置く方がよろしうございます、これはつまり裾の切のきれましたときの用意でございます、又裾廻しの切のちがひますときは胴の切を長くして縫ひ込みにして置く方がよろしうございます、印の付け方は袖、身頃、(裏身頃は袘の寸法の二倍だけ長くして置くのでございます、)等は單衣と同樣でございます、衽と裏袖とは少し單衣とちがひますから第二十二及二十三圖に就て御承知を願ひます、さて縫ひまするは先づ裏袖をとりて、袖口をかけ、袖口のアキの所を表裏合せて表を手前にして縫ひまして、折をつけて表にかへし、表袖の切をそとにして袖口のアキの縫ひはじめと縫ひ終りとの所を合せ、右袖は表の切を一枚向ふにはねて、手前の方に裏の見える樣にいたしてよく袖口下をそろへ、左の袖は表の切一枚を手前にはねて、又袖口下の切をそろへ、表の切が手前になる樣にして兩袖とも其中になる切は、袖口のチジレヌ樣に、斜に折り縫はじめをよく針とめをなして、袖口の切のある所だけは一針ぬきにして袂の先きまで縫ひまして、それより巾をあたり、ヤツクチを縫ひまして、折をつけて又もとの通りかさねてヤツクチの方より袖下を縫ひます、もし袂が丸であれば丸みを縫てクリます、次に引かへして、全躰に躾をかけます、(躾は袖口の所を除くの他は袖の兩面通じてかけるのでございます、)次に表身頃をとりまして、脊、脇を縫ひ置き、裏身頃をとりまして、脊を縫ひ、肩にアゲをいたし、縫ひ込を後にかへします、(此場合には、前の縫ひ込み衽の付けの縫込はチジレヌ樣に折つて致します)次に脇を縫ひます、これはトホシ裏の縫方でございま



第二十三圖 衽ノ切ノ出タル所



第二十四圖

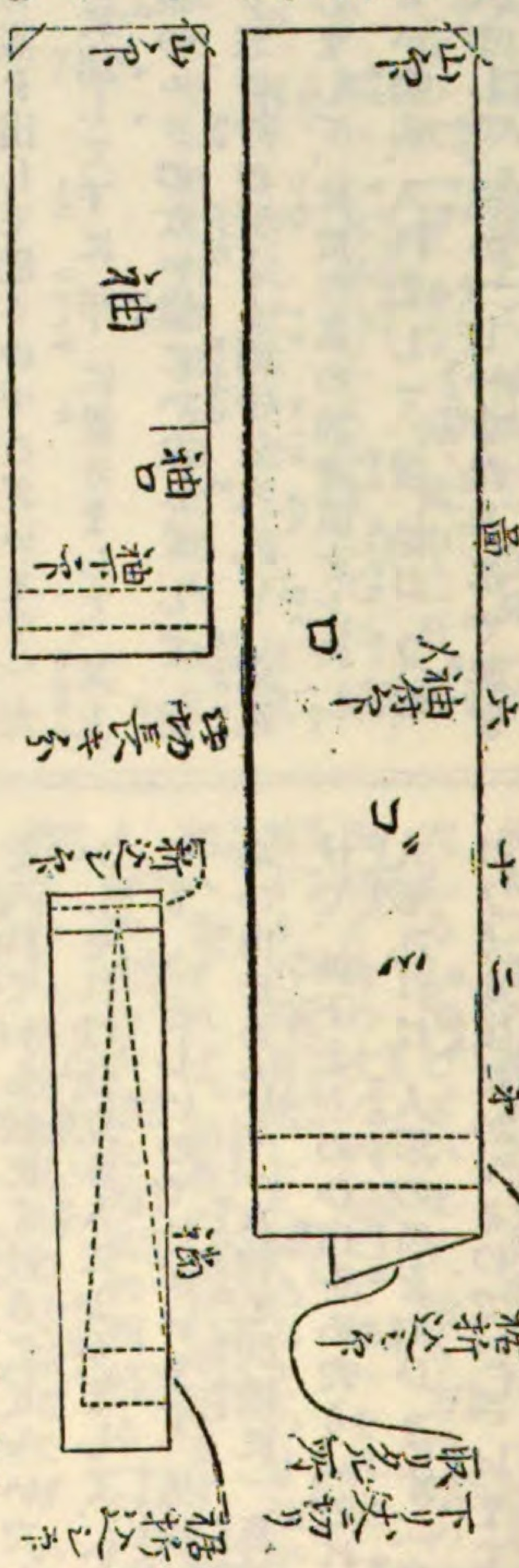


第二十五圖

すが、もし胴繼ぎを致すのなれば、身頃の胴の切と、裾廻しの切と別々に脊脇を縫ひまして、胴繼ぎを致します、(此時には胴の脇の縫込みの後身頃の切を少し後にかへして袖付の方の縫込のチヂレヌ様に繼ぐのでございます、)次に裾を合せ、脊と脇をとぢ、横とぢを致します、(針目の數は、前巾の裏三針、後巾の裏四針、表へは此倍數でございます)それより身のヤツを縫ひ、袖付けて、前身頃の切をとぢ、巾をあたります、(此巾は、裾の所と、ダキと、其中ほど、とに印をつけ置きます、)次に衽を取りまして、褄を縫ひ表裏を合せ引かへして、表の切をキセカケ隠躾をかけてそれより前身頃を衽の裏表にてはさみて、縫ひつけ、兩衽ともこの様に致しまして、後ち、立褄を縫ひ引かへして、躾をかけまして、衿をつけます、次に衿先を縫ひまして、(單衣ものゝ衿先きの様に致しまして、)躾けます、こゝにて縫ひ終りました、絹物なれば熨斗をかけてたゝみつけ、木綿物なればよくたゝみつけて壓をして置きます、以上御話しいたしましたのは女物でございますが、男物は袖の人形であれば袖巾をあたりまして人形をぬひ袖下をぬひます、又皆袖を付るときは袖口下を縫ひて直にヤツチの方より袖下をぬひます、又身頃は表にアゲを致します、(單衣と同様)衿は廣くいたしませんでくけます、先づこれだけが女物とちがふ所でございます、又小供物の表は裁方つもり方印のつけ方等單衣と同様でございます、裏も大人用の衣服と同様でございます、先づ一ツ身は袖口が廣袖になると身頃に脊縫ひがありませんのがちがひます、衿は男物の様にくけつけるのでございます、三ツ身も四ツ身も衿は同様にいたします、三ツ身は全躰が女物と同様でちがひません、四ツ身は脊衽脇と云ふ順序に(單衣にて御話し致しました通り)表裏とも縫ひまして、裾を合せます、他のとぢます所は同様でございます、横とぢの針目は一ツ身なれば後巾の裏に四針、前巾の裏に二針、三ツ身、四ツ身は前布の裏に二針、後布の裏に三針つゝにいたしまして、表はいつれも此倍の數が出ますので綿入に於きましても同様でございます次には

綿入

の御話を致しませう、これも女物から申上ます、表の裁方積り方裏地の積り方などは袷とちがひません、だゝ袘の寸法がちがひますからそこを斟酌すればよいのでございます、印の付けかたも亦袷と同様でございます、



縫ひますには先つ表袖をとりまして、袖下より袖口まで縫ひ袖口の所をよく針どめをして、袂が丸であれば丸みをつくりまして、表にかへし躾をかけまして、表を見て巾を當り置きます、次に裏袖をとりまして、袖口をかけ表袖の通りに縫ひまして、(綿入はすべて袖口には綿をふくませますからそれだけ縫込を廣く丁度六分位にして置きます、)裏を見て巾を當り、ヤツクチを縫ひます、このときにヤツクチの綿をつれぬ様に縫ひつけます、それより引かへして躾をかけ置きます、次に表身頃をとりまして、背脇をぬひ衽をつけ衿をつけ衿巾をあたります、(單衣の通りに)次に裏をとりまして、袷の通りに背と脇とを縫ひまして、衽つけ衿をつけます、次に裾を合せます、(裾を合せるには四すそは表を見て合せ、褄は裏を見て合せますのでございます)次に表にかへして表の切を五厘位キセカケといたしまして、躾をかけます、(此躾は四裾だけで衽は隠躾をかけるのでございます、)次に立褄に躾をかけ、身のヤツを縫ひまして、袖をつけます、表袖は身頃の方を山の所で肩巾より一分位廣く折りまして、脇あけの所より斜に折をつけ、袖付のはしめと、付け終りは、身頃を極く少し縫込み針留をよくしてつけます、裏は巾の廣きときは袖の方の縫込

を折りまして、狹きときは付けはしめと終りとだけを折ります、身頃は伸して袖を付けるのでございます、つまり表袖の付け方と反對になります、それ故裏袖付の縫こみも身頃にかてるのでございます、かやうにして兩袖をつけ終りましたらは、表の前身頃と裏の前身頃と合せて、兩面に表と裏の背の出る樣に（尤も表裏とも縫目のある方即ち裏を出して置くのでございます）たゝみ、表の背を上に出して下に平に置きまして、其上に綿を置きよく綿のムラのない樣にいたしまして、裾綿を入れそれより三ッ衿の所より兩手を入れて、兩脇を持ちて引かへしまして、此度は裏の前身頃を上にし、綿をよくムラのない樣に、入れまして、裾、袖口、立褄、等に別に綿を入れまして、引かへし一寸たゝみて置きます、次に躾るのでございますが、先づ袖口よりはしめ衿の表と裏とをとぢまして、單衣の廣衿の樣に躾ます、次に横とぢ（袷の折りに大人用と小兒用との針目を御話しいたして置きました通り）を致します、横とぢは下まへの衽付けよりはしめまして、上まへの衽までとぢまして直に其針にて衽の付けを相褄までとぢます、又別に下まへは下より相つままでとぢまして、立褄をくけ、背、脇をとぢます、（此高さは丁度裾廻しの高さと同じ位でよろしうございます）先づこれで仕立上るのでございます、この縫ひかたは、多く絹物にもちゐますが、木綿物になりますと、ヤツクチ、身のヤツは綿を入れてから後にくけることゝいたしてあります、志かしそれは仕立る人によりまして、いつれに致しましても、よろしいのでございます、男物は矢張袖は表袖をぬひ巾をあたり、（女物と同樣に）裏袖をとり袖口をかけて、袖下よりぬひ巾をあたり（これも女物と同樣に）人形なれは、人形の所をぬひます、（表裏を別々に）それより身頃にかゝるのでございますが、ヤツクチと身のヤツとでございませんのと、アヂのあるのとが、女物とちがふばかりで、他にはちがひはありません、一ッ身は表袖をぬひ、裏袖をとり、袖口をかけて、裏袖をぬひます、（矢張り之も廣袖でございます）其他は脊ぬひのない所が女物とちがふばかりでございます、三ッ身は女

物と同様、四ッ身は袷の通り縫ひまして、綿を入れるのでございます、袖は裏表別々に縫ひます、すべて小供物の襟はくけ付けでございます、

重ねものになりますと、縫ひ方は少しもちがひませんが、只下着は、寸法をかへなければなりません、先づ通常の所を申せば、袷も綿入も通じて、袖丈が二三分、(袷二分、綿入三分、位)身の丈一分、後巾一分、前巾二分、衿丈三分位をつめます、去かし其品物によりましては、餘程斟酌がいりますが、其手かげんになりましては、仕立る人によりて、考へてもらはなければなりません、次に御話しいたしますのは

羽織

でございます、之も女物、男物、小供物とありますし、其うちでヒトヘ、袷、綿入等の別がありますが、丁度時節がらでありますから、先づ男物單衣羽織より申上ませう、

裁ち方と印のつけ方は第廿四、廿五、廿六圖に就て御らん下さいまし、廿五圖は切の丈の少きときに此裁方を用ゐます、即ち褄が鈎でございます又廿六圖の印のつけ方の袖の所は普通のと一寸ちがひますから、御斷りして置きます、袖はそとになる方、即ちうしろの方、猶委しく申せば紋のつく方の切を少し多くして、(なみの袖の樣に同じ樣に折らないで)置きます圖中の(イ)の所に二重の線がありますのは、一枚を長くいたしましたしるしでございます、積り方は棒の褄の方は、袖丈の四倍と身の丈の六倍とを加へそれに一尺八寸(これは前下りと衿肩廻しと縫込みとの寸法でございます、)を加へますれば、用布の總尺を得ます、鈎褄の方は、やはり身の丈の六倍に袖丈の四倍と一尺(これも前下り、衿肩まわし、衿先縫込みの寸法でございます、)とを加へて、總尺を得るので、其他の部分のつもりはおしむはかりて御考へ下さい、衿の印の付け方は圖のみでは少々足りぬ所がありますから、一寸御話しいたして、置きます、衿は巾が大概一寸八分より、二寸出來上りに致します、こゝでは二寸出來上りのつもりにて申上て置きますから、他の寸法の時は、少々加減をいたせばよろしい

のでございます、先づ衿の切をとりまして、裏を上にして、平に置き、切の耳の所より、四寸五分に全躰に印をつけ、終りましたら此次は其印より先を四寸五分より五分五厘引て丁度三寸九分五厘の巾に印をつけます、それより四寸五分の印の所から、手前に折り、(そとに裏のでる樣に)又其さきの印(四寸五分より先に三寸九分五厘に印をつけました所)を此度は向ふに折りまして、(丁度三枚重なる樣になります)熨斗をかけます、次に又其巾を、眞二ッに折りまして、衿山の所より、丈を又二つに折り、衿附けの方に山の印をつけ、それより四寸位下りて印をつけます、それより以下は五六寸位はなして、印をつけ置きます、これたけであとは、縫ひ方にうつりますから、それは次號に申上るとに致しませう、

習字の順序

華族女學校教員
東宮御所御用掛 小野鵞堂

習字の順序といふことに付て、少し御咄しを致しましやう、私は自分の實驗上と、授業の經驗上とより御咄しするのでありますから、或は他の先生方と、其說の違ふ所があるかも知れません、そこでこれから御咄しするのは、總て私の一家言として聞ていたゞきたい、

扨習字せんとする人々より、常に質問せられますのは『凡幾年習へは能く書けますか』『どうしたならば早く能くかける樣になりましやうか』『何から始めるのが捷徑でありますか』の三點です、習字の事に付て始めて逢ふ人は誰も必これらの質問を試みられますが、私はいつも其答に窮します、窮するのは一言にして盡すことが出來ないからであります、つら〳〵右の質問を考へて見まするに、早く能く書きたい、といふ希望から出るので、つまりは同樣の事に成るやうです、私は色々に工夫して居りますが『先づ四五年はかゝりましやう』『熱心に習ふより外致し方がない』『楷書か又は行書からお始めなさい』といふより答へのしやうがありません、去りながらこれでは餘り冷淡な答で、質問者を滿足せしむるに足らないばかりでなく、不肖ながら質問

を受くる地位に立て居る身分には殊に不親切の感じがする、そこで、世間には未だ御目にかゝらぬ方が多い、又右の希望を抱いて居らるゝ方々も少なくない事とおもはれますから、少し立入て右の御答を玆で致さうと存じます、

此處に一寸御斷りしておきたい事がある、それは習字の初期です、いろはを習ふ時期は、無論初期でありますが小學校の或る程度までは、筆法とか書法とかいふ事は二の次にて、早く文字を覺えさせて、早く用が足せるやうにとの望みが先に立て居りますから、習字法としては如何と思はるゝ點もありますし、又一方にはよく書きたいといふ自身の慾が發達して居ませんから、私は高等女學校の一二年、年齡ならば十四五才の頃を以て假りに習字の初期と見なします、此年頃になりますれば、不完全ながらも日用の事は辨じて居りますから、作文とか讀本とかの助けをしないでも習字は習字として、順序を踏で行く事が出來るからであります

（以下嗣出）

畫法指南

野口小蘋

◎菖蒲を畫くには、まへになりたる葉より畫きはしめ、まへの葉成りてのち花を畫き、またうしろにある葉を作るべし、墨の濃淡等は前號に種々の花卉を寫して、しは〳〵しるし置たれば略しぬ、尤も運筆等注意必要なり

◎萱艸一名宜男草、又わすれぐさともいふ、初夏花開く、畫きかた先づ葉よりはしめ、後花を作る、葉は細く長けれど、菊の葉の如くならぬやう注意ありたし、花は百合の花に似て六瓣なり、此圖を作るには、やはり墨色濃淡をわかちて、まへなる葉は濃にしうしろなる葉は淡に作るべし

◎紫陽花を畫くには、花よりはしめ、花成りてのち、葉を畫き枝を作る、花は四瓣なるが數花相集りて開きて、丸く大なるかたちをなす、繡毬花略相似たるものなれど、紫陽花には似て異なり、花五瓣にて、やはり數花相

あつまりて花開きて、丸く手まりの如きかたちをなす、あぢさゐよりは小さし、花ははしめより終りまで白し、紫陽花は開き初めには青みを帶び、全開の後淡紅又は薄紫藍色等漸々に變色す、故に俗に七化なといふこれらを畵くにも、用墨用筆等に意を注ぐべし

◎瞿麥を畵くにも、先づ花よりはしめ、萼より莖を作り、葉をゑがく、なてしこは花葉とも、總て優しく畵くにつとむべく、細葉といへども一葉毎に、墨色濃淡をわかちて作るべし、

本法第一卷第六號「畵法指南」中に獅子花とあるは梔子花の誤りに付此に訂正す

化學叢話

農科大學　K　M　生

化學のはなし

化學のお話を致さうとすると、元素だの原子だの有機だの無機だのと、兎角無趣味な事ばかりで婦人方には飽かるゝかも知れん、然し爰にお話を致す者は、婦人方が、日曜の暇位に出來る樣な簡單なる實驗や、又は皆さんの耳目に觸れ易い者に就て極めて卑近なお話であッて、其序に、用ゐた試藥や、物品に關係をした、化學上の雜談を致さうと思ふのです。

先づ初めには化學の發端を、極々簡單に述べませう。

（第一）化學の發端

秦ノ始皇帝が不老不死の靈藥を求めさせて、笑を歷史に殘しましたが、化學も最初煉金術と云つた頃には、其の目的の一は、矢ッ張、不老不死の藥を製出すると云ふのであつたから、面白い。そして他の目的は、賤しき金石から、貴重なる金屬を取り出すと云ふのでありました。種々の試驗を成したる結果、最初人に注目された物は、水銀と硫黃で、此を元素と考へた、實に此の二物は今日でも元素と認められて居る、其後鹽も一の元素だと云つて、茲に三元素說が起つた、其次には四元素說と云ふものを唱へたが、此は火、水、土、空氣の四を數へたのです、又或人は此の四元素に通ずる一元素があると云ふ說を立てゝ、夫を仙石と稱したのです、今から見れば誠に可笑いが、何分未だ十六世紀の頃で、而も化學と云ふ

者の發端で有るから、決して無理はない、其後は二派に分れて、一派は徒に空想のみに走つたが、一派は盛に實驗に實驗を積んで、遂に此も後世の化學と成つたので有ります、扨て今日では實に日進月歩の發達を成して、明治十年頃には未だ六十ヰの元素であつたのが、只今では十個以上も其數を増し、殊に化合物の發見等に至つては、誠に夥しく増加しました。

《第二》炙り出し

淑女は、多分種々の「炙り出し」を承知でせうが、爰に述ぶる者は、何遍でも出たり隠れたりする奴です、藥品は「鹽化コバルト」と云ひて、少々高價であるが二錢もあらば澤山です。

此は赤色の結晶ですが、夫を薄く水に溶かして、紙に書く時は、少しも見えぬけれど、火にて炙る時は、青く立派に現はれます、故に一名秘密書用インキとも云ふのです、次に之を湯氣の上に置くか、息氣を吹き懸ける時には、忽ち隠れてしまうから、何度でも出來るのです。

今試に紙片に［晴レ］と書て、窓の近邊にでも置て見玉へ、冬の天氣などには明に現はれます、西洋では、晴雨花と云ふ物があつて、天氣なれば花瓣が青く成るのださうです、だが此は何れにしても、現在の天氣を告げるのみで、即ち晴夫なれば青く、濕氣が多かつたり、雨が降つたりすれば、隠れるのですから、天氣豫報にはなりません、寧ろ空中の濕氣を計るに用ゐる方が、當然なのです。

幸ひ玆に鹽化コバルトの溶液がありますから、「アンモニヤ」水に入れて見ませう、初めには青色の沈澱(ムラ〱と濁りて淀みたる物なり)が出來るか、澤山に注ぐ時には、消えて渇色の液となります、次に此液を空氣中に晒して置く時には、自然と次第〱に、赤色に變じて來ますから、これも試して見たまへ。

一寸淑女に申して置きます。これから先には、種々の藥品を何度も用ゆる事が有ますから、アンモニヤは勿論の事です、鹽化コバルトでも、硝酸でも鹽酸でも何に限らず、試藥が殘りましたならば、罎に貼紙を附けて必ず貯へ置きたまへよ。

《第三》瓦斯燈

當今では、晝をも欺く大光力の電氣燈や、瓦斯燈などの様な、結構な物がドシ〳〵盛に成ッて來ましたが、私は今瓦斯燈に用らるゝ石炭瓦斯のお話を致しませう。」この瓦斯は、御承知でせうが、石炭から取るのです、即ち大きな釜に石炭の粉末を入れて、下からも亦石炭でそれを燃くのです、（一寸妙な様ですが）、すると盛に瓦斯が出て來ます。が然し、不純物が澤山に有ッて、燭力の爲にならぬ故に、出る瓦斯をば水に潜らして、水「アンモニヤ」、或は「コールタール」などを取去り、次に又他の藥液の中を通して、硫黄などを取去りたる者が、即ち石炭瓦斯として點火されるのです。然し勿論この瓦斯は數多の化合物が混合して居ッて、一ッや二ッではありません、最も多量に有る物から、擧げますれば、第一は水素瓦斯で、百分の四十五位（宛んど半分に近い）次に「メタン」瓦斯が四十足らずある、一酸化炭素が八位）其他「エタン、アセチレン」等の炭素化合物、及び酸素、窒素、炭酸瓦斯などの少量も混じて居るのです、處で、光力に最も必要な物は何瓦斯かと云へば、決して水素ではありません、全く「メタン、エタン、アセチレン」瓦斯で、殊に後の二者が多ければ益々明るいのです、併し「エタン」は僅に百分の四乃至五に過ぎず、「アセチレン」に至つては、一萬分の五乃至六位な少量です、斯く申す時には、何だか暗さうに思はれますが、中々然うではありません、一時間に、五立方尺位の瓦斯を燃せば、優に電氣燈に匹敵するとか云ひます。

《第四》有機化學

只今「エタン」とか「メタン」とか、「アセチレン」とか申しましたが、此は有機化合物の内に數へらるゝ者で、有機化學の方で講義を致す者です、往古は、動植物から取れる物を有機體と稱して、有機化學で研究し、礦物から得らるゝ者をば無機體と稱して、これは無機化學の方でありました、其頃は有機體は是非とも、動植物の生活力に依頼せずば、出來ぬ者と思つて居ましたが、西暦千八百年代に、獨逸の化學者ウューラ氏が、所謂無機體からして、動物體に生ずる尿中の尿素、即ち有機體を製出

しました、其後と云ふ者は盛に人工を以て、有機化合物を造出す樣になつて、今日では有機化合物と申しても、單に炭素化合物の種類に過ぎない、從て有機化學と申しても、一般化學の一部分であると云ふ事になりました。併し、化合物の數と云ふ者は、實に夥しく澤山にあつて、中々面倒であるから、便利上有機化學として特別に講究するのです、其代りには、ドシ／＼發見などがあツて、隨分愉快な學問です。(折が有つたら、「アセチレン」瓦斯燈に就てお話を致しませう)。

《第五》水の檢査

と申しても實際は中々面倒なものですが、一寸一二試驗を致しませう。

(一) 少し斗り石鹸を清水に溶かして、これを試驗すべき井水に注ぎ込み、攪拌して見るのです、若し其時沫が立たずして、沈澱が出來ましたならば、此井水には、石灰石の樣な化合物が溶けて居るのだ、所謂硬水と名づけらるゝ水で、良くありません。

(二) 硝酸銀と硝酸の少量をば、試驗管に入れたる井水中に、靜に注いで見ませう、若しフワリとした白き沈澱が、澤山に出來たならば、其水は鹽素化合物(食鹽とか、鹽酸とか鹽化「コバルト」の樣な物です)に富む事を示すので、良くありません。硝酸銀は高價ですから、薄硝酸を買つて來て、其一部分を取分けた中へ、銀片(無くば銀貨)を暫時浸して置けば、それで一時に硝酸銀と硝酸の混合が出來ます。

今試驗管に、極々少量の食鹽を溶かした水を入れて、それに、此の混合硝酸銀を、極靜かに注意して注ぎ込む時は、白き沈澱が兩液の界に輪になツて出來ます。(コツプを用ゐるならば、少し多量の鹽を入れたまへ)、が此の中へ若しアンモニヤを入るゝ時は、沈澱は忽ち消えます、次に又硝酸を多分に入れると、再び元の白色に戻りますから、試して見たまへ。(但し硝酸銀は暗い所か、黒い紙で瓶の外を包んで貯へ置かなければ、變色をして駄目になりますから、注意せられよ)。

(三) 井水に硝酸鹽類の有るか無いかを驗るのも、大

切であるが、此の試驗にけ強硫酸が必要ですから、殘念ながら淑女には出來ますまい。併し大切であると云ふ理由と、其方法丈けをお話しませう、抑々窒素を含む有機物が、地下や又は地上に於て腐朽する時には、硝酸鹽類が出來るのです、殊に畜舍や汚物捨場の近邊などには、澤山に出來ます、故に井水中に存在するならば、此水は腐朽した有機物に觸れたものと見做して、飲用水に供しては不可ません。

試驗法を簡單に云へば、白き茶碗の樣な器へ、四五滴の井水を入れて、其中へ五滴程の強硫酸を加へたる後に、第一硫酸鐵(綠礬)の結晶を投じます、そこで若し結晶の周圍が黒く成ッたならば、硝酸鹽類が存在する事を示します。

《第六》藍の褪食

只今殘して置いた硝酸がありますから、これで手拭などの藍染の青い所へ、字でも書いて御覽なさへ、忽ち其字の跡は、色が褪けてしまいます、褪色たならば、洗濯曹達か「アンモニヤ」か何かで、能く硝酸を洗落さなければ不可ません。毎でも鹽酸とか硝酸とか云ふ酸類を使用する時には、必ずアルカリ性(後に述べん)の「アンモニヤ」が苛性曹達の如き者を備へて居て、机や衣服などに、溢れたる時は、直ちに注がねば不可です。

藍染のお話を一寸致しませう。藍葉、花は可なり愛らしい者です、諸君が暑中休暇の頃、畑に藍葉が乾かしてあるのを見ませう、あの乾いた葉を何週間も室内に積で置て、時々水を撒布ますと、醱酵作用と云ふ變化が起りまして、玆に蒅と云ふ物が出來ます(此は青藍と云ふ沈澱物が主です)、此の蒅の搗き固めた物が、藍玉です、染物屋ではこれに石灰や木灰を入れて、一種の變化した液を造り(白藍と云ふ)、其中へ糸なり布なりを入れて、それを空中に晒して置けば、自然に青く染め出されるのですから、誠に都合が宜しいです。

《第七》醫藥と煎茶

古の人は八釜敷云ひますが、實際醫藥と茶とは禁物ですよ。勿論凡ての藥ではありませんが、例へば彼の強壯劑に用ゆる林檎酸鐵ケンキの如き物をコップに入れ水

を加へて薄くしたる中へ、煎茶の澁い奴を注いで見たまへ、何が出來ますか！、忽ち青黑い沈澱が現れます、これは全く茶の中に、タンニン(澁味の物)と沒食子酸と云ふ者があッて、此と鐵とが化合するからです。六秋生が實際此藥で舌を眞黑にして、まるで鐵漿を嘗めた樣な目に遇ふた事がありましたよ、勿論胃の中も眞黑になるのです、謂はゞ鐵漿を飲むのと同じ事で、藥は何の功能をも成しません、だから茶は大禁物なのです。

此の試驗を成すには、林檎酸鐵ケンキには限りません、クエシ酸鐵でも鐵飴でも、又は鹽化鐵でも鐵劑なれば何でも宜しいのですから、是非試して見たまへ。

《第八》五日市の絹

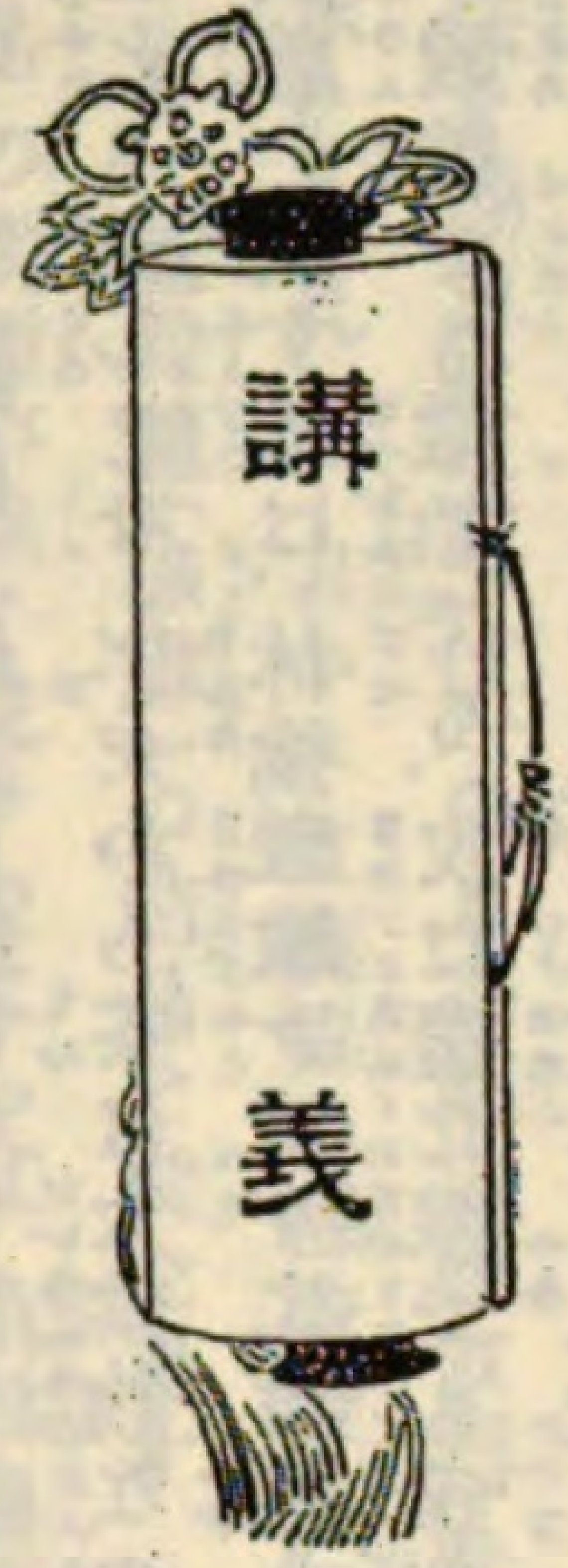
淑女は五日市と申しても、能く御存じない方が多いでせう、此處は八王子と青梅(をうめ)との間に在る、谷間の小都會ですが、此近邊には所々から、化石が出ますので學生が折々遠足がてらに出懸けます、八王子からは新道が四里、福生停車塲から三里程です、扨て此處には可なり有名なる黑染の絹が盛に出ますが、これは近在(村の名を忘れたれど直ぐ判ります)から出る、一種の赤土と椰子の實で絹を染めた者です、即ち赤土の鐵分と椰子のタンニンとが、化合するからでせう。中々立派な物ですが、併し重量を增す爲めに、十遍も廿遍も染める者ですから、絹が脆弱なッて來ます、從て人々が喜ばない。兎角日本の工商人は、眼前の利にのみ走ッて、爲めに商品の價聲を落易いのは、誠に殘念であります。

《第九》蔬菜と肉食

食鹽はよく何にでも用ゐられ、又實に何處にでも多少存在する者でありますが、其符號はNaclで「ソヂウム」Naと鹽素clとの化合物です。今茲には食鹽に就いての少し風變りのお話を致しませう。

一概には云へませぬが、地方の人は鹹味の食物を好み、都會の者は兎角甘口で、鹹味を嫌います、これは全く菜食と肉食とに關係を致して居るのです。獨逸の化學者なるブンゲ氏の發見によれば、野菜の樣な加里化合物に富んだ食物を、多量に貪る人は、「ソヂウム」化合物(食鹽の如き物)の排泄も夥しいとの事であります。其

處で、體内にソヂウムが缺乏する者ですから、從て食鹽の如き者を以て、補はなければならんのです、即ち身體の生理上食鹽が必要なのです、肉食に於ては斯樣な關係はありません。然るに地方の農家などでは、蔬菜が主で肉食は誠に稀ですから、從て鹹味な食を好みます、都會の人は比較的に、魚類や獸肉を多く食しますから、鹹味を嫌つて甘口なのです。



百人一首講義（六）

文學士　大町桂月

三十、壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかり憂きものはなし。

○有明は、曉方の月也。

○つれなくは、我に連らならぬ也。即ち我と一致せぬ也。我に同意してくれぬ也。情なき也。つれない人と云へば、こちらで思ひ慕へど、先方では一向取り合つてくれぬ人也。有明の月がつれなしとは、主觀的の言ひ方にて、月は元來情なきものなれとも我心に深く恨み愁ふる所あるより、月までも我につれなきやうに見ゆる也。

○この歌、「有明の月までがつれなくうらめしく思はれて別れた時からして、つく〲世の中に曉程つらい者はあるまいと、思ふやうになりました」といふやうに解すべし。女の處に通ひて、逢はずして空しく歸る明方の情をうたへるもの也。有明の月までがつれなく見ゆとは先方の女つれなくして、心に深く恨む故、月を見ても、やはり月がつれないやうに見ゆる也。有明の月までが、つれなく見え、人につれなくの

みせられて別れて歸つたとありしが、そのつらさ今にわすられず、曉になる毎に、そのつらさを思ひ出さずに居られず。世に曉ほどつらく覺ゆるものなしとの意也。

○人のつれなきより、月までもつれなしと感じ、而して、曉に月をつれなしと感ぜしより以來、曉になる毎に、常に聯想を起して、はては曉がつらいと感ず。何等の切情ぞ、何等の婉詞ぞ。語短くして、意長く、趣味深き名歌と云ふべし。

三十一、坂上是則

朝ぼらけ有明の月とみるまでに、吉野のさとにふれるしら雪。

○曉、雪を見てよめるうた也。ねぼけ眼をこすりつゝ、窓を推せば、天將さに明けむとす。一面に白う見えて、まだ有明の月が殘つて居るかとて、よくよく見れば、月の光にはあらずして、白雪の降れるなり。ひと通りの歌にして、別にすぐれたる妙所もなし。

三十二、春道列樹

山川に風のかけたる柵は、流れもあへぬ紅葉なりけり。

○柵は、川の中に棒ぐひを立て、竹木をからみつけて、水の流れをせきとむるもの也。

○「あへぬ」は「合はせぬ」也。「はせ」が約まりて「へ」となる。今日の俗語にて、「酢あへ」といふは、「酢合せの意也。「流れも」の「も」は、語意をつよむる爲めに用ゐたる言葉にて、別に意味なし。「流れもあへぬ」は「流れ合はせぬ」也。流れ合はせぬは、流るゝに合せざる也、即ち流れずしてとゞまると也。

○山川なれば、大なる川にはあらで、清水がちよろ〳〵と流れ、川の中には小石が澤山ありて、淺い處は、その石が水上にあらはれて居り、兩岸は樹木しげり合ひ、秋ふけて落葉すれば、川に滿ち、それが小石にとゞめられて、自然に水の流をせきとめ、一寸見れば、柵のやうなれど、まことの柵にはあらずまた

人がわざ〳〵作りたるにあらず、風が無意識に木葉を吹き落して、自然に柵やうのものをつくりたる也。これ多く山川に見る景色也。一首の意は、山川に風が作つた柵は、實は本當の柵にあらずして、流れあへざる紅葉が、澤山たまりて、自然に柵のやうなものをつくりたる也と也。

○山川に多く見る景色なれど、さまで妙處を捉へたりとも云ふべからず。流れもあへぬ紅葉を、風の作りたる柵と見立つる言ひまはし方、細工の跡見えて巧を弄せるに似たり。殊に「なりけり」と、感嘆的の説明をなせるは、餘り大袈裟すぎて、事實に相應しからず、もとより拙なるにはあらねど、感服しがたき歌也。

三十三、紀友則

久方の光りのどけき春の日に、しづ心なく花のちるらむ。

○久方は、枕詞にて、日、天、月、都、光などの上につく語也。

○「しづ心なく」は「靜な心なく」也、即ち落付かずして、騷々しきと也。

○この歌は、下の句の首に、「など」の語を略したる也。即ち「久方の光のどけき春の日に、などしづ心なく花の散るらむ」とあるべき也。されど、などを入るべき餘地なく、且つ之を入るれば、散文的になり、入れなくても、などの意は自から見ゆる故、省きたる方が、調子のびやかになり、意味の上にも餘韻あるを覺ゆる也。

○陽春四月、空くまなく晴れわたり、雲もなければ風もなき好天氣、霞もにほひて、如何にのどかに、心自から浮きたつに、なぜ花はさう〳〵しく散るであらうか。これ一首の意也。

○うら〳〵とのどけき春の日に、花ちら〳〵と散りて止まず。何等の心ゆく光景ぞや。「しづ心なく」にて散ることのしげきを知るべし。風ふかず、一鳥なかず、日永くして少年の如き春の日に、香雪音なく散

りしきる光景言外の、躍動して、妙趣言ふべからず。調子大にしてのびやかに、詩意縹緲、よく春の光景の要點を捉へ、詩意、陽春に適合し、調子また詩想を融和し人をして、感嘆措く能はざらしむ。洵に一代の名歌也。

三十四、藤原興風

誰をかも知る人にせむ、高砂の松もむかしの友ならなくに。

○「友ならなくに」は、「友ならぬに」也。
○「誰をかも知る人にせむ」は、言ひ換ふれば、「誰も知り人はなし」との意也。
○高砂は、地名也。
○むかしなじみの友は、みな死んで仕舞ひ、世から見すてられて、誰一人うちとけて、しみ〴〵はなしする人なし。世の中は闇黒也、寂莫也、人に向っては、もはや知己を求むべからず。『老後孤獨のさびしさ、言ふべからず。せめて友を人間以外のもとめむか、松の名所なる高砂の松は、むかしながらの姿也、之を友とせむか、されど、松はもの言はず、言葉を解する友人にはあらず。嗚呼この松が人であればよいに。人はみな死んで仕舞ひて、今は物言はぬ松を友とするより外に、友とすべき人なし。これ一首の意也。
○知己死しつくして無情の草木を友とせむとす、老人の心細さ、思ひやられて、眞情自から流露す、あはれなる歌也。

三十五、紀貫之

人はいさ心も知らず、故郷は花ぞむかしの香ににほひける。

○「いさ知らず」の「いさ」は澄んで讀むべし。「いざ」と濁りて讀むべからず。「いざ」と濁る方は、「いざ行かむ」などゝ用ゐて、俗語の「サア」の意也。「いさ」と澄む方は、「いさ知らず」とのみ用ゐて、他には用ゐず。「いざ」とは、意味を異にす、混用すべからず。
○この歌の意を解かむには、この歌を作った時の事

情を知らざるべからず。貫之が毎度、初瀬へお參りにゆきて、その度ごとに、宿りたりし家ありき。その後、久しく行かずして、或時久しぶりにて、その家をおとづれ、久しくお目にかゝりませむ、どうです、おかはりは有りませんかと挨拶すれば、難有うござります。このとほり繁昌して居りますと言ひければ、貫之は庭前の梅枝を折り取りて、この歌をよめり。頓智即妙と云ふべし。

○久しく來なかたから、先方では、もはやむかしのなじみを忘れて居るかも知れぬが、表面だけは、しんせつにして呉れる。然し變はり易き人心、本心は、どうだか分らず。唯庭前一樹の梅の花は、昔も今も色香少しもかはらず、今も昔ながらの色に出でゝ、昔ながらの香を送る也。これ一首の意也。別に宿の主人が心がはりしたと言ひ切りたるにあらず、又さまで宿の主人を恨みたる意も見えず。たゞさう御しんせつにおつしやつて下さりますが、人間のとだからどうだかわかりませむよと、じやうだん半分に、先方の氣をわるくさせぬやうに、しやれて讀みたる歌なるべし。

○一寸氣の利きたる讀み方なれども、すぐれたる歌にはあらず。すべて貫之の歌には、俗才は見ゆれど、詩才は見えず。言葉は可成り巧につかひこなせど、詩想は平凡なるが多し。蓋し貫之は感情の切なる詩人にあらず。日本の歌人としては、第二流以下也。世には、貫之を非常にえらき歌人と思へるもの多し。古來の盲評に雷同せるものなるべし

漢文評釋

文學士　久保天隨

女丈夫傳

古賀侗菴

（作者小傳）古賀煜、字は季曄、通稱は小太郎、侗菴と號す。精里の子、父子二代、儒術を以て九州に名あり、著述亦た頗る富む。弘化四年歿す、年六十といふ。

女丈夫者、女子阿婉也、以其行事卓犖無上

婉古烈丈夫故、今以此稱焉、阿婉父某、嘗仕羽之米澤、既而有故辭祿、退居都下新川之上、以醫鳴、求治者不絶、列侯或給以月俸、

坤、柔にして牝馬の貞をなすは女子の徳なり。然れども、一朝事あるに方りてや、可憐の勇氣を皷舞し艱苦を犯し、善く鬚眉の男兒を愧殺せしむる者あり。かくの如きは、必ずしも巴の子孫に非ず板額の血統を受けたるに非ず、また希臘の昔アマゾンの女兵にも非ず、唯だ一片の氣慨發揚する時乃ち然るのみ。男子に幾分女性的性情を存し、やさしき處あるを多とすると同じく、女子は亦たその奥底に於て多少の丈夫的氣象を備へざるべからず。雪に惱まぬ白梅一枝、凛々たる姿、物とはなしに高く尊げなるは、即ち此故にして、然らざる者は柳の絲の唯だ人にしなだれかゝるのみにて、品の下りたるは紅樓媚を賣る。うかれ女と何の擇ぶ所ぞ個庵の女丈夫傳に寫すところは、雄々しき少女の活歴にして、人をして覺えず案を拍たしむる者あり。起首の數句、その此を呼んで女丈夫と稱する所以を釋し、重きを行事の卓犖なる一點に置きし處、その微意の存するを觀るに足る。卓犖は、すぐれて且つかたきことなり。女丈夫の名は阿婉、之を起首に點出し、なほ紀傳の正體を離れず。阿婉の父某かつて羽前の米澤藩に仕へしが、故ありて祿を辭し當時、將軍の御膝元たりし江戸に出で、新川の邊に卜居しけるに、醫術を以て世に鳴りければ、治療を請ふもの、引きも切らず、大名などの中にも月俸を給して、諸士の格に待遇し、まさかの時、脈を取つて貰ふ用心に備へしものあり。世の常の藪にはあらぬ醫者殿の繁昌は、これにて知るべく、以上第一段の叙事専ら女丈夫の門地賤しからざるを暗寫すと雖も、又直に次の一段、夜盗襲來の事に反折し來る。文辭頗る簡切、一冗語を着けず、自ら大家の規度を見るものといふべし。

阿婉夙喪母、與一妹從父而居、一夕夜半

有人叩門、告其家人病勢阽危甚、父趣裝趨與之俱往、獨二女居守、時列侯所餉月俸、適積在堂隣近惡少、時主人之亡、又蔑二女無能爲也、四人成群、排門而入、更擔米苞以出、

これ第二大段中の第一小段なり。阿婉は夙に母を失ひければ、年幼き妹と唯だ二人、父に從て同居しけり。ある夜のこと、四隣寂として、滿街の柝聲、三更を報ずる頃、忽ち人あり、門を叩き、家の者、病勢甚だ危篤にして、今にも息を引き取りそうなれば是非來て見て呉れ玉へといひぬ。阽、音は鹽、危きなり。眞夜中夢を結びしばかりにて、人に叩き起されて、寒さを耐らへてもかけ出さねばならず、こゝらが仁術と稱ふるだけに醫者殿御苦勞の處と知るべし。父も職業柄、仕方なければ、支度を整へ、使の者と共に出かけぬ。趣は促すと同じく、趨は赴くと同義、また走るといふ意も籠れりと知るべし。父すでに出かけたれば、留守せるものは二人の少女ばかりなりしが、も折折とて、大名達より賜はりし月俸なんど、積み立て、そつくり家の中に在りけるが、近所に住める無頼の惡棍ども、人の者は吾が者と心得るが習なるが、主人の不在を見て、好機逸すべからずとなし、幼き娘たつた二人、何の手向ひなすべきかとて、四人打そろひて、門を押し開いてどし込み、そこらに在りし米俵をかつぎ出して、のこ〳〵と立ち去らむとはしけり餉は「送る」、適は「偶ま」、亡は「不在」の義、苞は米俵なり。以上夜盜の忍び入りし事を敍し、「米苞を擔ぎて出づ」といひて、一先づ收束をなし、後段さらに筆を阿婉の身に着け、無限の波瀾を起さしむ。

阿婉時年甫十六、而妹僅八九歲 阿婉語妹曰、吾雖儜弱一女子、坐視賊入吾室奪吾粟而不能抗、他日胡顏見人乎、且也阿爺以剛嚴聞、吾見賊退縮不能出手、譴罰必不小、吾將挺身當之、乃潛匿妹于庋閣

中、少開其戸、使瞰其外、謂曰、吾一婦人、纖柔無力、加之以寡敵衆、萬無生理、吾死之後、阿爺還家、汝具陳所見焉可也、吾所以囑汝者、獨此而已、便提刀潛從側戸出、伏於玄關外、有一賊、正負米出、直進刺刀於其腹、立斃、有一賊、當後、謂其跌而僵、趨將救之、又刺之、亦斃、於是一賊覺諸中有人、來將前捕已、阿婉揮刀擊之、斷其一臂、砉然墮地、其一逃走、追擊傷之、

餘りといへば、づう〳〵しき賊の振舞、流石に座視する譯にも行かず。阿婉はこの時芳紀正に二八、妹は僅に八九歳なりけるが、屹度心に決せしことあり、妹に向つて語つて曰く、吾こそ世にかよわき女の身なれども、素町人の賤しき者にも非ず。盜人どもの我は顏に、吾が室に入り、吾が米を奪ひ取るを視ながら、之を何ともせぬは、腑甲斐なき事の極にして、他日如何なる顏して人と相見るべきか。其上父君は長袖の醫者にも似合はず、世に剛嚴の聞えが高く御座して、心ざま頗る雄々しくおはすなれば、今の場合、吾にして恐ろしさの餘に縮み上り、何の手向も出來ざりしとあらば、必ずや譴責して、その臆病の程を誚し玉はむ。されば、吾はこの身を棄つる覺悟にて打ち出で、之に當らむと思ふなりと。かくいひ終り、幼き妹を押入の中に匿し、少しく隅を明けて外面を覗き得る如くならしめ、之を戒めて曰く、吾は元より女の身なれば、弱々しくして力なし。その上、一人を以て四人に敵することなれば、如何にするも、助かるべき道理なし。若し不幸にして、賊刃に斃れし後、父君歸り來り玉ひなば、汝は見たまゝの事詳しく申し上ぐべきなり。豫め言ひ置くは、この一事のみ。他には思ひ殘すこともなしとて、刀を提げて、そつと傍への戸を開いて出で物の黑白も分かぬ暗の中、人知れず、玄關の外に身をかくし、賊の出て來るを今か

〳〵と待ち受けたり。讀者よ、十六歳の少女、毛蟲を見てさへ恐がるが世の常なるに、かばかり膽玉の据はりて、絶えて物に怖れず、咄嗟の間に在りて、用意周到、遂に能く群賊を鏖にしたるの一事、決して尋常裙釵の爲す所に非ざるを知らむ。倜儻の筆、亦た頗る細を穿ち、少女が心中、一片の氣慨、動き初めし有樣を叙して、毫髮も餘す所なし。少女すでに身を伏して待つ。神ならぬ身の知る由なく、まして慾の爲に眼くらみしにや、一人の賊は、丁度その時に米を背負ひて、のそ〳〵として出かけたり。それ來たとて直に進み、脇腹めがけて柄も通れと刀を刺し込みければ、ぐすともいはずして地に斃れぬ。くらがりの中にてありければ、後に從ひて來りし賊は、よもや人の爲に刺されしとは思はず、重き者を背負ひたる爲に、躓きて倒れしにやあらむとて、あはたゞしく馳せ來り、之を扶け起さむとしけるに、又來たかとて、前と同じく、之を刺しけるに、これも亦た斃れき。かく二人まで斃れしなれば、必ずや暗中に人あらむとて、續いて出でし一賊は、漸くに思ひ中りければ、進み來りて之を捕へむとしけるに、そうはさせじと、阿婉は血刀打揮ひ、之を撃ちけるに、その臂を切り落し、とうと音して、地に落ちたり。かくて三人まで見す〳〵切り立てられければ、如何なる手なれの劍術者にやと思はるゝばかり、とても叶はじとて、殘る一人は跡をも見ず、穢くも逃げ出しけるに、これも序にとて、追かけて、一太刀あびせかけ、傷を負はしめたり。

以上二節、第二大段、少女奮鬭の狀、寫し來りて宛然目に睹る如く、古しへの牛若丸が群盜を切り立てしも、かくやありけむと、百歳の後、人をして感奮する所あらしむ。而してその叙事の跡を見るに、急忙の際を寫して、次序整然、繁簡その宜を得、從容迫らず、僅々數十字を以て、暗中の一大活劇を描畫し、容易に讀者をして摸索せしめ、過つこと無からしめしもの、洗錬の工、乃ち然るのみ。文を學ぶもの、一字を增減すべからざるを以て、理想の極致と爲すべきこと、改めて喋々するを要せず。今日世にありふれたる飴細

工的文章は、見るからに山鳥の尾の徒らに長々しく、たとへば三伏の牛涎の如く、また老婆の絮語の如く、よろづの事にいそがしき折柄、とても埒明かず。凡そ漢文を學ぶものは、その簡潔切實の筆致を領會し、自ら楮墨に臨む際は、機に應じ處に隨て、その姿趣を發揮せむを勉むべきなりあらゆる種類の文におて、皆然るものあり、何ぞ獨り紀事の一體のみならむや。

少之、父方歸、聞之大驚、事聞、町奉行奇其義勇、賞以銀錠、且痛禁死傷者家、令不得仇怨、實享保季年事也、阿婉所盜之刀、蓋左文字、其父在米澤時、君賜之者也、

これより第三段に入る。少女すでに賊を追擊し、先づこれにて安心、どれ一休といふ中に父はもどり來りつ。ありし事の次第を聞きて、大に驚きたるも道理なり。すでにして、その顛末を具し其筋に屆け出でけるに、時の町奉行なにがしは、少女の義勇を奇なりとし、銀を賜ふて之を賞しぬ。銀は其額を算するに幾錠といふ、銀錠はなほ金圓といふと同じく、一種の省略より出でし熟字なり。少女賊を殺す、直、固より此に在り。然れども、覇府時代、仇怨必ず報ゆるを以て義と爲せしが故に、奉行は更に死傷者の家に嚴令を下し、如何なる事あるも、少女を仇としてつけねらふ如き事なからしめ、以て烈婦が一身の安全を得せしめぬ。流石に、手ぬかりなき處置といふべし。以上敍事の始終本末を述べて、すでに盡せり。享保季年は、時を點し、以て總結となす。更に阿婉が賊を斫りし刀の出處を敍し、其父かつて米澤に在りし時、君侯の賜ひし者なりといへるは、餘波を起し、文情をして一段の昂揚をなさしめしのみならで、遙に起首の一段、阿婉父某嘗仕羽之米澤といへるに接映し、常山の蛇勢、首尾相應ずるに似たるものあり。又中段「且也阿爺以剛嚴聞」云々といへると、有意無意の中に照帶し、以下數個の刀字、いふまで無く緊密の關係を存し、名刀靈あり、少女の義烈と相得て、遂に震天撼地の大事を爲さしめしといふに歸着す、一篇

を添へて、特に趣ある、即ち此故のみ。

蚵操子曰、余毎病輓近世敎化無具、而閨壼爲甚、乃若阿婉之壯烈英偉、亦可以立懦砭愚矣、寧忍泯而勿傳邪、明季阮太沖、憤將士孱懦不能制流賊、雜取古女子婦人建義旗滅盜賊事、著女雲臺二卷、以諷時、余於是傳亦猶太沖之志然、彼則專勵鬚眉男子、是爲小不同耳、

蚵操子は、侗庵の別號なり。この論贊は、二小節に分つべく、起首より寧忍泯而勿傳邪にいたるまで、此傳を著はし、所以を敍し、近世の風俗日に廢頽し、敎化の材料となすに足るべき者なく、閨閤婦女の事に關して、特に然るものありといひ、婀婉の壯烈英偉を推して、九鼎大呂の重きを爲さしむ。懦夫を起たしめ、愚者を針するに足るもの、寧ろ泯滅せしむるに忍びむやといふに至りては、作者の微意、正に此に存すと謂ふべし。後段さらに明末阮太沖が女雲臺と題せる書を著はせしことを敍して、陪客と爲し、襯映せしむ太沖の志は、之を借りて時の將士孱弱にして爲すなきを諷するに在り、然れどもこの作者の意は、必ずしも鬚眉の丈夫のみに限らず、一般世上の男女を警醒せむとするもの、この處、少しく同じからざるのみ。そも世敎に裨益ある文字は、古しへ漢學者の理想とせし所、この種の文を作るに際しては、極力筆を驅るを常とす。莊重雄偉、固より其所といふべく、讀者は之を純粹の文學的作品として見ること無く、敎訓的旨意を領知するを先とすべく、かの彫章繪句、花あり實なき閑文字に比すれば、その高きこと、一等なるを疑はざるなり。

土佐日記講義（六）

文學士　鹽井雨江

八日、障ることありて、なほ同じ所なり。今宵の月は海にぞ入る。これを見て、業平

の君の山の端にげて入れずもあらなむといふ歌なんおぼゆる。若し、海べにてよましかば、波立ち支へて入れずもあらなむとよみてましや。今、この歌を思ひ出でて、ある人のよめりける

　てる月の流るゝ見れば天の川
　　いづるみなとは海にざりける

とや。

○障ることありて、云々。八日の日も、差し支へありて、船を出だし難くて、やはり大湊に泊り居るとなり。○今宵の月は海にぞ入る。今夜の月は西山に没せずして、海中に沈み入るとなり。○これを見て。月影の海中に傾き沈むを見てといふことなり。○業平君。彼の有名なる六歌仙の一人在原業平朝臣のことなり。○山の端にげて。業平朝臣の歌に「あかなくにまだきも月の隠るゝか山の端にげて入れずもあらなむ」といふあり。その歌をさしたるなり。未だ我が心に充分に見あかず満足せぬに、早くも月は山の端に傾き隠るゝことかナアー、いと惜しや、願くは、山の端が逃げ避けて、その傾き隠れんとする月を入れずしてありたしと、傾く月を惜しみたる心なり。今夜の月の海に入るを見て、業平朝臣のこの歌のことを思ひいだすとの事なり。○もし、海べにて、云々。若し、海邊にて詠まむならば、「あかなくにまだきも月のかくるゝか波立ち支へて入れずもあらなむとよまるゝであらうかナアーといふことなり。惜しくも海中に沈む月よ、願くは、沈まんとする月を、波の立ち支へて、沈み隠れぬやうにしてほしやとなり。○ある人。貫之自身なるを、ある女の書ける日記の事にしたれば、かくある人とのみ。わざといへるなり。○てう月の歌の意は、照りかゞやく月も、天を流れて、海中に沈み入る。シテ見ルト、天にある銀河の流れいづる河口も、やはり海にぞありける」といふ事なり。○とや。とやうむ或る人がよまれたといふ意なり。ある人のよみたる歌を聞き覚え居りて例の女

の書ける筆づかひなり。

九日。つとめて大湊より那波の泊りを逐はんとて漕ぎ出でけり。これかれ互に國のさかひのうちはとて見送りに來る人、數多が中に、藤原の言實、橘の季衡、長谷部の行政等なん、御館より出でたまひし日より、此所彼所に追ひ來る。この人々ぞ志しある人なりける。此の人々の深き志しは、この海にも劣らざるべし。

○つとめて。其の翌日朝早くといふとなり。其の翌日とは、九日の日よりいふにあらず。前夜やがて八日の晩よりいふなり。故に、朝早くといふ意にのみとりおきてよし。○逐ふ。廿八日の條に註せり。九日の早朝に、大湊より那波の港をさして船を漕ぎ出だしたりとなり。○國のさかひのうちはとて。國の境の内は、何處までも貫之を送り行かむとてといふ事なり。○御館より出でたまひし日より、云々。國守たりし貫之が、國府の住居を出でたる日より、此の藤原の言實等の數人は、貫之の別れを送りて、此處彼處に、貫之のあとを追ひ來たれりとなり。御館といひ、いでたまひしといへる詞は、例の女子の書ける日記にしたればなり。○此の人々ぞ。此の藤原の言實等の數人の者は、人情のある人なるよと、賞美たるなり。○此の人々のふかき志し、云々。此の藤原の言實等數人の者の人情の深き事は、此の海の深きにも劣らず。此の海の如く深しといふ事なり。これも、其の人たちの人情の深きをほめたるなり。

これより今は漕ぎ離れゆく。これを見送らむとぞ、此の人どもは追ひ來ける。

これから、いよいよ遠くの泊りをさして、今は此の土地を離れて出船す。されば、此の人情深き人々は、此處に貫之を見送りせむとて、こゝにまたあとを追ひ來たれりとなり。

此のあたりの文、このこれといふ詞を幾度か重ねたるところ、趣あり。

かくて、漕ぎ行くまに〳〵、海のほとりにとゞまる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふことあれど、かひなし。かゝれど、此の歌を獨言にしてやみぬ。

　思ひやる心は海を渡れども
　ふみしなければ知らずやあるらむ

○かくて、船の漕ぎ行くに従つて、岸は遠くなれば、海邊に立ちとゞまりて見送り居る人の影も遠くなりたり。舟に乘り居る我れ〳〵の影も、此方の岸の人〳〵よりは遂に見えずなりぬ。岸に立ちて見送る人々も、今は悲しや惜しやなどいうてならむ。船にのり居る我れ〳〵も、悲しくなつかしく思へども、今はせん方もなし。思へども、心はとゞかず、言へども聲は達せず、あはれ、せん方もなや。今更に誠に惜しく悲しく思へども、せん方なければ、この歌を獨り言にうたひすてたりとなり。

歌の意は、惜しくなつかしく人々を思ひやる我が心は、海上はるかに彼方に通よへども、文をやるべき便りの無き故に、それをつぐるによしなければ、彼方の人々は、その惜しくなつかしく思ひやる我が心を知らないであらう、誠にせん方なきことよとなり。

此の一段、貫之が文才を示し得たる妙筆といふべし。文簡にして、趣味ふかく、筆工まずして自ら妙をきはめたり。別れゆく船出の情景、僅々數句の間に、げに面白くあはれに言ひ得たり。

かくて、宇多の松原を行き過ぐ。其の松の數、いくそばく、いく千歳經たりと知らず。もと毎に浪うち寄せ、枝毎に鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに、たへずして、舟人のよめる歌

　見わたせば松のうれ毎にすむ鶴は
　千世のどちとぞ思ふべうなる

とや。此の歌は、所を見るに、え勝らず。

○かくて、船は宇多の松原の海邊を過ぎ行く。船より見わたせば、其の松原に生ひたる松の數は、幾何といふ數を知らず澤山に生ひ、其の無數の松は、いづれも古木にて、幾千年を經たるものなるか、わからぬほどなり。老松の數多並び生ひたり。其の松の木もと〴〵には、波がうち寄せ、その松の枝〴〵には、鶴が樂しげに飛びかひ遊び居りて、いと面白しとも面白きけしきなり。船の中の人が、あまりの面白さにたへず、佳き風景にうかれて、一首の歌をよむだ。其の歌は、「見わたせば松の木ずゑ〴〵にとまりて居る鶴は、其の松を千載の友と思ふべき樣なり、あはれゆかしき松よ鶴よ」とやらむいふ歌なり。此の歌は、此の松原の面白き眺めには、勝る能はず。此の松原の景色には、とても及びがたしといふ事なり。○舟人といへるは、船中のある人なり。貫之にはあらざるべし。○松のうれ。うれとは末の意にて、故にこゝにては、松の枝なり。○どち。互ひに同類なりといふ意にて、されば、仲間、友といふ意なり。○え勝らず、勝る能はず、勝つこと出來ずといふことなり。

かくあるを見つゝ、漕ぎ行くまに〳〵、山も海も皆昏れ、夜更けて、西東も見えずして、てけのこと、檝取の心にまかせつ。男も、ならはぬは、いと心細し。まして、女は船底に頭をつきあてて、ねをのみぞなく。

○此の段の意は、かかる美しき松原のけしきなど見ながらに、船にて漕がれ行く程に、何時しか山も海も、皆、暗くなりて見えず、夜は更けゆきて、いよ〳〵四面は眞暗になりて、西も東も見えずして、いと淋しくものすごし。またいかなる天氣とやなるらむ、明日の天氣はいかならむなど心配せらるれど、何にを思ふもかひなきことなり。海上のことなれば、天氣の事など皆船頭の心にまかせて置きつ。たゞ船にまかせて漕れ行く。男も、海上に馴れたる人は、さもなけれど、海路になれぬ男は、いと心細し。ましてや、かよわきならひの女子どもは、いと心細く恐しくおぼ

えて、船底にうつぶして頭もあげ得ずして唯泣き居たりとなり。○昏れ。暗くなりて見えぬ事なり。○西も東も見えずして、此の句の下に、「いと心細し」といふ句を入れて見るべし。○てけ。天氣の事なり。「檝取の心にまかせつ」の下に、「たゞ船にまかせて漕れゆく」といふ如き語を足して見るべし。○頭をつきあてて。うつふして頭をあげかねたる風勢なり。恐れて泣きふしたるなり。

かく思へど、舟子檝取は、船歌うたひて、何にとも思へらず。そのうたふうた

　春の野にて音をばなく。若薄にて手をきる〱つんだる菜を、親やまぼるらん、姑やくふらん、かへらや、よんべの髫髮もがな。錢こはん。昨夜の菜を、虚言をして、賖わざをして、錢も持て來ず、おのれだに來ず。

これならず、多かれど、書かず。

○此の段の文意は、かく心細くも恐しくも思へども、海上になれたる船頭どもは、面白さうに船歌などうたひて、何んとも思はず。其の謡ふ歌の一つをあぐれば、左の如きものなり。

　春の野にて聲をあげて泣きて居る者あり。其の泣く人の言ふことを聞けば、春の野の若き薄にて、我が手を切るをも厭はずして摘んだる菜よ、あはれ、それを親が食はんと欲すらむ、姑がくふらむ。昨夜の彼の少女よ來よかし、菜の代價を請求せむ。昨夜の菜を借りてもちゆきたるまゝ、虚言をつき騙をなして、その代價も持て來ず、自分も來たらず。だまされた、殘念した。老父母にくはせまゐらせむ菜を、浮薄なる女にだまされて、いたづらにとられてしまつた。此の樣な歌を、船頭どもは謡ふなり。此れのみならず、他にもいろ〱の歌をうたひたれど、此處には、その一つをあげて、他の多くは書かずといふ話しなり。○船歌。艪櫂を押しながら、船頭どものうたふ歌なり。○まぼる。ま欲りにて、食ひたしと欲する意なり。まは調の爲めにそへしのみ。これを貪る意

にとかれたる説、普通なれど、これは欲する意にとかでは、一首の意きこえがたし。姑とは老母をさしたるなり。○かへらや。歸へらむやといふことにて船歌の噺の節なり。○髫髪髫髪少女の略言なり。少女のことなり。項に髪を結び居る童女の姿より、かくは少女の名とせるなり。此處にては、遊女などの假りに少女の姿したるなどにもやあらむ、その遊女にだまされて、折角の榮をとられたるを惜しむ歌の趣向なり。髫髪も、かなのもがなは希望の詞にて、「少女よ來よかし」といふ如き意となるなり○賂わざ。今いふ騙の如し。物を借りて、その物をもかへさず代價をも拂はぬをいふ。

これ等を、人の笑ふを聞きて、海は荒れど、心は少しなぎぬ。斯く行き暮らして、泊りに至りて、おきな人一人り、たうめひとり、あるが中に、心地あしみして、ものも物したまはてひそまりぬ。

○これ等の船頭どもの歌のをかしさに、船中の人々のおもしろげにうち笑ふを聞きて、海上は波風の荒れど、我が心は少し靜まりたり。かく海上に一日を暮らして、那波の泊りにつきぬ。乘り合ひの中に一人の老翁と一人の老女とは、氣もちが惡しくして、食事もせられずに、そのまゝ寢しづまりたまひたり。

○心はすこしなぎぬとは、人々のをかしげに笑ふをきゝて、やゝ我が心の慰められ、怖しき心地のやゝ紛れたるを、海の荒るゝに比べて、洒落れて、心はなぎぬといひたるなり。○たらめ。老女をいふ。

○「とまりに至りて」といへる筆は、やゝ面白からず。此處にて、いたりつといふやうに、筆をきりたきところなり。いかにぞ。ゆきくらして至りてといふやうに、かくいひつゞくる筆づかひは、句などをいたはらぬ古文の風なれどこゝにては面白からず。

十日、今日は此の那波の泊りにとまりぬ。

○十日の日は一日那波の泊りにとまり居りたりとなり。

小說

雙々燕

藤本藤陰

酒望子（上）

太う古りたる事にはあらで、世のうつり代れる頃なりき。武藏の江戸は、東京と稱を變へて、百事一新に就くこの大都より、程とほからぬ下總の行德は、名にながれたる利根川の、東京灣に注げるそが東岸にありて、房總の街道なりけるが、すべてなほ往昔の儘にて、旅館、休所、軒を並べ、こゝに宿れる旅客、晝食の支度をなす者、絶え間なくして、日に幾千の數や估れる名物の、中山蒟蒻よりも多かるべし。

こゝの巷はづれの堤に、簷高く酒望子を下げて、門の障子に筆太く御休所としるし、傍邊に小く三德と書いつけ、鯔の煑びたしに、豆腐の羹ものなどにて、酒と丼めしを鬻る店あり。あるじの名を德右衛門と稱び、家號を三好屋といふより、人は略めて三德と呼びけり。是はつひに通稱の也似くなりけり。

さるは、主人の性として、常に己を驕らず、哀憐を人に被けて、義に強き心さへありければ、現に三德の稱にも適ひたるべし。よはひは六十ばかりにして、妻も白髮生ふる老媼なりき。若き時より子なくして、是ぞといふ親族もなかりしかば、人は養子せんことを勸めけるも、德右衛門翁、禿頭を振りて、いや、尊慮は忝なう御座れど、天の我們夫婦に子を授け賜はらぬのも、世にいふ、過世の劫報などゝ言ふにても御座らう乎。それを忤つて、無理に養嗣など爲やうとは、懸けても念ひませぬ。世間を觀ますに、どうも養子の順熟するのは鮮いやうにて、畢竟他人を子とするのが無理な理由で御座るから、子のない爲に家が斷えますとも、自然の事なら詮方御座らぬ。なまじひ養嗣をして氣を痛めるは、隨分痴果た事で

御座ると、絶えて索めんとも做ざりけり。

代々傳へたる田園ありて、人に小作せしめ、家も廣やかにして、店につゞく母屋は、三席乎、四席ありて、庭には、厩もあり、風呂を焚く所もありて、壯者一人をつかひ、老夫婦、客を大事にして、酒の銚子をかへ、飯を出すに、氣も尻も輕くして、休らふ隙もなく勞作きたり。

酒望子（下）

足ることを知れば、齷齪として勞作けるにも、おのづから心に餘地ありて、人に哀憐をかくるは、却て身に報いくる幸福の媒にして、三德の翁は、世を樂しく人に敬はれて、殖さんともせざる家貲は、年々に延び、子なくして圖らずも子あるに臻る。

彌るは、土地の若者などの、酒うち喫みに來て、もてる錢の足らざらんとも、心よく受領て、他日還しに來つれば、否、彼錢は算計に入れまをさず。拂はつしやつた丈を入りにして、帳面を締めまをしたれば、今餘分のものを戴くやうなし。酒とまをす的は、最初に念つたより、過し勝ちになるものにて御座るから、顧客さまには、毎回算計の足らなくなる事が御座る。いや最う、夫は道理なる事理ゆゑ、御携帶丈を戴いて、帳面を極め、不足を貸しにいたし置くことは、老翁絶えて爲ませぬから。と如何に言ふも領收らず。

旅客などにても、路銀の匱しからんやうにて、晝食の支度などするに、酒好む者は、酒をも請ひて出さしむれど、忸怩として、多く費らざらんやうにと、把る杯を頭と共に傾けて、菜のものは、廉からん物を撰みて、一品よりは取らざるを翁は、氣の毒に思ひて、算計をいくら乎減らして領收も常なり。すべて貪らざれば、旅客も名に聞きて、三德の酒望子を訪ねて、大概はこゝにて晝食の支度をしたり。

時しも嚴冬の天に雪氣をもよほして、密雲低く垂れ、朔風凜冽として、堤をすぐる旅客は、笠傾けて天うち仰ぎつゝ、歩行をいそぐ未刻下り、果然六花空に飜り、鵞毛をひき挽りて、みだし飛ばせたらんやうに、狂舞一番、墜落し來つて、野も山も一面の銀世界と變じたり。

翁は起ちて、母屋の戸などを引き閉て、四五日前から催して居たんだから、づんと降るだんべえ。老媼どの、最う客人も見えられまいから、慢々と店を旁づけさつしやれ。と圍爐裏に麁朶うち燻べて、甚麼をか考がへ居けり。媼は涕を啜り〱、是ぢやあ復た來年も豐年で御座りますべえ。と床几を旁寄せ、土間に吹き入る雪を拂へば、壯者は腰障子を中にして、左右より戸をひき閉て、笠うち冠りて、多く積もらぬ程にと、家の前の雪を拂ふもおもしろ氣に、雪と倶に舞ふが也似し。

雪の日（上）

翁の胡坐をくみて、煙草をくゆらす圍爐裏の向ひに、媼は冠れる手巾も脱らずに坐りて、夕食にはまだ早う御坐るが、退屈さつしやらうから、熱くして始めさつしやつては。と言ふに、自己も爾う思つて居たのだ。なかなかに寒氣が増して來たから、夫ぢやあ一銚子煖て、羮ものでも下さつしやれ。と圍爐裏の隅に串ざしにして差しある、蕃椒を炙りて、媼のもち出す膳箱に載せある、ひしほの嘗物に寸斷り入れ、羮ものにも入れて、これを餚に、手酌にて傾くれば、媼は、酒を まざるから、藥鑵の湯を汲みて、醤を一箸賜さつしやれ。と掌を出し、おう、大層に蕃椒を入れさつしやつて。爾やうに辛いもの食べ さつしやるから、猶々這の藥鑵を見るやうに倣らさつしやるのだ。と笑ひぬ。

あはゝゝ。どうせ最う花を尋ねて、香を追ふといふやうな春は、疾うの昔となつて、禿顱に戀想を懸けるといふ女も無えだから、一向頓着しねえだ。子はなし、齢は積もつて、今日の雪のやうに消えるを俟つ身は、斯うして一杯傾ける中が、極樂淨土へ往つてるやうなものだ。と興ず。

一銚子が二銚子、三銚子となりて、いつか皺びたる面も、紅う澤々となりて、壯者が、竈の前に身を煖めつゝ、こくり〱と居睡りてゐけるを呼びて、如何だの、雪は、づんと積もつたらうの。と跟々き起ちて、土間に下り來たり、腰障子を半開けて、外面を眺め、おう、積もつたわ〱、なか〱止みさうも爲ぬ。是が解けちやあ、明日

は大變だんべえ。しかし能い景色だ。烏が一羽二羽飛んで行く外は何も通らぬ。いや、爾う許でもない乎。何んだ、幼い兒のやうだが、親か知らん手を曳いて來るやうだが、乞食ぢやあ無からう。いや、御武家のやうだ、雪が吹き巡つてよく分らぬ。嫗さま、來て見さつしやれ。

どうだ、御侍のやうだの。何んだ、よく分りましねえ、困つたもんだ。ほい、轉んだ、やれ〱。おう、幼い兒が起さうと爲るやうだ、え丶、一緒に轉んで了た。嫗どの、兩個とも起きずに居るが、凍えて夫れ斷りになりやあ做まい、嗚呼、如何したの歟、往つて見て來やう乎の。うんにや、爾ういふ者ではねえ。やあ、起きた〱、能かつた〱、起きて何だか這裡を指さし丶て來るやうだ。

雪の日（下）

紛々たる雪を冒して、堤にさし懸りたる武士體の者が、幼きものに手を曳かれつ丶、雪に辷りて乎、撲地うち仆れたるを、幼き者は、周章て扶け起さんとして、這も亦うち仆れ、迭に起きんとして復た仆れ、渾て是れ温飩粉に裹まれたる人間の餅の也似くになりて、やうやく身を起し、幼きものは、再び手を把りて、何身も痛めは爲ません乎。と問ひ、何ともない。といふに喜びて、那所に見えますのが、御父樣の言はれます家のやうで御坐います。と指さし丶て、這方を投して來たりたり。

三德の翁は、溜息つきて、まあ宜かつた。持病などの發りて、倘もそれ斷りになりは爲ぬ乎と、大概に氣を傷めた事ぢやあ無かつた。這裡を指さし丶て來るからは、我が家を知れる者ならん。と近接きけるをうち戍り視れば、武士體のものは、年齡五十許にて、幼きものは、十二三にもならん男兒にて、正しく是れ親子と見えけるが、知れる者にはあらで、身の扮裝は、花色木綿の紋章つきの衣服を端折りて、帶の上に三尺を締め、柄袋かけたる大小の刀を佩び、脚には、紺の脚絆を着け、素足にして革鞋を穿きたり。幼き者は、鼠小紋の衣服に、這も大小刀を佩びて、小き袱包を脊負ひ、古びたる白足袋に、

草鞋を穿き、倶に筍笠を冠りたり。
翁の門口に佇立ゐけるを看て、男兒は走り來たり、障子に三德と書るせるを覩て、喜ばし氣に冠れる笠を脫き、あのう、御酒はありますか。と問ふも溫和し。翁は、手を下げて、へえ／＼御坐ります、御入り成さつしやれませ。と傍よせたる牀几を出し、若者に麁朶をもて來さしめて、土間の火鉢に火を燃さしめける時、武士も至りて、笠を脫ぎ、身に積もる雪を拂ひ、免さつしやれ。と土間に入れば、翁は小腰を屈めて、嘸御難儀に御坐られましたらう。何卒御懸け下されませ。と牀几を火鉢の前に寄せ、若樣も御足や御手をお煖めなさつしやれませ。さぞ御寒う御坐られましたらう。

憂き旅（上）

苟且ならぬ翁の接待に、武士は懌びて、それは千萬忝ない。恁いふときは、火が何よりの馳走である。と手をさし翳し、男兒も傍に懸けさせて、主翁、氣の毒であるが、どうか一合熱くして、後で飯を一椀づゝ出して吳れ。餚は何も不用ぬ。梅干を用意して參つたから。と酒と飯ばかり誂へたり。

壯者は呆れて、武士の顏を覩護りけるを、三德の翁ほゝ咲みて、檀那樣は、御武士氣質の猛く坐つしやれど、御寒い時に酢いものを食らつしやつては、餘計御寒く成らつしやられませう。と言ふを、いや／＼、武士は、握飯に梅干が、去來といふ時の兵糧であるから、一向に苦しう存ぜぬ。しかし年齒には叶はんもので、氣はなか／＼に屈せぬ積もりも、今日のやうな時には、幼い息子に手を曳かれなども致すから、殘念に思ふことが每回ある。と語れり。

無作法ながら、檀那樣には御幾歲に坐つしやられます乎。拙者は、丁度である。それは御健に坐つしやられます。若樣は、御十二位にも成らつしやられます乎。息子は、當年十三歲に相成るが、いや最う、女子を見るやうに效ない奴で、ものゝ用には立ちさうもない。いえ、怎麽いたしまして、御柔和なのが、生意氣にさし出ますに優りまして、却て御賴もしう坐つしやられます。と媼

に、早う御銚子を熱くして、何乎、わり合せの東西を煖めて、御二人前さし上るやうに。と命けぬ。

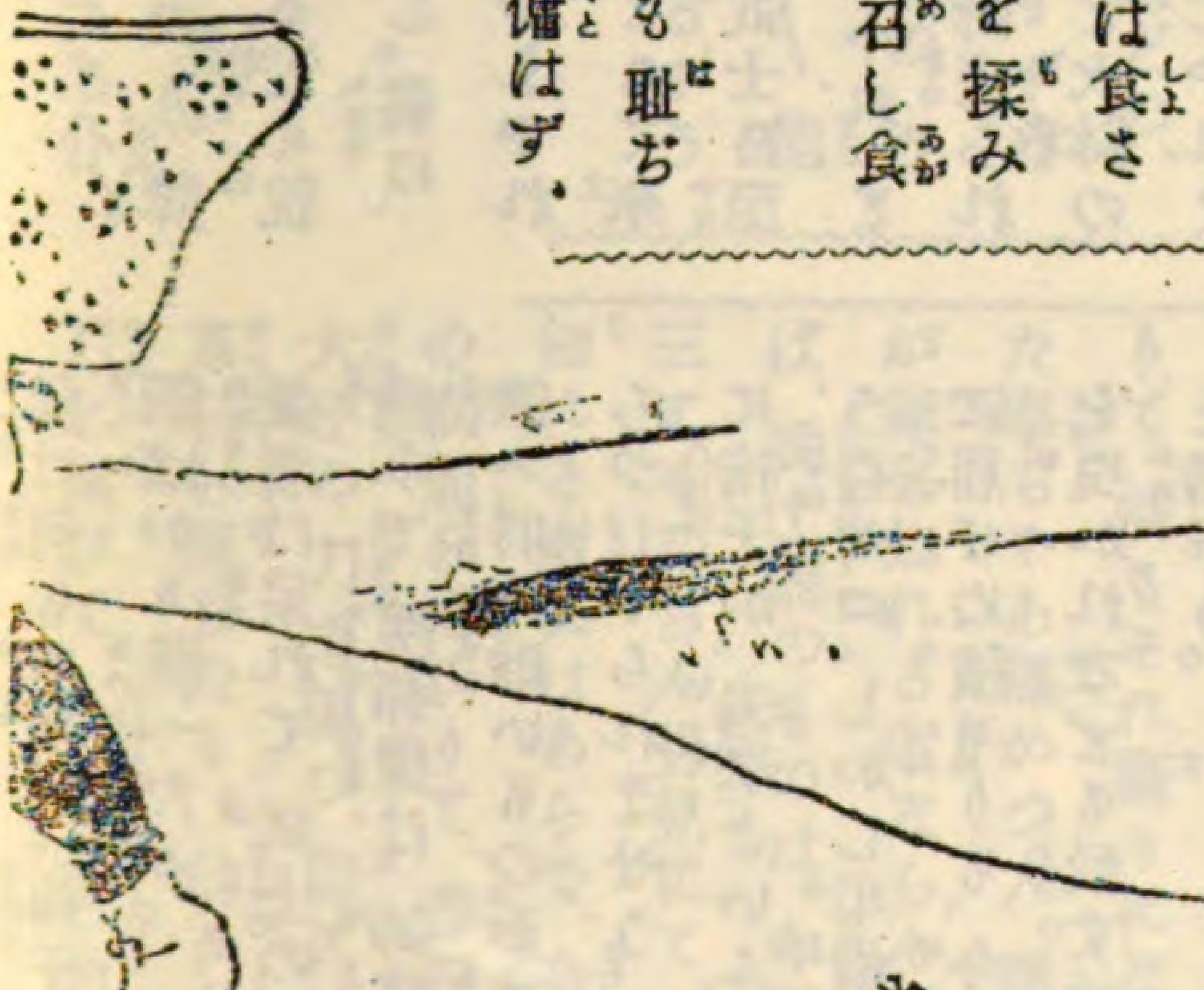
婢は、膳こしらへをして、軈てもち出す胡桃足の膳に、鯷と葱の羹ものを汁椀に盛りて、小鯵の煮たると大根を輪ぎりにして煮たるを煖めて、向附の皿にもり合はせ、銚子は別の盆に載せ、杯を添へて、武士と男兒の間に並べけるを、翁は、何卒冷めませぬ内に召食れませ。と勸めぬ。

武士は、膳部を觀て、主人、かやうな餚は、拙者共は食さぬから、どうぞ引て呉れ。と斷るゆゑ、翁は、手を揉みて、今日は御精進の日にても坐せられて、魚類は召し食らつしやらぬので御坐られます乎。と問ふ。

いや〳〵、精進など致す日はないが、實は、言すも耻ぢ入る次第ながら、路銀が逼迫にてあるゆゑ、馬も傭はず、幼い息子にも歩かせて、中食なども、簡便になす家へ行き、當家の事を途中で承はり、雪を冒して參つた次第であれば、どうぞ最前頼んだ通り、酒一銚子と飯一椀丈にして下さつしやい。梅干は、竹の皮包にして、息子に持參いたさせたれば。と出さしめけるに、男兒は、面赧めながら、袂を搔い捜り、考へて、更に懐をかい捜りて、御父樣、梅ぼしは、先刻轉んだ時にでも落しました乎、御坐いません。と早涙ぐみて、叱られやせんと、恐悸したり。

憂き旅（下）

芝寸歩



翁は、いとゞしく氣の毒に念ひ、若樣、御遺失なされましたら、老爺が幾何でも進ぜますから、梅干ぐらゐに御心配さつしやる事は御坐りませぬ。檀那樣、老翁めは、少し世人とは異りまして、顧客さまには、往々御勘定などの足りなくなる事が御

坐いますも、御客様をもつて家業といたし居りませば、偶然爾やうの事が御坐いませばとて、夫を蔑かうなど丶は決して致しませぬ。人としては、時に我れにもあらず、困窮の境界に墜ちいる事もあるもので御坐いますから、同胞相憐むとまをす心にて、爾やうの御客様に



は、渾て御勘定を蔑かずして、進ぜまをして居ります故、失禮ながら、御配慮下されず、召し喫らつしやつて下され。鯷の羹ものは、御寒さを凌がれて、梅干には優りまをし、若様にもお煖いもの丶方を御喜び做さつしや

れませうから。と勸めたり。
武士は、翁の厚志を得難きことゝ感し、辭を低うし、他を突き仆しても、我れを利さうと計る世に、主翁のやうな仁者は誠に珍らしく、佛の慈悲といふとも、その樣には御坐るまい。さばれ、代料を拂はずして飮食し、塵芥の功もなくして饗應に預るは、身共、武士の片端に列なり、耻も知らず、貪るに似て、何分意に安からず存ずれば、達て辭退をします。と斷れり。
翁は、耳の邊を搔きつゝ、爾やうに仰しやられましては、老翁めは、唯々當惑いたす外御座りませぬ。と詫くべくも非ず。老媼も出で來たりて、只管勸むるから、夫までに言し吳られる厚意を無下にいたすも本意にあらず。爾は、代料を借り置き、再び參らん時、酬いをすで御座らう。と言ふを、翁は、いや〳〵、爾やうに御坐られては、老翁めが法をもつて酒餚を賣りまをすやうにて、些細の食物を御堅く仰られる程の東西では御坐りませぬ。と老媼に羹ものなどの冷めけるを盛り換へさせけるに、今は爲ん樣なくして、厚く歎びを述べ、盃を把りけるから、翁は、火に粗朶を添へて、どうぞ御緩りと召し喫られませ。と立ち去りて、圍爐裏の傍にて煙艸をくゆらし居けり。
男兒は銚子をもちて、父の前に來たり、腰を屈めて酌しけるを、父は重ねて三杯傾け、後は自己が篩いで喫むから、貴樣は、老媼に飯を出して貰ひて前に食べよ。と言ふを、御父樣の食らつしやつてから戴きます。と傍に蹲踞して、なほ銚子をもち居ける樣子の愀々しく、禮義を守る男兒が、容貌さへも一段美しく窺えて、翁は、心の內に感じ入りけり。

草　枕（上）

飢ゑては食ふものを擇ばざるに、かしこの羹もの、蘿蔔の煮たるを煖めたるなど、時にとりて不味からぬかは。
武士は、酒を飮み了り、飯を食はんとし、男兒にも共に食せんやうに勸め、羹ものを吸ひ、鰺など首より食ふに、

只是れ口の迯げん歟と、遠し氣なり。男兒は、父の箸を把りける後に把りて、纔に羙ものを吸ひ、餚には手も着けざるから、老媼は勸めて、若樣、お魚に骨が有つて、食べさつしやり難くは、老婆が解して進ぜます可え。と言ふ。

武士は制めて、否、婆々どの、搆はつしやるな。息子は、一體小食にて、菜のものも一種よりは食さぬから。と斷るを、爾やうでも、道を歩かつしやると、お腹の空くもので御坐いますから。と鰺を解して勸むるを、飯も一椀より食べざれば、老媼の心盡くしも徒らになりけり。

御武家樣の若樣は、食べさつしやる物まで、御行義よく坐つしやれど、這邊の兒等は、眼さゐ白黒として、口一ばいは推し入んで、食べさせて置きますと、五杯も十杯も食べます。大食いたすと魯鈍になると言ひますが、違ひ御坐いません。と手を口に當て、ほゝ／＼と笑ひて、茶を進め、膳を引く。

翁は、ふたゝび出て來りて、誠にお麁末に御坐りました。と謝ぶるを、いや、遠慮なく馳走になりました。腹も滿ち、寒さも凌ぎ、忝なく存じます。と酒と飯の料は拂はんとて、諮ねけるを、怎麼いたしまして、御路用も御逼迫の趣に承まはりませば、聊かにても前途の御補足に成さつしやられて下されませ。と例の一徹の翁、さら／＼肯かずして、老妻に梅ぼしを纏包にさせ、男兒に授けて、若樣、今回は御遺失なさつしやらぬやうに。と打ち笑ひ、外面を瞻め、檀那樣、今日は、那邊まで御坐られます歟、雪は倍す／＼降り頻りますから、何か着さつしやらんでは、所詮行かつしやられません。と簑を取出し來たりて、檀那樣、これは小作の者に貸します粗末な品で御座りますれば、雪が止みましたら、途へ御棄て下されて、若樣には、小さい方を着させて行かつしやれませ。と勸むる厚意の亦辭みがたくして深く謝し、息子にも着せしめて、刀を佩び、笠うち冠りて外面に出でたり。

吹きめぐる雪は、波濤のひるがへり飛ぶに似て、面を向くべうも非ず。皚々たる堤上、人の往來も絶えて、脛をも埋めん深雪を踏み、一歩なりとも立ち出でがたく覩えたり。武士は、氣を猛にして、男兒の怖れけるを勵ま

し、途中で日は暮れやうが、雪にて明るければ、船橋の宿まで辛抱して步べ。そこにて泊りに就くから。と言ふを、御父樣、船橋とやらまでは、何里ばかり御坐います。と問ふから、爾う、二里半許もあらう。と告ぐれば、どうして其樣にては、這の大雪の中を。先刻のやうに復た一緒に轉んで、それ斷りに凍えて、死んで了ひます。と吹き來たる雪風に笠を奪られじと、兩手に押へ、はら〳〵と淚を墜とせり。

草枕（下）

老夫婦は、門邊に起ちて見おくりしが、諸共に男兒をいとしく思ひ、既に武士の十間ばかり步み出でたるを、翁は呼び止めて、檀那樣、所詮この雪では、那方にても行かつしやる事は、なか〳〵の御難儀にて御坐られます。是非ともに今日行かつしやらんでも宜い事なら、自己方に幾干も空た室が御坐りますから、今宵は御泊り成されて、明日雪の霽れてから、御發ちなさつしやられましては。と言ひたり。

武士は、五六步立ち戻りて、誠に忝なう御座る。是非に行かんといふ次第でも御坐らぬ。意の外なる風雪にて、是にては、效ない息子には、一里とも行くことは成るまいと想ひ、實は當惑いたし、如何せんと思案も付かず、行かれる丈行つて見やうとは思ひますが、儻し主翁の仁心にて、一夜の宿を貸して下されば、實にこの上もなき幸福にて御坐りまをす。と言ふゆゑ、何爲室か幾席も唯空てゐます事で御坐りますから。と急ぎ壯者をして盥に湯を汲ましめ、さあ〳〵、若樣も早う御坐られて、草鞋を脫がつしやられ、御足を洗つて上らつしやれ。と老夫婦慇ろに世話したり。

武士は、只管謝し、息子は、憙しさに耐へられず。足を洗ひ、裳裾を下し、翁の導くまゝに、父に隨ひて母屋に至れば、蓆六疊ばかり敷ける小室を今宵の臥房として、こゝに佩刀も旅裹も置きしが、翁の、しばらく茶の間に御坐られて、圍爐裏にて御煖まり成さつしやれ。と勸むるから、復た父に附きて其裏に至れば、茶を汲みて進め、老媼は、甘薯の蒸したるを盆に盛りて進むるも憙し。脫

ぎ置きたる、脚絆や足袋は、壯者をして濯はしめ。土間の火鉢にて乾かせ置くもゆき屆きたり。

武士も、男兒も、老夫婦の懇切なるに、今は百年も親しめる心地しつれば、老夫婦も、武士の心直にして、息子の柔順しく孝心なるを、ゆかしく捨てがたく念ひたり。爾れば、翁は武士に問ひて、檀那樣は、何方樣の御藩にて、御姓名は何と仰られます。と諮ぬるから、拙者事は、館山の藩にて、澤邊平兵衛とまをす者にて御坐るが、唯今は浪人にて、今般在所の生家へ息子とも〲罷り歸るにて、息子は、千代之丞とまをします。と告ぐれば、爾やうで御座られます乎。御子樣は、千代之丞樣の外に猶坐せられます乎。と問ふ。いや〲、這奴一人にて御坐る。主翁の息子殿は、別家にてもして居られ、當店は、隱居商賣といふにても御坐る歟、夫にしては、大層に家が廣う御坐るが。と四邊を覩回しつゝ訊ねたり。

夢の世（上）

三德の翁、ほゝ咲みて、渾て子とまをす者は御坐りませぬ。當座は、自己が創めましたのにて、婆々と餘命を送つて居りますが、子の御坐りませぬも、結局氣樂にて御坐ります。と言ふゆゑ、爾ればとて、人の身は、常に健全なりとも、卒爾に病痾の發することもあり。命數致れば死は免れぬもので御坐れば、豫て家を嗣ぐ者を定め置くが、世間の風習にて御坐るが。と更に訝しみて、諮ねたり。

翁は、例の自然に任するといふ事を論じて、天意に乖る無理に養嗣をいたしますとも、元より生の子にて御坐らねば、若樣のやうに溫和にして、御孝心ふかき者のあるべきにも非ず。されば、翁媼にて、斯くいたして一生を送るの心安きに如かず。身代を讓る者なければ、人の困られる時、應分の力を添ふるは、養子に讓らんと苦しむに優り、娛しくして、幾多の人の欣ばれますにて御坐れば。と告ぐるに、平兵衛、翁の世の人に異なるを倍す〲感じ、既に日は暮れはてゝ、燈火を點じければ、辭して母屋に至れば、老媼は、夜の具を出し、被けん物を多くし、唐銅の火鉢に火を埋めて、枕邊にさし置き、千

代之丞に厠の在りける所を敎へ、手燭を行燈の臺に載せおき、何なり御用の有らつしやる時は呼ばさつしやれ。と隈なく意を注けて、立ち出でけり。

平兵衛は厚く謝し、老媼の出でゆくを送り、埋め火にて手を焙りつゝ、獨言て、嗚呼、世には親切な者もあるものだ。人は爾うなくては成らん。老翁が無理に養嗣を做ぬと言ふもなか／＼に面白い。家貧をもつて困る者を助けるとは、無欲にして侠氣ある者だ。武士にても、狼見るやうに貪りて、飽くことと知らぬ役人もあり。犬のやうに媚びて、羞辱も知らず、身の出世を計る擬侍もある。是等の儕は、こゝの翁の風下にも立ち難きものだ。と嘆息して、千代之丞に、こゝの翁媼が恩は、懸けても忘るなよ。己は在所へひき籠んで、また這裡らを通ることも無からうから。と語げて、明日は雪も晴れやうから、早朝に發ちて、復と厄介になるまじきとて、疾く寐ねんと、老媼がならべ敷きたる臥蓐に、平兵衛まづ横になれり。

千代之丞は、我が被衾の二枚重ねてありけるを、私は這樣に被けては重う御座いますから。と一枚父に被けんとするを、なに、自己もこれで寒くないから汝被けろ。と言ふ。夫なら、御足でも擦りませう。と言ふを、それも宜い。汝も草臥たらうから早く寐ろ。と言はれ、やがて臥蓐に入りたるが、實に草臥居ければ、直に眠りたる其夜の拂曉ごろ、千代、千代。と父の呼ぶに眼覺むれば、あゝ苦しや／＼。と喚きて、水を一はい呉れよ。と言ひけり。

夢の世（下）

千代之丞は、駭かぬものかは。眼を擦り、跳び起きて、御父樣、どう成さつたので御座います。と遽しく問ふ。うむ、苛く體が惱ましくて、口が乾いて成らぬから、湯でも水でも呉れろ。と言ふ。それは如何したら宜う御座いませう。お湯も水も這裏には無いから。とまご／＼して、未這樣に眞闇だから爲樣がない。と有明の行燈の滅んとしては明るくなるを、急き搔き立てゝ、どこがお苦しいんで御座います。と父を覗れば、這は／＼甚麼。

いづこへ往きし乎、姿も見えず。
あれ、今口をお言なされたものを。とうち駭けば、布團の動きて、うむん。と呻くに、さては布團を被りて座しけるよと知り、安堵して、御父樣、水もお湯も御座いませんから、御苦しい所を摩つてゐて進ませう。その內に夜が明けませうから。と言へば、何とも應へずして、あゝ苦しや〳〵。と呻くに、心も心にあらず、どうしたら能からう、無いんだから做樣がない。臺所へ往つて汲んで來るのは易けれど、默つて汲んで來ては竊むので、當家の翁嫗が寐て居るのを起しては、惡かろうし。嗚乎困つて了ふ。何處歟に無い乎知ら。と四邊を看回しても考へ着かず。寐起きの身は、一層寒けくして、齒の音も合はず戰へたり。

あゝ爾うである。と考へ着きて、雪が過多積もつてゐるだらうから、雪でも可らう。と手燭に灯を移し、椽側へ出でゝ見たるが、雨戶は鎖鑰して開かざれば、宵に往きて、記得ある厠に至り、窓を開けて觀れば、雪は既に霽りて、夜は早明けんとして、窓に橫はり伏す南天の樹に、綿を被せたらんやうに積む雪を、やうやくに一掴みとりて、急ぎもち歸り、かくと父に告げ、布團を褰げ、口に宛行へば、眼を開き、口を開きて、雪を呑み込み〳〵て、布團を悉頭から被けて吳れ。と言ふゆゑ、其樣にお寒いんで御座います歟。と問へば、點頭くゆゑ、御懊惱い處を擦りませう。と言へば、頭を掉るに詮術なくして、我が布團をこと〳〵く被けゝれば、その中にて、うむんうむん。と呻く心細さ得も言はれず、幼き心のいとゞしく、若し御病氣が重くなつて、御死にでも做されたら如何しやう。と涙はほろ〳〵と墜ちて、早く明るくなれば可いが、こゝの翁が起きたら、有り樣を告げて、見て貰ふから。と立ちつ居つしたり。

左右する程に夜は明けて、誰れ乎起き出でたらん動靜に嬉しくして、店へ馳せ行き見れば、今しも翁が寢床を起き出でたるにて、千代之丞を見、若樣、まだ御起き做されるには御早う御座ります。火の出來るまで御安歇なされて座さつしやいまし。と顏をうち視て、怎麼なされました。何乎御父樣に御叱られても做されました乎。

と問ふ。泣然零る泪を刷ひて、何も叱られは做ません。昧爽から斯れ〳〵にてと、父の加減の悪きを報ぐるに、呀、檀那様が、如何さつしやつたので御座られる乎。夫ぢやあ無御困りなされたで御坐りませう。翁が參つて御動靜を觀ませう。と倶々に至りて、檀那様、老翁めで御座ります。如何なさつしやいました。と問ふ。千平兵衛、少し頭を出だし、翁を視て體を起さんとす。千代之丞、後邊に回りてこれを扶く。主翁にて御座られる乎。昨夜より種々と厄介に成りまして。と挨拶しけるも苦し氣なれば、强ひて臥せらしめて、病狀を諮ね、多分寒氣に御中りなされましたので御座りませう。婆々に梅干を焼かせ、熱く湯に製てゝ進ぜますから、それを召し喫つて、汗を發しますやうに做されましたなら好らうと存じます。一夜にても御宿をいたせば、他人とは存じませぬ。決して御心遣ひなされますな。と遽ぎ店に立ち往きたり。

養ひ子（上）

寝ありて、老媼が梅干湯をこしらへて拿ち來たるに續きて、翁も來たり、これを飲ましめて、被衾を増し、風の入らざらんやうに做し、是にて汗を御發し做されるで有らう。と店へ立ち歸り、顔を洗ひ、口を嗽ぎ、煙艸二三ぷく吹きて再び來たり、千代之丞に容子を尋ぬるから、手をさし入れ試るに、體は冷たくして、絶えて汗ばむ氣色もなし。翁は首を傾けて、それぢやあ梅干湯ぐらゐぢやあ否ないと見えます。早速醫者様を呼んで診て貰ひませう。と言ふに、千代之丞は、嬉しくもまた當惑したる體にて、父には、實に路用も少許しか有りませんから、御醫者にかゝる事は出來ません。と涙をはら〳〵と墜とせり。

なあに、其樣なことに、御心配なされますな。入用なん乎、幾干かゝつても、這の翁は厭ひませぬ。何卒御病氣の快くならつしやるやうにと願つて居ます。と老媼を呼びて、自己は、中山の養齋樣を頼みに往つて來るが、まだ路は付くまいから、馬で行くが、若者に鞍を被けさせて、準備して下さつしやれ。否々どうして這裡らの醫

者なん乎が。えゝ知れた事を、這樣なものを着て參られます乎。と氣の揉めるより、あらぬ小言もいひて店に至り、垢つかぬ布子を着て、小紋の羽織をひき被けて、若者が牽き來たる馬を、どう。と駐め、荷鞍に手を懸けて、踊り乘りたり。

千代之丞は送り出でゝ、ひたすら禮を述べけり。直に戻つて參じますから。と笠うち冠り、一尺も積もれる雪を蹴立てさせて、堤を二町あまり行きて、那方の村路に入れば、這方に繁れる松の梢より、はら〳〵と落つる雪に翁も馬も見えずなるまで見送りたる千代之丞は、いそぎ父の枕邊に戻りて、もし汗の發でも做たらん乎、と捜り試るも發でざれば、今翁の出で行きたる許なれど、疾く醫者樣を率て、戻つて來て下されと竢たるゝも無理ならず。

老媼が、火を火鉢に入れて、煖らつしやれ。と進むるも辭し、湯を小盥に汲みて、御顏を洗はつしやれ。と言ふも辭し、父の身を案じて、我がゆく末までも考へて、唯涙のみ落とし居たり。およそ一時ばかり過ぎて、主翁は、醫者を我が馬に乘らしめ、藥籠の裹みを脊負ひて、尻高くひき絨げ、馬の口をとりて戻り歸れり。

老媼のいそぎ立ち出でゝ、翁を勞ひ、先生は馬より下りける樣子にて、どうぞ這方へ御通り下さつしやれ。と請ずるを、うち聞く千代之丞は、馳せ出でゝ、手を着きて、温雅に先生を迎ふ。

養齋老、姓を春野といふ。齡五十あまりにして、冠れる頭巾をとれば、光れる頭の、着ける衣服ゝ黄ばめる縞にて、おなじ羽織を着し、腰に銀製りの短刀を帶びたり。千代之丞を視て、翁に、この少年が、客人の令息にて御座る乎。と諮ね、御尊父には、御加減が惡う御座られるよし、今まゐつて、診て進ぜますから。と老媼が出す火鉢にて手を焙り、茶を喫み、徐くにして身を起し、あるじに導かれて、母屋に至る。

千代之丞は、先に至りて、父をよび起すも、この時、病勢いたく革みて、言ひ知らぬ譫語のみ言ひけり。養齋老、膝おし進めて容體を見、脈を考へて、匕もて口を開かせて舌を見、千代之丞に被衾をもとの也似く被けさしめ、

老嫗が汲み來たる小盥の温湯に手を洗ひ、翁に報げて、病性が太だ宜くない。愚老の考へでは、雙感の傷寒と想ふ。這は古來不治の症となし、藥のよく効を奏すべきものでない。斯く言へば、如何に本意なくして、疑惑する所もあらうから、念のため、一應他の醫師に診て貰ひたい。と所謂匕を投げたる言辭に、千代之丞は、身も世もあらずして、先生どうぞ御救ひなされて下されまし。父が這裡で死にましては、當家の迷惑になり、私は御覽なされます通り、幼いもので御座いますから、如何いたして可い乎知れません。何卒御救ひ下されまして、父が郷里まで歸られるやうにして下されまし。先生の御恩は、いつまでも〳〵忘了をしません。と膝行よりて、涙の面をふり起し、養齋老の袂をつかみて泣き乞ひたり。

養ひ子（下）

養齋老は、そゞろに千代之丞を憐におもひ、あるじの翁も只顧乞ひて止まざるから、爾れば試みに一帖の藥を進ぜまをさん。それを服して發汗いたしたならば、早速使をもつて報げ遣されよ、却に是れ療治のとゞく道あり。發汗いたさぬならば、報げ遣すも詮なし。と斷わりて、藥籠を開き、調劑して、生姜一切投て煎じられよ。とこれを授け、老嫗がもち出でゝ進むる膳に、餚を見つくろひて、銚子、盃を副へたるを、酒は一滴も給べざればとて、固く辭して、はや去らんとするに、翁も爲んやうなくして、若者に禮物を拿たせ、馬にて送らしめ、急ぎ藥を煎じて病者に服しめ、汗や發ると、千代之丞にしば〳〵索り試せしめけるに、竟に發ずして、千代之丞の物も食はずに憂へて、看護して居ける哀憐さも見るに忍びず。賴みには成らざらんも、千代之丞の心休めに、土地の醫師を迎へ、藥を乞ひて服さしめ、とも〳〵に看護したる第三日めの夜半に、千代之丞が、御父樣〳〵〳〵と泣き呼ぶも、老夫婦が、檀那樣々々々。と喚ぶも、絕えて應へなきに至る。

千代之丞は、屍と取り縋りて、御父樣、かねて御言ひ聞けのことも御座いませど、私は心細くつて、御一緒に死にたう御座います。母さまにも亡られ、兄弟も御座いま

せんで、又御父樣に御訣れまをし、館山へ參つたつて、伯父樣の御氣もよく知ませんから、御父樣、どうぞ一緒に御伴れ下さいまし、一人殘つて居ましたつて、何の樂しみも御座いません。と歎くを、道理ときく老夫婦の心は、いとゞ悲しく、いとしさ增して、摑める手巾を泪に絞り、御歎きは御尤でござりませど、御一緒に行かうしやる事が成るものでは御座いませず、爾う思し召して、若樣の御體を惡くさつしやる事でもあつては、この翁媼は何と做ませう。御武家樣の猛き心を御持ちなされ、親御樣の御とり斂めをなさつしやられ、如何なる御艱難も忍ばつしやつて、御身を立てるを御孝道とは思し召さつしやらぬ乎。と勵ましぬ。

當方で種々と世話になつたのも、父さへ痊くなれば、那樣にも恩報しは成ませうが、夫も叶はずして、後に殘された私は、父の亡骸もどうして可い乎、黃白といふものは携帶て居ませず、館山は遠くして、まだ行つた事もありませんから。萬望父を那裡のお梵宇へでも葬つて下されませば、私は當家の下奴ともなつて、那樣な事でも勞作て、恩を御報しまをしますから。と掌を合せ、泪を瀑布のやうに落として請ひたり。　（次號完結）

（編者曰く双々燕一篇の趣向作者寓意の存ずる所は後半に在り、故に前篇のみを見て無味平淡と思ふは未だし。）

雜錄

瓜生岩女

文學士　常盤大定

資性温良、貞淑、勤儉を行ひ、施與を務む、明治戊辰の役後、會津地方の民窮し俗壞るを見て、之を救濟教育し、爲に幼學校を建て、尋で自ら東京に來り、救貧の方法を講究し、歸りて貧兒養育所を私宅に設け、又救育所を福島町に設く、既にして近郡有志の囑託により、育兒會を創め、又自ら福島瓜生會を

開きて窮乏に賑はす等、爲に凍餓を免れたるもの前後甚だ多し、或は飴粕を以て煎餅麵包を創製して救貧の一助と爲し、其他育兒慈善の事業に盡瘁すること三十餘年、爲めに費す所尠からず、洵に公衆の利益を興し、成績著明なりとす、仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ、其善行を表章す。

明治二十九年五月十一日

賞勳局總裁子爵　大給　恒

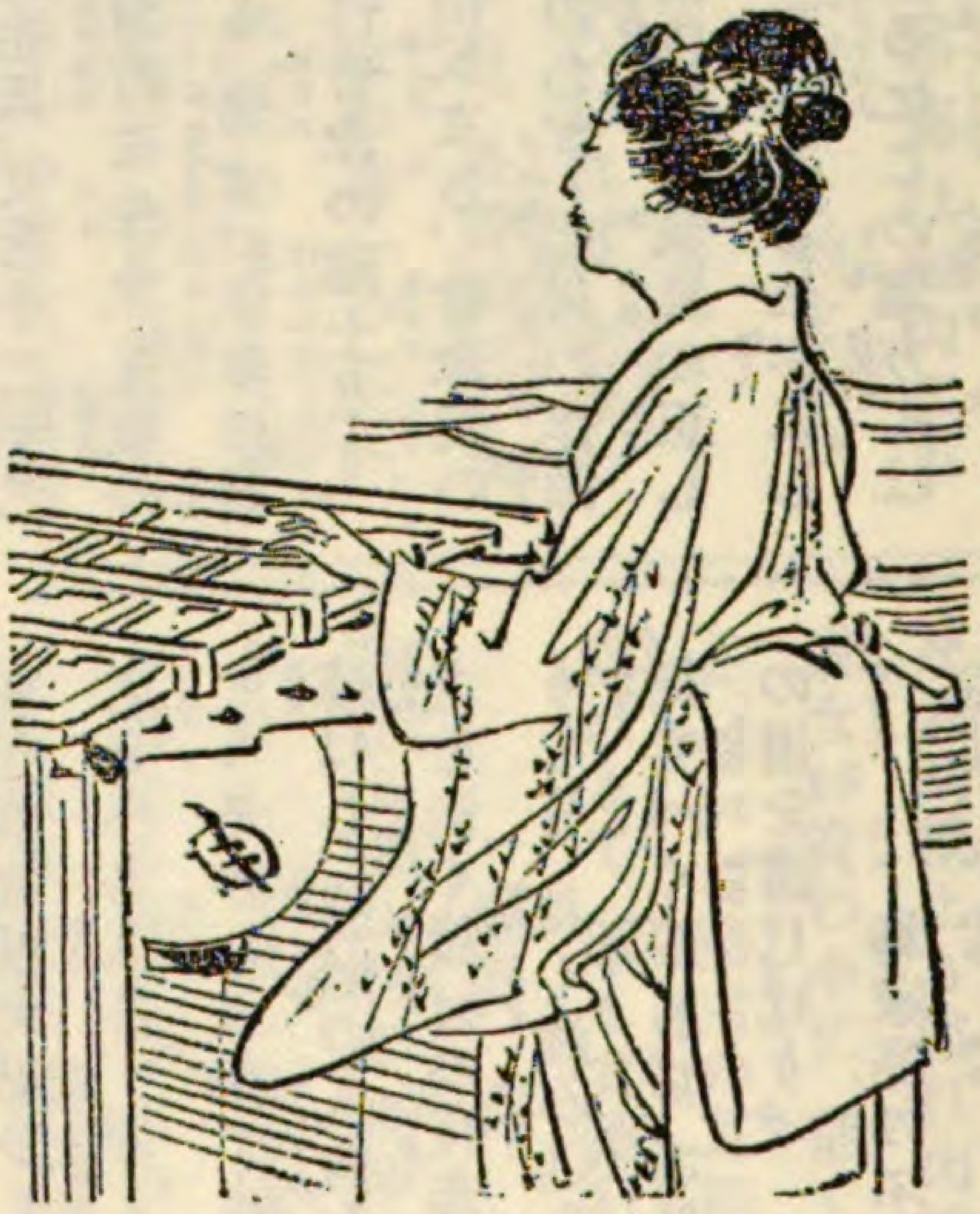
奉　勅

…………………………

これは是、其筋より故瓜生岩女に下し賜はれる褒章の記なり、故稅所敦子刀自、瓜生岩女の傳をものせられ、ほめたゝへて曰く、年老いたる賤の寡婦にして、この褒章を受けしもの、御國廣しといへども、獨り岩女あるのみ、いかに名譽の極みならずやと、然り、名譽の極なり、此名譽の極を負へる岩女の資性は如何に温良なりしぞ、其の勤儉救貧は如何なりしか、矯風に盡しゝ狀況如何、育兒に務め、慈善に奔走せし顚末は如何、蓋し是等は岩女の一生を通じて終始せるもの、其一般を叙するも猶一小冊子を成すべし、今予が叙せんとするは、其中に就きて重要なるものゝみなれども、是とても一二回にして盡くべきにあらず、殊に岩女の他に優れるは、用心の細かなると、同情の濃やかなるとにあり、この細かなると、濃かなるとは、幾分か分析細叙するにあらざれば、發揮しがたき點少からざるを以て、幾回に度りて、予が見聞に觸れしところを列記せんとす、見る人長きを咎めずして、一讀の勞を吝み玉はずば、蓋し益するところ尠少にあらざらん。

こゝに予が之をものするに至れる所以を一言せん、明治二十五年の夏、淺草某處に於て、ゆくりなくも故刀自と同宿せることありき、藁を以て髮を結ひ、身には粗服を纏ひ、一見田舍婆の如き中に、一種犯すべからざる氣概あり、辯舌爽にして淀まず、兎角の浮世話にも「皇國の爲」なる語を絶たず、傍に座して其話を聞けば、恰も南風我懷を掃ふの感あり、往々諧謔人をして抱腹

せしむることも少からず、兩頬に湛ふる一種慈愛の笑靨は、予をして此中に佛菩薩のひそむにやと思はしむるものありき、今猶眼前に彷彿として忘るゝ能はざるは、刀自の室隅にありて襤褸をさきつゝある後姿なり、刀自は其能く出入して幇助を受けたる土方伯、三島子等より、襤褸又は靴足袋の廢物等を貰ひ來りて、毛絲なるは之をホゴシて何かの材料とし、木綿なるは之をさきつゝ組みて一條の繩となし、以て草履の麻裏に代用し、藁草履を求め來りて、之に附け、養育院に至りて、兒童に與へて小兒の笑顏を見て大に樂み、斯くて早朝より夜に至るまで、老樂の身の爲すことゝては、些少の私意を挾まず、炎天の沙塵の中を出て行き、歸りて室隅に襤褸をさき、少閑とても敢て徒消せしことわらず、養育院幹事安達憲忠氏曰く、他の事に至りては、敢て刀自の後へに落ちざるを期し得るも、少閑を徒消せざる一事に至りては是到底企て及ぶべからざるなりと、されば刀自の善行は悉く此寸陰の產みし所、刀自の藍綬章、目下鑄造中の刀自の銅像も、皆此寸陰を惜みし結果といふも過言にあらず、數日間の偶然の同居、予は唯三四回の對面を得しのみなりしも、無言の間、刀自に受くる所頗る多く、當時思ふやうは、嗚呼志成るの日は、此刀自の爲に半身を捧ぐるを得んと、爾來怱々として冬去りて春來ること、こゝに十回、裘葛を易ふることこゝに十たびの多きに達して、予の志未だ成らず、而して



予が學校生活を卒れる日は、刀自實に此世にあらざりけり、予の遺憾猶未だ腦中に蟠りて、容易に脱せざるものあり、予之を聞く、今人の失德過擧を談ずるは、古人の嘉言懿行を述ぶるに如かずと、されば責めては、刀自

嘉行を記してなりとも、予の志を果し、兼ては聊かなりとも、世道に益する所あらばやとの願より、かくは刀自の一生を女學世界に掲載することはなしたるなり。

◉氏と育ち、

瓜生岩女、父は渡邊利左衛門、母は瓜生氏、文政十二年二月十五日を以て、岩代國耶麻郡喜多方町に生る、九歳の折父を失ひ、母に隨ひて瓜生家に歸る、岩女が不幸は實に九歳の時に其萠を發せり、瓜生家は會津の藩士なり、天保十三年、岩女十四歳の春、その伯父なる、會津侯の醫官、山内春龍の家に就きて、裁縫のわざ、起居の作法等を學び、傍ら育兒の道を聽けり、山内家は家風の正しきを以て、夙に藩下に其名あるもの、居ること三年にして、婦道の一般を知るを得たりき、然るにこの地方には昔より墮胎とて、いといまはしき惡習あり、二人の子まではこれを養育すれども、其他は悉く闇より闇に送るの弊風ありしかば、春龍大に之を患へ、いかにもして、この惡風の根を拔き、非行の跡を絶たしめんとて、深く心を病めしに、岩女も大に之に同情を有し、毎に伯父を助けてこの事に盡しけるとぞ、岩女が是より後幾十年間矯風に盡せる初は、抑もこゝに源を有せるなり、

弘化二年、十七歳の折、山内家を辭し、歸りて佐瀬氏を迎へて夫となせしが、片時も矯風の事を忘るゝ事なく屢々伯父春龍を訪ひしに、又同じく醫官たりし石田龍玄といへる人も、志を同うして、共に此事を諮り、「萬民こゝろのかゞみ」と題して勸善懲惡を旨とせる一書を著はし、墮胎の人倫を壞り、天地の道に背けるを説き、之を洽く諸村の有志者に頒ち、又親しく人に諭す所ありしも、長く浸み込みたる弊習の事とて、一旦にして根絶すべくもあらざれば、ます〱心を碎きて之が一洗の道を講じけり。

◉家庭の不幸、

岩女の不幸は幼にして父を失へるに始まり、其後つぎ〱禍の神は、其一身にまつはりて容易くは去らざりしも、之に碎けずして却りて之が爲に慈善の心を强めしは、岩女の天質の然らしむる所なりけんかし、安政三年の春、良人はふと重き病の床にうち臥し、文久二年遂

にかへらぬ旅路に赴きしか、前後七年に至れる永き月日の其間、看病に一身を投ぜる傍ら、老いたる母に孝養を盡し、子女を愛育して、始終一日の如く、屈せず、撓まず、又倦まず、厭はず、心を砕きて吾身の疲れをも打ち忘れしかども、天命は如何ともしがたく、今は盡しゝ其心もあはれ水泡に歸してけり、岩女の愁傷は如何にありけん、岩女の誠は天に通じて、この年官より物を賜ひ、厚く其孝養と貞操とを賞せられき。

其後三年にして、重ねて慈母をさへ失ひければ、岩女の歎きは今更いふべくもあらず、長女つね、長男祐三、次女とよ、三女とめ、皆まだ幼く、岩女は女の身一つにて、四人の遺孤を育くむことゝなりてければ、いよ／＼志を勵まして家事を治めつゝ、幼兒の敎訓に心を注ぎしが、如何に勤儉に力めぬるとも、女の手一つなり、月日の立つに從ひ、儲財は漸く乏しくなりければ、一層奮て勤儉の道を立て、少しも幼兒を飢えしめず、我身は、夫に別れてより、髮結ふにも遂に油を用へたることゝてなかりき、岩女は己が身の幸なきより他の貧しきを見ては、同情の涙禁じがたく、惻隠の心ます／＼厚うなりて、孤獨なるを見ては、己が食を割き與へ、鰥寡なるを聞きては、己が器を分ち贈るを以て、憂きが中の此上なき心やりとぞしける、育兒の爲、慈善の爲に、其半身を捧げし岩女の慈悲心は、實にこの重ね／＼の不幸に基せる同情より溢れ出でしものなり、

岩女が貧の中に、能く貧を助け、救を濟ふの志厚きこと、やがて藩主の耳に達して、御紋附き、三つ組木盃を賜はりて、厚く其德行を賞せられけり。

◉庭訓

岩女は貧の中に如何にして此重賞を得るまでの德行ありけん、是頗る他の聞かんとする所にて、若し能く岩女の爲せる所に學ぶあらば、世道人心に益する、甚だ大なるものあらん、岩女時に家人を誡めて曰く、凡そ慈善の事を行はんとせば、平素一家の衣食住に十分の節減を加へざるべからず、如何なる人と雖も、慈善財産として別に備へあるものはあらざるべし、人の慈善を爲し得るは、平生の用意一ッにあり、平生こゝに用意せば、時

ありては廢物の利用をも爲し得べきなり、平生の用意に加ふるに、猶一の注意すべきは施す時に當りて私念を放棄するにあり、若し一片にても名利心の如き私念を挿まば、百萬の財物を布施すとも、是其私念を滿足する爲の手段たるのみにて、布施の義に背くこと甚しく、遂に些少の功德もなからん、陰德を重んずるが如きは之が爲のみ、昔し釋迦牟尼世尊數多の弟子を率ゐて、月蓋長者の許に乞食せられけるが、長者はかねて吝嗇の聞え高く、些少の布施をも之を惜めども、さすがに世の取り沙汰もうしろめたく、唯少許の米粒を盆に盛り出でゝ之を布施せんとせしが、長者の眼には其米遽かに琉璃の如くに見えて、思ひ切りがたく、遂に施さずして止みにき、釋尊はこゝを去りて、さる河の邊を過ぎられしが、偶ゝ米洗ふ賤の女ありて申すやう、我米なりせば食はずとも、之を施し參らせんと思へども　これ主人のもの、一粒たりとも減ずべきにあらず、せめてはこの洗汁なりとも捧げまつらんとて、桶に充てゝこを奉りしが、釋尊は喜びて之を受け、祇園精舍に歸りて、粥を煮、ともに之を嘗めたまひき、時に釋尊のたまへるやう、今日の賤の女の施しこそ、眞の施しなれ、汝等この粥にて飽けるや否や、皆曰く、我等既に食はざるに、先づ腹滿ちぬ、釋尊曰く善哉々々、一粒萬倍の功德ぞかしと。こは是天竺の事とのみ思ふべからず、我慈善も常に之を以て心としぬ、汝等之を心とせよと、

○又時に誡めて曰く、我家には古より一粒米の中に一體の佛菩薩具はり玉ふとて、大に尊敬し來りしが、今の世には浮妄の說となして、顧るものもなからん、されどもつら〳〵之を考ふる時は大に味あることあり、滿洲とかの諺には、一たび米を喰へば、上天すといふとかや、我邦は素と農業國なりと雖、人口の繁殖につれて、年々輸入米の量を增す、今後益々米穀の貴きを加ふるに至るべきは明なり、今後といはず、貧民窟に至りて之を見ば、一粒米をだにも得るに苦しむものあり、能く之を思へば一粒の米といへども、叨りに棄つべきにあらず、釋尊が一粒米の重きこと、須彌山のごとしとのたまへるも、この故なり、云々。

○自ら責めて人を責めず、自ら樂しむ所のものは先づ人をして樂しましめんといふは、岩女の主義にて、常に之を以て家人に訓へ、自らは之を以て心とし、之を日常の事に行へり、其兒童を訓ふる時、決して怒聲を發せず、若し彼等に惡癖ある時は、順次に之を矯正するの道を取り、今日之を誡めて其効なければ、暫く之を放任して能く其居動を察し、重ねて之を誡しむ、彌々其効なければ、益々心を用ふ、時としては之が爲に半月、又は一月の間鹽絶ち、穀絶ち等を爲すことあり、曰く神佛の力を假りて、之を改めしめんと、如何なるものも、是に至りて、其癖を改めざるはなかりしとぞ。

滑稽名所新つれ〴〵草

文學士　喜田貞吉

徒然なる折々、日くらし足に任せて、心の向いた所々を、其所此所となく驅けまはれば、をかしうこそ物珍らしけれ。

いでや此世のものとては、滑稽なるべき事こそ多かんめれ、神社の御事などは言ふも畏こし、掃溜のそばのお稻荷樣まで、正一位の位あるぞやんごとなき、官幣國幣の御社などは更なり、たゞの社でも古史に見ゆる程のものは、何となく神々しく見ゆ、其神殿などは、隨分零落ても尙奧床し、それより下の方は、旨く世を胡魔化して時に逢ひ、得意顏に自らはエライと思ふらめど、いと苦々し、淫祠ばかり羨しからぬものはあらじ、人には詐僞か何ぞの樣に思はるゝよと新聞記者が書けるも實にさる事ぞかし、玉垣赤く塗り立てたるにつけて尊しとは見えず、口の惡い京童の言ひけん樣に、其元を正して見れば一向さてもつまらず、迷信の深い人が何か云い出したが始めとなりて、目盲の目が明いたの、蹇の足が立つたのと、針程の事も棒程のたとへ、遂には狐や狸が神樣にまで出世するぞ事々しき、

羽田の穴守稻荷樣は近比急に世にもてはやされ、數年前までは極めて淋しかりし地の、今は茶屋料理屋軒を並べて、參詣者は大師河原の弘法大師にも劣らぬとて

そ聞く、これは穴守と云ふ二字が極めて人氣に稱ふたものとぞ覺ゆる、東京上野の穴の稻荷は、古いものなれども「守」の字の無いだけに一向流行れりとは見えず、同じ稻荷樣にても、流行ると、流行らぬとあるは、人に時めくと、めかぬとあるが如きものならんかし、祇園精舍に撞き出だす鐘の音は、諸行無常と鳴り響き、沙羅双樹の花の色は、榮ゆるものゝ必ず衰らへき理を示すものとぞ、平家物語の始にも侍る、淺草田圃の太郎稻荷は、近う維新の前までは、此上なく流行りしを、今は猫の子一匹詣づるものなくなりしに、この穴守稻荷は、明治十八年の比とかや、此地の鈴木となん呼べる家の土藏に、古く住める一匹の狐の、或る病人を治したといふ事、誰れか言ひ出したが本となりて、畏こくも豐受大神を勸請し、はては今の流行を成せるなりとぞ、「新佛教」の塵庵ひじりの筆にも侍る、

鎌倉建長寺の後の山の半僧坊は、はる〳〵遠江の國より出で來りて、近き年こゝに出店をなん開業しける、もとより天狗といふ事を觸れ立てゝ、羽團扇と、鼻の高い赤い顔とを看板としければ、此地の岩嶮しくよろづ物凄きが極めて似つ合しきまゝに、間もなういとよく流行り出でゝ、講中となん云ふものも澤に起り、今は山の麓より嶺まで、信者の立つる小さき幟に、道の兩傍土も見えぬまでなん埋もれける、

おなじ半僧坊の出店でも東京なる市が谷のはさして流行れりとは見えず、人の家居の立ち並ぶところは、天狗に不釣合なる故ならんかし、

穴守稻荷も、半僧坊も、其信者のおほくは、賤しき業する女、其女を置きて營業とする主人などなるに如何なる故にかあらんといと口惜し、

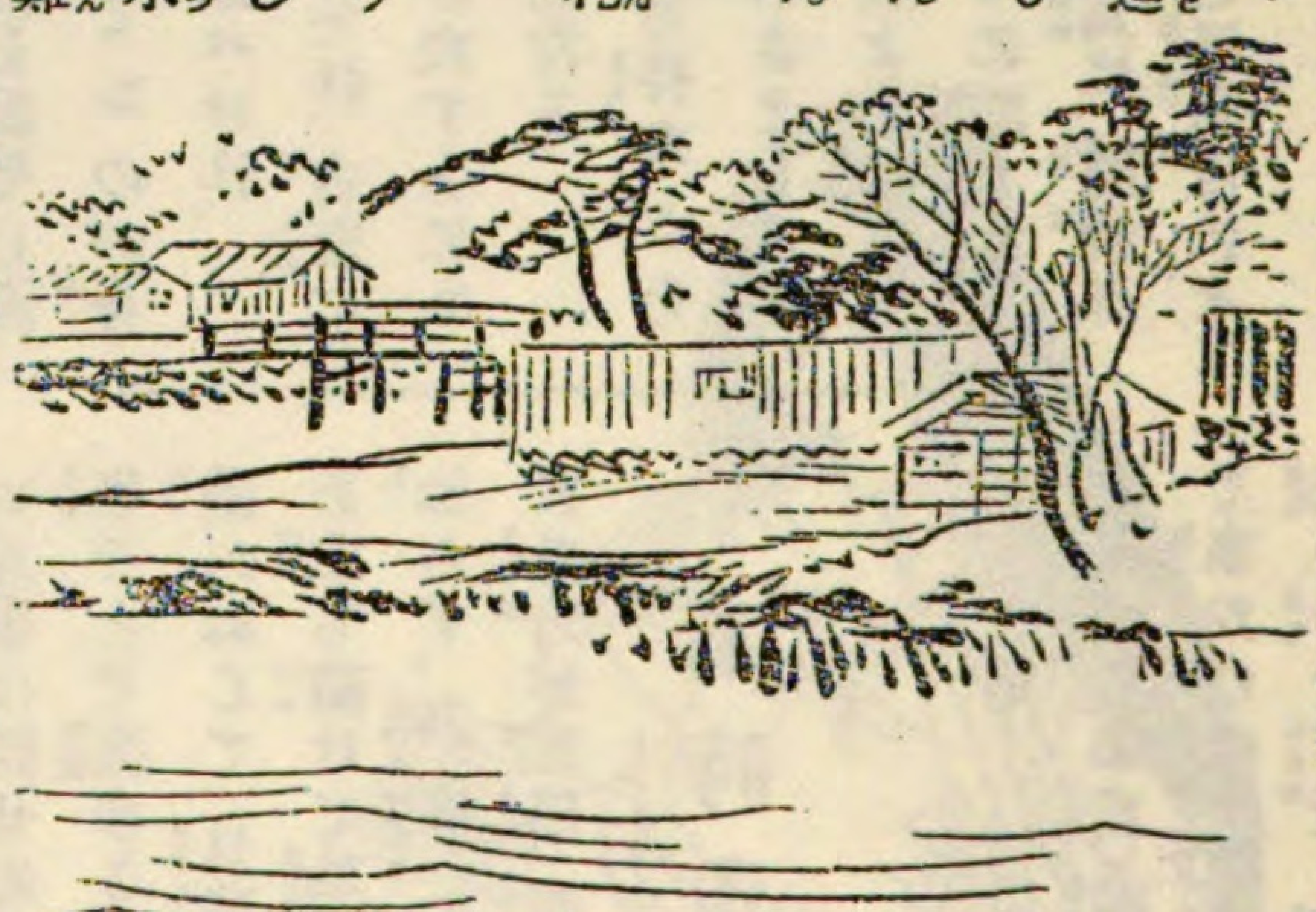
おなじお大師樣でも、大師河原のは流行り、おなじ不動樣でも成田のは流行り、同し觀音樣でも淺草のは流行るとこそ聞け、流行るは祈るに効驗あればなるべし、流行らぬは祈るも其甲斐なければなるべし、神佛も祈る場所によりて、聽くと聽かぬとあることこそ淺間しけれ、

神佛の守り札こそ、世にも床しきものなれ、成田より出づる身替り札は、此を肌身離さず附けてさへ居れば、火

にも燒けず、水にも溺れず、鐵砲の丸も中らぬといふ保證付なれば、いかに有難く尊くて、之を戴かんとする老弱男女なん、朝な夕な押し合ひへし合ひ犇きける、言はゞ二錢の保險料にて出來る生命保險なり、此保險ありても尙死ぬ程の人は、それ迄の定命にてお不動樣も之には替り得ぬものなればと、被保險者も敢て小言申さんともせず、お不動樣も保險料拂ひ渡さんともし給はぬなり、

火難盜難水難除のお守札、安產のお守札など、何れか此類ならざるべき、

有馬の水天宮は安德天皇を祀り奉れりとか聞く此天皇水に入りて崩御ましまししかば、御身に比べて、後の世の民草の水の溺るゝを憐れとお思し給ひけん、水難除のお札を周ねく世に施こさしめ給ふとぞ、世の人は口々に語り傳へける、誠にさる事あらんには、水難救濟會などにては、浮身器を用意するよりも、先づ船毎に數多此お札を用意せしむる事こそあらまほしけれ、



播州の明石は、歌の聖 柿本人丸が、ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島かくれ行く船をしぞ思ふといふ歌を詠みけるより、此所に人丸を神と祀りて、人丸神社いかめしくぞ建ちける、此神世上の難產に苦しむものを憐れと見そなはし、火難に財產を蕩盡するを不經濟とお思し給ひてや、火難除けのお守札安產保證のお守札を授け給ふとぞ聞く、人丸は火止るなり、火災を守り給ふべし、人丸は人生るなり、安產を守り給ふべしと、眞面目に説明する神主らしき人の顏こそ、なか〳〵にほのぼのと見ゆれ、

石川五右衛門を神と祀らば、稻妻强盜を神と祀らば、罪障消滅の爲に盜難除の守札を出だすべきか、さては盜賊に追捕除けの守札を出だすべきか、東京谷中の天王寺なる、さきの森文部のおとゞを刺し

たる狂漢西野それがしの墓は、何の守に爲んとすらん、人皆なの打ち缺きて持ち行く、神佛果して其守札に約束したるだけの事を履行する程の靈あらば、果して迷信者が身勝手なる願を納受し滿足せしむるの驗あらば、神や佛を看板として、おのが身を肥さんとすなる人々にこそ罰を中て給ふべけれ、神社や寺の緣起こそ叉なく都合よきものなれ、古書に何とあらうと、そんな事は深くは問はず、ひたすらにおのが社や寺の尊からんやうにとぞ書き連ねたる、近きころ或る神社の古緣起とて、神官の秘め持たるを見しに、かざりなどの事々しきには似で、あさましき贋物なりければ、親しき間の事とて、隱さず其よし語りつるに、其人面白き人にて、君がしか言はるゝに詐りも無かるべけれ此古緣起も詮なし、願ふに我か爲に、贋物ならぬ眞正の緣起を書いて給はれと、ズンと眞面目にぞ言ひける、

二荒山をむかしぶりに讀めば、補陀落淨土の事も思はれて、いと床しきに、「ニックワウ」と漢樣に讀めば、たど〳〵しくぞ覺ゆる、それに「日光」と言ふ漢文字さへ當て嵌めては、黃金白金ちりばめて、きら〳〵しき社殿のなくてかなはぬこととなりかし、日光を見ねば結構といふ事は話せぬと、むかしの人の言ひけんも、げにさる事ぞとぞ覺ゆる、其日光の陽明門は、終日立つて見ても飽かぬとて、日暮の門と言ふと案內者の語るに、よくまあ立ち續けて足のしびれぬ事よとさゝやくに、案內者知らず、其傍の鐘樓と鼓樓とを指ざして、彼方が四郎に此方が五郎、四郎に五郎は鐘と大鼓の御やぐら、

不時の歸省（上）

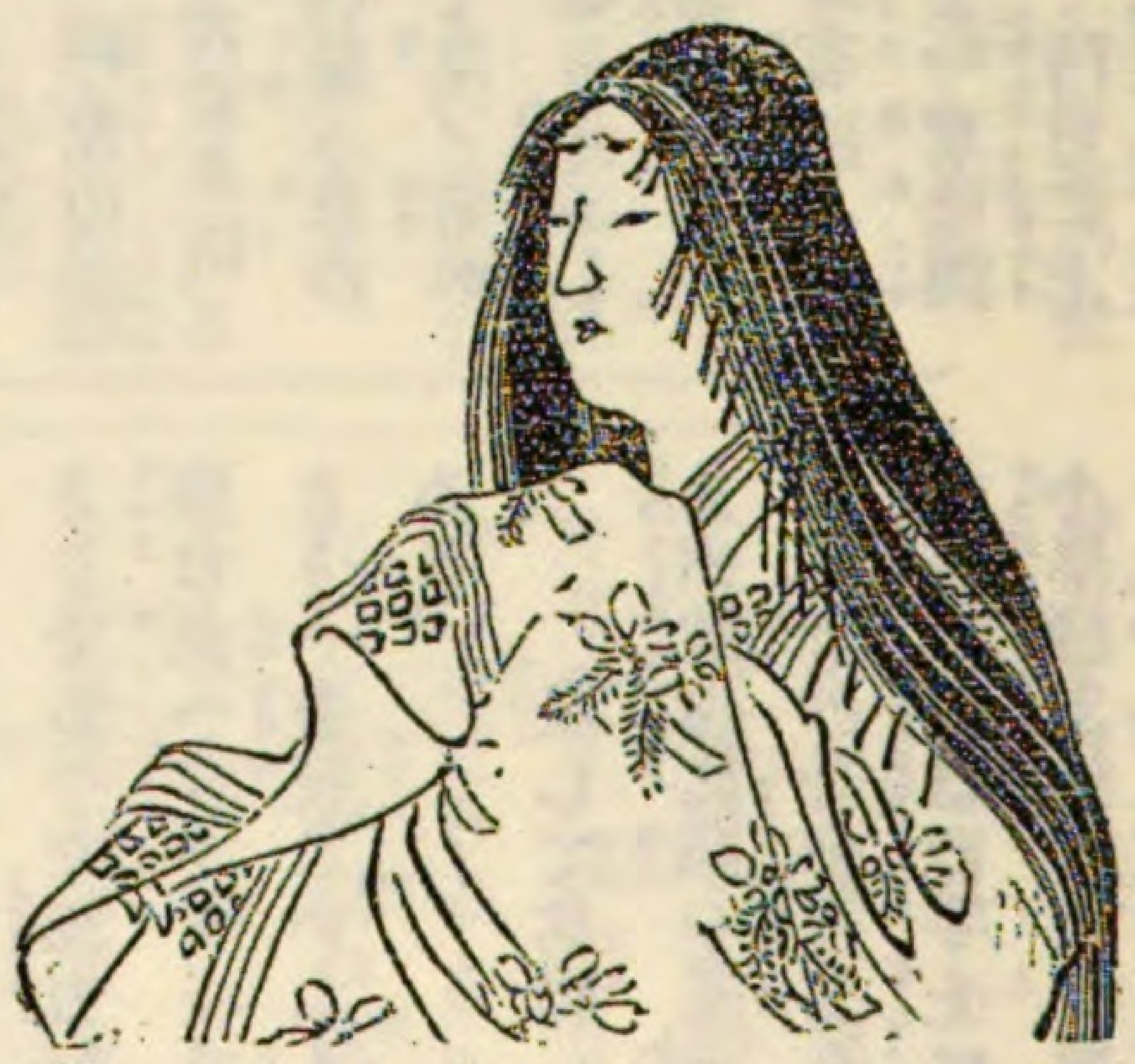
湖畔吟客

電報

電報ですよと、遽たゞしく後の障子を引き明けて入つて來たのは下宿屋の小娘。此は夜の十一時頃で、予は床の中で洋燈を頭の上に置て、書見を爲して居たのであるが。電報よりは寧ろ此の娘の足音に驚いて、書物を抛げ棄てゝ左の手を突て捻つて身を起した。娘は電

報を差し置て、又バタ〳〵と驅け去つたので其を取り上げ開き見ると、『キドクスグカヘレ』と記された。此れ計りでは判り兼ぬるが、實は丁度四日許前郷里の叔父の許から、言つて遣した手紙がある。其の文意は母上此の櫻時から、少し僂痲質斯の氣味があつて、梅雨に入つて稍や重體となり、久しく逢はないから一寸歸國しては如何だ、といふに在つたが。予は少し外されない用事もあつたので、大抵なれば歸らなくつても濟むやうに、其方で取計ひ吳れよ、と返書した其後の電報である。

此の電報に付て二樣の解釋を試みた、其の一は斯樣だ、其は三四年前、度々歸國を迫られて此に拗ねた結果、今日と同し電報が來て、驚て歸つて見ると危篤とはまつかな嘘、母上はピン〳〵して洗濯物を干して居られた。此度の電報も畢竟此の故智を學ぶには非ずやと言ふを。次なのは眞實の病氣で、予が冷淡なる返書を見て猝に發作したのか、若くは先の手紙が予を氣遣はせぬやうに、努めて穩和に書かれて、其の後到底隱し置かば油々しき大事に及ばんも知れず、其れて電報となしたのではあるまいかといふのであつて。此が經になり緯になり其から其と樣々の豫想を織りだして、其夜の半分は無益に費したのである。



翌朝友達で最も世智に丈けて居る某を訪つれて次第を語ると、事は頗る簡單である。彼がいふ、電報の實否を質さうとするのが根本的の誤謬で、親の病氣が危篤といふのに、先例があらうと欺されやうと、歸省せぬといふ法はないと。で予は萬事を拋つて明日一番列車で歸るとにした。さあこう極めて見ると中々忙かしひ、車輪に立ち働らいて夜の九時までに辛つと用事を叩き上けたが。又一つ用事が起つた

といふのは送別會で其には及ばぬと言ふのに、友人に強ひられて之に臨んだ。彼是して其夜も十二時過となつた。明て一番の列車に二三の友達に送られて新橋を發した、時に三十四年五月の下つ方。

途上

友達の好意を惡く言ふでもないが。送別會で夜更かしゝて飲食したのが遠因で、通して汽車に搖られたのが近因となつて、尾の道で汽車から抛り出されたときは、腹工合云ふ計りなく惡るかつた。此のまゝ汽船（此の頃はまだ山陽線が廣島附近に通し居るのみで尾ノ道から汽船に乘るのを便利とした）に乘れば到底も全ふして歸鄕するとは出來得べからずと殆んど落膽したが、幸ひ汽船の出るに時刻まで六時間程の猶豫が有つて、其の間に幾分か快方に向つた。が汽船の中で一度吐瀉し（無論人に見止られぬやうに立ち廻つた）門司に上陸した時は、我ながら倒れるかを疑がひ、柳行李を何樣して停車場まで運んだのか其さへ知らない位であつて、已う萬事休と覺つて臍を堅めて檢疫醫に名乘つて出た。一寸此處で理つて置くが、當時日清戰役後で、軍夫の日々歸るもの夥多しく、中には充分虎列剌などに冒されたるものあつて、汽車汽船などで行逢つて難儀したと語るのも往々聞て居るから、實は予も幾分か神經を起して居たのであらう。けれど幸ひ那樣な病はしい病でなく、腸胃加答兒で藥も貰へたので、今まで滅入りさうであつた氣力が笑しくも引き立つて來た。けれど腸は絕へずチクリ〳〵と痛むで、尾の通で一腕喫したきり一晝夜といふもの、飯一粒口に入れなかつたのである。

果して危篤

九州鐵道に乘つて一刻〳〵鄕里に近づくと、我が恙よりも母の身が案じらるゝやうになつた。熊本から先へ二驛で鄕里の宇土はあるのである、此處に下りて幸ひ小學校友達であつた人力車が居るので、其に打ち乘ると、彼は微笑した計りで直に驅け出した。我が家の門に梶を下すと、何となう家內が立ち騷いで居るらしい。玄關に近づくと先づ出で來給ひしは祖母君（母方）で、

其から姉君(出で嫁す)弟、甥とゾロ〳〵出て迎ふる。導びかれて先づ入つたのは母上の病間である、母上は予が歸りしといふ報せに、思はず頭を擡げ給ひて先づ涕をポロ〳〵と零し、何故暇を取りました、私は此の世の者ではない筈であつた、と又ポロ〳〵と落し玉ふ。其の顏の窶れやうは見紛ふ計りで、手さへ薪を裂きたるやうに纖く骨立ち、三枚を重ねた布團さへ、毀れ懸つた鳥籠でも載せたやうに痛々しく、息をはづまして見遣り玉ふ。予は何といつて可いか其の言葉さへ見出し兼ねて、只バッと頭を下げて暗涙に咽ぶのみである。折から醫師が來たとのことで、引き下つて他の間へ入ると。祖母君は引添ふて入り來給ひて、先づ旅中の草臥を勞りて後、語り出て玉ふ比は。母上は此の正月に肺炎を煩はれたが、其は二十日間計りて全癒し、二月の中旬から左の足が少しづゝ痛み、初は僂麻質斯とのことで左樣氣遣も無かつたれど、四月の上旬から追々疼痛を増して、神經痛になつて五月に入つて益々劇しく、叔父を始め予に歸省を命せんとしたことは度々であつたが、母上は此を拒んで、彼も今が大事の時なれば、さう容易に呼び返しては身の爲に惡からうと、曾て聞き給はなかつたが十五日頃になつて、醫師もぽんと匕を投げ其となく勸めたので、漸く那樣穩當なる書狀を出すことを承知され、予の冷淡な返事が來て見れば、母上は人一倍憤つて遂に電報を發したとのことであつたさうであるが、通譯で支那に從軍して居た弟は軍隊が引き上げとなつて、謀らずも其最中に歸つたので、電報を書いたのは弟であるさうだ、其から甥は其と同時に熊本に居たのを弟が引つ張つて來たのであるさうだ。まあ此樣なことであつたが祖母上は猶之に付け加へて、卿が歸るとの返電があつてから、母の病氣が劃然見直したやうだと。其の翌日から、予はヒッタリと病床に付き添ふた。母上は餘程氣も晴々したやうで、醫師も首を捻つた位である、固より氣の丈夫なる質で言たい事を人に包めば包む程情は强いので、實際賴み切つて居る予が歸り、歸らぬ筈の弟までが思はず歸朝したので、今まで便少なかつた御身が、急に大船に乗つたやうな氣がし

て、其で大に氣力を恢復したのであらう。

教育談片

苫米地日東

◎男尊女卑は、古來東洋の弊風であつた、東洋一般の通有病點であつた、今や社會文明の發展すると共に、この厭ふべき弊竇も薄らぎ行つたに相違ないが、いかにせむ多年因襲したものだから、未だ全くその弊痕の除去やらぬ趣あるを憾む、元と人間としての男女兩性には、人爲的の等差を附すべきものでない、從て女子に敎育を施すには、必ずしも男子敎育と軒輊を設ける必要はない、女子も男子と同じく、或程度までは同一の敎育を施し、唯に低等なる實用的敎育を施すのみならず、また一方にては高等なる學理的敎育を受けしむる必要あり、以て女子の天性能力を發達せしめ、僅かに家政整理の責務を盡くす得るのみでなく、進んでは社會業務をも負擔し得るの學識能力を有せしめざるべからず、是れ吾人が平素女子敎育上感じて居る所である、此希望と副ふの點に於て、吾人は、

◎這回日本女子大學の創設せられたのを喜ぶるものである、たとへ私立の學校は、其設備に於て概して官立學校に劣るにもせよ、我國に於ては官私立を問はず、未だ一の女子大學を有せざる時なれば、私立ながらも一女子大學校の、新設せられたるのを喜ばざるを得ない、祝さゞるを得ない、此校の設立に付いては、設立前には少なからぬ非難があり、設立後にもいろ〳〵の批評がある、此等の世評は要するに、設立前に於ては女子大學の必要はないとか、必要があるにしても尙早しとか、囂びしく唱ひられ、また漸く設立を告ぐるに至るや、其名稱のみは大學なれども、其實質は名稱の虛大に副はない、つまり其內容的組織は女子高等師範の學科程度に優らぬのみか、却て劣るとか言ふものあれば、又此校管理の任に當る成瀨氏は、米國風の敎育意見を有する人なれば如何など疑ふものもある、吾輩は日本女子大學とは何等の關係がない、だから別に辯護するの必要もなければ、攻擊するの必要もないが、之れを公平無私に評す

れば、我國現今以後の時代は、女子に高等教育を施すの必要ある以上は、一二の女子大學校を設置することは否定し難たい、そうして學科程度は時勢と共に漸進主義を採り、今日の教育事情に省みなければならぬことゝ思ふ、故に吾輩は妄りに此校に對する批評をなさず、將來の校績如何を見て言ふ所あらんとするのである、

◎過日女子大學の開校式に、大隈伯は創立委員長として出席せられ、一場の演說をしたが、頗る面白い事を言つた、先づ男尊女卑の弊は矯めなければならぬを說くや、貨幣制度に比喩して曰く、

私は貨幣制度については、飽迄金貨本位を主張した一人だが、人間については男本位を主張することは出來ない、否男女兩本位を主張しなければならないと思ふ、貨幣制度は金貨本位にしなければならぬ理由もあるが、人間は男子のみを社會の單位と數へ、言はゞ女子をば物の數にも入れぬとは甚だ不都合である、私は今更ら古めかしき男女同權論を擔ぎ出して振りまくでないが、兎角東洋諸國は日本のみならず、支那も朝鮮も一般に婦女を輕視するもの惡弊は免がれない、尤も今日では大分其弊も矯められたやうであるが、之れは社會の爲め賀すべき事である、そこで教育上の原則としては、可及的男女平等主義を採らなければなるまいと思ふ、尤も男女兩性は天然に於ては殆んど同じた、十のものなら八分まで同じた、唯女の男に及ばぬ所は二分ある、此二分は自然のもので而かも人間に最も必要なものである、此等の自然に屬する部分は、教育の力で如何とも爲し難い、否教育を以て之れを動かすべきものでもないが、大體上に於ては男女の間に教育の等差を設くべきものでない、



◎伯は又た曰く、家庭は社會組織の單位とも言ふべきものであるから、社會の根本的改良を爲さんと欲せば、是非とも家庭より改良しなければならない、つまり社會風紀の源泉は、家庭に於て涵養せらるゝものであるから、社會の風紀を純潔ならしめんと欲せば、家庭の風習を改善しなければならない、近頃は社會の改良とか、救治とか云ふ聲は大分高まつて來たやうであるが、之れは洵に時節柄可然の用意であつて、今日の病的社會狀態にては、一般の民人に此の感覺心を惹起せしむは已むを得ざることゝ思ふ、然るに只其聲を大にして騷ぐ計りでは一向其効はない、尨大なる社會を改善するとは、固より容易の業ではないが、前に申した如く社會と家庭とは密接の關係がありますから、先づ以て家庭の改善は急務であらうと感じます、さて其善良且つ完全なる家庭は、理想に富み實際に慣れたる婦人の手を借るものが多いから、將來は是非とも女子の教育に重きを置き、以て賢明なる婦人を造くるの必要があると信ず、と老伯は性來大言壯語の癖もあるが、其詭辯的言葉は一種の趣味を湛え、中々面白く話されることがある、

◎澁澤榮一男も、一席の演説をされた、彼れは實業界の泰斗である、日本の經濟に缺く可からざる人たる丈け、中々平凡を抜ける高見達識を具えて居る、氏の演説は、私は教育家でないから、教育上の意見は有して居りませんが、と前提を置き、唯本校との關係は、會計監督の責任があるといへばあまりに立派過ぎるが、實は例の兵站部の責任を負はせられたのです、何うも此兵站部ほど困難なるものはない、本校の創立までの間は、私は隨分兵站部の爲めに頭を痛めました、決して自分の功勞を吹聽するのではありませんが、凡ての事業は賛成するものが隨分多くあるも、サテ金となれば人は皆逃け出すもので、成り立つて後では、黃金の雨でも降つたかのやうに想ふでせうが、黃金の雨は決して何處にも自然に降り來るものでありません、云々と校の會計上に付きて一通り、述べ終り、教育上に付きては何等の意見もありませんが、諸君……一言申して置きたいこ

とはありますと言ふて、私の愚見では、日本の女子教育は、外國風を其儘模倣してもいけません、また古はいざ知らず今日では、貝原益軒翁の女大學ばかりでもいけません、要は日本風と外國風を混融して、所謂折中主義で、よい鹽梅に時勢に適切なる教育を施すがよからうと思ひますが、しかし之れは主として教育家の手腕に存することである、私の最も希望する點は、唯日本の婦女子に固有ともいふべき、清純なる淑德、優美なる容儀、の特性特質をば永久に保持したいと思ふ、と言つた、言葉は簡朴であるが、彼れの熱誠篤實なる性情は表はれてゐる、終りの希望の一言は、陳腐なるが如くして而かも至言である、方今の教育家の頭腦には、是非とも此觀念を有つて貰らひたい、

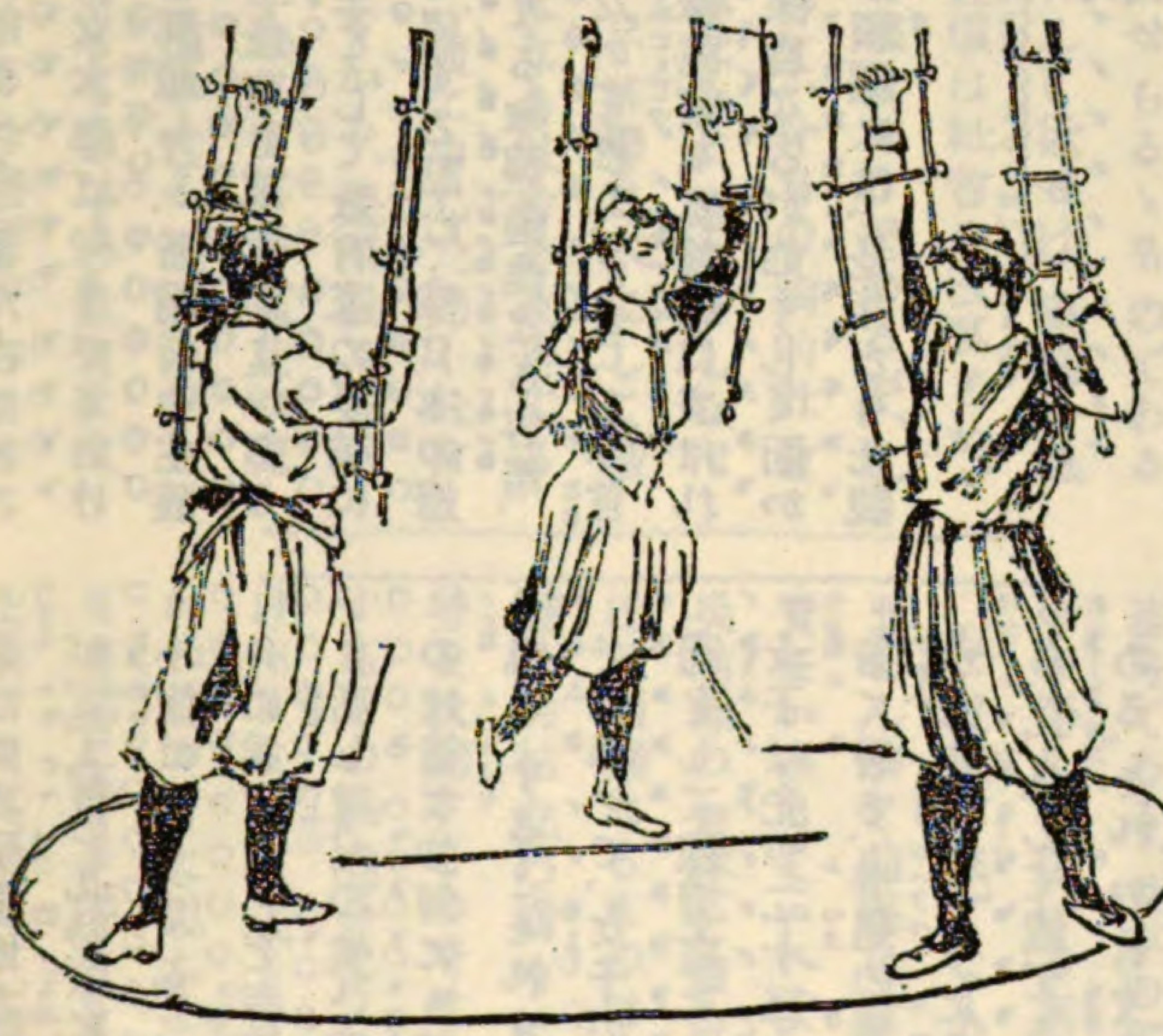
女子體操學校

近頃女子の體育が段々奬勵されて體操教員を養ふ所もある、併しまだ今の處女子の體操を專らとする所はないが、茲に一ッ亞米利加の女子體操學校の事を話して見ませう

是は新英蘭土地方の或る町に在る體操學校の事であるが、午前の九時頃に行ッて見ると、幾人と來觀人が居、小使はダンベルだの木馬だのを配置して教員が其の日に爲すことを指圖して居る、其の間に女子の聲らしき話し聲だの笑ひ聲だのが聞える、その現はれて來るのは皆な如何にも健康で活潑さうに見える、處に鈴が鳴る、するとそれまでガヤ〳〵言て居た聲が全く止んで仕舞ッて、女子が行列して歩んで出て來る、教員に一禮をして練習室に入込む。

女子は先づ二十五人も居る、いづれも圖の如き着物を着て居る、普通の着物のやうに窮屈なものでない、襟は水夫の襟のやうに造ッてある、袴は膝の所で結んである、一見して感ずるのは皆な如何にも健康らしいのである、それから又さう云ふ一種の稽古着を着て運動をして居る連中の中に三十歳以上のものも居る、之には少しく驚かざるを得ぬ、先づ平均の年齡は二十五歳であるが、それが皆な小學校へ出るもの丶やうに活潑ら

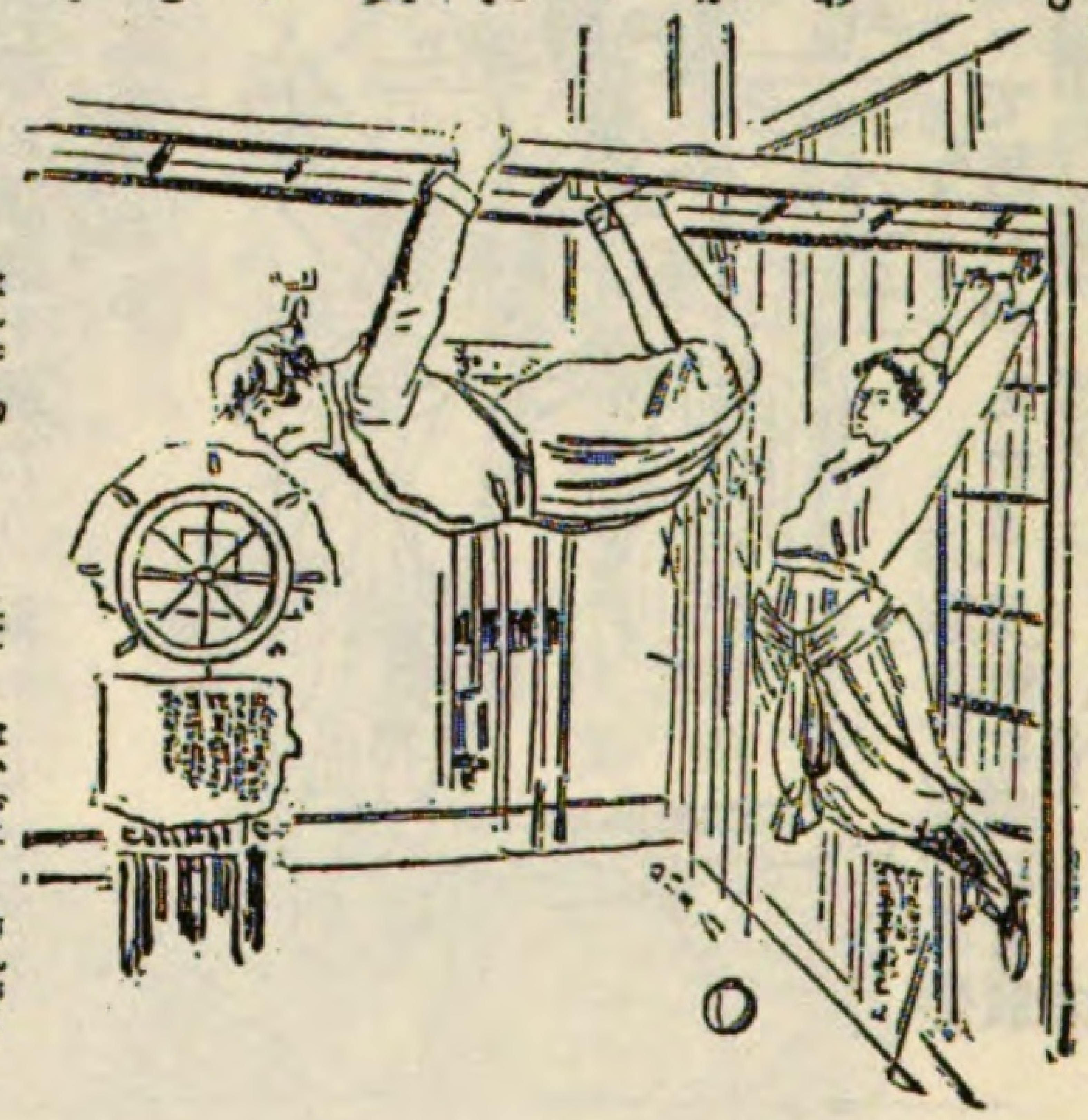
しく見えるのは隨分妙です
それが二級に分れて居ッて、敎員の命令で兵隊のやうに一列になッて整列をする、頭を高く擧げて、しつかり直立し、胸を張ッて踵を合はし爪先きを正しい角度にし、さうして手を脇に密接さして居る、これが稽古の始まりです
ピアノの奏せらるゝと共に體が兵式に動き出す、自由に排列し進退して男も及ばぬ程巧みなこともある、それか十分間も續いて居る
それからやさしい體操に移ッて行く、女子はダンベルを持ッたり棒を持たり又クラブを持ッたりして色々の形で振出す、二十五人揃ひも揃ッて身體が良く、ドレも變に曲ッたりして片輪のやうに見えるのはない、固より體操の技術には上手下手はあるが、其内十人は勝れて巧みであッて殘りの者は大抵に熟達して居るといふ有樣だ



こゝに這入ッて規則通りに稽古をすると、大抵は斯う曲ッた片輪なりになッて居るものも當り前に直ると云ふことである、二年前に入學したといふ者があるが、入學の當時顔色甚だ惡るく胸が引込んで肩か曲つて喉が細くッて、身體の形が如何にも醜かッたのであつたがそれが今見る所では非常に變化して居る、胸が張ッて喉が圓るく身體は正しく立ッて居る、先きに虚弱で仕方がないと見られてゐた者も今は實に斯う立派に爲つて居るのである。

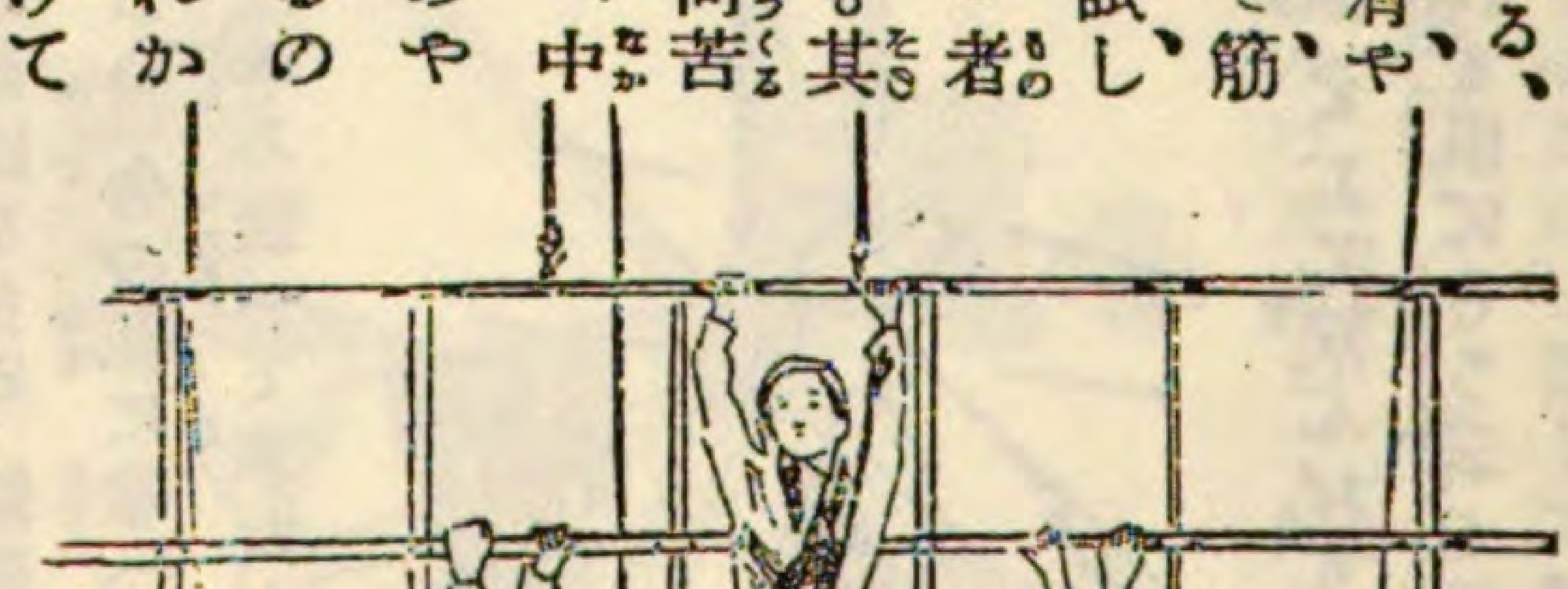
やさしい體操を一時間ほどして終ッて、十分間の休みがある、其間女子は皆な面白をかしく謡ッたりして彼地此地を飛び廻ッて居る、それからして最も骨の折れる體操が始ッて又一時間も續く

天井から幾ッも縄が下がッて、下に鐵の輪がある、其輪をつかまへて、ブランコをするやうに身體を振ッて其の次の方に移ッて行く、さうして段々に移ッて行く第二圖にあるやうな梯子乗りは殊に肺及び筋肉を發達させる爲めに設けられてあるので、これらは餘程効能のあることになッて居る



それから又脊中を強めることがある、是は見物人から見ると隨分慘酷のやうに思はれるが、皆な一向平氣で少しも厭やさうにせずにやッて居る、一人〱バラレルバースの上に手の掌と足の爪先きで身體を支へて横たはッて居る、

其間敎員が肩や背中を押して筋肉の強サを試して居る、或る者は十五分間も其儘にして一向苦しみもせぬ、中には鋼の棒のやうに剛強なるのもある、それから脊中を曲げて肺の筋肉を發達さする仕方もあるが、それも隨分難義さうに見えるが、皆な喜んでして居る



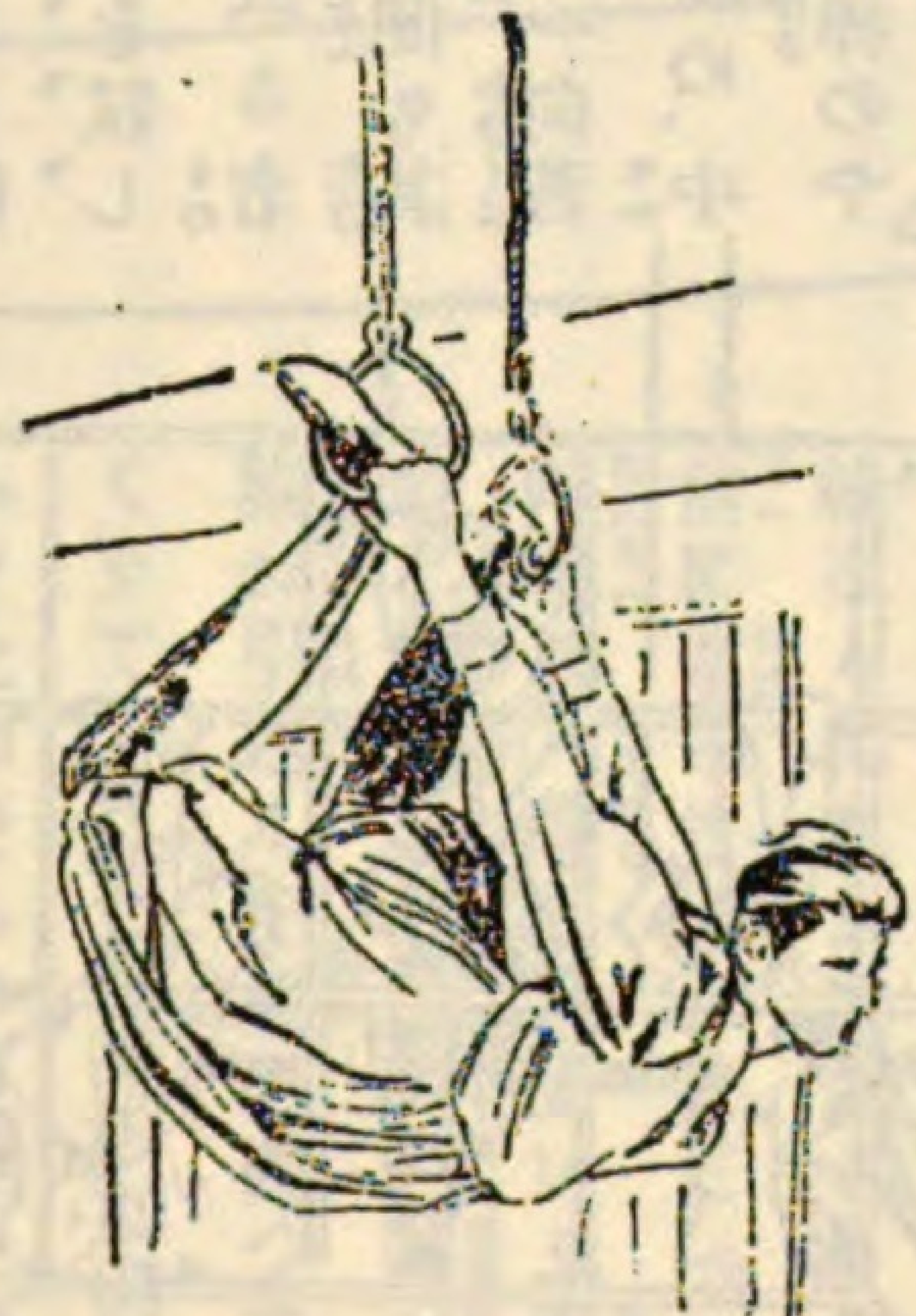
其授業が終る頃に二人撃劍をして出る來る、是は頗る

巧みで中には甚だすはやくて、早さと共に能く調子が合ッて居るのもある、又どこやら女らしくやさしく見えて居る、しかし劍を撃つさまは充分力が這入つて居ると認めねばならぬ、是が終ると全級皆な講義室に入込む、一時間も解剖學の講義を聽たり、何かして居る、先づ午前は斯う云ふ風で終る



一週間の内に毎日同じことの繰り返さるゝのが多いが又中には其日に依ッて變はッて居るのもある、又別に舞踊も敎へられる、それから他の科目の講義もある、一人〳〵別々に敎へられるのもある、又病人の級もあるそれは脊骨が曲ッてゐたり何かして身體の充分でないものが始め附添人と共に入込んで來るのですが、多くは二三年其處で色々と療治をして貰ッて居る内に直ッて仕舞ふ

近頃は斯う云ふ流のことが餘程流行ッて來て、皆な身體を強くせねばならぬと思ッて居る、實に手だの足だのを充分に用ゐねばならぬ、健康が第一と云ふことになッて、細くッて百合の花に喩へらるゝやうな者を美人とすることは寧ろ衰へて來たといふて妨げない、それよりも身體がしつかりして、唯その若い時ばかりでなく、多くの小兒がわッてそれが皆體操をして飛んだり跳たりして居る時、自分も矢張りそれと倶にさう云ふ運動に堪えられる樣になるのが望ましいことになッて來たといふのは米人何某の話であります



社交

訪問及音信の事

人は社交的のものでありますが、さればとて單に用事を辨ずるばかりの爲めに、人を訪問するものではありますまひ、人と人との交際は用事のみで繋がれる可きものでない、父子なり、夫婦なり、兄弟なり、姉妹なり、朋友なり、其の關係は必ずしも金錢の貸借があるのでない、共同の仕事があるのでない、又共通の利益があるのでない、是等は一切利害損得の外に人としての關係がありませう、既に人としての關係があれば、人としての交際を全ふする事も亦考へねばなりません、即ち用事以外に交際を全ふするとも、亦考へねばなりません、即ち用事以外に交際といふ事があります、されば用事がないとて、人を訪問しないのは決して交際の誼を全ふする所以ではありません。時刻も場所をも頓着せず徒らに人を訪問し、亦、長坐をして人を困らせるのは決して好い事ではありません、けれども用事がないからとて鼬の道同様に、親しい人を疎遠にするのは又決して好もしい事ではありません、而してあまりに疎遠に致せば、遂には閾が高くなッて、之を踰ゆる事すら甚だ六かしくなるものであります、譬へて言へば山間の小徑も、若し人の踏まなくなれ



これは女子が決闘服を着けし理想畫に御座候其實自轉車に乗り候へ共未た決闘なする程のおてんばには無御座候（在伯林小波生）

ば、忽ちにして茅や薄が生ひ茂ッて其の痕を埋めて仕舞ます、人と人との交際もこれと同様で、折角の親友も疎情になれば、何時しか其の交情は斷絶するものであります、されば人間の交際に於ては訪問が一番大切であッて、用事の有無は別段として互ひに訪ひもし訪はれもすることは大切な事であります。

訪問と同じく大切なのは音信であります、兎角日本人は手紙を書くことを單に用事を辨ずるもののみと心得、用事がなければ、如何に親しい間柄でも時としては親子の間柄でも、音信をせぬものがある、此れは大きな心得違である、決して天倫の樂事を全ふする所以でない、訪問は近い場所ばかりに限られて居るけれども、音信に至つては星や月の世界にあらざる限りは、世界の隅から隅まで行き屆くものである、それを怠つて居るといふのは如何にも心得のない人と言はねばならない。

概して日本人は手紙を書くのを一種の苦痛として居るらしいが、之に反して西洋人は、能く手紙を書く事に勤める、のみならず、是れを一種の樂事としてゐる、そして其の手紙は如何にも綿密精細で、時としては理由もたわいもないことをば幾百行となく、書き立つるのは殊勝な心掛といつてよろしい、尤も西洋人は半面に於て實利を重んずる念が强から、用事の手紙を書く時には、簡單明快に其の用事のみを書くのであります けれども、併し用事以外の手紙に就ては十分其に勞を吝まず、否之れを勞と思はないで、却て交際を全ふするの樂みとし致して居ります、然るに日本人は用事と交際との區別を知らず、用事の手紙を書くにも前後に無用の文句が多く、却て用事の主旨は茫然として辨じのつかないやうなのもある、而して交際上の手紙に至つては全く書く必要を感じて居ないのみならず、折角之を書いても如何にも極りきつた文句で、何の風情もないのである。西洋では手紙を書くことは、普通男女の嗜みとして必らず修練し居るのであります、されば其の人の地位の如何によりて、上手と下手とはあれど、決して之を等閑にしては居らないのであります。

我國でも、訪問や音信の事は從來、それ〳〵式もあり、

習ひもあつたけれど、概して維新前後は破壊されました。されば明治の今日に於て、その風習を養成するのは、家庭及び社會改良上に大切な事であります。

流行のしをり

●流行の夏禮服

十七八才の令孃向は地質五本絽にて糸は薄藤、薄小豆、雪紅色などにて紋は五ッ紋大きさは鯨一寸模樣は高江戸裵にて秋草の白抜又は瀧過の千鳥の薄細色入り夫れへ時色絽の二重を付け緋絽縮緬の裏衿にて仕立上りの代卅五圓位ひ

△長朱伴　絽縮緬又は紋絽の白地に曇繡の龍か肉色地に千羽鶴の白抜ゆ半衿は白絽縮緬に銀糸霞に花紋ちらし仕立上り拾七八圓位ひ

△帶　絽朱珍納戸地に銀糸の觀世水又は金銀の折鶴八釜模樣代は三十圓位ひ

廿七八才位ひ　絽縮緬の利久又は生壁色にて五ッ紋大きさは鯨一寸奴裵模樣にて雲見きりに靜海浪か疋田地に千鳥の蔭抜き二重は白絽縮緬裏衿水色縮緬にて仕立上り卅八圓位ひ

△長地伴　絽縮緬の白地に曇繡の秋草又は景色模樣にて白絽縮緬の半衿にて仕立上り十八九圓位ひ

△帶　絽繻珍の薄納戸地に銀糸の鱗形又は銀浪は金千鳥代は三十五圓位ひ(大丸吳服店報)

●フランネル地

フランネル、セル地とも羊毛より製織するは、謂はでものことながら、腹部は柔か過ぎ、背は又餘りに硬ばければ(敷物用としては至極適當なるが)其上等品は、何れも咽喉下の毛のみにて、織成したるものと知るべし、本邦品とて、元料は濠國より輸入するなれば、原料には差して相違なけれども、製織術の劣れるため、水に入るゝ度毎、縦糸縮みて小皺となり、何となふ着心悪しくなるは、致方のなきものなり、而して本年の舶來品は、昨年仕入期の相塲廉かりしため、殆と一割位の安價にして、フランネルの如きは、本邦品と何程の違ゐなく、着物一枚分、男子物にて、貳圓七拾五錢、婦人物にて、貳圓九拾五錢位にて、普通のネル地は購ひ得らるべし。

扨て近頃流行のネル地は、英國製(薄地物)にして、獨逸製(厚地物)は洗濯の度に、毛が纏れ合ふて、ぼてつく氣味あれば、寒地のシャーツ用の外需要少なき模樣なり、其流行の柄合は、左の見立に依りて、判斷ありたし。

婦人向

色合は蜀黍、濃淡の鼠、栗色等風通、小紋縮緬風の柄合を始め、雨莚縞、曙縞、赤大名(黑地の赤縞)

同若向

色合は紅梅、牡丹色、藍、紫等の矢絣、兒持縞、瀧縞、節糸風立縞、霞絣又は風通、御召風の柄合

男子向

色合は紺、黑、鼠、濃茶等の、千筋又は萬筋、みぢん、くづし等。

小供物

小供物は、重に友染ネルにして、是は昨年來非常の流行なるが、其外にては大立縞、浮糸入の縞、又は絣の類なり、色合は婦人の若向と略同し。

價格は

一ヤール 六拾三錢 六拾五錢 六拾八錢 七拾錢 七拾三錢 七拾五錢留にして、男子物には、六ヤール二分五厘婦人物は六ヤール半、同若向（振袖物）■には七ヤードを要し、仕立代は、普通五拾錢より、七拾錢位なり。セル地は、フチンチルと遊び横縞が充分に銕なし得れば、吉野、風通、一樂、御召等の如き、見事なる紋樣を織り出したるがあり。

婦人向

色合は鼠、栗色、白茶、藍鼠、紺等の吉野織、一樂、風通風の紋柄にて、意氣會社にては、俗に鰹縞と稱へ、黑地又は革色鼠地へ、白の片見持筋を織出したるが、非常に嬉ばれ、同若向は、以上の色合に、赤味を持ち、縞柄の大目なるものと知るべし。

男子向

色合は鼠、紺、黑、革色鼠等にして、チル地と同樣隣擘筋、みぢん、大名た娃め、刷毛目、鰹縞等。

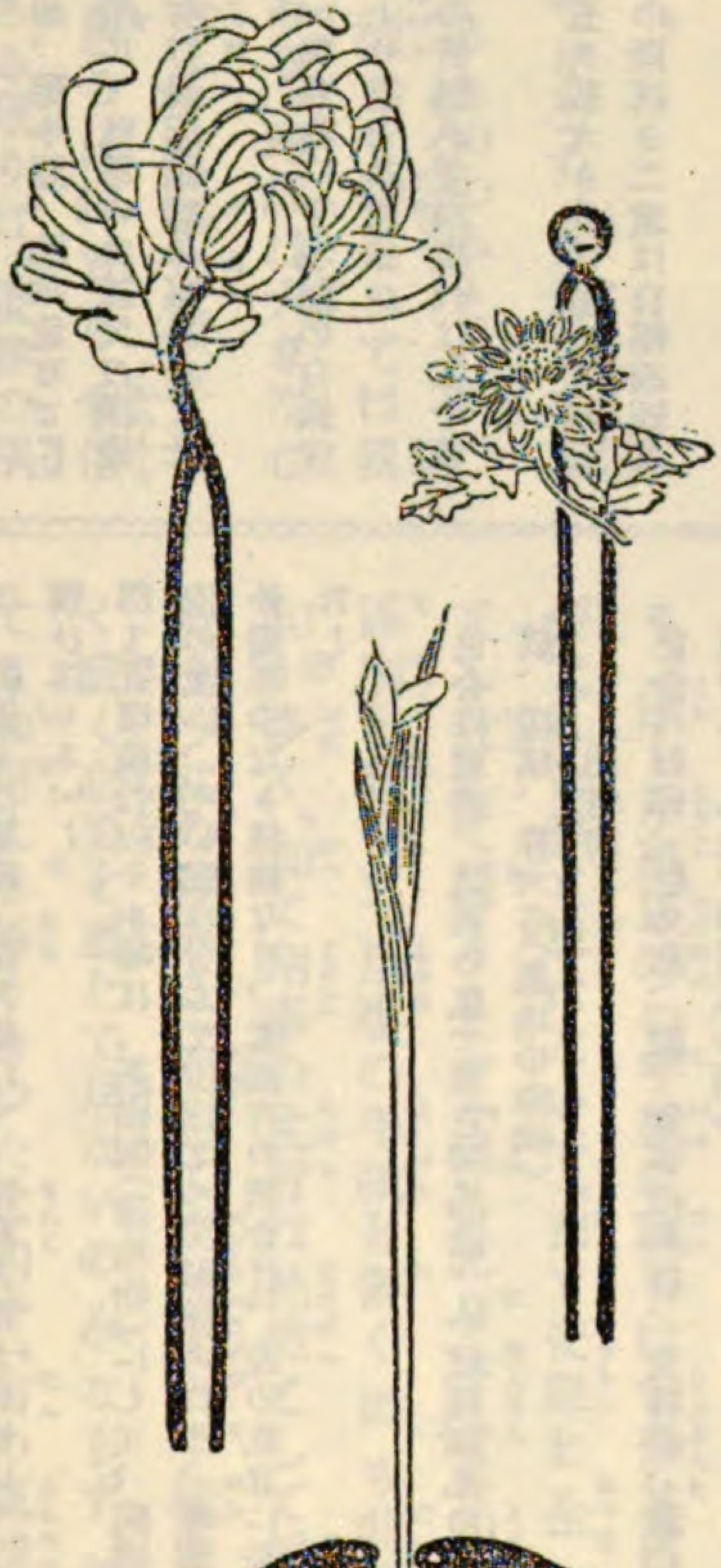
小供物

色合は藍、紫、淺葱等の矢筈、よろけ立枠、瀧縞、友染模樣等。

價格は

邦製一ヤード　八拾錢より壹圓留り

舶來品一ヤード　壹圓五錢　壹圓拾錢　壹圓拾五錢　壹圓貳拾錢　壹圓貳拾五錢留りにして、本邦品にては、男子物五圓、婦人物五圓貳拾錢、娘物（振袖物）五圓六拾錢、舶來品は、男子物六圓五拾七錢、婦人物六圓八拾貳錢、娘物七圓參拾五錢位にて、普通の地質を得らるべく、仕立代は壹圓より、壹圓五拾錢位なり。



◎流行の前差しと根掛

圖に示せる菖蒲形　は角製、象牙の花にして、拵へも仲々巧みなる上に、拾五錢と云ふ御愛憎物とて、銀杏返、島田を始とし、三十五六歳留りに、殊の外喜ばる。

亂菊の簪　は全部銀製なれども、花丈けを艶を出さず、態と生地の儘白上りとなしたるにて、態と磨きをかけずして、どんよりと、底に光りを持ち居る具合面白くして、銀杏、島田髷なくには、恰好の差料なり、價は三圓より五圓位。

差込風の簪　近頃差込簪しの流行に連れ、其風を取りて作り出だせる新形にして、松葉形の脚へ、菊花又は四季の花物を、差込風に打附けたるにて、總鍍金が上品なりとて、二十歳位迄の婦人に、尤も持囃され居れり、價は壹圓七拾錢より貳圓位、

七寶延しの根掛　銀臺の總鍍金にして、七寶形を一筋に延ばしたる眞珠入なり、無論丸髷用なれども、銀杏返しに掛くるも亦好かるべし、價は

貳圓より、眞珠次第にて拾六七圓迄あり。

○流行の羽織紐

以前は丸打が流行なりしが、近年は平打丸打とも五分々々の流行にして、種々變はりたる品あり、先づ男子向紋附の羽織には、普通丸打の太目にて極永きが似合はしく、平打物にては、幅廣の篭目打一枚紐が、昨年以來流行さはなりたり、而して此篭打にて縁取の中筋入は無論意氣の方ならんが、縞物には隨分映り好かるべし。

縞の羽織には千歳打さいふて、平打三枚を鎖風の中筋にて、綴合せたるが、尤も評判よく、上下二枚を鼠に、中一枚を白さなしたるものなどは意氣向さも申すべくして、尤も上品なるは三枚友色のものなり、色合は白、黑、柿、鼠、濃、茶等種々ありて、何れも總撚返しの房附が流行さ知るべし、婦人物は男子物さ違ひ結切り流行にして中にも、吾妻打鎖さ連れたる如き、打方(差絡參照)と羽衣打(結目丈吾妻打他は撚返しのパラ〳〵糸)さが一般に氣受け好く、意氣社會にては、千鳥、唐打、都なごいふ、細の丸打にて蝶結びにするが流行なり、色合は若向には牡丹紅、梅鼠、柿色、濃紫、夫人向には茶、鼠、利休鼠、柳茶、素鼠等にして、丸物を除きては、凡て撚返しの房附なり(日本橋葭町佐竹組糸店調)

價格太の丸打(長紐)貳圓十錢　篭目打(同)　參圓
千歳打(同)　貳圓九拾錢　千鳥、唐打、都打の丸紐參拾五錢より
羽衣打(結切)　七拾九錢　吾妻打(同)　七拾錢

夏向の用品

最早立夏の節に入りたるが岐阜提灯は年々需用增加し本年の如きは絹地摸様のものにて銀金具を附したる最上優美の品現はれたるが目下製造元の下相場を聞くに紙地に山水花卉動物類を描けるものにて小三十八錢以上、中六十錢以上、大一圓以上二圓五六十錢また絹地上等銀金具裝飾附は九十錢以上五圓までにて外國輸出も大いに增加したりさいふ▲夏向庭先に用ひる青竹の椽臺は昨今賣口頗る好しさぞ元來竹は七八月頃切取りて製造せば蟲の喰ふ患ひなく且久しきに耐ふれば一般に青竹のものを喜べば隨つて持も惡しさいふ相場は中間物十三八錢以上四十五錢、六尺物八九十錢より一圓五六十錢なり▲夏座布團類は種類大いに增加し檜の皮あり備後蓆あり護謨引の布製あり太藺ありズックあり油引の紙製あり何も清涼を感ずる品にて美麗なる着色を施しあるが價は一枚十五錢以上一圓二十錢までなり尤も本年は護謨製空氣座布團流行の摸様あり價は一枚八九十錢以上三圓止りなりと聞く▲市内にて名ある擊劍柔術用の道具製造人は昨今頗る繁忙を極め居る由なるが右は朝鮮、臺灣、布哇、米國、英國等より注文多きためなりといふ相場は面、小手、竹刀、胴等一組五圓以上六圓五十錢位なり風▲風鈴屋は昨今市内にて見受け初めたるが本年は非常に複雜りたるもの出でたりされど其好み如何にも俗に過ぎたれば外國人ならでは買ふ者少なし價は八十五錢より二圓三十錢位なりといふ尤も並物は六七錢より廿錢前後なり▲藤製の乳母車は昨今需用者多くなり種々なる彩色附のもの現はれたるが美麗なる裝飾品日覆等悉皆附きて二圓八十錢以上五圓五六十錢位なり▲簾類の景況ちりん〳〵と鳴る風鈴の午睡の耳に遠く近く簾越しの風に凉しき夢を貪るも最早遠からずなりたるが其簾類の景況を聞くに相場は昨年さ大差なし尤も本年は外國よりの注文なければ孰れかといへば景氣好からぬ方にて竹簾皮選びにて一間四方上物八十五錢以上一圓五十錢、同横一間竪四尺物六十錢以上七十五錢位、同三尺物四十三錢以上六十錢位にて皮と身さ一本替にて一割五分安なり又葦簀は別注文にて一間四方上物七十錢以上二圓、同中間物三十五錢以上八十錢、同二枚折屏風形八十錢以上一圓、簀戸一圓二枚物は上物二

圓以上三圓見當なるが此外山道又は瓢簞等の摸様入は竹の節にて編み立てる事出來るも綿密なる書畫物は何れも切り拔細工なれば手間貫非常に高く價は並物の三倍位なり又本年より丸ヒゴの器械製品現はれたるが極めて美麗にして奥ゆかしき者なるも價は三尺物にて三圓以上四圓位なり

洋傘の流行と其變遷

爰に西洋傘の流行物を案内するに先だちて、明治初年以來之が流行變遷の大略を記すべし。抑も西洋傘の商品さして、始めて我國に輸入されしは、慶應年間にあり、然れども其當時は之れを求む者稀にして、東都に於ける販賣店も、只僅かに南傳馬町の仙女香坂本及び日本橋通り一丁目の久保田等二三ありしのみ、斯くて維新以後百事面目を改むるさ共に西洋傘漸く行はれ明治四五年頃に至りては益々流行し、極端なる守舊家を除くの外は猫も杓子も之を携ふる姿のなりたるが、其頃の流行物は、今日の如く贅澤なるもの少く、十中の八九までは、天笠張りの深形にして、色は青、茶、黑の三種さし、骨は何れも丸骨なりき。

斯くの如く、洋傘の流行益々盛んさなりたる處より、明治五年中仙女香坂本に於て甲斐絹張を製造したるが是れ和製洋傘の嚆矢なりさす、爾後此甲斐絹張り大に行はれしが色は海老茶、青、黑等とし、柄の握りば水牛、鹿の角等の曲り形の極猫奢なるが多く流行したり。

明治十年頃淺骨の物出で來り之より深形一變して淺形さなり彈ぎの金物廢れてパテン之に代り其後十五六年頃より毛繻子張の品現はれたり、されど形は二十年頃まで引續き一般に淺形行はれ、然かも大形なるものなくして、男女共に中傘を好みなれば、亭主と女房さ一本の傘を供用すべく、なか〳〵重寶なりし處より、中傘一名女夫傘の名もありしさは、鳥渡可笑しき話なり。然るに二十年以後淺形物漸く廢れて、再び深形さなり又此頃より男女の品を區別するに至りしが、其後二十五年頃より今に至るまで格段の變遷なし。

さて今年の流行物なりさいふを聞くに、男持の上等品は里昂製の海老茶、或ひは靑の綾絹張にて柄の握りは自然木とす、此代價は二十圓前後なり、次に普通の品は、甲州改良綾絹張り及び越前奉書張り等にして、柄の握り矢張り自然木さす、此代價は三圓より五圓位まで、又女物の上等は、娘向さしては、里昂製の緋、御納戸等色物は紋織及び黑の紋織華美なるもの、年增向さしては里昂製黑紋織さして、柄は何れも象牙、黑檀等に彫刻を施したるものにて代價は是も二十圓前後なり、同普通の品は、西陣及び桐生製の紋織さし、柄は棕梠竹に護謨製の握を附けたるものにして、代價は三圓より五圓位までなり、其他絹張にても廉なるものは、二圓前後、又木綿張りの品は、一圓前後にて求め得らるべしさなり。

時論一斑

交際論（風俗改良談の一）

東京音樂學校長　渡邊龍聖

私は、風俗改良さいふことを以て、二十世紀を迎へたさいふ考を以て居りました、其所で二十世紀の始に於て、其問題さして「相續論」、即ち家庭改良論「奉公論」、即ち國民的生活論、「交際論」、即ち社會改良論、「信仰論」、即ち宗教論、「趣味論」、即ち國方の美術的嗜好に關する所の議論、これ等五問題に就て本年に於て普通講談を致したいさ思ふて居るのでありますゝ、其處で本日東京市教育會の第一講談會に於て、私が志す所の問題

に就て、卑見を申し上げる機會を得たは、甚だ面目と致す所であります、

風俗の改良、公德の養成といふことは、此世紀になりまして、種々の新聞などに於て見受けます、殊更讀賣新聞には、公德養成といふ題が出て居ります、又板垣さんは風俗改良といふことを、主として御述べになる樣に承つて居る、全國聯合教育會へ文部省から全國小學校及中學校に於て公德養成の方法如何といふ、諮問案が出るといふこと、一體私の考へに致しますと、今日一般の人達は倫理道德といふことを、誤解して居ると思ふのであります、倫理道德といふものは、非凡な豪傑を作るとか、若くは神佛と謂はるゝ樣なものを作るといふことが、主眼ではないと思ふ、人間といふものは、如何程練り上げても、人間は人間で終はる決して神や佛にならるゝものでない、私は倫理道德の主眼は寧ろ凡庸の人を作るにありと思ふ、人間以下の者が社會にあつては困まる、乃で人間並の者を作れば結構といふ考を以て倫理道德を教へて貰ひたいと思ふ、故に私は今日の多數の人達の考へとは違つて居るかも知れませぬが、修身の教育、倫理道德の教へには決して非凡な行ひ、非凡な人の爲した極端の例を之を教ふるといふことは、喜ぶべきことでないと思ふて居る、古往今來美談は隨分ある、忠臣孝子義人烈婦の美談はあります、今日、修身道德を語る人は、兎角之れ等の極端の塲合に於ける美談を以て人を教へたがる、極端の困窮に處したる孝子の實例や、危急存亡の塲合に於ける忠臣の實例であるといふ事柄を以て普通一般の人達に授けたがる、そんな塲合には、修身に一遍出逢ふかどうか分らぬ、又此四千萬人の同胞の中の幾人がさういふ實際に遭遇するか、實は甚だ稀なる所の人達がさういふ塲合に遭遇するであらうと思はれる、乃でソンナ稀なる塲合に稀なる人が處すべき方法を教へんよりは寧ろ所有る人が毎日毎時に爲さればならぬ事を授けた方が甚だ勝さつて居ると思はれる、私の考へでは、倫理道德の教へといふものは、一個人として完全に善く働くことの出來る人、又家族の一人としては善良なる夫と爲り、善良なる妻となり、國民の一人としては善良なる所の國民であり、社會の一人としては、善良なる所の一人と爲り、人にも愛せられ、人をも愛するといふやうな人、即ち何れの方面から見ても完全な人を拵るといふのが倫理道德の主眼でありて、決して非凡な豪傑とか、或は神佛の如き理想的のものを作るといふことは主眼でない、又主眼としても成功し得べからざることであらふ、其處で人の生活に多方面ある中で特意に我國民の最も缺點とする所は、社會的生活に於ける道德といふとである、然し日本人が性來公共心に乏しいと云ふ譯ではあるまいと思ひます、實は吾々は、公共的のことを餘り能く知らないので公共心に乏しく見ゆるのであらうと思ひます、

（中略）

◎今日は申し上げる迄もなく、平和の時代である、戰爭が有つても、平和の時代である、昔の人は人を殺す爲めに戰ふたのである、領地を奪はん爲めに戰ふたのである、今日は戰爭があつてもそれは平和を得る爲めの戰爭である、殖産興業の實利を收めん爲めの戰爭である、人を殺すが主眼でない、昔の如く人口の少い時代には人天然の生産物に依賴して生活が出來た然るに今日の如く人口が多くなり何れの土地も住民を以て滿されて有つて見れば、如何に廣く領地を有つて居ても、天然の生産物に依賴して生活することは出來ぬ、然らば今日にては土地を廣く有つて居るといふは必ずしも利益ではない、人が働いて殖産興業の方法を研究して衣食せねばならぬ時節になりて參りました則ち今は殖産興業の時代である、さて其の殖産興業といふものは昔のやうな工合に人々が離れ離れに、孤立的に働いて居ては、決して之を盛にすることは出來ぬものであ

ります、飽迄も協同せればならぬ、

此頃、社會は一の有機體であるといふことが盛に言はれて居る然し社會は有機體ではない、社會は人間といふやふな有機體ではない、けれども社會を進歩せしめんには是非社會を有機的にせねばならぬ、昔の社會は決して有機的でなかつた、各個人が個々獨立して孤立的生活をした、即ち社會は個人の集合體であつた、恰も河原に小砂利の集つたやうなものであつた、（中略）

人物さへ勝れて居ればどういふ社會に生活しやうともえらい勝れた働きが出來ると思ふと間違ふ、なんぼ文明人でも文明社會から切り離されし「ロビンソン、クルウソウ」の如く孤立されて見ると、文明人としての働きは出來ぬ、如何なる明文章が有つても、其中から一言一句を切り離して其一文字に甘味がありますか、一の文章といふ全體の中にあるからして其一言一句に旨味がある、それと同じで、個人も社會から切り離されれば決して旨味の有るものでない、其社會に生活して居るからして其個人の價値が有るのである、其個人に社會的價値があるからして、其社會の價値が出てくる譯である、社會を進歩せしめんには又其社會を組織する個人を進歩せしめんには、どうしても吾々は社會的生活を重じ、互に助けつ助けられつせねばならぬ、先刻拶席に於て江原君の御話に「土地を肥されば大木が出來ぬ」と如何にも其通り、社會を肥されば豪傑は出來ぬ、昔の太閤秀吉を此處に持つて來ても今の社會では豪傑であるまい、彼の時代が拵らへた豪傑である、今日豪傑を拵へんには先づ此社會を肥して行かねばならぬ、英雄豪傑は其社會の生産物である、故に社會的生活を重ずるといふが人生の務の中で最も needed なのである、乃で其社會的生活に於ける最も大切なる問題の交際論に就て今日御話し申し上たいと思ふ、社會は個人の協同に依りて進歩する、個人の協同は相互の交際に待つ事が多いからである、

◎然し前以て一言述べて置きたい事がある、協同といふことが必要であると申しますと、或は誤解する人が有るかも知れぬ、それは協同と依賴との混同である、是の二者は別物であるから明瞭に區別して戴きたい、日本人は協同には弱いが、依賴には强い、子が親の財産に依賴して惰け、親が子に依賴して、未た達者の身で有りながら左團扇で暮さうと考へる、親類に一人の金持が有ると近所近邊から寄つてたかつて寄生蟲的生活をしやうとする、自分が働いて立派に生活を營むことを考へずして寧ろ寄生蟲的に人に依賴して乞食のやうな生活を爲す事を好む者が隨分社會にある、寄生蟲的生活は協同でないと思ふ、少し名の知れた人に爲ると、同縣の好さか、同鄕の好みとか言つて、種々な人から種々なことを依賴に應ぜれば、「彼の富豪を以て是しきのことをせぬ不仁の奴ある」と言つて罵り騷ぐものがある、（中略）

即ち社會に於て寄生蟲が澤山出來ますと、交際が圓滿に行かぬ、圓滿なる交際は出來なくなる、一寸笑顏をして來る者があれば、何か賴みに來たのではないか、金でも貸せといひはせまいかといふ疑が起る、眞の交際は衣食住の依賴を離れなければ出來難い、即ち眞の協同は獨立と相待つて行かればならぬ人は飽迄も各自の職業に就ては獨立せればならぬ、自分の職分は自分で盡す、自分の爲すべき事丈は飽迄も自分で爲し、決して人に依賴せぬといふ事でなければならぬ、斯の如き獨立は協同を妨げぬ獨立である、（中略）

交際の種類を別てば種々ありませうが、私は便宜の爲めに職業的交際、友誼的交際、儀式的交際との三つに別けます、職業的交際は職務に關する交際、友誼的交際は意氣投合しての交際、さて交際の方法を尋ぬれば種々ありませうが、重なるものは談話、交通、訪問それから贈物、それ

から會合、是等の方便に就て是れから申し上げたいと思ふ、
第一談話であります、昔の人は寡言沈默といふ事を重んじた寡言沈默は、道德の一部分であつたやうでありますけれど今日の社會に於ては寡言沈默といふことは道德の一部分ではありませぬ、口は食う爲め許りではありませぬ、又饒舌る爲の口である、時に依りては隨分饒舌るが宜い、舌は味ふ計りの道具でない、又思想交換の機關である、昔のやうな時代即ち個々孤立の生活を爲せし時代には、内部の事情を人に知らせるといふ事は能くなかつた、法律も不完分であるから危險が多かつた、個々孤立でございますから助け合ふことも少ない、故に成るべく内部の事情を人に知れぬ方が宜かつたので寡言沈默が宜かつた、然し今日の如く協同を要する時代には人も知られればならず、自分も亦人に知られなければならぬ、自分はどういふ所に役に立つかといふことを人に知つて貰はねばならず、亦人がドンナ所に役に立つかを知つて居られればならぬ然らば饒舌つて人を知り人に知らるゝといふは結構である、饒舌らるゝ丈饒舌るが宜いと思ふ、併しながら口は禍の門、病は口から這入り、禍は口から出る、故に饒舌は結構と言つても無茶苦茶に饒舌つては交際の道に適はぬと思ふ、

◎第一には職業的の交際の談話であります、私の考へを申しますと、職務上用事が有つて談話する時は、其談話は簡單が宜い簡便に趣旨を明かにするが宜い、要らぬ無駄口を述べたり、飾り口を述べたり、御追從の言葉を加へたりするは、今日繁忙の世の中に於ては無益である、職務上の談話は簡單にして明瞭でなければならぬと考へる、

◎併し儀式上に用うる談話、即ち冠婚喪祭は儀式の重なるものであるが、是等の場合に用ふる談話は必ずしも簡潔を主とするものであるまいと思ふ、寧ろ感情を疏通するを主とするものであらうと思ふ、體冠婚喪祭の如き大禮といふ者は、其當局者が最も多く人からの同情を要するものである、悲みの場合に於て友達から同情を表せらるれば、其悲しは半ば減ずるものである喜びの場合に於て同情を表せらるれば、其喜びは倍增する樣に感ぜらるゝものである、儀式上に用うる言葉は感情の疏通を主とし、能く己の感情を表はし能く己の同情を表はすことに務めねばならぬものであらうと思ふ、又言語は多少美術的でなければならぬと思ふ、少位は言葉に飾りが有つても宜いと思ふ、單刀直入よりは圓滑に美術的に其儀式にふさはしき飾りがあつて然るべしである又談話といふものは必ずしも言葉のみで爲すものでないといふことを忘れてはならぬ、人の同情を最も多く要する所の冠婚喪祭の如き大禮の談話は、口が半ば、擧動半ばといふ譯であらうと思ふ、それ故場合に依りてに千言萬言を繰返して、御氣の毒でござるといふよりは、一滴涙を溢した方が對話者を感じ動さすることが多い、其故に、私が考へますに儀式上の談話といふものは、口のみではなく進退動作に至る迄悉く注意すべきものである、眞に同情を發表すれば進退動作悉く同情的でなければならぬ、悲を表はすときは悲哀の情態喜を表はすときは喜びの情態あつて然るべきものである、言語は勿論の事進退動作に至る迄悉く同情的に在り能はざるならば寧ろ悲みを述べ喜びを述べに行かぬが宜いと思ふ、言葉の調子の如きものも餘程同情を表はすに關係あるものと思ふ、餘り高調子で悲哀の言葉などを述べるは不適當と思ふ、餘り低い調子で喜びを述べるは何となく情のうつらぬことであると私は考へる、

私は葬式に參る度毎に感慨措く能はざる事が度々である、葬式に行つて見ますると彼の場所は悲しみの場所である事は申す迄もない、死したる人を哀悼する場合である、けれども會葬者の中には隨分壯言を放つ人もあり、高笑する人もあり、半は面白半分に會葬する人が澤山ある、眞に

悲しみを表はす會葬者の數は甚だ少ない、惜しくもない悲しくもないと思ふ樣な人の葬式には行かぬが宜い、世間躰を繕ふ爲に會葬するは無用である。

◎次には友誼上の談話であります、友誼上下の談話には相手方の理解力を計つて談話するが相互の務であらうと思ふ、友誼上の談話は、御互に親しみの爲めの談話である、相手方理解し得ない樣なことをいふ必要はない、相手方の理解力を計つて分り易い語葉で興味のある談話をするが宜い、相手方に興味があつて已れが談話することを聽きたがつて居るとが明かに判つて居れば自分の専門なり職業なりの事を話すも宜いが、さもなき場合に於て、人の面白からぬことを、自分一人興に乘つて話して居るは、友誼上の談話といふ趣旨に背いて居る、親しみを増すよりは寧ろ人に嫌がらるゝ機會を造ることゝ思ふ、

◎次に二人三人寄らば兎角第三者の品評が出易い、御承知でもありませうが、壁に耳あり障子に口ありといふことを聞いて居ります、針小棒大の事實となつて、評されむ人の耳に、誰れいふとなく這入ります、故に第三者品評談話の材料とするは避けるが宜い、避けるが道徳である、避けるが謹みであらうと思ふ、縱ひ評された人が聞かぬにもせよ、人間といふものは邪推深いものであるから、相互に第三者の惡口を云ふて居ると、相互に疑ふ樣な事が起る、此點から第三者の人物評論は爲すべからずである、

◎其次は相手方の内部の事情に關係する所の質問的談話は爲すべからざるものである、兎角人は物を聞きたがるものである、話の種がないと、貴方は貴方はと言つて聞きたがる、場合に依れば之れぞ甚だ善くない之れが對話者の感情を害することが起る人といふものは色々で年を聞かれて嫌やがる者もあり、又好みを聞かれて嫌がる者もある、外國の婦人は、年を聞かるゝことを嫌がる、乃で婦人の年を聞くことを失禮としてある、若し強て年を問ふとイツても二十一、二十一と答へる嘘を答へても年を聞かれたには悖德でないとなつて居る、然し我國では、年を聞くを敢て失禮としてない、年頃を越えて、未だ結婚せぬ、婦人に其年齢を聞くが如きは餘りによくないことゝ思はれたり、其婦人の感情を尊敬するといふ點から言つて宜くないとである、けれども、年自慢の爺さん婆さんに、何歲になられます、それば御達者といふてやるは、却て功德になるかも知れぬ、又飲食物に關する談話は場合に依ては謹むべきものであらう食物といふものは誰でも彼でも食はればならぬものである、人が最も必要とするものであるが、併し話にしては餘り奇麗なものでない、蕎麥がすきぢやの、燒芋が好きぢやのと云ふは、餘り品がよくない、彼所の料理は旨いのまづいのといふやうなことは、云ふ人の品格に障はることがある、

◎サテどういふ人にも差支のない話しといへば、文學上の話しとか、美術上の話しとか、或は風景の話しとか、旅行の話しとかいふ種類のものであらうと思ふ、乃で交際が圓滿に仕やうとするには文學上の趣味が必要である、人と交際の出來る樣に文學を修むるも必要、旅行して、風俗人情に明になつて居るも必要である、繪畫彫刻等に就て、多少の嗜好を持つも必要である、或は音樂を理解するも必要である、外國人が、此等のことを力むるは、必竟氣樂で之を力むるに非ずして、交際上必要を認めて之を力むるのであらうと思ふ、我國の學生の狀態を見ますと、已は商人になるのである、詩文を讀む必要はない、又已は工業家になるのである、文學や美術の必要が何處にあるが、といふ有樣である、成程、商賣人になるには、文學美術の必要はなく、又工業家になるにも、文學美術の必要はないかも知らぬ、が商業家工業家として、社會的生活を爲すに

は、之れ等のものが必要である、商賣上の知識を應用する上に於て必要である、工業上の知識を、社會の實用に供する上に於て必要である、外國人は、商賣人になるにもせよ、工業家になるにもせよ、「シエーキスピアー」さか「ロングフエロー」さか「テニソン」さか或は「ゲーテ」さか、「シラー」さかいふ類の詩集を讀まぬものはない、中等以上の生活を爲すものに、美文の嗜好のないものは稀である、足は社會的生活に必要てあるからである、一體、文字美術の如きものは、單に交際上必要であるのみならず、又人の品格を高めるものである、之れが修養を爲すものゝ社會品位を高むるものである、斯ういふ點から文學に關する知識美術に關する知識は必要であるさ思ふ、

◎又隨分、話ばかりも退屈する事がある、若し音樂上の趣味を有つて居れば、御謠ひなさいさか、御彈きなさいさかいつて、或は謠ひ或は彈じて、談話の憂欝を防ぐ事が出來る、斯くするさ再び談をする時に、談話に新なる活氣さ興味さが伴ふて來る、乃で音樂の嗜好も亦交際上甚だ必要である、

◎それから文通のことに就て卑見を述べたいさ思ふ、是も職業的、友誼的、儀式的の三つに分れます、職業的の文通は成べく簡單が宜いさ思ふ、職務上の手紙は短い程宜い、要領が判れば宜い職業上の手紙に、時候の挨拶は不必要であるさ思ふ、御家内樣に宜しく抔さいふも不必要さ思ふ、飾りも御世辭も要らぬさ思ふ。

（未　完）

歐米婦人談

農學博士　新渡戸稻造

こは、博士が過日明治女學校に於て、傍聽者の問ひに應じて述べられたる演說の太要を摘記したるもの、博士は識見卓拔、思想豐富の學者なれば、談柄頗る面白く且つ有益なりさ認め、此に採錄することゝせり。

◎歐米婦人の裏面……これは私は男だから、さても男だから解らない、また解るものでないさ思ふ、また解るものでないさ思ふ。女は仲々裏を見せぬ、若し見せても其れが表なのだ。ラフカデホオ、ハーンさいふ人は、餘程面白い妙な男で、名まで日本風に小泉八雲といふて、日本の婦人を妻にし、日本服で坐敷に据りこんで居て、私なぞが行くさ却てマアお倚けなさいなぞさいふ位の人だが、日本人のことに就て書いた本のうちで此人の書いたものは、一番よいさ思つて居る……その人の書いたものゝうちに、日本の女に就て言ふてることがある——日本の女といふものは、百合の根の樣なもので、これで結局かさ思ッて皮をムクさ、又その下に前さ同じ樣な皮がある。今度こそ結局だらうと皮を一枚ムケば、又前の通りの皮がある。何枚ムイてもその通りで、ムイてムイて能く〳〵の末になッてから、始めて心のある所に達するさ書いたが、これはまことなので、女さいふものは、凡て何枚も皮を被ッてるのだから、これが裏面だなと思ッてゝも、實はそうでなくッて、表面なのだ。しかし、少し申上げやう。

これは、何人かが惡口にいふたことだが、獨逸の女さいふものは先づ少さい時には、始めに幼稚園に這入る。それから十四五位になッてくるさ、ハイ子の詩を讀む。此のハイ子さいふ男は、私は大嫌いだ……なる程その文躰は流暢に相違ないが、眞實なところがない、世を馬鹿にして、舌を出したりアカンベイでもして居る樣なところがある。隨分高尙なこともいふが、其仕まいになるさ、今まで言ッたことをは皆なウソだよアカンベーさベロリと舌を出す奴だ。言はゞあの男は、何事も皆な輕蔑し

て——世の中も宗教も己の心も皆な輕蔑して、暮らして實に眞摯シンセリテーといふものがない。その代り自分の一生も馬鹿な暮しをしてしまッたのだがしかし兎も角浮氣な詩が多いから、心の浮氣盛なり十四五の若い獨逸の女は、このウキ〳〵した人情を歌ッたハイ子の詩集を讀む。それから、二十前後になるとハイ子はやめてシルレルを讀み出す。シルレルといふ人は、まるでハイ子とは段がグッと上で、月夜に漫歩して月の詩を詠み、雨の戸をうつのに泣ひて雨のために歌ふといふ樣な神經家であッた。それで書くことが、凡て皆な高尙なものだ。それから、大變に愉快で私は極好きだ。そのラヴしてたラウラといふ女のことは始終詠じてゐるが、實に高尙なものでそのラウラといふ女は危ても骨と肉のある人間の樣には讀者の考えで思えない位だ。これをハイ子に書かしたら蛇度キタナいものになッてしまふ。兎も角このシルレルを卅まで讀んで、卅から後になると今度はゲーテを讀むといふことだ。しかし、私は、既に卅を越えて四十に近いが、まだそうゲーテには遷れぬ、今以てシルレルやカーライルがよくッて、この時代に止ッて居る……實に卒業が遲いので、カーライルなどは既に十三遍も讀んだが、なほ面白くなッて讀んで居る。でも、日本といふところは何事も早く卒業する人の多いところで、カーラトルなどは隨分若い時には讀んだ、しかし、今になッて見ると馬鹿らしくッてモウ讀みません……つまらん……解りきッたといふ調子だ。しかし、そう早く解り過ぎて飮み込みのよいのも、困ることだと思ふ。この種類の人は丁度……便所に這入ッて握飯を食ふてた男が、どうせ飯は口に入れるも、つまりは下に出てくるものだから腸や何かの中を難儀して通すよりり、この方が近道だらうと、自分の食ふてた握飯飯ボタリと糞壺の中に落してやッたと同じことで、早いことは早いが、何も消化させないのである。嘗つて、或る獨逸人に、私は何故まだシルレルが卒業出來ないで、そこに止ッて居るだらうと話したら、それは結構なことだ……それはお前にまだ理想があるからだ、ゲーテはシルレルよりは理想の低い人だと云ッた。なる程、ゲーチは百科の學問に通じて化學上のことに就ても、色々新意見など立てたほど、で詩文は素よりいふまでもなく、風彩も非常に立派であり、又貴族の家に生れて門閥もあり、何として備はらざるところがないといふ程だ。のみならず、小さくはあるがワーマイルといふ國の宰相でもあり、政治上の技能もあッた。しかしたゞ品行が修らない。ところがその「たゞ」がたゞの「たゞ」でなく大變な『たゞ』である。……ゲーテは長生きのせいで、大變でエライ樣に人々に思はれる。もしシルレルとゲーチを同年代に比して見れば、ズッとシルレルの方が上なのだ。其理想の高いことは夥しいものだ、それで、つまりゲーテは實地的なのである、兎角人は年を取ると理想がなく實地的になり、あアいふ人には何度の角度で禮をする、こウいふ人には何度角度で又禮をなせればならぬといふ樣な禮をする角度の工合を覺える樣になる……殊に日本の實地家には、これが多い。獨逸の婦人卅になッてから後には、ゲーテを讀む樣になるとは、即ち理想は御免を蒙ッて、これからは實地の方だといふも同じことだ。故に、續ひて料理の本を讀み出し、常に割烹書を机の上に置く樣になる。然し、四十前後になると今度は女權論に關する書物を讀みだすそうな。これは、いくら亭主に馳走してやッても、亭主は外に出るとビールばかり飮んで來て、うちに歸ると小言ばかりブー〳〵いふてるので、不平を感じて來るからだ。それから、五十位になると教育書を讀み出す。これは自分のためでなく孫のことが心配になッて來て嫁や娘を叱る手段にするためなのだ。さて、六十になると、そろ〳〵彼の世に近くなッてくるから、今度は聖書を讀み出すとのことだ。以上は或る人の書いたものにあることだが、何分か

獨逸婦人の裏面を示す材料にもならうかと思ふ。

◉米國の男子は其女子に不平ならずや、男子が不平だといふよりは、寧ろ女子が男子に不平だと思ふ。然し、玆に面白い話がある。これは米國の新聞記者で、フヰンクといふ人だが日本を旅行して、後にロータス・タイム・イン・ヂヤパンといふ本を書いて、その五章にこれは書いてあることだが、大變に日本の女を讃めて居る。或る夏の日にこのフヰンク先生、どッかの茶屋に行ッた。すると女中であつたか藝者であつたか、兎に角女が出て來て、一人は着物を脫がせ、一人は團扇で煽いでくれる、一人は茶を入れて接待す……實に生れてからこんな愉快なことはなかッたといッて居る。それから突然と……諸君……を叫んで、我々は非常な失策をした。實に非常な失策をした、、、、、、、これまでの婦人を敎育した仕方は實に純良なる性質を變テコなものにしてしまッたと憤激して居る。なる程そんなところもあッて、亭主が一日默くなッて働いてるのに、妻が家の中にソーフアー安樂椅子に寢て居るといふ弊もなかてはない、しかし是れは稀れだ。なる程、米國の男で獨逸なとに來て隨分ヒドイことばかりして、行くべからざるところなどにも行ッて居ながら、本國に歸ると何知らぬ顏して會堂に行き、人よりも一段聲高くして歌を歌ッたり、安息日學校まで敎えてゐるものなどもある、非常に一時米國で流行したエ・ヂヤパニース・ワイフといふ芝居にある樣な例もないてはない、なんても亞米利加では立派にして、生命の洗濯は外國に行ッてするといふ程で、凡て男は米國では女の前に小さくなつてる樣だが、別にこれで不平だと云ふ譯でなく、これは女を尊敬してゐるといふものだと思ふ。凡て夫婦の間柄などでも愛ばかりで尊敬がなければ、長くは續かんもので、二三日はよいが二三年たてば駄目になる、已れの亭主はクダラないといふ馬鹿だと思ッては、とても夫婦になッては居らない。そこで、女性の男性を尊敬することは容易だが、男性の女性を尊敬することは六ケしいものだ、然るに、米國では未だに女が不足であるし、それに殖民時代に女が不足であつた爲に、非常に珍重せられた風が今に殘ッて女權が張てるから、女は尊敬せられるが、女の方が又實際進んで居る。米國は御承知の通り實地の國だから男のうちで有用の才あるものは、皆な實業界に這入る。そこで男子には敎育が却て行き屆かないで不足だ。故に、話をしても男よりも女の方が面白い、男が却て解らんのに女の方が東洋問題でもなんでも盛に談ずる。これは、家の中にたまッてるから、その間に雜誌でも本でも讀んで皆な勉强するのだ。こんな仕末だから、男どもはドウも自分らの話すことを解ッてくれないで困ると、女が男に對して不平を感じて、夫を尋ねたり何かするにも、さぞやどの男も不滿足で困ることだらうと思ふ。それであるから、自然夫を持たぬ女も澤山出來て來る。それだからとて、敎育の高い女は皆な夫を持たぬかと云ふに、決してそうでない。中々夫を持つものが澤山ある。これは、學問に於ては成程その夫を尊敬することは出來ないだらうが、男たるものゝ男らしい高尙な品格キヤラクターを尊敬して夫に貢ひ、之を樂にしてやる樣に骨折るのだ。

◉米國發達の原因及將來　今度の巴里博覽會は能く各國の性質を示して居るものであるが、誰れの眼にもこの博覽會で氣がつくのは、是れから日の出の國は、亞米利加と獨逸とであるといふことだ、露西亞もエラクなるだらうが、これは中々ヒマのかゝることで直ぐといふ譯には行かぬ、私は亞米利加の女を女房に貰つては居るが、私自は極亞米利加はイヤだ、然しエライ國になるだらうといふことの確信は、今度の博覽會を見て甚だ增して來た、今日では商業の中心は英國龍動であるが、將來は世界の商業の中心のみならず、金融の中心ながも米國の紐育になることだ

らうと思ふ、將來世界中最大になるものは恐らく米國であらう、現に其萠しが充分現はれて居る、今其發達する原因に就ていへば(第一)國が大いからだ。國が大きいから物產が多い。畠などの一つで大きいものゝあることは、殆んど想像以外であツて、畠を耕すために馬に乘ツて行く時に、先づ途中で一泊し又翌日續けざまに耕して行き、また翌夜も畠の中で泊るといふ仕末だ。又たマックスウエルといふ三つの停車場はマックスウエルといふ一つの畑のうちに設けられて居るといふこともある大躰マアこんなに信じられない程大きい國なのだから、それから出る產物も非常なものだ。多く其產物といふは麥と家畜で、歐羅巴人は、殆んど米國の肉と麥とで生き居るといふてもよい位だ。近頃、米國で大きな軍艦が製造される樣になツて來たがこれは麥のお蔭だといふことだ。一寸聞くと可笑しいが、至極尤もな話で、毎年非常に多く出る麥を外國に積んで送り出すに就て、出來るだけ大きい船を拵いたいものだと工夫をするところから、造船術が大變に進歩して來て、遂に軍艦の大きいのをも上手に造る樣になツたとのことである。(第二)氣候にも關することで、全躰に乾いてオゾーンが多い。オゾーンが多いから、隨ツて人民が凡て活潑である。(第三)は政躰によるのだ。あアいふ政躰であるから、人民の上に束縛といふことは少しも加へない。誰れさまにでも思ひ切ツた精一杯なことを、何でもドシ〳〵やらせる。言はゞアメリカ人は皆な王樣であるといふ氣性の心持ちだから、何事も憚らずにドシ〳〵やれる。(第四)萬事實際的で理窟を言はぬ。或る人は、獨逸人は哲學を考えるが、亞米利加人は哲學を實行するといふた。誠にその如くで、百事實際に行ツてゆく。(第五)亞米利加人は、皆な大法螺吹きで、何事も話が大きい。しかも、その法螺が空法螺でなくツて、一方に吹きつゝ一方では、着々その法螺を實行してゆくのである。亞米利加人の法螺のヒドイことは新聞の廣告などでも能くワカるが、その法螺の廣告を見て、未だ人の住んで居らぬ原野などに出かけ、そこを開拓して自らその廣告の文句にある樣に繁盛な良い土地にしてしまふ(第六)に教育が良いのだ。亞米利加の教育といふものには別にワクが無い。親に對してとか國家に對してとかいふ樣に何に對してとかいふワクを拵えて教育を施すことをしない。何んでもやる丈けやれといふのだ……伸びるたけ伸ばせるのだ。それだから、ウソの無い正直な男らしい男、女らしい女が出來る。リンコルンの樣な工合な男は、兎ても米國の教育でなければ出來ぬ。あアいふ人は外の國にはあるまい……丸でロッキー山の岩を切り出して持つて來た樣な人物だ。男だか女だか解らぬ位で、今四百萬の貔貅を指揮してるかと思へば、一方では又メソ〳〵泣いて居る。丁度仁王と觀音との雜種といふ質だ……あアいふ人を作ることは兎ても餘所の國の教育では出來ない。米國の樣な自由教育の國でなければ、兎ても出來ない。

◎米國女學の狀態如何。一概に米國の女が受ける教育といツても、階級によりて違ふ。然し、皆な先づ小學校に行く。近頃ではキンダー・ガーテン所謂幼稚園に相對してキッチン・ガーテンといふものが出來て、これは幼稚園の樣に、教育の傍ら台所即ちキッチンの事を教える……即ち皿洗ひの歌などいふものがありて、これを歌へば自然に皿は如何なる順序で洗ふべきものかとゆう樣なことが覺えられる樣になつてるのだ。之れに少さいうちに行くものもあるが、小學校に就て私の甚だ感じて居ることは、大凡そ二つある。(第一)は先生が頗る非常に親切なことだ。一躰那國の人は凡て親切なもので、嘗てカリフォルニヤの圖書館に行つてたら、二人の小さい小供がやつて來た。其處の書籍掛は若い女だつたが、小供等が來るのを見ると大變に親切に其側に往つて、ドンな本か欲しいかといふ樣なことを問ふ。すると、小供は……今度先生から言ひつけ

られて、學校で何か詩を暗誦せればならんから、その書物を借りに來たといふた。そこで、その書籍掛の女は、これがよからうの……あれがよからうの……と書物を三四冊出して來て、親切に其暗誦する詩を定めて教えてやッた。次に又、中年寄のおカミさん風の女が、一人の小供を伴れてやッて來た。何を尋ねるかと氣をつけてたら、今度は料理の本を借りたいといふことだつた。……どうも是までは覺えて居ッた料理ばかり拵えてやッて來たが、長い間に亭主もアキたらうから、何か本を見て新らしいものを拵えて食はして見たい、就ては何んな本が良からう？といふので、又その書籍掛の先生いろ〳〵親切に、……あれからよからうの……これがよからうの……と相談に乘ッて定めてやッた。それを見て私は實に感心した。これが日本で御覽！……書籍館に行ッて、こう〳〵いふものを調べるには、何がよいでしようなんていふものなら、ソンなことは知ッてる限でない目錄を御覽なさへ！と忽ち一喝されてしまふ。（第二）に。先生は、總べて實際のことに當りて教えて、所謂實物教育をやる。實際のことに當りて覺えない智識といふものは、甚だ役に立たぬもので、隨分これがために困ることがある。それで思ひ出したが、或る百姓が五升芋を掘ッてた所に、一人の男が通りかゝッてそれは何だと問ふから、これは五升芋といふものだと答へた。すると其は非常に怒ッて……テニそんなことがあるものか、それはウソだと言ひながら、その芋を手に取りて見て……五升芋といふものは、こんな色のものでなく白いものだ、それにどんな冷いものでなく、熱いものだといふたそこだ。そこで百姓は餘り可笑しいものだから、貴公は誰だと問ふたら、乃公は農業雜誌の記者だッて言ッてすまし込んでサッサと行ッてしまッたといふことである。實際に當らないで教える教育の弊は誠にこんなものだ。米國などでさへ私の知ッてる小僧のうちに、麥の生へてるのを見せて、麥だといッても仲々信ぜず、小麥は木に出來るものだと主張してたものがあつた。小學時代に續いて中學時代となるが、昔は學問といふものは、三つのR即ちリーデヰング、(讀方)とアリスメテヰック(算術)とライテヰング(書方)とを學ぶにありとしたものだ。然し、今では三つのH即ちヘッド(頭)ハート(心)とハンド(手)とを訓練するといふことになッて來て居る。それで、頭と手とのみならず心の方にも意を用ひて、動物逆待などいふことをさせない樣に教育する。次に大學時代となりて專門に取りかゝる樣になれば先づ一番に文學醫學を修むるものが多い。その外政治經濟諸種の科學及數學などを專門にするものも出て來る。然し、法律を修むるものが一番少ないらしい。兎角女は本ばかり讀んで居れば、御飯を炊ひてもヤワラカにゆかないで、シンが出來て困るといふ非難もあるが、何に！シンが出來てもよろしい……：學校を出さへすれば直き自然にシンが無く軟く炊ける樣になるから、學校に居るうちは少し空想といはれても笑はれてもちまはない、……充分に理想を養ふ樣にして、理想の高くなる方の本をばかり澤山にドシ〳〵讀むことにするがよろしい。學校では何んでも理想を高くすることが必用だ。それで後からは丁度よい位になるから。……（完）

娯樂



釣魚のたのしみ

總(そう)じて今年(ことし)は早(はや)くより氣候(きこう)の暖(あたゝ)かくなりし爲(た)め海川(うみかは)の

水早うぬるみて魚も此頃より棲家を替へ徐々と餌につく様になりたれば好釣者の爲めに一二の消息を傳へん

▲鮎　鮎は此頃は早や三寸位となりて多摩川下流にて擬虫釣にて綸に上る由なるが擬虫釣を用ゆるには天工と人工と區別し難き午後四時頃より六時頃迄即ち日沒前を最もよろしとする由にて五六月より盛夏にかけ魚も追々上流に泝り軀も大くなり其頃は擬虫釣を用ゐず友釣引懸け等に漁する也

▲鯔　乘込鯔とて餌に饑えて品川沖に出沒する魚を覗ひて先月頃より臺場最寄より沖合へ掛けて引懸けにて漁りする人あれども秋ものと違ひて場所を定めて集合し居る次第にあらねば終日漁り廻りて籮を空うする事なしとも限られねど機會のよき時は一日にて一ヶ月分位の獲物ありとて好釣者の出漁するもの中々多しとぞ、

▲鱵　此魚は汐干の濟む途端即ち來月初旬の中汐頃より例の繩釣にて釣に上るものなるが昨今にても行德最寄にてはボツ〳〵獲物ありと、



▲鰻　鰻は目下好釣期にて品川沖臺場最寄本所深川の諸川にて珠數子釣、穴釣等にて相應の獲物あり

▲鮒、鯰　の如き川魚は少しく盛時を外れたれど深川木場及び元八幡疝氣稻荷近邊行德最寄の池沼等にて中々の獲物あり深川靈岸裏杯には夥多しく釣堀の散在するあれども針にかゝる事至つて少なしと最も堀の所有主に代替りの時杯には魚を入るゝ事多ければ從つて釣に上る事も夥多しとて黒人連は夫等の場合のみを覗ひて襲撃する由又大森舊街道より左方海に至る各所及び羽田手前立場茶屋より海に下る各所に散在する汐入の池にては夥しく釣に上る由なるが其好場所を極むるは容易の業ならねば先づ所を選ばず綸を垂れ居るに其堀の所有者は多く見廻り

人を雇ひ居れば其見廻り人の立廻り來るを覗ひ多少の金錢を握ますれば好漁場へ誘ひ呉るゝ由にて普通二三十錢を與へ居れど富限者の樂隱居など費用を惜まざる人の一圓位も投ずる事あれば手に餘る程の獲物ある所へ誘ひくるゝよし

▲鯉も隅田川上流中川竪川筋等にてポツ〳〵釣に上るよしなり



堀切のあやめ

櫻花ちり、藤しぼれ、牡丹も散りぬ、躑躅も萎れ、薔薇の花も色褪せぬる此頃を我が物顔にゆかりの色ゆかしく咲匂ふは花菖蒲の花にぞある府下に花菖蒲の名所は少からざるが中にわきて其の名の聞へたるは葛飾の里堀切村に及ぶものなし、むかし徳川將軍の初めてめでたまひし頃は、勿論一戸にして假初のすさびなれば、作り飾れることもあらざりしが、いつの頃よりか此の花を養ひたつるとを専業とするに至り、庭園のさまさへ

清らかに作りなして酒肴なども客の好みに任せて調理するとゝはなりぬ、まして年々に新奇を競ひて今は花の種類も幾百といふに至り紅色茶色など世に珍らしき種類さへ見えぬ、

梅若寺より右に折れて行く途中には草花作る花圃あり賤が田唄の節おかしく歌ひつれつゝ草苗植うる水田ありて、蛙もおのが田面と啼くらむ、都下萬丈の紅塵も此處までは至らぬなるべし扨堀切菖蒲の由來を聞くに同村小高伊左衛門氏が五代の祖先は農業を主とし、當時(文化十二年頃にして今より凡九十年前)松平壹岐殿へ出入し馬秣を納むるを常とせしが或時富士山に至り、山麓に玉蟬花を見出し此は珍らしきものなりとて之を持歸り其所有の池に植付け置きたり、然るに壹岐守殿よりて豫て鴨を御預けあり壹岐守殿も時に鴨の見廻りに御立寄なさるゝ折、池中に玉蟬花あるを見て大に賞賛せられ因て此由を當時の將軍に申上げたれば將軍もお成ありて御遊覽あり、其折尾張大納言齋茂侯には日本一といふ三字を書せられ主人に賜はれりと、それより爾來其の評判益々高く星移り年變りて終を公衆にも隨意に來觀を許すとはなりしなり。

盆景のなぐさみ

◎盆景と陶製の兜人形窓前の新綠階下の青苔日に〳〵夏景色に移り行きて緣日の露店に植木屋の次第に多くなる今日此頃盆栽も好けれど盆景もまた一寸趣きのある樂みなり盆景は七八年前より流行し年々同好者の殖ゑ行く有樣にて造り方も追々に進步し今は其材料を賣る店も市中到る處にあり材料と云へば石と砂と苔と木と夫れに陶製の人物と亭榭と盆が一枚譯も無く大きな景色を繪に書くと同じ理屈にて砂石の配置と苔の使ひ方によりて遠近濃淡の景色を見すなり苔には雨苔、天鵞絨苔、生苔等ありて遠景には米點山水畫の小米點を用ゆる如く細かき天鵞絨苔を用ゐ近景には大米點と云つた樣に生苔を按排し砂は根岸、玉川、西京等の產にて陸には根岸の茶色砂水には西京の白砂、水際には小砂利を用ゐ石は加茂川產を賞用し安物には藤枝の石を用

ゆること多し樹木は玉杉松等を使ひ盆は素焼小判形にて淺きを好めり直段は好み次第にて如何程と限りは無けれど新橋の三銀と云へる陶器店にて販賣する十二景の小道具一組二十五錢より五十錢位までなり十二景とは各所の景色十二を選び苔香園の圖案にて三銀が造りたるものにて、富士の麓、浮島ヶ原、松島 羽田の渡を寫せるものなどあり。

才媛詞藻

第五回懸賞文披露

和歌

佐々木信綱先生 選評

（天） 琴　横濱藤町三ノ一二八關根方　長谷川さく子

仙人は藥ほりにや倦みぬらん
峯のいはむろ琴の音ぞする

（地） 琴　小石川區柳町廿五　淺井雅子

すか〳〵し琴のすかゝきすか〳〵し
月すむ夜半の琴のすかゝき

（人） 五月雨　相模國三浦郡浦賀町宮下　松本やす女

此ころは海見るまとのかひもなし
ふるさみたれの雲深くして

（次點）

◎琴　栃木　奥村英子
ひきなれぬ琴のしらへもちゝはゝの雨のつれ〳〵なくさめんため

◎仝　下總　相磯ふみ
門にたちて目しひし母かひく琴にあはす少女のうた哀なり

◎五月雨　本郷　小林しづか
南天のてる〳〵ほうしくちはてゝしるしむなしき五月の空

◎仝　信濃　清水作子
はる〳〵と君か旅路を思ふかな久しく晴れぬ五月雨のあめ

◎五月雨　岩代　志賀琴子
蝸牛やれし軒端にはふみえて夕いふせく五月雨のふる

◎仝　大阪　西島喜美子
大井川はや越しましゝ便りありし其夕より五月雨ふる

◎仝　新潟　吉田梅子
杖をのみたのむ盲者の田舍ちを往來になやむ五月雨のころ

◎仝　岩代　遠藤雪子

小やみなくふる五月雨をいかにせむぬれたる桑をけふもつまばや

（秀逸）

◎琴　　三重　和田眞砂子
雁かれもおちやきぬらんてる月もことの志らへもすみのぼりたる

◎仝　　近江　梁瀬涙枝
つま琴のしらべかすかに聞ゆなり花の香運ふ風のまに〳〵

◎仝　　山口　草賀きくのこ
谷川の音にましりてたえ〳〵にきこゆることのあはれさびしも

◎仝　　牛込　秋野菊
飛ふ雁をかへさん人もなきことを昔ながらに月照らすなり

◎仝　　上毛　須藤きみ子
はちあけて入る月かけをまれきけん昔覚えて琴の音ぞする

◎仝　　下野　田村恒子
まとちかくながるゝ水も音すみてしらべたへなる夜半のつま琴

◎仝　　宮城　宮崎うめ子
玉川にひるの暑さを流し居れは琴の音きこゆ月高くして

◎仝　　大阪　西島喜美子
しのび音に琴弾きて見る夕まぐれ梨の花ちりぬ月はさし出てぬ

◎仝　　神田　長縄絲子
月ふみてかへる家路に我友のまがきをもるゝ妻琴の聲

◎仝　　山梨　末木たれ
さみたれのながめにあきて手すさひに獨りしらぶるつくし琴かな

◎仝　　芝　岩井きよ子
月清き磯邊の松に聞ゆるは神の奏つる琴にやあるらん

◎仝　　茨城　鵜飼竹子
月の夕手なれの琴をかなでつゝいさなくさめん我たらちねを

◎仝　　長崎　二本松右枝
いにしへのさがのゝ奥はしられどもおぼろ月夜に琴の音ぞする

◎仝　　伊勢　弓野はつ子
ひきなれし小琴の糸のふときれて何とはなしに胸はさわぎぬ

◎仝　　麹町　中春子
小夜ふけて母病みませる枕もと玉のを琴のきるゝ音かな

◎仝　　日本橋　杉谷幾子
さやかなる月ものぼれるたかまとのしらへゆかしき琴のねぞする

◎仝　　河内　杉生霞子
思ひあまりたちし琴の緒おもひあまりまたつなぎ見ぬ夕ぐれの空

◎仝　　長門　杉山みねこ
おもしろと神もきくらん春のよの月にすみ行く妻琴の音

◎仝　　愛知　山田かね
何人のわびてすむらんふるびたる家にまれなる琴の音ぞする

◎仝　　栃木　加藤きん
青柳のいとものどけく吹風にひゞくうてなのつまごとの聲

◎仝　　栃木　淺野千代子
久方のそらゆく雲もたゞよはんしらべたへなるつま琴の音に

◎仝　　香川　黒川まづ
松風のしらべも高き玉琴は天津をとめのかきならすらん

◎仝　　東京　女記者
五月雨のはれまもみえぬつれ〴〵に妹がしらぶるつま琴のこゑ

◎五月雨　　熊本　間宮あき

今日幾日帆影はたえて和田の原雲のみ通ふ五月雨のころ
◉仝　肥前　吉田みれ子

そほ〳〵さふるさみだれの夕暮に賤の男急ぐ山里のむら
◉仝　伊豫　田中賢子

集ひ來て手習子らの薄墨をかきなかしたる楳雨の雨
◉仝　大阪　中村はる子

何時までかふりつゝくらむけふもなほはれみてやらぬ五月雨の空
◉仝　三重　富士子

谷川のゐせきくつれて瀬の音のたかくなりゆく五月雨のころ
◉仝　對馬　志田照子

五月雨は後なくはれて天あほくみどりしたゝる四方山々
◉仝　下總　ため子

あたらしく今年入れたる敷石も苔のむすまでさみたれのふる
◉仝　群馬　生方けん子

みなし子の乳母求めてなく顔にあはれは添ふる夜半の五月雨
◉仝　磐城　内山ふさ

山の神の鳥居は朽ちて白菌の埀いさ長く五月雨のふる
◉仝　宮城　松村かくを

五月雨にたく藻の烟打ち濕り海士の小舟も歸り來にけり
◉仝　芝　吉水孝子

まさやけき天つ日かけを見てしかなくもりつゝきしさみたれの空
◉仝　神戸　水越秀子

五月雨に庭のやり水みつ越えて散るや樗の花のなみよる
◉仝　神田　積山きやし

つれ〴〵と降る月雨に東屋の軒のまつくの音ぞ淋しき
◉仝　芝　吉水艮子

漸くに日かけ見えしと思ふまにまたも降りきぬ五月雨のころ
◉仝　福岡　富川ひて子

我が友のあしもとたえて古のひさに親しむ五月雨のころ
◉仝　羽後　菊池雪子

しと〳〵と五月雨ふる夕まくれ畦道たどる賤の乙女子
◉仝　伊豫　藤野正代

しめやかに書讀むまどの明暮に物にまきれぬ五月雨のころ
◉仝　赤間關　梶間ひさ子

おしなへて野は海原になりにけり川も分たぬ五月雨のころ
◉仝　長野　竹下たけ子

つれ〴〵とふる五月雨のきのふけふ賤が糸繰る音ぞさびしき
◉仝　福岡　安永む津

五月雨に遊ひの友も訪ひこれば歌書きて山にす我そ妹かな
◉仝　神戸　藤田鶴子

時鳥はつ音きゝつるあしたよりふるさみたれの晴るまぞなき
◉仝　越後　山岸清子

いろ〳〵の花にうかれし世のさまをまつめんとてや五月雨ぞふる
◉仝　三重　龜井志萬子

五月雨はいつはれぬらんまなびやにかさを手にして行かぬ日ぞなき
◉仝　松本　島田治代

五月雨にさひくる人も途絶けりうときは獨り日影のみかは
◉仝　羽前　鈴木すゞ子

五月雨に野川の水のあふれ來て藁家の軒に漕ぐ小舟哉
◉仝　丹後　黑川節子

けふもまたふる五月雨にうめのみのうみはてゝこそ日を暮しけん
　　和歌山　水木花子

⊙仝
さみたれの日をふりくらすつれ〳〵にいさと別れし友ぞ戀しき
　　大阪　田村といち

⊙仝
大そらは雲にうもれて五月雨ののきより落つる布びきのたき
　　横濱　吉本米子

⊙仝
しづの女がさき洗ひ衣手にもちて空ながめやる五月雨の頃
　　群馬　須藤梅子

⊙仝
木枝さす楢の木かげに庵見えて軒はさびしく梅雨のふる
　　千葉　小出ひで

⊙仝
早乙田に水せき入れて歸り行く道もなかばに五月雨のふる
　　能登　植田鈴子

⊙仝
牛乳くばる子のあはれなり今日もまたみの重たけに五月雨の空
　　群馬　品田讃子

⊙仝
玉水の音を聞きつゝ今日もまた歌書きくらす五月雨の頃
　　武州　石川れん子

⊙仝
さみたれのふるやの軒の人訪はでおのづから散る山桐の花
　　神田　佐々木慶子

⊙仝
まなみ屋の我子はかへさいかならむをやみなくふる今日の五月雨
　　神田　闘屋鶴子

⊙仝
五月雨からかささしてけつさきて芝に上野に旅の人あり
　　東京　吉田たき子

⊙新樹
おしなへて木々そ青葉に成りにけりときはの松に色をかはして
　　東京　吉田い代子

⊙夕立
なる神の音はさたえて山の端のいり日すゝしき夕立のそら
　　東京　まき子

⊙尋時鳥
人なくはつげややらまし時鳥尋ればびろ心つくしも
　　越中　抽木久義

⊙藥師堂の閑磬
しつかにもなりひゝくなり御佛の法の林に入りあひの鐘
　　磐城　松崎操子

⊙月前郭公
むかつをの松をはなるゝ夕月に姿も見えて鳴く時鳥
　　福岡　江口さみ子

⊙柳
われをさらしさ　咲きにほふ
花のいろ〳〵　よそにして
やなきのいとの　なよやかに
風になびくも　あはれなり

漫言

佐々木信綱

こたひの課題なる五月雨さ夢さは、題ひろく趣深くして、詠みいで易ければにや、見もてゆくに、勝れたる歌つれよりは多かり。されど集まりたる歌の中には、似通ひたるもの少なからぬは、遺憾さする所なり。始めて歌を學はんさする人は、詞よせの書物などより拾ひ綴るもよろしけれど、既に形の歌を覺ふるに至りては詞よせの書物に便らずして、獨り新らしき趣向を考へざれば、秀れたる歌は出でこぬものぞかし。いかなるを新らしき趣向、古き趣向さいふかさいふに、始めの程は自らの考へ出したる歌は、すべて新らしきやうに思ふあれど、さるものにはあらず。大方の趣向は、既にふるき昔より幾千の歌人が讀み盡しいひ盡したるものなり。されは歌の歴史を知り、其格調着想の如何をしらざるべからず。我編篡せし書物を勸むるはいかゞしけれど、まづ續歌學全書などを購ひ求

めて、其を讀まば、古人の歌のよき所を知るを得べく、はた古人の未た詠みもらしたる新らしき趣向を捉へて詠むべきことも知りうべきなり。

新體詩

（天）

胡蝶によせて

名古屋　林千代子

かげろふ燃ゆる春の野の　菫の床をなつかしみ、
裳裾かゝげてゆくさくさ、　暮るゝもしらぬ里の子よ。
夢まどかなる花かげの、　蝶をな追ひそ甘き香に、
醉ふてはしばし人の世の、　つらきさだめも消ゆべきに。
風も音なき春の夜の、　朧の花をすかし見よ、
ゆかしとみしに束の間の、　そはまぼろしか晨の雨。
散りてはかなき花びらを、　たれかきのふの色と見ん、
げに色見えてうつらふは、　世の人みなの心かな。
胡蝶よ花の下かげに、　しばしは眠れ春の日の、
光りはいかに薄くとも、　露をしされの枕にはして。

評、人世五十年といへど、思へばあすをもしらぬ身の上なり、花にねむれる胡蝶の夢さますなよとは、さてもやさしき君が心かな。（蝶二）

（地）

花かげ

松本　小岩井愛子

惜しき名殘に堪へかねて、　月おぼろなる庭の面を、
地にしく花の影ふみて、　まよふも悲し春の宵。
花の木かげに立寄れば、　泉のごとく悲しみは、
小さき胸に湧きみちて、　熱き涙にせきあへず。
この花かげに遊ばんも、　あはれ今宵を限りにて、
故郷とほく旅のそら、　明日は別れて行かん身よ。
梭の音とほく桃あかき、　里の少女と生れ出で、
胡蝶ねむれる花かげに、　夢おほかりし我身かな。
あゝ極みなき思ひには、　泣きて一夜を明さばや、
月おぼろなる花かげに、　名殘やあだにつきすとも。
思ひあまりて佇めば、　こずゑに夜の風さわぎ、
さすが名殘の惜しきとや、　ころもの袖に花ぞ散る。

評　あらき浮世の涙ときかゝぬ里に生れて、胡蝶と共に花のかげにねむれるほどこそ、まことに人間の春なりけれ。（蝶二）

（人）

若菜籠

牛込　櫻井伊豆子

梅

多くの花にさきがけて
寒さもしらぬそのさまは
たけきをの子にたとへんか
まがきの梅のほころびて
まなびの窓もかほるなり
風は香りをふき送くり
谷間にねむる鶯の
さむき夢をやさますらん

鶯

まがきの梅のほころびて
風はにほひをつたふとき
かすみをさざせる谷間より
きよき音いろに歌ひつゝ
春をつげくる鶯の
こゑにこゝろもうかれけり

評　まだうらわかき鶯の初音、歌のしらべもいさあやうげなり(蝶二)

小説

(七)　夏の夕

姫路　もと子

今し方播磨紡績の五時の滊笛がなつた、われは行水をせむが爲めに前栽へ行つた。六つ七つ眞白に花の咲ゐて居る夕顔棚の其下に、淺々と湯のつ早々に行てあつた、がれた盥が置かれ水して鳴海しぼりの輕やかな浴衣に着更へた。實に氣が清々とする。開け放つた夏坐敷の端近く座を占めて、夕餌の膳についた。丁度此時横町の方で毎日やつて來る豆腐屋の寢ぼけた樣な賣聲が聞えたそれが段々もよつて來て我家の前で留まつた、と思つはら門口で下婢の話が聞えた。しばらくすると又賣聲がして段々北の方へ行くと思つたが、遂に大路の方へ曲つたのか其聲も消えてしまつた。行水をした其名殘の露が松の葉に奇麗に宿つておる、庭の植込から吹いて來る冷しゐ風が、靜に髮のほつれ毛をあほつて何とも云へない好い心持である。しばらくは箸をとるのも忘れておつたが、ふと吾にかへつて夕餉をしたゝめた。

丁度此時親しい友のかづ子さんが散歩にと誘ひに來られた。かづ子さんは我家の近くにおられるのである。年わ十八で同年である。振分け髮の小い時から同じ學舍で手を曳き合ふて通ふた仲である。學校でも品行は勿論良い、學科も優等で級の首席は、吾と爭ひ合ふのである。かづ子さんは殊に國語と作文と歷史と英語とが御得意である。吾も此四學課が得意である此學課の嗜好が大變に仲をよくせしめたのである。其外にかづ子さんの温順世のと、親切な事は常に自分をしてかづ子さんを崇拜し、尊敬せしめるので、一生交を絕たないのは勿論、始終同じ臥起をしたいと思ふておるのである。和歌と新體詩とは互に添作し互に批評し合ふて、吾々の快樂の大部分を占めておるのである。そして每朝每夕誘ひ合ふて野に出で自然の美を樂しむでおるのである。

吾は膳を片付けて、直に庭下駄をはいて前栽の柴折戸を出て家の東手にある小高い丘に登つた。此丘はあまり高くはないが四邊が停いので眺望は中々よい。此丘の上には一本の大きな合歡の木があつて、花は今が盛

とでも云ふべきか、一面に咲いてをる其下は青い芝生である。合歡の花は吾が諸の花の中で最も神聖なものとして愛してをるのである。かづ子さんも同樣である。毎朝毎夕氣のむすぼれた時、頭痛に苦しむ時は何時もかづ子さんを誘ふて一所にこゝへ登つて、此木の下に座つてハイ子の詩集を誦するのである。其時は苦しかつた病も、世の中の事も、忘れておるのである。此時には利慾の念も、愛憎の念も、皆消えてしまつておるのである。

實に此かづ子さん、此合歡の花、此詩集は吾と離れ難い友で、此ものがある間は、我生も全ひので我快樂も存するのである。

南には北條の村が立木の間にちらほらと其藁葺の屋根を表はしおる。そこから夕餉の烟が立ちのぼつておる。其村の西には三左エ門堀の堤が長く續いて、其南の方には飾磨の精米會社の煙筒が高く聳えておる。ずうつと南には播磨の灘鞍掛島と、家島とがぼんやりと煙の樣に横つておる。東には市川の鐵橋が土堤の松林の間から見えておる。此下を流れて、おる水は、南へ走つて阿呆の川原の射的場のそばを流れて、川幅の狹い所へ來て急に銀波を躍らせておる。それが又ゆるやかに流れて深くなつて居る所には渡舟が通ふておる。それが流れて又阿呆山の西を廻つて、遂には兩側の土堤の松林の間へ隱れておる。此邊には早やも夏霞が立つておる、夕陽は黄金色の光を放つて此川筋に輝いておる。其まばゆい光線が夏霞に映じて何とも云へない奇麗さである。どの樣な畵家でも此彩色は出來ないだろうと思ふ。

かく思ひながら、此畵にもなりがたい夕景色に見惚れ居つた。不意に播磨紡績の六時の汽笛がなつた。驚駭してふり向くと、赤い煉瓦造りの建物の一番中央部の小さい管から頻に蒸汽を吐いて居る。眞白い奇麗な蒸汽は勢よく吐き出されて居るが、一間と登る間に消いてしまう。高い煙突から出てをる淡い煙は、ゆるやかに舞ふて西南の方へ流れる樣に漂ふて、たん／＼淡くなつて遂には雲になるのであらう。

パッとさはがしい羽音がした。ふり向くと阿呆の川原近くの藪にさはいでおつた、數十の雀が北の方へ飛んでゆくのであつた。

急に騒がしい人聲が聞えた。それは馬車道をゆく播磨紡績の工女であつた。十數人一團となつて何かやかましう話しながら行きつゝある。

行くのは人々が一日の勞れを休めるべく眠つて居る間に、吾のみは起き騒がしき器械の音を聞きながら、綿埃の中に夜業するが爲めである。歸るものは、同樣に一日の間無趣味なる工場に、卑陋なる歌を樂むで漸く新い空氣に觸れ、身の汚を洗ふて家に待ちいます父君母君と共に夕餉の膳に就かむが爲めである。其中には、或は母君の藥を得む爲めに、此身を犧牲に供しておる熱い心の者もあるであろう。或は一家の食糧をたゞ細腕に稼いでおるけなげなものもあらう。或は弟の學資を得むが爲めに一身を粉に碎いておる暖かい情の姉もあらう。此熱情のあふれて稼いでおるものは、たとへ今は襤褸に包まれておるとも、幸福の神は必ず彼等に幸福を授けるであらうと思ふと、何たか喜ばしうなつた。彼等が塵に汚れた束髪の中には、神が啓示の白玉を隱しておられるのではあるまいか、そして彼等が苦める時等は彼の啓示の玉の光で彼等の頭腦を照らして、横道へそれたりする時には、それをさとされるのではあるまいか。彼等の歩む時には、神が御手づから彼等の手を曳かれて希望の光へと導かれるのであるまいか。若しも出來るならば、神となつて、彼等を保護し彼等を導いてやりたい、などゝ頻に空想に耽つておつたが、彼等が今歌ひだした卑猥なる俗歌を聞いた時に、今までの思想を破られて何となしに胸がつまる樣悲しうなつた。

一羽、二羽、三羽、一日阿成村の方へ遊びに行つて居つた鵲が、中天高

く幽かに歌ひながら白鷺城の森へ歸つて來よる。雲一つない空をゆるやかに飛んで行く鳥を見つめておる時は、何一つ胸にわだかまりもなく、已が恰も中空を飛んでおる横で、平和な夏の夕の云ふに云はれぬ詩趣があるものである。其鵄は遂に若葉に圍まれた白鷺城の頂に止まつた。若葉のこんもりさ茂つた中に、白壁の城壁の巍然として夕陽に輝いておる狀は、實に壯嚴なものである。あゝ此城の中には、曾て矢叫の聲の中に荒武者を籠らしたのである。今も此中には幾萬の兵士がいざ事あらば一擊して手並の程を示さんさ、腕を撫しながら戈を枕さして横つておるのである。

城郭の青葉隱れより嚠喨たる喇叭の音が聞えた。果ては長く響いて其餘韻が遠く四方に渡つた。勃々たる勇氣の溢れ出たのださ思ふて、一種悲壯な觀にうたれた。

夕陽は今青山に隱れて、世はだん〳〵さ夜の幕に覆はれかけた。今迄氣がつかなかつた蛙が、あたりの田で恰も世の中の晝間の出來事を訴ふるかの如く、聲高にうたひ出した。かづ子さんは頻に和歌を書きつけておられたが、歸つてから互に評批し合ふさ云ふて立ち上つた。北の小家では庭前に蚊遣の火を焚きながら主人が馬を洗ふておつた。喇叭の響は絕えて慨悲なる軍歌は、城内にあたつて起つた、宵の明星に嚴かに四方の市民を守るかのやうに輝いておる。

評　言文一致體の幼稚なるものなれざ、夏の夕の自然の景色を描きて詩味津々たり、又た其文中に點綴せる、親しき友、可憐なる工女などに對する舒情は、この文の趣味を一層深からしむ（記者）

國　文

（甲）姉を懷ふ

名古屋　龜山音羽子

更けゆく夜半、物靜かなる已が部屋に、文繙くもいさ嬉しく越し方行末なんご、小さき胸に充ちにみちて嬉しさも悲しとも思をめぐらしゝ事の幾夜をか經にけむ。霞立ちこむる春山に、うき世を外なる櫻花咲き出てより、我も人も迷ひにまよひ、老いたる人人若やぎて、瓢の塵など打ち拂ひしも、幾日の前なりけむ。世は春ばかりにはあらで、花のちり易きを如何にせむ。いさゝ叢竹うち戰ぐ夕風の心のまゝに弄あそばせつ、庭もせに音も立たせず。散りしくを見れば、世の人の春の眠りをやぶる鐘の響も、何となし心ありげなり。

散る花を惜しさは思へど、吹く風を心憎しさは思はず、散りてこそ花は愛でらるれ。されど惜しみても猶あまりあるは人の子、まして血をわけたる姉君の初兒、去年の花咲く田の表、菜の葉に蝶の二つ三つ、見初めたる其頃に、嬉びの聲ありて、いつの年よりも樂しき春を迎へ、一家の團欒此上の望なかりしを、夏さ過ぎ、秋さなりて、氏神の森に、鴉の行く秋を啼く夕、悲しきかな姉上の愛兒は、虫さやらにて僅か一さ夜の內にことされぬ。泣き俯し給ふ姉上はさらなり、團欒の人の眼には、草葉における露のそれよりも、いやましに增したる悲しみの露を宿しぬ。かの愛兒の、笑めるがごさきおもざしの、昨日の姿さ偲らばこそ、今にも唇をばあやつるかのごさく、合掌なしつゝ北に枕せる其あごけなさ。見知らぬ人の心をも泣かせしめたる、げにことわりなりけり。あはれ其折の姿、其悲しみ、未だ少しも去りやらずして、冬さ暮れ、春さ明け、世は習し花に月日を送りつゝ迎へつゝ、田の面に咲く菜の花など見るにつけ

去年の事思ひ浮べ、姉上の御心の中、さぞや〳〵苦しき悩みなるべけれど、やがて東風すべての花の上に手を延べて、野も山も青葉の庭となしたるに、御心少しは慰み給ふべくや。されど、物静なる此頃の夜半、いつものこと文繙き居れば、何處の家の軒なるらむ、五月幟の風車、朧月夜に響く毎に、姉上は愛に泣く胸を又もやかきみだされ給ふらむと思ひまいらするにも、涙とゞめあへず。

評　文は未だ至らざれども、情は切なる所なしとせず、涙もろき女性のおもかげ見えて、喜ぶべき也。（桂月）

（乙）

◎わが親しき婦女諸君にのぞむ

高知　雪香女

かほかたちのうるはしと否とは、其人々の天賦にして、決して其心ゆゑにはあらず。さるをおほかた世の人は顔かたちのよしあしをもて、其人の心をはかり、彼はみめうるはしく姿やさしければ、其心も亦いとやさしく情ふかゝるべし。誰はかほたち、みにくければ、其心も亦いやしく、みぐるしからむなどうはさするは、これぞおろかさのきはみなるべき。姿みにくゝて心やさしき女の身にとりて、いとも〳〵憐むべきかぎりにこそ。さは云へ美を好むは人の天性なれば、あながちに無理とも云ひがたしといふ人もあらむか。これその一を知りて未だ其二を知らざる説にて、人の天性愛する美は、罪もなく、けがれもなく、眞に愛すべき美なれ、其心の清きと否とをかへり見ずして、うはべの美のみを愛づるを、いかで眞に美を愛する者といふべき。なべて姿うるはしき女に、心やさしう才徳かねたるはいと稀なり。多くは己が美なたのみて女の操をやぶり。あるまじき行などなして、汚名を殘すものあり。之に反して美しからぬに、心ことにやさしう婦德、學才をそなへたる女少からず。されど、女は皆一般にみにくきをかこち、あるは紅粉をよそほひ、あるは髮をぬり、あるは金銀のゆびわなどはめて、徒に男子に媚びを送り却て笑を招くは、いかに見苦しきかぎりぞや。容姿のみうるはしとて、心けがらはしくば何かせむ。これ、さながら美しき錦もてたごんを包めるが如し。たとひ包める布は古き木綿なりとも、その中はこがれの光までゆき玉にこそあらまほしけれ。わが婦女たち、其かほがたちをみがくが如く、心をみがきなば、賢婦才女はみち〳〵て、夫をたすけはげます良妻、子を教育する賢母數多おこりて武きますらをも亦數多いで、わが日の本はいや榮えに榮え天つ日と共にてりかゞやかぬくまなきに至るべし。かくてこそ始めて國恩君惠の萬分の一にむくひうるなれ。あはれわが親しき婦女諸君よ。姿と心と何れが重きや。富士の峯高しと云へども、大平洋ふかしといへども、限りなき恩には及ぶべくもあらぬを、只己が心一つにてかばかり限りなき恩の片端をむくい得るを、喜んでむくいんとは思はずや。勇んで返さむとは考へずや。

評　文は未だ妙ならざれども、また拙ならず。云ふ所は他の奇なけれども、自から道理にかなへり。美女之を讀んで、みづから戒しむべく、醜女之を讀んで、みづから慰むべし。（桂月）

（丙）

◎端午の日記

相模　瀨戸富美枝

終日打ちこめりし空なれば、明日は如何あらんと思ひ煩ひしに、嬉しや、夕さりより、四方の雲霧やゝ動き、久方の空には、二つ三つきら〳〵ときらめく星の見えけるに、心樂しく、嬉に夢を包み去りぬ。明れば五月五日、うら〳〵と昇る旭の光りは動きなき富士の高根に先づ

さし初めて、薄紅にいろどりぬ。千代呼ぶ軒の雀、萬代謳ふ谷の鶯、聲朗らかに、君が代唱ふ教子が唱歌に調合するもいとなつかし。

あはれ、今日は如何なる日ぞや。九重の奥ふかく竹の園生には、嚴かなる皇孫が御命名式舉げさせ給ふ。いとも目出度くいとも喜ばしき日にぞある。門毎に日の丸の旗たちならべるに、男の兒ある家にては、鯉幟いみじう立ちて、風のまにまにひら／＼と尾をふり、恰も瀧に上らんさまの、いと勇ましくも又雄々し。今日を晴れと着飾れる幼な童や乙女子の美しさ。彼方に凧を揚ぐる童あれば、此方に手毬もて遊ぶ乙女ありて、日頃さびしき山里も、今日のみはいと賑はし。あるじし、あるじせられし人の顔は、秋の紅葉の如く、足は千鳥に、高く低くよろめきながらたどりゆくもなか／＼に興深かゝり。道のまなかに乙女童等に取り圍まるゝは、飴賣る人なるらん。面白く吹き立る笛の音の、靜けき山路に響き渡れるに、今日はとりわけて耳だつ心地す。生孫を抱い歩りく舅姑の顔恰も蕩ける大黒の如く頰に寄せたる三筋四筋の波にも其うれしき心、自から現はれぬ。

崩ゆるが如き衣につゝまれし幼子の、にこ／＼と笑ふ愛らしさ。風にひらめく鯉幟さらんさにや。むく／＼さふさりし手を上げてもがくその無邪氣さ。實に罪なきものは赤子なり。かの愛らしき口もて、雛けながら母樣など呼ばるゝ親の心には、時鳥の初音よりも倚ほ嬉しからんなど思ふもをかし。

今日か明日かとまちにし節句も、祥雲棚引く中にくれはてゝ。茜さす西の空さして歸り行く烏の二つ三つ啼くも長閑し。夕映はみ寺の森に收りて、今迄騷しかりし子供の聲も、山に響きし笛の音も打ち絶えて、いと靜けし。かの勇ましかりし童、かの面白かりし商人は、今や如何なる夢をか結ぶらん。かの無邪氣なりし幼子は、如何に暖かき母が懐の乳房探りつゝ眠れるにか。媼くらき燈の下、己が愛子のすや／＼と眠り行く罪なき顔を眺めつゝ、守歌うたふ母が心や如何ならん。わが身の親はれし節句は已にすぎ去りたれど、なほうれしく思はるゝは、今日の節句なり。

普通文

（甲）　婦人と家庭

東京下谷長者町二ノ六木村樣内　岡田光子

婦人は家庭の帝王なり、燈明なり、かりそめにも婦人にして懲るときは忽ちに、和氣靄々たる家庭を紊亂し、嚴正なる風紀を紊り、其煩累のひいて國家元氣の消長におよばむ、然れども其善く圓滿なる家庭を經緯して、而して品性陶冶に全心全力を注がるゝなれば、富國强兵は是よりして作られ、國家悠久の隆盛は是れよりして成る、何となれば、家庭は小なる國家にして、而して國家は大なる家庭なるがゆへなり。されば家庭の構造にして支離滅裂するものあれば、やがて、國家の荒廢衰亡は免かれざるものとこそ存すれ、古人も既に云へるあり、曰く一家仁なれば一國仁に興り、一家禮なれば一國禮に興り、一人貪戻なれば一國亂をなす、しかるに、我が國の婦人にして多くは、其が國家的感想を體持して、一家庭の善美なる家政を料理するもの幾人かある『人生婦人の身となることなかれ、百年の若樂他人に依る』と、白樂天の絶叫せし東洋古來の慣習なれは、婦人の終生は獨り男性に屈從して、それにて足れりと言ふを休めよ、いかに姿ら婦人なればとて、いつまでも、かく無氣力の服從に甘んすへきや、畢竟此の如き陋習は、未開なる昔日卑純的封建

時代の遺風にして、複雜なる生存競爭自然淘汰の文明時代に於ては、決して、その陋習を順致する能はさるものなり、必すや、妾は婦人さて、自勞自治に、獨立自治の精神に處せすむはあらド、是れ妾は猥に西洋主義の生嚼説を主張するものにあらすして、時世の餘勢ひいて此に言及する所以なりさす、無暗に男子に服從して、世事の云云を説かさるは是れ甚た美德なるか如しと雖さも、女德の全能全智を保持する能はさるを奈何にすへき、あばれ世の婦女子、内には獨立克己の主義によりて、德義の涵養を殷にし、外には一家の模範を示して、眞善眞美なる家庭を作らしめ、常に誠意愼獨にして、良人を扶け傍ら高潔優美なる子女を育成せしめられて、而して國家のために粉骨碎身せすむは、何の面目ありてか國家に相對せむさする、クーパー氏嘗て妾ら婦女子のために謂ひけらく、我家の笑顔は眞に秀美なり、相互に和氣洋々たるは眞に愉快なり、純潔優美なる愛情の充滿する家は、四邊到るところ歡樂ならさるはなしさ、あゝ妾は婦女子の本務も、又大ならすや、

評　瑣々たる文字のみ、されど、文理井然、頗る見るべきものあり、老熟の筆にあらずんば能はぬ也、彼の滔々數萬言を駢ぶるも、殆んさ要領を得ぬ冗文字に比せは、其勝さるこさ幾等なるを知らす、この文の如きは、所謂文意兼れ到るもの乎（記者）

（し）世界は大學校

下總香取郡多古町島區　郡司文

人はいふ、我は何專門學校の卒業者なるを以て、世上に誇るに足れりさ。又曰く、我は何博士なるを以て、大に濶歩するに足れりと。其言や一理ありさ雖、亦嗤笑を買ふの價ひなるのみならむか。それ、世界のことは、人事さなく、自然さなく、洵に千態萬樣にして、僅かなる學校教育の、よく竭すべきにあらざるなり。のみならず、造化の幽幻にして、醇味のある處は、身親しく其境に臨むにあらずんば、味ふべからざるるもの往々之れあり。試に、現今學理の淵源を攷へ見よ。大は天文哲理より、小は動植の諸學に至るまで、皆然り。ダーウヰンの進化説は、比較研究より生まれし呱々の聲にあらすや。ニュートンの重力説は庭園の果實の隕落せし音の反響と云ふも、強ちにはあらず。ワットの氣力發見も、亦鐵瓶の湯氣の賜ならずや。獨り科學に於けるのみならず。百科の學皆經驗に偶然に、自然の教誨を仰がざるもの罕なり。之に依て見れば、中學さ謂ひ、大學といふ、何れ皆世界の大學校に入るの豫備科にして、其之れが比較的容易に、且正當に學ばせんが爲の素養のみ。さるに、人々宇宙の眞理は、只之の校にありさなし、又數百の赤書黃籍を以て、森羅萬象の小模型さなすは、大に心得ぬ事ざもなり。世人或は學理さ云ひ、實際さいふ。固さ學理は實際より出でゝ、實際に應ぜん爲のものなれば、學理直ちに之れ實際と、兩者相融和せざるべからざるに、なほ此稱あるは、其間何等かの逕庭なかるべからず。左もありなむ、さもそふす。新出の醫學士をして、直ちに、命旦夕に迫るの二豎者を委れたらんには、渠れ躊躇せざるべけんや。陸軍大學出の若士官を驅つて、直ちに、硝烟漲り、煩聲殷々たるの修羅場に投ぜんか、渠いかで眼まドろかざるを得べきぞ。若法學士亦氣息喘々として、重荷さ共に政渦の中に情死するの、止むを得ざるべし。之れ未だ實際なるものゝ、琢磨を經ざる璞なるによるさも云ふべきか。實際は乃ち實際にして、眞理のある處を其儘秋收冬藏す。

故に瑣の誤謬を挿むことなし。日常行動の間に瞑々の裡に、主觀にはた客觀に、圓滿なる痕跡を捺されつゝあり。されど學理は之に比すれば、幾分か抽象的にかたぶきて、しかも誤差なきを保すべからず。もし單に學理的の價値をして、全豹が具ふる眼目の焦點とも云へつべき、實務の舞臺に演技せしめんとならば、大に其枝離せる個々の間を、紐帶もて連結せざれば叶ふべからず。此紐帶なるものは、躬親しく其境に到りて覓むるにあらずんば得べからざるものにして、即ち世界の大學校に於て教授する所に屬す。孟子のいはゆる「悉く書を信ぜば書なきに如かず」とは、餘り陳套なるも、亦以て兩者間の消息を窺ふに難からず。學理なるものは、全能なる實際より産みたる、一時形見とも見つべきものにして、經驗淺き少年の頭腦にも、明瞭に認識し得らるゝ、範圍はた抽象的のものに限られたる、材料より構成せらるゝことを悟らざるべからず。かゝれば、其畸形兒が連城の璧と璧めて、全能なる母を蔑みするが如きは、大なる僻事といふべし。

見よ、世は暗澹として妖雲朦朧、眞理の光は未だ洽れからず。天帝の幽遠なる謎は、爾等が頭腦に塊まりのまゝ介在するにはあらざるか、神秘の關門は鎖されて、其鑰は深く匿されあるにはあらぬか、誰か其鍵鑰を得て、之れを闡明にするものぞ、試に世人に諮はむ。天の寵恩に浴せる新日本の臣民は、徒らに學校教育のみに満足しゐらるべきかと。又いふ、爾等の天賦の職責を、瞑目沈思せよと。

評　男にも劣らぬお元氣には、只恐れ入るの外はありません、堂々たる御意見に感服したる僕等は、「あなたは女ハイカラですれ」と敬ひ申上ぐるの外、何等の批評も出來ません、(記者)

消息文

(乙)

◎友の嫁きしときゝて

下總香取郡多古町島區　郡司文

折りふしの移りかはりはいと早きものよ。さる頃までは、「誠から出る口癖の寒さかな」と、誰やらの口すさみも、げにと思ひ知られ候へしかども、今ははやもむかし偲ぶの花橘の候と相成候。いぬる睦月の休暇に、御許君と悦しき遊びのことも、亦その折、お姉君に何とやら申されて、時ならぬ花や紅葉をお面わに拜みまつりしことも、つひ数日前のやう思はれ侍り候。

偖こたび父よりの知らせによれば、御婚儀はさる十五日、目出度御擧げ候へし由。かくあらむとは期しゝものゝ、今更のやうに、嬉しさの餘波を胸の中に躍らせ申候。お聟君千坂樣の御高名は、かねて承り侍り、お似合はしき御伉儷、洵に〳〵羨ましく存じ奉り候。かの折、お妹君に取られ給ひし言質は、お約束通りに受け戻し候や。日頃おいつくしみの、命より二番目とか仰せられし、鸚鵡は御持參あらせられしか。定めてかれも健かにいますらむ、此の頃中は得意になりて、いかなることを語り居るにや、聞かまほしく候。

かれ〳〵の御素養御抱志も、今や御實行爲さるゝ時と相成候へば、御理想の美はしき御家庭を拜するも遠きにあらずと、怡躍致され候。さはれ、學理と實際とは、間々齟齬する場合ひも之れあり、又家風とてもあらむなれば、こゝ些しの間は、何事にまれお控へ目になさるゝ樣くれ〳〵と斷りまゐらせ候。かゝることどもは妾の申すまでもなく、夙に御存慮遊ば

さろゝさころならむも「夫婦は人倫の始」さや申して、いと重く大切なるものにしあれば、お仲睦ましう、お立派なる若様嬢様數多設けられむことを、玉椿千代八千代かけて祈りまゐらせ候。なほ申上度ことは澤々に侍れど、最早暑中休暇もあひなきこと故、その折のお目もじの上にゆづり申候。目出度かしこ。

追て何がなさ存じ候へども、世事にうさき身のよしあしさへわきがたく候まゝ、奈何なもかへりみず、此東西名婦鑑及び家事要訣御參考までにもさまゐらせ候。こはかの有名なる紫野刀自の御熱血を灑がれたるものにして、何れも去月中の發刊に之れあり候かど、もはや二版を重ねしほどにて、都下の批評界は嘖々として、その完きたまさほめたゝへ居り候。

評　文詞穩妙にして、十分に賀意を遂せり、文中に一二の注意を述べたるは、之れ友を思ふ眞情に出づ、此種の消息文さして最も體を得たるもの乎。(記者)

(丙)

◉在都の姉に寄する文

山口縣山口町堂の前岩本庄吉内　山名よし

櫻梅散ッて空しく泥土に歸し、椹野川上の小杉ヶ森には杜鵑の早や初音を漏して旅客の枕そばだゝしめ、若葉の奥にほのめく火影のいさ心地よき思ひせられ候時節柄、御姉上様には如何御暮し被遊候哉、定めて御すこやかに御修業の道をたぞらるゝ事さ喜び居り候。次に母上様初め一同變りなく消陽仕候間御安心被下度候。

姉上様には過る四月に第四年級首尾能く御修業なされ候由、御來書によりて承り候。文筆御熱心の事なれば國語漢文の滿點を得られしは誠に御喜びの事さ推し候。校課御多繁の折柄にも係はらず御筆のすさび時々女學世界誌上にて拜見仕、妹の妾迄何さなく心強き思ひせられ候。妾にも折々投書を試み候へども、つたなき筆の跡のいかでか才女多き中に立ち交らはるべき、いつも沒書にて同級の藤崎様、廣瀬様に笑はるゝのみに候。

此間は一葉全集一部御送り被下難有落掌仕候。餘暇にはいつも全集を繙き愛讀致し居り候。流麗に且つ同情の涙あつき筆づかひ古のなき紫女が面影も忍ばれて、明治の世の斯くも賢き天才は生みしかさ、そゞろ女流の爲め肩はゞ廣き心地せられ候。本年一月發行の文藝俱樂部に記載せられ候幸田露伴氏の二日物語の後編、前二日物語さ併せて等しく文壇の珍品と仰ぎ申候。此頃は學課の暇にはいつも此一葉全集さ二日物語とをのみ讀み、春雨に徒然なる時節柄も露うしさ思はず暮し居り候。然乍學ぶべき學科は務めて勉強仕候。何れ來ん歲の四月には、首尾能く此校を卒業して御姉様の跡追ふて京上せまほしき考に御座候。

廣瀬様には自宅より御通學なされ居り候へ共、道程の餘り遠くてかよはき女の朝夕通ふ事の六ヶ敷ければさて、十日餘り前より妾の部屋へ御住ひなされ候。其後は入るも出るも共に手をさりつ樂しく暮し候。藤崎様には熱心に毛筆畫の御研究にて近頃は中々御上達なされ候。森様、國光様も御變りなく被在候。國光様には天緣結ばれて近々の中隣村に素封家の名高き齋藤様へ御嫁入せらるゝ由相傳へ居り候。

かたくなる生れは性となりて女界の流行なぞ更らに知り不申、妾は只古しのまゝの下駄に傘に着物にて通學致し居り候、流行の傘も、髮も眼に止まらず候。まゝ御知らせ申事出來無候間只御無音御謝び旁近況御知せ申上候。時候は日に增し暑につのり行き可申候間一入の御保養何よりの御事に御座候。乍序手叔父母様へ宜敷御言づて被下度たのみ上候かしく。

評　文章平易にして、能く日常の消息を報ず、異郷にある姉君をして、いといとうれしさを感ぜしむるに足る。(記者)

賞外佳篇

春の園

徳島　波間花子

(上)

今日は天氣の晴れ渡つた日曜である。

撫肩のすらりとした、艶々と滴るやうな緑りの髮を夜會に卷ひて、淡桃色のリボンを鬖し白襟に海鰕茶色の袴と云ふ女學生。眉の秀でた色は透き徹るやうに白い、切の長い眼元の凛と締つて何處やらに一種の誇りの視える顏立て、右手に紫きの深張りの洋傘、左手には包みの大きいのを抱えて、何日もの洋琴の先生の內へ行くので、ゆる〳〵と野邊の心地よい風に吹かれながら、歩みを運ばせてゐる。

彼那邊なる藁屋の背戶の傍に咲いてあた桃の花は、前の週までは紅いと、ふくらんで美はしかつたが今はちら〳〵散り染めて、青葉の濃き空が視えて、暖かひ風の吹く度にひら〳〵其邊りの清い小川に、花葩は亂らばつて浮んでゐる。

遠くかすんだ、曠々とした野邊にも蒲公英、紫雲英、などの草花は處々に見えて、日影は麗らゝかに一面に照り輝いて、揚雲雀の聲も長閑に、何れを視ても暢び〳〵と暖かそうてある。少女の鬖す深張りの傘を透して、衣服を透して、ほこ〳〵と夢心地になる迄に心快い、足の運びは益々遲くなるばかりで。

其處の藁屋の紅い衣服を棹に乾した、下には未だ十歲ばかりの、いたいけないこ乙女子が少さい手に盥を据えて何か洗ひ物をして居たが、此那邊の美しい姿を視てか、急に洗ひ物の手を止めて、無邪氣に立つて視てゐる、傍に大きい盥がある勢か身體が、格別に少さく視えて愛らしい。

這那邊の少女は其れを視てほゝ笑みながら、足もとに眼を注ばり小さい板橋を渡つて、衝と振り顧ると早や女の子は視えぬと想ふと、裏から廻つたか邊ふの一筋道の田甫一さんに驅けて、畑の內へ蹈み込み手拭で頰被りして、鍬を持つた黑い影の側へ寄つた。

今迄一心に仕事を爲してゐた人は、急に頭を擡げて頞被りを寒り直ぐ顏を拭ふこゐる、乙女子の兄か遠目にも未たうら若ひ五分刈の紺の筒袖。畑の中からは兩人の視線が一心に此方を指してゐるので、少女はいぶかしそうに折々、洋傘の横から白い顏を振り向きながら、それでも歩みは運ばせこゐる。

大分離れて弟と畑の方を視返ると、少さい乙女子は視えないで、只黑い影一ツ身動もせず、見送つてゐるのであッた。

(下)

夕暮の薄靄は棚曳いて、野の暖かい景色は次第に寂れ、斑らの藁屋根より夕餉の烟りは細く立ち登つて、遙ふの山々は茫然と黑紗に包まれてゆく頃、前の少女は洋傘を杖にしながら、洋琴の稽古から歸りで、急ぎ早に畔道をたどつてゐる。

今少さい板橋を渡つて二三步來たと思ふと、不意に後から

「孃樣……孃樣……」と

太い男の呼聲がする、少女は立ち止まつて衝と後へ振向くと小走りの男あゝ前に畑の中にゐた其人であらうか、馳せ寄つて丁寧に辭宜しながら口不調法に

「ぶしつけですが……あの孃樣、ハンケチは落しなさらなんだかへ。」

「あゝ絹の牡丹の花を繡つたハンカチでせう」

「へエ」
「それは妾何處で落したのだらうさ想つてゐました、あなた拾ひなさつて下すつて」
「へエこれ嬢樣が前の日曜に通りなさる時に田甫の道で落しなした」斯く謂ひつゝ大事そうに懐ろから白いハンカチを出した、ふはりさ香水のいゝ匂ひは鼻を打つのである。
無言に差出すに受取る其白い、華車な手の指環は光つてゐる。
「大きに有難う」少女は其心切を謝して、美しい顔には少し笑さへ刻まれてゐる。
「ほんさうに有難うござへます」さ亦辭宜して立ち別れる、さう空には朧の月も浮んで何處からか、寺の鐘はゴーンさ震ふやうに、低う沈んで響くさ、さら〳〵さ風に音して其處の生垣の内の、桃の繭ははら〳〵少女が髮にも袖にも滾れかゝて、後には香水の匂ひやらを遺して歩んでゆく。少女は折々振返つて視るさ、夕靄を距てゝ薄暗い遙かに黑い影は何日迄も寂しく立つてゐた。

（おはり）

◎娘こゝろ

麴町　尾上はつ

庭に向へる四疊半障子引あけて今しも針仕事に餘念なきはことし廿才の春をむかへ！此家の姉娘お八重なり秩父縞の袷に黒繻子さ紅葉の中形あるめりんすの腹夜帶をしめ色白さいふにあらねど目もとすゞしく鼻筋通りて殊に口もさの愛らしき見るからやさしげなり髮は前がみゆるやかに銀杏返しを根高く結び白のすが糸ふさ〳〵さして日頃令孃風を好むものからいさ品よく誰が目にも商人の娘さは見えず過る年小學校卒業してより裁縫の稽古に通ひ居たりしが此頃は袴重れものに至る迄大方縫ふすべも心得且は常より病身なる母親の何事もおくれがちなるにぞ裁縫には折々通ふ事さして去年の秋より家にて洗濯張物の事より四季折々の着がへなど母をたすけて怠らずけふも父の羽織を縫へるなり折柄廊下のかなたより此間をさして來るはお美代さて十四になる妹髮を桃われに結ひ姉さ對なる袷に板〆めりんすの丸帶しめたるいさ愛らし姉は妹の來りしさも知らず針もつ手をやすめ目を庭の方にうつして何をかひさり思案にくれぬ「姉さん」さよびしを心づかぬに「姉さん何を見て入らしやるの」姉はいまだ詞なしお美代はいさゞかしげに「姉さん何か考がへて入らつしやるのれ」お八重は初めて心つきぬ「まア何時の間にか來たのれちつとも知らなかつてよ」さつきから來てゐますわ姉さん切に考へてゐらつしやるんですもの」姉も打ゑみて「そふ何か用なの」「いえ別に用じやないんですけれど」お美代は姉のかたへに座をしめ棚の上なる此月の女學世界手に取り口繪の寫眞ながめつゝ「姉さん此節はお花やお茶のお稽古およしなすつたの」「別にしなくてならない事でもないから」云ひさして何か打案じ居たりしが俄に「美代ちやんおまへ來年小學校卒業したら今度は何處へ上るつもり」「そふれ學校では皆さん高等女學校へはいる方が多いんですけれどお父樣許して下さるかしら」「そりや行く氣ならわたしから願て見てあげるわ」妹はうれしげに「そふして下さればわたし嬉しいわ姉さんなぜ高等女學校へ入らしやらなかつたの父樣いけないつておつしやつて」「いえそふじやないの早く裁縫の稽古をしたいさ思つてれ」「あゝそふ高等女學校を出てからでもおそくはないでせう」「ほんさはそふする方がいゝのよ」妹は女學世界をもとの棚へ直し

つゝ「姉さんこさしから女學世界になすつたの姉さん雜誌おすきれ」「あわたしの樣に小學校はかりでよしては少し本でも見て何か覺えなけりやならないからそれに手ならひもしたいさは思ふけれどもほかに用があるさつひ出來ないから美代ちやんなんぞは今の內にたんさ勉强して置かないといけないよどうしてもはたし位になるさ用か多くなるかられへ」折しもはた〳〵さ音たてゝ下女のお松は入來りぬ「お美代樣山本さんのお孃樣がお遊びに」「そふ今姉さんとお話があるんだけれど」「折角入らしつたのにそんな事いわないで早くお出なさいよ松六疊へお通し申すさいゝわそしてお茶を上げてねそれから美代ちやんお母樣のお部屋にお菓子かあるから之へ包んでお上げ」を八重はかたへの机のの引出しより半紙を二枚出やりぬお美代は受取り庭づたのひに母の部屋さして急き行きぬ

おもひかへせばわれ妹の年には來ぬ年の卒業式をこなき樂しみにて卒業後はかしこへ入學せん父上は昔かた氣におはせど願ひまつらばゆるし給ふべしなど　さくより心に定めたりしをふさ常より弱き母上の弟や妹幼くてはなど心に浮び俄に瀰學の氣もうせて遂に師の君たちのすゝめ給ふにもそむきまつり程近きへ裁縫の稽古に通ひ母上のすゝめ給ふまゝに茶の湯活花など初めしもきのふかけふのやうなれど數ふればはや五つさせの昔さなりぬ其後親しき友の便りに或は高等女學校も今智しにて卒業なり或は首席に居たまひし小林の君には高等師範へ入り給ひしなど聞につけ今更入學したたき心もおこり時のおくれしをくやみし事の幾度かやう〳〵家の事に心を配る樣なりてはもさより好まぬにあらねど茶も花も心にそまずなりて去年よりは絕へて稽古にもゆかし今は忘れし樣になれりされど裁縫は心にかけしかひあつてそが師の君にも他の人々よりはいされもごろに御教たまわりしかげ普通の物にはさしつかへなく少しは母上のお手だすけにもなろうれしき妹も來年は卒業なりせめて彼には望のまゝ學ばせやりたし夜にならば父上に願ひて見んなどこし方行末の事ども考へ居たりしお八重はいつしか日影のかむきてねぐらにかへる鳥の聲におどろきぬ

庭のなかたより俄に愛らしきこゑにもれて

　金剛石も磨かずは玉の光はそはざらむ

縫物かたよせて立上りしお八重おもわず見かへれば九ッになりし妹のおふみ二人の弟さ手をつられ池のほさりを歩みつゝ聲はりあげて歌ふなりけり

◉貞婦の事を記す

下總　寺本島梅子

德義のあせたる今の世にありては、なか〳〵に下等の社會に、その流れの清くすめるこそ、掬むべきふしの多かめれ。

こゝに身は賤の女にてありながら主に使へて、誠さ實さ、夫につかへて、貞さ節さ、を全うせる婦人あり。そは千葉縣香取部栗源村なる小農佐伯榮造といふものゝ妻なかと呼べるものなり。性質從順にして且、難に堪ふろこさ男子も及びいたし。年若くして同村佐伯源太郎氏に雇はれその婢となりて朝な夕ないさまめやかにかしづき。四年の間一日の如ければ主人の大に感ずる所さなりにけり。時に同家にありし年わかき忠僕、榮造さいふものさ見合せて夫妻さなし、近隣に一家を分ちて與へぬ。其れより共に力を合せて主の恩にむくいんさていたしみはげみければ、日々の暮しはまづ不自由なき身さなり、男子一人さへ設けゝれば、二人はいよ〳〵喜びてます〳〵物作りの業に怠りなかりしが、夫なる人はある日妻さ共に山に木樵りし折り急激卒倒するや、忽、全身痲痺し進退まゝな

らぬに、妻はおどろきて之れを背負ひおさな兒の手をとりてなく〱家にかへり、不足ながらもさま〲と治療を加へしかど、悲しいかな、腦の如何に刺激せられしにか、本の氣象とは打らて變りて三つ四つのをさな兒の如くなりぬ。さらぬだにあまる財とてあらざる身の今よりはかよはき女の腕一つとはなりぬ。なか女のなげき一方ならず、朝な夕な神佛に祈り、晝は病夫をのこして籠を負ひ田畑に出で、あるは人に雇はれなどして、夕はおそく歸り夫の屎糞の仕末を終へ、幼子を背負ひつ炊事し、食し終らば病夫の按でさすり、しばしも休むひまとてはなく身を粉にして働くなり。天はこの貞女をなどてすくはざる。かてゝ加へて夫ははげしき黴毒發生し、兩眼はそのために盲となりぬ。この時なか女のなげきは如何なりしよ。つゞれの袖のかはくひまとてなかりしならむ。あゝあはれなるはこのなか女なり。世の常の婦人なりせば、懦惰なる女にてありせば、いかでこれに堪へらるべき。さるを目に一丁字だも知らぬいやしき身にてありながら、よく貞と節と理とをさとりて愛と情との切なるより、この困難を憂しともおもはず。只管夫の快方の早かれとて神に祈りつゝ傍、糊口の道におこたりなかりしが、憂きつらき中にも月日のめぐるは早きものにて、背負ひし幼兒は漸、七つとなりければ、苦しき中にも假字文字なりとも學ばせたしとて、其の四月村なる小學に入校せしむ。わが父は敎の道にたづさはりければ、いと懇に世話してやりぬ。貞婦のよろこび一方ならず、さるにても夫の病は聊も癒へず。日に心も亂るゝようにて、をのが妻子の愛をも忘れて怒りのゝしる事常なり。なか女これを慰むるに菓子や飴を以つてすること恰、兒を扱ふ如し。人これを憐みて衣食を與へんとすれば固く辭し、近隣親戚のものにても必、これに禮するを常とせり。

人たま〱再嫁を進むれば、淚を揮うて答ひて云はく。吾が去らむ後はかの人の如何にして其の日を送らむ。さる心に露だもなし。かゝること進め玉ふは無用なりと、鐵より固き心には誰しも空しく歸るなり。かくて七年あまりのけふに至るまで、操の變らぬこの節婦の行くさき必めでたからむよ。

あればこの山下水を掬む人ありせば、世の中の松の操、竹の節、いよゝめでたきを加へむと思ひて、かよわき水莖のあとかくなむ。

許　文章は平々凡々なれど、事柄は一讀するの價値あるもの（記者）

◎國語教育の必要

香川　黑川しづ

外つ國々の言の葉數多あれど我らのすめろ瑞穗の國のたへにやさしき國ぶり御代の姿を其まゝうつせる言の葉にまさる者あらじとぞ思ふ近き頃迄學者としいへば漢の言葉を學べばそれにてたれりとし國語の事などは大かたわきまへざりしが今は人智開けて國語教育の必要を感じたるこそ幸なれ我國の語はやさしくたやすげに見ゆるものから其のまゝ文の法にかなはんにはなかなかかたき事にこそありけれいさゝか文がゝんにも國語をしらではかなはぬ事ぞかしよしからくかきたりとも語の法しれる人の見なば片腹いたき事はかりにぞあるへきあるは一筆のゆきかひにてゆゝしき間違ひ起りて世の物笑ひとなりし例も少なからずいかに水莖のあとはうつくしくとも語法にかなはずはおのがじゝ心のほどもしらせ難くひいては國體にもかゝはる事なるべければ此國に生れいでたらん上はなにをおきても國語の道をきはめではかなふまじされはこの道をきはめ給へる大人達は朝な夕な國語教育の事に心をくだき給へるぞ嬉しきさるを世の大かたの人西洋の語を學べると今の御代にありてはいとと大切の事な

れとおのが國の語をただにわきまへてあたし國のことばおぼえたりさてしたりがほなるはをかしき事なりとまれかくまれ國語教育といふものは一日もゆるがせにすべからざるものとぞ思ふ

◉根來の里

和歌山　いさを

ゆうべの雨は、名殘りなく晴れ渡り、朝日の光もうるはしゝ、いざ、根來の山のさくら花、散らぬ間にとて出で立つ。

汽笛一聲いさましく、我汽車は中の島停車場をはなれ麥青く、菜の花黃なる間を走りつ、少時にして舟戸に着く、此の處より降れり。目指す根來山までは一里許りと聞きぬ。

青々たる紀水の流れを横ぎり、里を出離るれば、早や緑りなす野なり、たちのぼる糸遊は瀬山の眉をうごかし、青空高く舞ひ登る雲雀は、平和の唄を詠ひつゝあり、點々たる茅屋には、炊煙徐々に騰りて鷄犬のこゑ遠く近く聞こゆ、柔らかにかすめる日光は、暖かにそびらを照らしつ、牛を逐へる牧童に迎へられ、畑うちかへす少女を送りつゝ進みすゝむ。緑葉の間に點々として白きは花にやあらん、花片三四風につれてたゞよひ來る。根來のさとに着きぬ。

地はこれ谷の間にありて、櫻花多しと云ふにはあらねど二株三株をちこちに艷を爭ひ美を競ふ、間を一條の靑き小川淙々として流れたり。堂宇ありて讀經のこゑかすかにもれ、民家ありて茶をひさぐ。眞に蕭散たる閑地なり。

なかば散りうせたるあり、今をさかりなるあり、八重櫻は未だつぼみなれば見るべくもあらず。甘露門のほとりに一きは目だちて美しう咲き出でたるあり、榜して「不散の櫻」といふ、されどそれも名のみにて、既に樹下は落花かさなりて白し、あはれ、誰がなせしたはむれ事ぞ、非情の花をして幾多の人を欺かしむ、花若し心あらば定めて快からず思ふらんと、いと哀れにも覺えしか。

かしこの花影には、酒くめる人の持ちたる盃の上に浮びし一ひらに、飲む手はなして歌ふも興あり。こゝの花下には、紅のもすそ長く引きつつ、摘み草なせる里の少女等のそゝのけたる鬢に、白き花の二ひら三ひら散りかゝりたる又なくをかし。

我れも小川のほとりなる若草をしとねに籍きて、限りなき清艷を浴びつやすらひぬ、脚下の水は淙々として自然の樂をかなで、頭上の花は風ふく毎に吹雪のごとく降りそゝぎつ、靑き草、ゆるく流るゝ水の上を斑々として化粧なしぬ、あゝ、此の瞬間、心は暢然として俗界を去り、胸は平和の神の暖かき雙手もて胸かれたらんが如く感じぬ。

思へ、來る春ごとに此の淸福を恣にせる里人の、いかに幸多きかを。實に彼れ等のやさしき胸には、俗界の狂譟たる富貴、高名、又あらゆる競爭、紛擾等の波立たず春海のごとく靜かなり、ひねもす山中に入つて薪を拾ひ、畑に出でゝ土うちかへし、終生役々として其の業を營み、山家の生活安らかにして、生涯の夢まどかなり。

此の自然の園に自然の人のすまへる樂天地に、願はくはとこしへに浮世の風の吹き來ずにあれ、されど虛榮と僞善との兩手に捕へられ、孜々として働ける都人士の惡風の、已が天職を盡せる淸き里人の美習を去らしむること、なほ花の嵐に於けるがごとくなれば、いかで未來長くこの儘にてあり得べき。

あはれ、我の再び此の處に遊ばんとき、櫻花は舊によつて笑むべくも、江山果して今の如くなるやいかに。あられもなき思ひに沈める内、日はいつしか西山に沒せんとす、心なくもやをら起ちて皈途につく、折しも夕

風にちれる花袖のあたりにさまよふに後ろ髮ひかるゝ心地して。
幾度びか顧みつ、さらば花よ・又來ん春は。

◉車中之記

遠州　磯部仲子

過ぐる年我が知れる人之京見物にさ旅せられし折り妾も御供仕るばやさ思ひしかど障る事のありて果さず口惜しき事になん思ひ居り侍りしに今年はからずもよき友のあるまゝ年頃の望みも開け行く御世の惠みにいさ老ひ玉ひにし我が祖母の君さへ其中に洩れ玉はざりしこそうれしけれ

幾年の望みもけふや大阪に
旅立つ身こそうれしかりける

夜もすがら夢さなく現さなく旅の事など思ひ浮べつ曉き告ぐる鷄の音に淺き夢破られて起き出づれば早祖母の君の荷物など調へ居玉ふぞありがたきものにこそさてあさけの調度もそこ〳〵に停車塲に至れば早其所には三人あるは五人うちつどゐつ旅中の事など樂しげに語ふあり我等を笑ましげに迎ふるあり送り の人を勞ふあり 吾れも人も 心は已に西に通へり

さる程に改札處は開きぬ汽車は着きぬあな乘り遲れぞ忘れ物はなきやなど常に野山を友さすなる人のどよめきつある内に妾祖母を扶け參らせて室に入れば腰を掛くる間もなう汽車は一搖ぎして動き出でぬ時しも頃は卯月の廿日あまり二日さ云へる朝六時にてぞありける長途の旅にしあれば荷物などのあるを頁き程に棚に載せなどしつるまにはや鉄坂も過ぎて名にし頁ふ濵名の橋にさしかゝりぬ呼べば答へんさすなる沖の舟の眞帆片帆の往きかふ樣鷗の波に戯はむるなど其景色の程得も云はれす已にして尾張の國に入れば何さなう異なる心地せらるゝも可笑し遙に熱田の宮を伏し拜み名古屋の金の鯱鉾を見ては征淸の當時其勇壯なる樣を想ひ浮べなどしつる程に古戰場の關け原にこそは着きぬ

君が代のつゆに霑ふ關ヶ原
むかしを忍ふ人のありせは

近江の伊吹山を仰ぎては床かしき日本武尊の故事に畏こくも袖の時雨るゝ亦程もなく米原驛を過ぎ行けば琵琶の景色の樂しさよ人の話しも知らで懲よりよ念もなく見つゝある程に彦根の城は來りたり掃門頭の櫻田の雪に世は春ながら寒からしめ川瀨能登川八幡も　ちさ〳〵過ぎて夕日の西山に傾く頃驛夫の七條〳〵さ呼ぶ聲になんさそはれ出でぬ

日さ共にれくらをいてし旅からす
いさやゆる〳〵翼休めん

◉女子敎育にのぞむ

東京　友近里子

我敷島の大和の國は昔は女子の敎育てふ事行さとかずたゞ庭の敎へとはむ歌を詠じ琴を彈じ茶の湯などのみやび業さては裁縫の道に心さすものありけれど家政の太切なる事をしらずまして育兒の道などに重きをかをず實になげかはしき事なりけり今や明かに治まる御代の御惠み至らぬ隈もなく汐くむ海士も柴かる山がつも物の理りを辨へ文の林までたどるに至りしはこれ一へに我大君の御惠みによれるなりさるを思ひがへてや文かき歌よむ事の上にのみ心をこめて自から優美なりさし家政の事などはいやしき業の如く見なしかへり見さる人もあらむされば往々今の敎育うけたる女子は家政をさるに不適當なりなどゝ誹らるゝ事あるはかへすがへすもなげかはしき事にこそ學び屋に通ひ玉ふかた〴〵は日に月に新たなる理をあきらめ玉ふべし已れも其はしに侍るものからよく愼みてよろずの事に心をこめいそしみてさも〳〵にみがきに〳〵て女の道をきはめむ事を切々のぞむのあまり愚かなる身をもかへり見ず一こさをかくなむ

懸賞文募集

本誌は初號以來『才媛詞藻』の欄を設け賞を懸けて廣く才媛の詞章を募集し來りしが、今回より改めて毎回必らず文題を設くる事となしぬ。其の選評者は孰れも國文學界の泰山北斗とも稱すべき大家先生也、海内の才媛乞ふ其の美感佳想に成れる玉作を投寄されんことを

七月分月題左の如し（〆切六月十五日）

日記の一ふし（叙事文）

（廿四字詰五十行迄）

夏のたのしみ（文體隨意）

（廿四字詰五十行迄）

（賞品）

甲　一人（圖書切符）金貳圓

乙　二人（仝）金壹圓

丙　三人（仝）金七十錢

丁　五人（仝）金五十錢

和歌兼題（〆切六月十五日）

螢

暑中休暇

（天、地、人、三名を選び前掲賞品の乙以下を呈す）

投稿規程

一、本書は女子の手に成れる投稿を歡迎す

一、投書の種類は文章（文體は國文及普通文に限る）詩歌（新體詩及短歌今様の類）小説は優美にして卑猥ならざるもの等とす

一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る

一、投書の用紙は半紙二ツ折（和歌は端書に限る）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る

一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す

一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること

一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

（寄稿募集）本誌の材料として、家庭及び地方風俗、婦人社界の状況、孝女節婦の美談佳話、各女學校の状況、その他有益の資料を寄せられんことを希望す

女子美術學校參看記

女子美術學校は塑像彫刻家として有名なる藤田文藏氏等の發起に成りたるものにて、其の校舍を本郷區弓町二丁目に撰定し、今春以來假校舍の建築に取急ぎつゝありしが、今回いよ〳〵開校の運びに至れり、同校の目的とする處ろは、我國女子の德性智識を涵養すると同時に、兼ねて女子に適當なる優美の藝術を敎授し、女子をして良妻賢母たらしむると同時に、又大に文明を裨益する技術家及ひ敎師たるものを養成するにあり、而して從來我國は世界の美術國と稱せられ今日に於ても漸次進步の域に向はんとするに際し、我が國に於ける美術敎育は專ら男子に限られ、女子の美術敎育に至つては未だ殆んと顧みられざるの風あるを遺憾とし、女子をして美術の敎育に就かしめ、其の特長を發揮せしむるにありと、されば本校に入るの女生徒は、其の學習せし處を以て女子の工藝、手工、其の他日常の業務上に適應し得べく、以て自活の道に就くべく、從つて其の社會上に於ける位置を高め、女子師範學校、高等女學校及各種の女學校に於ける美術敎師たるを得べきにあり。

校舍は未だ假建築なるを以て稍狹隘を感ずるも清楚なる木造洋館にして敎室を日本畫、西洋畫、彫刻、蒔繪、編物、造花、刺繡、裁縫の八科に分ち、各室皆卓子、腰掛の設備とし、就中彫塑、油繪の二科室には幾多の有益なる參考品を備へたり。目下未だ開校日淺きを以て生徒の數は多からざるも、裁縫日本畫、刺繡の三科には相應に希望者ありて、猶各科共今後追々設備の完全するを待ちて漸次入學者を勸誘すべしとなり兎に角同校は我邦に缺如せる女子美術敎育の必要に應じて設立されたるものにして校長始め職員一同頗る熱心にていづれも獻身的に從事しつゝある由、吾人は益々同校の前途盛大の域に至るべきを信ずるものなり。

女子美術學校校則

第一章　目的

一本校は女子の德性智識を涵養し兼て女子に適當なる優美の藝術を教授し內に處しては賢妻良母たり外に處しては文明を裨補するの技術家及教師たるものを養成する所とす

第二章　名稱

一本校は女子美術學校と稱す

第三章　位置

一本校假校舍を本鄕區弓町二丁目一番地に置く

第四　學則

一本校の學科を普通科及高等科とし副科として普通學を兼修せしむ別に實技のみを修むる者の爲に專修科を設け一科若くは數科を專修せしむ
尙高等科を卒へ其蘊奥を極めんとするものゝ爲に硏究科を設く

一本校の修業年限は普通科を三ヶ年高等科を二ヶ年研究科及專修科は共に一ヶ年以上とす

一學年は四月一日に始まり翌年三月三十一日を以て終る

一學期を分ちて三學期とし第一學期は四月一日より八月三十一日に至り第二學期は九月一日より十二月三十一日に至り第三學期一月一日より三月三十一に至る

一休日は左の如し

日曜日　祝日　大祭日　地久節　開校紀念日

夏季　自八月一日　至八月卅一日
冬季　自十二月廿五日　至一月七日

一授業時間は每日凡六時間とす　但し時宜により伸縮することあるべし

一學科課程表左の如し

普通科正科（左表八科の內志望の一科を課す）

學科／科目	毎週時間	第一學年	毎週時間	第二學年	毎週時間	第三學年
日本畫科	一八	臨畫寫生	一八	寫生臨畫 圖按	一八	寫生 圖按
西洋畫科	一八	臨畫寫生	一八	臨畫寫生	一八	仝上
彫塑科	一八	摸寫 摸造	一八	摸造寫生	一八	寫生
蒔繪科	一八	圖畫 平蒔繪	一八	圖畫 色漆繪	一八	圖畫 高蒔繪
編物科	一八	實習 臨畫	一八	同上 圖按	一八	實習 應用新案
造花科	一八	實習 寫生	一八	實習 寫生	一八	實習 室內裝飾
刺繡科	一八	實習 寫生臨畫	一八	仝上 仝上圖按	一八	仝上新按
裁縫科	一八	通常衣服	一八	仝上	一八	仝上

普通科副科

學科／學年	毎週時間	第一學年	毎週時間	第二學年	毎週時間	第三學年
修身及家政	二	人倫道德の要旨 衣食住	二	仝上女禮 家事管理法	二	仝上 家計簿記育兒法
國語	五	講讀作文習字	五	仝上	五	仝上
英語	二	綴字譯讀	二	譯讀會話	二	會話作文
圖畫	二	用器畫 臨畫	二	仝上	二	仝上
算術	三	球算加減乘除 筆算分數小數	三	仝上相場割 諸等及比例	三	百分算 利息法
裁縫	三	通常衣服 裁方縫方	三	仝上	三	仝上袴羽織 裁方縫方

音樂	一	唱歌單音	一	仝上	一	複音

高等科正科（左表八科の内志望の一科を課す）

學科／學年	毎週時間	第一學年	毎週時間	第二學年
日本畫科	二〇	用器畫、臨畫、寫生、臨模、	二〇	仝上 寫生、新案
西洋畫科	二〇	用器畫 寫生	二〇	仝上 寫生、新案
彫塑科	二〇	組立物寫生	二〇	寫生
蒔繪科	二〇	實習 臨畫、寫生	二〇	實習 寫生、新案
編物科	二〇	實習 臨畫、寫生	二〇	實習 寫生、新案
造花科	二〇	實習 寫生	二〇	實習 寫生
刺繡科	二〇	實習 臨畫、寫生	二〇	實習 寫生、新案
裁縫科	二〇	通常和服洋服	二〇	仝上

高等科副科

學科／學年	毎週時間	第一學年	毎週時間	第二學年
倫理	一	人倫道德の要旨	一	仝上
教育	二	教育學教授法	二	仝上實地授業法
國語	二	講讀、作文	二	仝上文法
數學	二	開平、開立、級數、級積、	二	代數、幾河初步
外國語	三	講讀、文法、會話	三	仝上作文
美術史	二	本邦西洋美術史	二	仝上
美術解剖	一	骨學、靱帶	一	筋學及其作用

專修科（修業一年以上）

學科／學年	毎週時間	
日本畫科	二一	臨畫、寫生、圖按
西洋畫科	二一	臨畫、寫生
彫塑科	二一	摸寫、摸造、寫生、組立物
蒔繪科	二一	圖畫、平蒔繪、色漆畫、研出蒔繪
造花科	二一	實習、寫生
刺繡科	二一	實習、寫生、圖案
編物科	二一	實習、寫生、圖按、臨畫、新案
裁縫科	二一	和服、洋服

備考　二科兼修のものは一科五十時以内とす

研究料（修業一年以上）

日本畫科	寫生、新案
西洋畫科	寫生、新案
彫塑科	寫生、新案
蒔繪科	新案
造花科	寫生
刺繡科	寫生、新按
裁縫科	和服、洋服

第五章　試業及品行

一各學期間に學業技術の成績を調査し一年の終に於て及落を定む

一品行點は平素の操行勤惰に依て之を定む

一及第者には修業證書卒業生には卒業證書專修生研究生は證明狀を附與す

一各學期の終に於て生徒の成績を父兄に報告す
一品行不良若くは身體怯弱にして修技の見込なき者は退學せしむることあるべし

第六章　入退學

一本校生徒募集は每學年の始に於てす　但し缺員あるときは學期の初に於て募集することあるべし
一本校普通科へ入學のものは高等小學校四年卒業若くは之と同等以上の學力を有し年齡十四歲以上のものとす
一本校高等科へ入學のものは本校普通科卒業のもの若くは之と同等以上の學力及技藝を有するもの
一本校專修科へ入學のものは小學校尋常科卒業以上の學力を有し年齡十二歲以上のもの
一本校研究科へ入學のものは本校高等科卒業若くは之と同等以上のもの
一疾病其他止むを得ざる事情ありて中途退學せんとするものは必ず本人若くは保證人出頭し其許可を受くべし

第七章　授業料及入學金

一普通科を一ヶ月金壹圓五十錢高等科を金貳圓專修科を一科壹圓研究科は無月謝入學金は各科とも金壹圓とす
一在學中は出席の有無に拘はらず授業料全月分を徵集す
一實技練習の材料は生徒の自辨とす但し時宜により材料を給する場合に於ては其成績物は學校に徵集するものとす

第八章　賞罰　（此章は省略す）

（教　師）（從五位）岩村透　磯野吉雄　波多野さく　大岩道藏（從六位）川端玉章　（從七位）川之邊一朝　川崎千虎　川島源兵衛　横井たま　谷口鐵太郎　谷紀三郎　田中晉　津田ふさ（ドクトルオフヒロソヒー）藏原惟郭　谷田部おゆん　山﨑ラサラー　（從七位）藤田文藏　伏見藤三郎　木原とき　島田友春

（校務監督）東京美術學校長　從六位勳六等　久保田鼎

（職　員）（校長）藤田文藏（學監）谷口鐵太郎（幹事）田中晉（舍監）横井たま子

雜　報

皇孫殿下の御降誕

青山の松が枝いよ〻緑に、御園生の若葉蔭を成せる好季節に際して御慶びの事承はるも畏きや、官報は四月二十九日の日付ある號外もて

◎宮內省告示第七號

皇太子妃節子殿下今二十九日午後十時十分東宮御所に於て御分娩親王降誕在らせらる

明治三十四年四月二十九日　　宮內大臣　子爵田中光顯

◎宮廷錄事

御產　皇太子妃殿下御安產親王降誕御母子共御健全に渡らせらる

東宮妃殿下の萬民歡呼の中に御婚儀を擧げさせ給ひしは昨年の五月十日にて在しましき滿一年ならずして今又此御慶びある、めでたしともめでたきのみか殊更親王に在しますぞ難有き、主上寶算五十、皇后宮御齡五十二にて御初孫をみそなはし給ふ御悦びの程推し測り奉つるだに歡ばしきや東宮御齡二十四、妃宮御齡十八、竹の園生の彌榮えに榮え玉ふこそ萬々歲と申し侍るめれ

◎偖も御產の御模樣を承はるに廿九日午後七時に御產氣附かせ給ひ九時に御產氣を催させられ十時十分と申すには早やいとも輕らかに御安產あらせられたり、御產氣御催しの由聞ゆるや皇后宮よりは直ちに御使を遣はされ有栖川宮御始め中山一位局九條公父子其の他の方々伺候あり御產相濟むや中山大夫即時參內して奏上しけるが御體量八百目通常のより優れさせられ諸事大きやかに在しますよしなれば御健康のほども無かしと轉ためでたく覺え侍れ、妃殿下にも常々御攝養に勉められし御事とて少しも御患ひの御模樣なく差して御疲勞の體にも拜せられずとぞいよ〳〵めでたし

◎扨て又皇太子殿下には葉山なる御用邸に御滯在中なりしに付即夜電報にて詳く御報わりし上錦小路東宮主事は妃殿下の御使として三十日朝葉山御用邸に伺候し又有栖川宮殿下は翌日參內の上更に葉山へ赴かれ親しく言上ありたりとなん

◎皇長孫御降誕の吉報は即時に傳へさせられ或は早くも承はり及びしかば高輪麻布兩御殿幷に各宮方は申すに及ばず文武大官宮城幷に東宮御所への參賀引きも切らず葉山御用邸へ電信にて御祝詞申上るも多く地方よりの御祝電も少なからず猶昨日より三日間內に參賀すべき旨在京親任官勅奏任官幷に有爵有位者へ達せられたり

◎親王御降誕の報傳はるや、市中は皆國旗を揭けて祝意を表し、各官公立女學校はいづれも休校して祝意を表しけるが中にも華族女學校は曾て妃殿下が御修學遊ばされし緣故もあるとて講堂にて其祝賀式を擧げ大隈、南部兩孃に下田學監附添ひ東宮御所へ伺候して左の賀表を奉呈せり

日嗣のみこの御妃のきみ御產の事いと安らかにてひこみこさへあれいでませしさうけたまわり、かしこかれどもうれしさもよろこばしくちあきいほ秋の永き代までにいや榮へに榮へさせたまへとあふぎのぞみまつる眞心のもだしがたくて祝ひの言の葉をきこえたてまつるあながしこ

◎御名命式

其の當時より相州葉山の御用邸に御滯在中なりし皇太

子殿下には親王御命名式に付五月五日午前八時新橋着列車にて還啓直ちに東宮御所に入らせれしが、永より先徳大寺侍従長は皇孫御命名式勅使として御命名書及御劍一口を奉じ五日午前十時警視警部等に前後を警衛されて東宮御所に向ひ表御門より參入中山大夫御玄關に出迎へ直ちに表御殿に誘引すれば皇太子殿下には陸軍少佐の御正裝にて御對面の上勅使より御命名書幷に御劍を拜受し之を中山大夫に授け直ちに親王の御前に於て御披露あり畢つて之を上壇に奉じ殿下の御挨拶あり勅使は別殿に於て茶菓ノ饗應を受け同五十分退出したり親王の御名御稱號左の如し

御名　裕仁

御稱號　迪宮

又親王御命名式御當日は豫て仰出されし如く午前九時より賢所、皇靈殿、神殿に於て御祭典あり天皇陛下には親しく御名を撰ませられしと洩れ承りぬ

◎謹みて承はるに、御名の御歷代に支障なきや御稱號の文字の適するや否や等十分專門家の考證ありたる末三種を撰びて奏上し、其一つを御裁可遊ばされしものとか裕は即ち寬裕の裕にして、ひろと訓せらるゝ所以なるべく、「裕乃以民寧」「天姿玉裕」など、いづれめでたからぬはなし。迪は『說文』に「道也」とあり、みちと訓ぜらるゝ所以なるべく、「允迪厥德」「惠迪吉」あるひは「惟帝思庸。大典光迪。思媚三靈。誕降天篤」など申せば是れ將ためでたさ極みと申さんも畏し

◎豐明殿の御祝酒　御命名式の御祝酒は東宮御所に於て賜はる筈なりしも同御所御手狹の故を以て宮城豐明殿に於て御賜宴相成りたり當日の御模樣を伺ひ奉るに南溜、西溜等を以て休憩所に充て茶菓煙草等何呉れとなく御備ありて式部職員其他宮內官、來會者に應接し正午となるや宮內官は一同を豐明殿に誘引し席定るや劉喨たる奏樂の間に御開宴田中宮相は多くの宮內官を率ひて熱心に斡旋し午後一時過ぎ御散會相成りたる由參列の方々は久邇宮邦彥王、同妃兩殿下を始め奉り大臣、大將、有位有勳有爵者にて、總て三百餘名に上れり。扨又御命名式御祝ひの爲め午前十時三十分より宮中に參賀したる各皇族殿下を始め奉り九條大勳位、各大臣親任官、公爵、從一位、勳一等、麝香間祗候、錦鷄間祗候、宮內省勅奏任官、侯、伯、子、男爵總代、京都華族總代、等には御祝酒を賜はる前御學問所に於て拜謁仰付られたりと洩れ承りぬ。

◎御養育主任御生れながらにして未來の陛下と仰がれ給ふべき御運に渡らせらるゝ皇長孫殿下御養育に就ては去る七日葉山御用邸に在す東宮殿下より川村純義伯に御召命あり川村氏は取るものも取りあへず伺候したるに殿下には御機嫌麗はしく此度御誕生の皇孫は其方に養育申付くるとの仰言に伯は卒然のとて恐懼答へまつる所を知らず唯だ頭を垂れ居りしが漸くにして面を擧げ數ある群臣の中より殊に臣を擢でさせ給ひしは伊藤土方其他の御諮詢の上御內定あらせ給ひし御事にもやと伺ひまつりしに殿下には笑を含ませ給ひ餘事は知らず個は我が一家のとなれば兩陛下と自分とにて選定せしなりとの重ねての仰に川村伯は一層感激し直ぐにも御請けをと存ぜしかど顧みれば其責任の大なると類ふべきものもあらねば一先づ御猶豫を願ひ歸邸後熟考の上去月再び葉山御用邸に伺候し御請申上げたりとぞ尙ほ皇孫は冬期は多く沼津の方にて御養育申上ぐべしとなり。

◎故瓜生刀自の銅像建設

淺草公園內觀音堂と水族館との間に建設せられたる。故瓜生岩子刀自の銅像は、去月十九日其の除幕式を擧行せり。今其次第を記さんに先つ式場は四方に幔幕を廻し、中央銅像の附近には一大天幕を張り、左右二ヶ所に湯呑場を設け一方に少年樂隊の奏樂所など諸般の準備能く整ひたり。やがて午後二時奏樂と共に開場せられ、建設委員長澁澤榮一氏が刀自の經歷梗概を述べて除幕の辭となし、次に除幕を行ひ、次に修多羅檻大僧正遊行上人數十の僧侶と共に供養を行ひ、次に修多羅檻大僧正の讀經あり、次に河野廣中氏登壇して建設委員諸氏並に贊成寄附者の勞を謝し、特に今回の擧は澁澤氏の盡力なかりせば、かくも速に建設の運に至らざりしとて大に氏の功勞を陳べ且つ謝し、終りに慈善事業の事は言ふべくして行ひ難きものなりと起し、之を行ふには不撓の精神と之に要する動機の必要ありと論じ、故瓜生岩子刀自は先天的の慈善家にして、又能く其動機に遭遇し、不折の精神を以て終生慈善・教育・救濟に盡瘁せられたる婦人にして、古今類ひ稀なる慈善家なりと歎賞し、依て玆に銅像を建設して永久に其德行を表彰し、併せて世人をして之を慕ひ之を傚はれん事を希望するものなりと述べ。滿場の喝采を得たり、次に瓜生家總代の答辭ありて午後四時閉會を告げけり。來會者凡二百五六十名にて中々の盛會なりき、式全く終て來賓に茶菓の饗應ありき。

嗚呼刀自の如きは千古稀に見る所の仁人なり、人一度淺草公園を通行して、刀自が慈顏を拜せば、彌陀の溫容を拜まんより幾層の感慨を呼び起さんこと必せり。噫刀自が身は地下に在るも心は銅像に籠りて千古に慈愛を與へなん因にいふ此の奇特なる慈善家の經歷談に就て。本誌は同會幹事の一人にして刀自生前の知己たりし文學士常盤大定氏に起稿を乞ひ本號より雜錄欄に揭載する事となしぬ

◎愛國婦人會の經過

主稱者奧村五百子女史は其後、四月十八日を以て畿內、中國、四國、九州各地方遊說の途に上りしが其前日、華族會館に於て送別會を開き、返

衛、一條の兩公爵夫人を始め、役員諸婦人二十餘名にて別に陪賓として近衛二條兩公爵等も臨席し席上近衛公が役員に代りて送辭、奥村女史の謝辭、二條公爵及須田海軍少佐の談話あり事務長原胤昭氏より事業の現況會計の報告をなし、終つて茶菓の饗應ありて午後九時散會せしが、近衛公爵が目下創立の節、一切の冗費を省かんが爲に、饗應も甚だ質素なることを述べられたるに奥村女史は會員十萬を得る迄は休止せざるの決心なれば假令盛宴の設あるも甘しせとず情に厚き送別は拜謝謹受す云々と答へたる由。▲韓國釜山なる能勢領事夫人は此程愛國婦人會の軍人遺族救護事業の主旨を賛成し同地の日本婦人會を代表して金六百五十圓を送附し來り猶ほ在留日本婦人を擧げて盡力せんとの旨を書添へありたりと。

◉慈善談話會の模樣

慈善談話會は、去月十二日神田錦輝館に於て開かれたるが、當日は豫報の如く、先づ鳩山春子女史立て開會の辭を述べ、次て女子學院長矢島楫子女史の「なみだ」、三輪田まさ子女史の賛成演説代讀婦人矯風會頭潮田千勢子女史の「婦人と社會事業」、等の談話ありたる後、此頃米國より來れる新聞通信員マーカット孃の英語演説（阿部磯雄氏通譯）あり、其要旨は、日本の文物制度の意外なる進歩を驚きたりと云ひ、而して一國の眞文明の標準とすべきは、其國の慈善事業如何に由ると論じ、更らに轉じて英米に於ける慈善事業を談じて、我國の慈善事業に及び、彼の岡山孤兒院に對して、熱心に賛成する旨を述べられたり、其他大關和子女史、岩谷小梅女史等の熱心なる慈善談話あり、傍聽席には紳士貴孃も見え、頗る盛んなる談話會なりき。

◉小供の誕生に就て

此頃人類學者を以て有名なる理學博士坪井正五郎君は、世界各國に於ける小兒誕生の奇習に就て左の如く語られたり

シャム國では黄色を尚ぶの習慣があッて子供か生れると黄色の繪具を身體に塗る又小供を寢かす道具の上に圓錐形の覆をかぶせて自ら歩く迄は其中に入れて置いて決して外へは出さぬ▲西藏では小供に初めて吸はす飲物は獸肉を乾して鰹節の如くなせしものを粉となし獸類の血に混合てドロ〱汁として吸はして居る▲印度では産をすると家内中大掃除をして先づ座敷を清め夫れから家内一同身體を清めて頭に油を塗り親戚友人等を集めて御馳走をする又た命名式の時には親戚友人等を招き僧侶が祈禱をする印度では夜中は決して小供の談をしない夫れは梟が小供の名を覺えて其小供を取りに來ると云ふ迷信から起つたのた又たどんな場合でも好兒だとか美しい兒だとか云ッて小供を褒めると惡魔が取りに來ると云ふ迷信を持つて居る▲波斯では回々教が盛んな土地たけで赤兒が生れると回々教の教を聞かせる尤も赤兒に分る譯はないが土人は宗教の事は聞かして早いと云ふことはないと云つて居る又た波斯には赤兒の時分には布片にて赤兒の身體をぐる〱と巻付けて首丈出してあるが其の切れへお守りなど縫付けてある▲北海道のアイヌは小供が生れると産湯を遣はすこともあるが多くは水浴で多數の婦人が集り舌で全體を嘗めて拭ふ

▲亞非利加のマテーの土人は小供を湯に入れるが手拭と云ふものがないので母親が口で嘗めて遣る其上油を塗つて赤く光るまで磨擦して野羊の皮をひろげて仰向けに寢かし四隅から絡きて風呂敷包の樣にして忙がしい時には木の枝へぶらさげて置く印度では風邪をひかない爲め阿片を豆粒ほどづゝ小供に呑ますことがある其れから半年ほど經つと初めて飯を喰はせる其時は喰初式と云ふ樣なものを行ひ親戚友人等を招いて御馳走をする印度は熱帶國で大人も子供も常に裸體であるが、喰初めの時には金銀寶玉の類でいろ／＼身體を飾り腕輪、首輪は勿論足へも輪を入れる▲印度では女の子供は木の人形を作つて玩ぶが富んだ人は人形のために部屋を作り人形の爲め食事の眞似をしたり又た遊びの眞似をする男の子供は木で作つた馬、牛、象等を玩び之れを飼つたり又た使つたりする眞似をする此玩具の上等なるものは銀又は象牙などで作つたものがある

▲女の子は二三歳になると兩親は早や婿を定めんとて諸方を探り歩行くが其時に一種の迷信があつて途中で油屋に遭ふとか犬が耳を動かして居るを見るとか烏が頭の上を飛ぶとかすると惡兆として其日は婿殿の捜索を見合して家に引返すが出逢ツてよいものは若い娘、美しい花、象、死人魚屋であつて是等のものに出逢ツた日に定めた婿殿はいゝとしてある、良夫が極ると女(小供)は頭より布片を冠せて指の先を赤くす

南洋のボルネオでは妻が姙娠すると夫は物を打つと云ふことはしない、姙娠の後夫が物を打てば腹の兒にさわると云ツて居る、又た物を堅く結ばない、刄物で細工をなすヿを禁じてある、すべて激しき仕事はしない、すれば小供に害があると云ツて居る、小供が生れて八日間夫は宅に引籠ツて飯と鹽との外何んにも喰はずに謹愼して居る一ケ月經つ迄は夜分は決して外出しない難産の場合には森間の小屋へ連れて行ツて奴隷が食物を運ぶ土人は難産をするのは惡るひヿをした報だと信じて難産の女は普通の産婦よりは一段下がツた取扱をする、又ボルネオでは昔しは母親が死れば其赤兒は生きながら母親とともに埋める風があつたが、これは慘酷な樣だが母親を失ツた赤兒は自然乳がなくして死ぬゆゑ、可愛想なりとて母親につけて遣るのである、▲ボルネオの土人は小供を可愛がることがつよく子を持つて居ないと恥にして居る、土人は小供の幸福を考へて小供のために幸福になるヿならどんなヿでもする人に與て遣る方が小供のため仕合だと思ふ時には人に遣つて仕舞ふのである、親々は小供のためにはどんな危險でも冒して其子を助ける或時鰐が赤兒を咬へて水の中へ這入るのを母親が見付け直ぐ水の中へ飛び込んで鰐の目玉を攫んで鰐が驚ひて小供を放した處を助けて連れて歸つたと云ふ樣な談がある▲チモロート(馬來と南洋との間に群島)では小供が生るゝと椰子の樹の皮の上に乘せて籐で作つた籠に入れ畑の中へ下して置くそうすると小供が丈夫になると云つて平氣で遣つて居る時々不注意のため籠に火が移つて籠と共に燒け死ぬることがある▲ソロモン島では網袋に小供を入れて歩行が其の網袋は額から紐で支へて居る▲ニユギニーでば婦人が産氣を催ほすと川の側に行ツて小供を生み落し直ぐ川の中へ這入ツて奇麗に始末して歸へるが少こしも苦痛を感じない、此の土地では小供が生れて不具であるとか弱さうであると殺して仕舞ふ、又た夫婦の不和の時は夫への面當てに自分の子を殺すことがある、又た奴隷の女が子を産と生長して自分と同じ苦しい境界に入らない樣其の小供を殺す風がある▲オースターリヤでは婦人が産氣を催ほすと獨りで行くか、又た友人の女と二人連れで住所から離れた所へ行つて子供を産むと直ぐ水で洗ひ砂、枯草などで身體を拭ひ宅へ連れて歸り平氣な顏をして居る、又た小供が生れると永く夫に觸らないそして威張つて居る、又た所に依ると小供が生れる時砂を搔集め火を焚して砂を熱せしめ其跡へ穴を掘つて小供を入れ首と頭

さを出さして他は砂中に埋め二時間ばかりして掘り出す所がある、又た小供が幼い時には竹の籠に入れて肩に乘せて行くが又た圓座の樣なものを脊にまとひ丁度龜の子の樣にして圓座と母親との脊の間へ子供を入れて行くことがある、小供遊びとしては地面に畫を描たり鬼ごつこをしたり又戰の眞似をす

◎女子諸學校の狀況

◎女子遊戲講習會。日本體育會にては曩に女子部を設けしが、女子に適應する諸種の運動遊戲を講習し、廣く之を奬勵するの目的を以て女子遊戲講習會といふを設け、去る十一月十七日より開始せり。此會にては星つれ子、安井てつ子、龜井まき子三女史が專ら監督の任に當り、其教師には唱歌遊戲を白井規矩郎氏に遊戲を小野泉太郎氏に、薙刀體操を小澤卯之助氏に囑托し、毎週月、水、土の三日を以て講習し居るが生徒の數次第に增加し目下七十餘名に達せりとぞ。

◎家庭衞生講習會。成女學校にては今般醫士山根正次、高田耕安等數氏の賛成を得て、衞生思想を家庭に普及せしむるため講習會をひらく由。講師は川瀨ドクトル、中島醫學得業士、會期は本月より六月までを前期とし、九月より十一月までを後期とし、會員(婦人に限る)入社金一圓の外別に出金を要せず、講筵は毎週二時間以上なりと。

◎育兒院と幼稚園。本願寺大谷派の有志僧俗相謀りてこのたびの紀念法要を緣とし京都七條通千本西入大宇朱雀に京都育兒院を創立し、又一大幼稚園を設立し京都淑女學校及び大日本婦人學會と聯絡せんとし、何れも計畫中なりと。

◎女子實修學校。今回東京市教育會にては、低度の女子技藝學校を設置する筈にて調査せしめたるが、其設置方法は此程の評議員會にて左の如く可決せりといふ。

一、本校は修身、國語、算術、裁縫、割烹其他家事に關する事項を教授する事。一、本校には尋常小學校卒業以上の學力を有する年齡十二年以上の者を入學せしむる事。一、本校の修業年限は二ケ年とする事。一、本校の授業は小學校授業時間後に於て三時間とする事。一、本校生徒の定員を一百名とし授業料は一人一ケ月金七十錢とする事。一、本校の教場は當分麴町區飯田町四丁目私立稚松小學校の教室を假用する事。一、本校は五月より開校する事

◎トルストイ伯夫人の抗議

露國の教務院がトルストイ伯の言說を以て國教に背くと爲し伯に破門を宣告したるとは既に報じたるが伯の夫人が教務院長にして露國第一の權勢家たるポベドノスチエツフに與へて破門の沒義道なるを論じたる書は先頃巴里に於て發表せられたり、書中耶蘇教の眞義を述べ人の靈魂の俗權を以て如何ともすべからざるものたるを說くあたり言辭堂々鬚髯男子をしく後へに瞠若たらしむるの槪あり、

◎歐洲帝室の皇孫

今回御目出度も、親王御降誕あらせられて、我が、皇室にても、こゝは、始めて、皇孫を有せらるゝ事とならせ給へり。今歐洲列國を見まゐらするに、最も、皇孫に富ませらるゝは、丁抹にて、英吉利、瑞典諾威、希臘、墺太利匈牙利など、之に次せ玉ふ。丁抹國王クリスチアン九世陛下の皇孫

クリスチアン親王　（卅二歳）
カール親王　（卅　歳）
ロウイザ内親王　（廿七歳）
ハラルド親王　（廿六歳）
インゲボルグ内親王　（廿四歳）
タイラ内親王　（廿二歳）
ガスタヴ親王　（十五歳）
ドグマー内親王　（十二歳）

英吉利國王エドワード、七世陛下の皇孫

エドワード、アルベルト親王　（八歳）
アルバート、フレデリック、アーサージョージ親王（七歳）
ヴイクトリア、アレキサンドラ内親王（五歳）
モード、アレキサンドラ　（九歳）
ヘンリー、ウヰリアム、フレデリック、アルベルト（二歳）
アレキサンドラ、ヴヰクトリア（十歳）

瑞典諾威國王オスカル二世陛下の皇孫

ガスタフアドルフ親王　（廿歳）
ウイルヘルム親王　（十八歳）
エリック親王　（十三歳）

希臘國王ジオジオス一世陛下の皇孫

ジオジオス親王　（十二歳）
アレキサンデル親王　（九歳）
ヘレ内親王　（六歳）

墺太利匈牙利國王フランツ、ジョセフ一世陛下の皇孫

エリサベツト内親王　（十九歳）

此の御目出度ためしには少しくかわりて、皇孫にはましまさねども、皇子の榮え玉ふは、今の獨逸帝室なり。即ち

フレデリッヒ、ウヰルヘルム親王（皇太子）　一八八二年生
ウヰルヘルム、エーテルフリデリッヒ親王　一八八三年生
アダルベルト親王　一八八四年生
アウグストウヰルヘルム親王　一八八七年生
オスカル親王　一八八八年生
ジョウヒム親王　一八九〇年生
ウヰクトリアルイセ内親王　一八九二年生

獨逸の今帝ウヰルヘルム二世は、殊に、御子達の敎育に嚴重なりと稱せらる。文武とも、良師に託して、容捨なく督勵せらるゝを以て、フレデリッヒ、ウヰルヘルム親王の幼時には、之れに堪へず泣き出だして皇帝に訴へられたることありしに、皇帝は却つて、其の師傅の嚴なるを賞し玉ひし美談ありといふ。

●本誌口繪の批評

左の文は、某讀者より寄せられたるもの、本誌六號の口繪を批評して面白ければ、此に揭げぬ

開卷第一頁に揭げたるは伏見宮禎子女王殿下の御肖像、温威備はり御顏貌より御容姿流石東洋貴族の姫君、第二は英國皇帝の内親王殿下なり何

れ劣らぬ御體格、衣服の合せ居る所は日本服と相等し、頸に珠玉を纏ひ胸及び腕を現はし束髪に結べる所、如何にも妙雅なり、僕は始め眼の開いた觀音樣の圖と思ひたり、抑も觀音樣は西洋貴婦人より係りしものにや、第三は和蘭女皇陛下の結婚式寫眞は餘り判然せざれども男も女も人相の佳きもの揃ふたり殊に美男子多きものゝ如し、第四は王子瀧の川、幽雅の景色想ひやらる、第五は名流の筆蹟、女の筆は男の書く如く或は太く或は長く或は小瘠立たるもの少く概れ相類したる筆法と思はる、第六は當世の名婦三輪田野口二女史の肖像、眞佐子と聞くと三十だいの年頃と思ひしに寫眞にては最早六十にも見ゆるなり噫これ忠實なる教育家、小類女史また超凡の人髮の形狀は一寸チョンマゲと見違へるなり何だか涉邊華山の緣類でもありさうなお顏俗にいふ他人の空似か、第七日本女子大學校建築は宏大にして華美ならず、繁雜なる市街に遠かりたる閑靜の地、修學には最も適良なるへし我邦も今や女子大學を見るに至る兎に角祝すべし、第八同校の寄宿舍等なり舍の位置は學校よりはやゝ低濕の地にありて二棟に分れたり、第九堀切の菖蒲二人の女立てり花を見て如何に感念を起せしか大した感じも無さゝうな容態なり、第十女子職業學校の生徒及職員これは〳〵能くも揃ひたり細かい人間が恰るで三月のお雛段の樣なれど高尚なる容姿のものは何となく少きが如し、而し無爲座食所謂藝なし猿は居らざるなり、第十一女子の職業何れもドッチリした體骼、中央の阿姉などは毬の如く肥え太れり、此圖は故更に仕度して寫たらしひ、車に手をかけし母アやの前垂を見よチャント疊みたる折目立てるにあらすや、又衣服に毛繻子やら天鵞絨やら廣き襟やりて常着には非らざるが如し、火鉢と土瓶の容姿が如何にも妙なり、第十二三井吳服店の休憩所實に立派なり僕は嘗て此所に至り、うつかり椅子に腰を下ろしポクリと凹まれ、あはや轉倒せんとした事ありたり用心すべきなり、第十三より三頁當世の名筆素人には面白くなけれども生徒諸君にはやゝ有益なる紙面なり。次の四頁は例の小藪女史の健筆頗る上出來なるべし、而し斯の如き畫は往々草木の種名を知るに苦むべし。以下二十面口繪の多き他に比すべきものなり、終に臨んで編者に望むものは内外國歷史的名婦烈女の肖像を時々揭出せられんことなり。（五生）

成女學校の講習會

前號に概畧を報じたる成女學校家庭衛生講習會の第一回講話（去月廿七日開催）は、來會者百餘名にして、先づ吉村校長の開會の辭、佐伯贊成員の本講習に對する希望、並會員聽講に關する注意あり。次に中島醫學得業士川瀨（ドクトル）兩講師の皮膚の生理解剖及衛生に就ての講話あり。蓋生理解剖などの話は兎角無趣味に陷り易く其の道專攻の學生すらも餘り面白からぬものなるに、まして斯る事には緣故の遠き令夫人令孃たちに聽かすることとて、講師が熱心になればなる丈、聽者は迷惑さうにあくびを嚙み殺すが常なるに、講師の老練なる、無趣味の問題をして十分に興味あらしめ、二時間の久しき聽者をして倦ましめざるのみならず同校下級の幼女生をして、思はずあゝ面白かッたの語を洩さしむるに至れり。さればこの講習會の如何に有益に又如何に成功するかは、之を以て其の前途をトすべきなり。因に記す、次回よりは每週火曜日午後第二時より開講し、凡二得づゝの講話ある筈にして、第二回の講話は川瀨（ドクトル）の消食器の生理衛生、中島醫學得業士の前講のつゞき、及綳帶のかけ方等なる由なり。

今後の女學世界

誌面改良

(記事增設)

我が女學世界は創刊未だ日の淺きに拘らず、一方に於ては清新にして健全なる家庭の讀物となり、一方に於ては妙齡諸媛が學窓に於ける勉學の栞となり、以て日に增し江湖の歡迎を受くるに至りしは記者の感謝し措かざる處なり。而して今や女子敎育の必要は一般社會の確認する處となり、本邦に於ける女子の敎育は是より將さに其の成熟期に入らんとするに際し、一家の主婦として女子に必要缺ぐべからざるは家政實務の習得にあり、是に於てか、各所に家政學校、家事講習會等の設立を見、從來の各女學校も又進んで家政科、家事專習に重きを置かんとするに至れり。本誌又玆に見る處あり、次號誌上より新たに家政實務の欄を增設し理論に於ては「禮法」「算術」「家政簿記」「衛生大意」「室内裝飾」「菓樹栽培」の各部に別ち、實務に於ては、「交際の法」「看護の法」「厨房の整理」「飮食の調理」「衣服の調製」「洗濯」「燃料及燈油に關する經濟」、等の細事に及び、それ〳〵專門の大家、知名の賢媛に寄稿を求め、斯くして理論に基き實際を離れず、出ては社交の務を盡し、入つては家庭を整理し、高尙の心を以て卑事に多能ならしめ、以て良妻賢母の務を完成せしめんと期す、此の外、猶圖案音樂の二科を增設し、一は女子工藝上の意匠に資し一は交際上に必要なる美術文學の嗜好を進め高尙にして閑雅なる婦人の特性を涵養せしめんとす。其他從來の各記事は、いづれも其の材料を精撰し、虛飾に流れず、浮華に陷らず、有益にして且つ趣味深きものを蒐め名實共に女學の栞、家庭の重寶たらしめんとす。

第九號豫告

七月五日發行

寫眞銅版口繪（小松若宮殿下御息所御肖像○伊太利母后陛下御肖像○上野公園の初夏（以上光澤紙）大隈伯爵夫人の肖像○下田歌子女史の肖像○日光陽明門○同上華巖瀑布○東京裁縫女學校卒業式○音樂學校卒業式○才媛筆蹟二葉其他

論説は社會腐敗救濟と題する鳩山春子女史の痛快なる議論と野中女史の衣服の改良家庭欄は例に依つて塚本女史の家庭教育春江女史の精細なる筆に成れる夏の家庭女史の食物の防腐松蔭女史洗濯の話等を始めとして家庭算術家計簿記等の數篇を掲げ修身には野中女史の女德と田島女史の禮法最も見るべく又史傳には久保文學士の斑婕妤中内文學士の泰西名婦の面影中村秋香君の三十六歌選の續學藝には藤堂岡田二軒氏の養生訓喜田文學士の地理談桐生法學士の法律談を始め裁縫造花編物外更に割烹實習を掲げ雜錄には常盤文學士の境に入り瓜生岩子傳愈々蔗境に入り塩井文學士の花の跡と題する優美にして清婉なる隨筆其他連載の講義、學藝、文苑等例に依つて材料豐富、

毎月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）‥金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內｛定刊數……十二冊／增刊四回‥三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

㊀本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
㊁御拂込み前金相切れ候節は送本を停止す。
㊂郵劵代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
㊃總目錄御入用の方は二錢劵相添へ申込あれ。

明治三十四年六月五日發行　第一卷第七號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

毎月一回一日發行

少年世界

定價
定價一冊金十錢
四冊前金卅八錢
八冊前金七拾五錢
郵稅一冊一錢

明治三十四年 第七卷第八號 六月一日發行

口繪

●伯林大學附屬東洋語學校長肖像●獨逸第三王子御肖像（以上アートペーパー）●二重橋前楠正成銅像●少年世界特別寄書家●臺灣知學堂及臺灣少女風俗●肅親王燒跡に於ける日本籠城者●歐行端書通信●奇怪な大海獸●富士絶頂劒ヶ峯●二等巡洋艦吾妻號

記事摘要

東京　博文館發兌

（後付の二）

毎月曜日發行
四六判四倍大

太平洋

毎月一回色刷特別口繪を添ふべし

口繪寫眞銅版風景風俗每號（八頁插入）

太平洋の大改良（博文館發行）

是れ昨年一月一日を以て、其第一號を發刊したる本邦唯一の週刊新聞なり、其論旨の眞摯精透、無偏無黨なる、其記事の精確明暢にして、一週間細大の時事を、能く秩序的統計的に記述して、首尾本末の一目瞭然たるより、意外の好評を博して、日刊諸新聞紙を讀む者も讀まざる者も、共に一部を購讀せざる能はざるの要紙となれり。歐米各國には由來週刊の新聞雜誌盛に行はれ互に美を競ひ豐を爭ひて、巨萬の部數を發刊し、一は以て娛樂に供し一は以て一週内の事蹟を系統的に明知せしむ。本邦未だ他に此種の物あるを見ず、蓋し一缺點なり。仍て一層江湖の厚意に酬はんが爲に、既に今春の初刊よりして、一大改良を加へ、大に字數を增加して、每號四六判四倍大の廿四ページとなし、紙質は精良の舶來品を選びて、幾多の**寫眞銅版**を插入し、以て時事人物、一切最近の出來事を、精緻なる寫眞と許多の繪畫とによりて瞭知せしむ。時世の進步に從ひ、事端の繁多なるより、人々皆時事を耳にする毎に併て直ちに其狀態人物を目睹せんと欲するは常狀なり。本館茲に見るあり、斷然此擧に出づ。乃ち如何に僻遠遐陬の地に在る人と雖も、事ある每に、總ての境を踐み、總ての人に接するの感あるべく、是れ我邦新聞ありて以來、未だ曾て有らざる所、其如何の精彩を放つべきかは、今玆に喋々するを要せず。其他紙面の增加に伴ふて、各欄を擴張し並に新設すべく、其概要左の如し。

各欄要目

時論　講談落語

週報　文苑

小說　雜錄

太平洋定價

前金

一冊		金六錢
十三冊	三ヶ月分	金七十五錢
二十六冊	半ヶ年分	金壹圓四拾錢
五十二冊	一ヶ年分	金貳圓七拾錢
郵税壹冊		金壹錢

見本應需

見本を望まるゝ方は郵券四錢送付あらば送呈す見本は號數の指定に應じ難きも可成近刊の者を發送すべし

（後付の三）

（後付の四）

再版出來報告

左記の各書籍は一時品切の爲め高需に背き居候處今般何れも再版出來致候間續々御購讀被成下度又々品切に相成候ては遺憾に付此段御報申上候

版	書名	定價	郵税
十五版	新撰明治字典	全壹冊金參拾五錢	郵税八錢
十版	五經（全十一冊）	金貳圓貳拾錢	目方八百匁
八版	書法詳論	全壹冊金四拾錢	郵税六錢
九版	詩法詳論	全壹冊金四拾錢	郵税六錢
十版	增訂帝國史略	全壹冊壹圓五十錢	郵税貳拾錢
廿六版	中等教育日本歷史（上）	全壹冊金五拾五錢	郵税拾錢
十二版	帝國六法全書	全壹冊金九拾錢	郵税拾四錢
四版	日本歷史	上製五拾錢 郵税拾錢 並製卅五錢 郵税八錢	
五版	近松時代淨瑠璃	全壹冊金六拾錢	郵税拾六錢
五版	近松世話淨瑠璃	全壹冊金六拾錢	郵税拾六錢
五版	高僧實傳	全壹冊金六拾錢	郵税拾六錢
四版	通俗三國志（下）	全壹冊金六拾錢	郵税拾六錢
三版	四大奇書（下）	全壹冊金六拾錢	郵税拾六錢

版	書名	定價	郵税
三版	商業實踐法	全壹冊金七十五錢	郵税拾貳錢
八版	劍舞術教範	全壹冊金拾八錢	郵税四錢
八版	家政學（下）	全壹冊金三拾錢	郵税六錢
十版	（一）勤學と處世	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
八版	育兒と衞生	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
九版	俳諧獨學	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
十版	（二）旅行案內	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
七版	圍碁と將棊	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
三版	商家書翰文	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
五版	就學案內	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
三版	相撲と芝居	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
七版	記事論說文範	全壹冊金廿五錢	郵税六錢
十八版	實用料理法	全壹冊金廿五錢	郵税六錢

文武堂出版廣告

世界冒險譚第八編
櫻井鷗村君譯述

航海少年

北は寒帶氷山の海、南は熱帶蠻人の地に跨がつて、少年と船長とが海賊、海馬、白熊、大氷塊、暴風、難船、黑人、獅子等に出逢はして、ありとあらゆる冒險をなし事實は千變萬化の狀を極め一喜一憂交も至り、讀み行く中に身の毛の寄立つてヒヤ〳〵するともあれば又た思はず快哉を絕叫しなければならぬ事もあるのは此航海少年で此種の物語の中で最上乘のものだ、之を讀まぬ中は未だ以て冒險の快事を語るべからずだ

第壹編	金掘少年
第貳編	遠征奇談
第三編	二勇少年
第四編	續遠征奇談
第五編	決志少年
第六編	漂流少年
第七編	殖民少年

正價壹冊二拾錢　郵稅六錢

櫻井鷗村君譯　（第四版出來）

勇少年冒險譚 **初航海**

金壹冊洋裝　正價廿五錢　郵稅四錢

今や我邦、内外頗る多事なるに際して、國民の最も要する處のものは、冒險的精神なるは論を俟たず。而して之を鼓舞すること、先づ冒險譚、旅行記の類を以て少年子弟を敎養するに殆まる。歐米雄邦の敎育家、夙に之れを勸む。然るに我邦に於ては方今此種の書籍甚だ缺乏せるは、實に遺憾とすべし。幣堂爰『初航海』を發行してより、夙に世上の高評を博したる所あり、爾來重ねる再々、今や其四版已に成る之を讀まむものは、少年は素より大人と雖も必ず三誦、快絕を叫破せん、請ふ愛讀をたまへ。

押川春浪君著　（再版出來）

海島冒險奇譚 **海底軍艦**

全壹冊洋裝　正價卅錢　郵稅六錢

全世界を舞臺とせる奇々怪々の大冒險譚は現はれたり、本編の主人公は雄風凜々たる日本海軍士官！、其部下には慓悍决死の水兵あり、鰐魚は印度洋に眠り。師子は大陸の巖に嘯み。海賊劔を舞はす處美人跳梁する處神州快男子の鐵拳飛ぶ。紅顏の勇少年あり變幻の輕艇に乘じて千尋の海底を駛り洒落の壯士あり奇異の鐵車を進めて萬峯の頂を踰ゆ寂寞たる孤島に不思議の響あり人外の異境に大日本帝國の軍艦旗翻る。奇絕！怪絕！又壯絕

（後付の六）

賣捌元　東京　博文館・東京堂

（後付の八）

著名學士大家執筆 ∴ 有名和洋畫伯挿繪

洋裝菊判美本　壹冊百卅頁餘

世界歷史譚

全部五拾册 ∴ 每月壹回發行

第壹編　釋迦……高山文學士著　觀山畫
第貳編　孔子……吉國文學士著　不折畫
第三編　耶蘇……上田文學士著　不折畫
第四編　ビスマーク……笹川法學士著　象堂畫
第五編　ハンニバル……大町文學士著　雷也畫
第六編　マホメット……阪本文學士著　蓮藏畫
第七編　漢高祖……三浦文學士著　蓮藏畫
第八編　子ルソン……島田法學士著　蓮藏畫
第九編　岳飛……笹川文學士著　金秋畫
第拾編　コロムブス……桐生法學士著　白瀧畫
第拾壹編　ガリバルヂー……岸崎法學士著　不折畫
第拾貳編　彼得大帝……佐藤文學士著　春汀畫

第廿四編

成吉思汗

法學士 太田三郎君著

中村不折君挿畫

全壹册　洋裝

正價拾三錢　郵稅四錢

東大陸黑龍江源の張幕に蹶起して西は黑海の外露西亞匈牙利に至るの地を席卷し南は支那帝國を侵略して遂に一大帝國を搬建するの鴻基を樹て僅々二十年間を以て地を拓くこと東西二萬八千里第十三世紀歐亞兩大陸の山河其指呼に任ず成吉思汗の雄圖此の如し爾後七百年當年蒙古騎兵叱咤の地今乃何の狀ぞ東大陸に意を留むる者は蒙古當年の雄圖を知らざるべからず

第拾三編　華聖頓……福山文學士著　古洞畫
第拾四編　孔明……安藤法學士著　松亭畫
第拾五編　ソクラテス……久保文學士著　不折畫
第拾六編　クラットストン……近松法學士著　不折畫
第拾七編　歷山大王……幸田文學士著　不折畫
第拾八編　王陽明……白河文學士著　春汀畫
第拾九編　ガーフヰルド……酒井文學士著　不折畫
第貳拾編　デモステ子ス……十時文學士著　古洞畫
第廿一編　シエクスピーア……中村法學士著　春汀畫
第廿二編　那破翁……土井文學士著　不折畫
第廿三編　孟子……永井法學士著　春汀畫

正價（前金）●壹冊拾參錢●六冊七拾錢●拾貳冊壹圓參拾錢●廿四冊貳圓五拾錢●郵稅壹冊各四錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界
毎月一回五日發行
第壹卷第七號
（明治三十四年六月五日發行）
（明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

（定價金貳拾錢）

（東京株式會社秀英舍印刷）